女人藝術

NYONIN TAISHŪ

附録

人大衆

八月號

世界興亡史論

（體裁）四六判 五〇〇頁 總クロース
背金模様 本綴上製 函入

（會費）全二十巻 一冊 一圓五十錢
申込金五十錢 一時拂廿八圓

刊行趣旨

大小幾多の國家、興亡地をかへ盛衰所を異にした世界大戰あつて僅かに拾餘年、今やまた經濟恐慌の大波は全世界のあらゆる國々を襲つて悲雨慘風、流石に勝誇つた英米も、その國家の支柱たる資本主義崩壞の斷末魔に喘いでゐる！驕るもの久しからず、今日の未開國、必ずしも明日の新文明を約束せずと誰が言ひ得やう。日本吾等は今後も尙英米資本主義に追隨して明日の沒落を共にすべきか、はた斷然過去の行掛を一擲して東亞有色民族と手を携へて進むべきか、今や岐路に立つ。歷史五千年の長江に棹し、靜かに世界人類の興亡治亂盛衰の跡を訪ねて新興日本の前途を遠觀する。恐らく今日の如く急切なるはあるまいと思ふ。乃ち世界史論の絕唱たる本叢書を刊行して廣く世に普及せんとする所以である謹んで大方の清鑑を仰ぐ。

1 世界史論進講録
2 羅馬史論
3 露西亞史論
4 佛蘭西革命史論
5 英國膨脹史論
6 普魯西勃興史
7 君主經國策及批判
8 英國憲政論
9 宋朝史論
10 近代建國史
11 亞歷山遠征史
12 印度史論
13 歐洲民族文化史
14 海戰史論
15 （支那）近世政治思想史
16 武家興亡史論
17 支那革命外史
18 ロシア帝政沒落史
19 アメリカ繁榮史論
20 小國興亡史論

東京麹町 下六番町
平凡社
振替東京 二九三六九

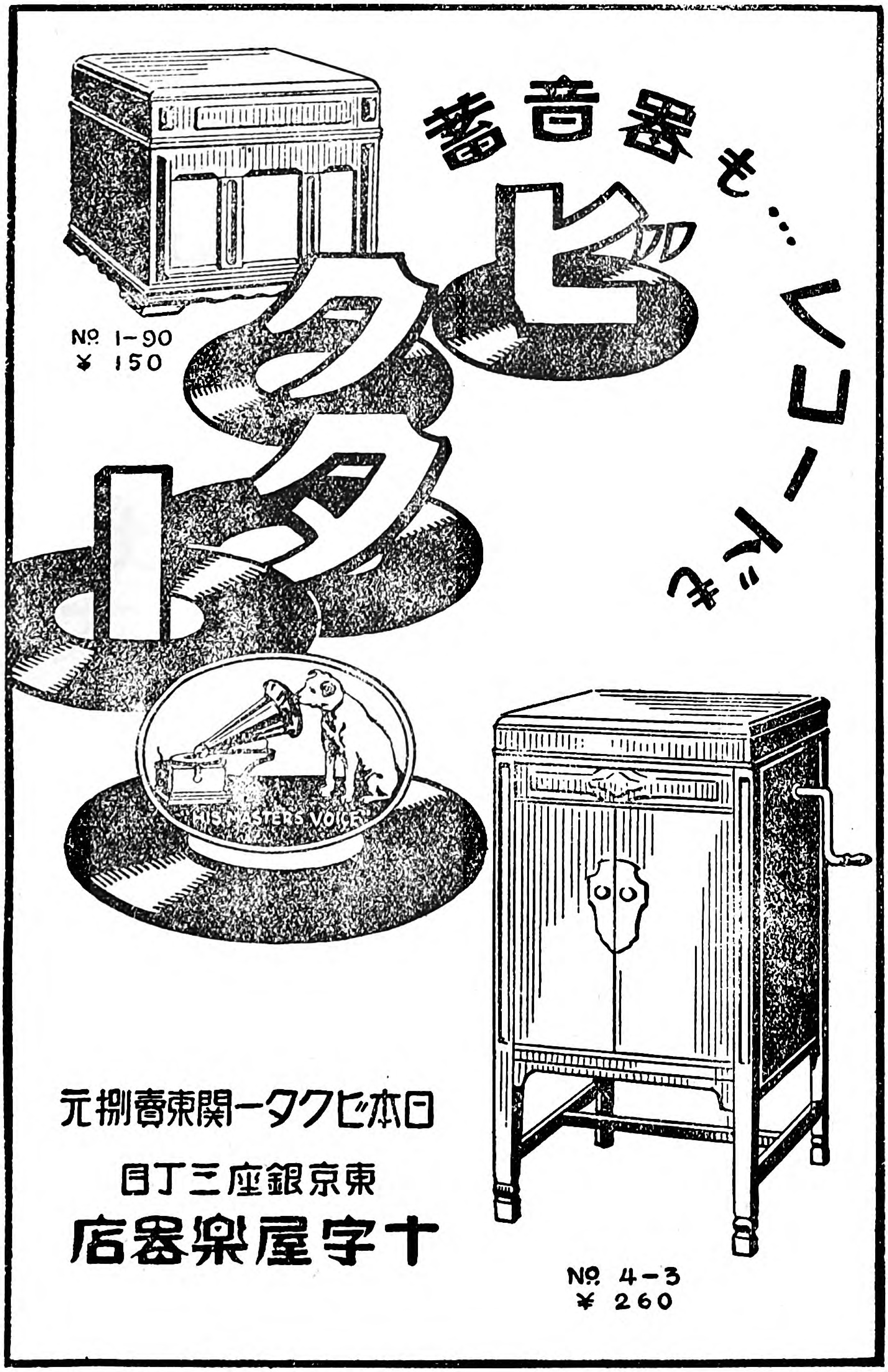
★★★

ソヴキノ映画

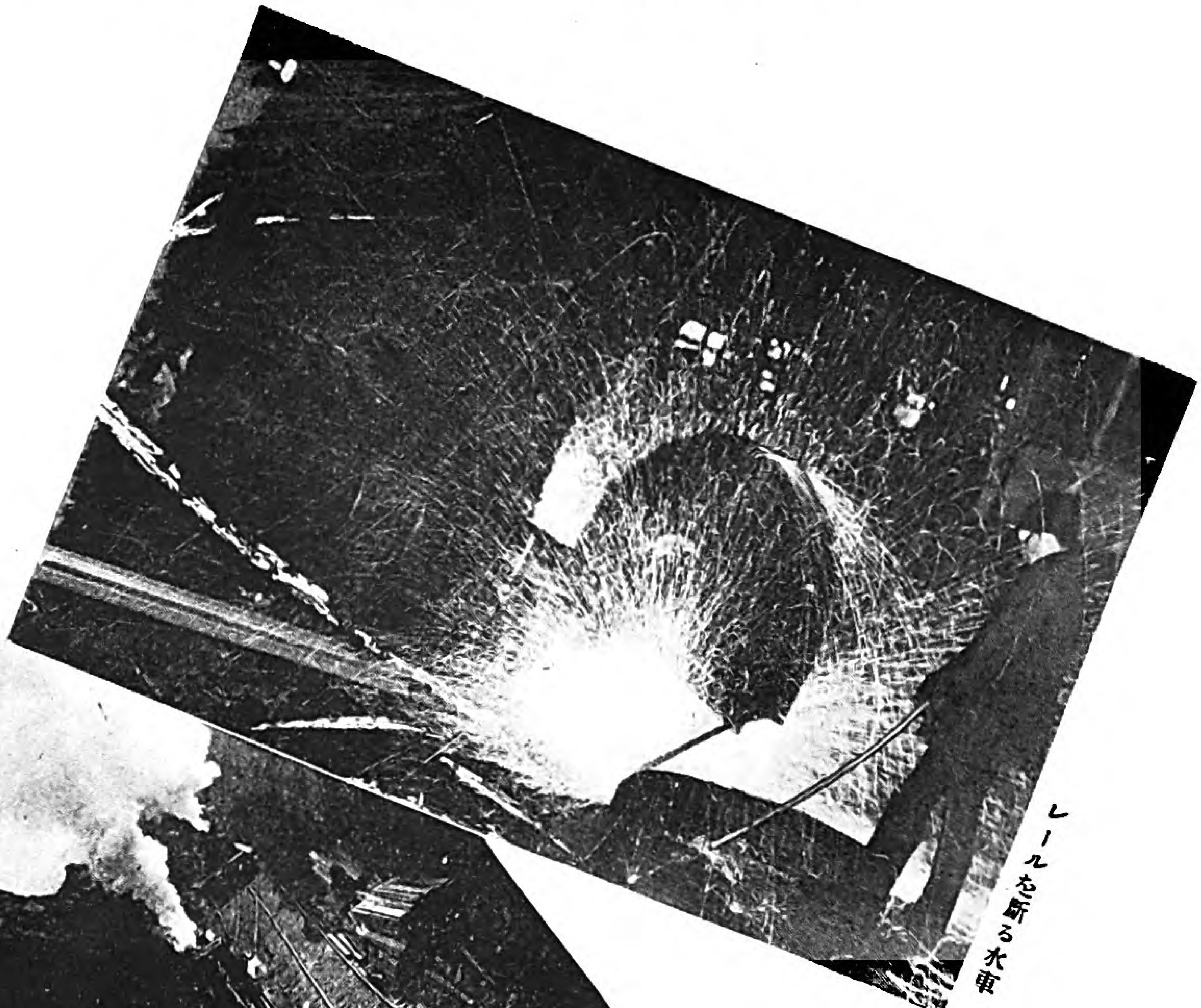
女人藝術第三卷八月號目次

―禁轉載―

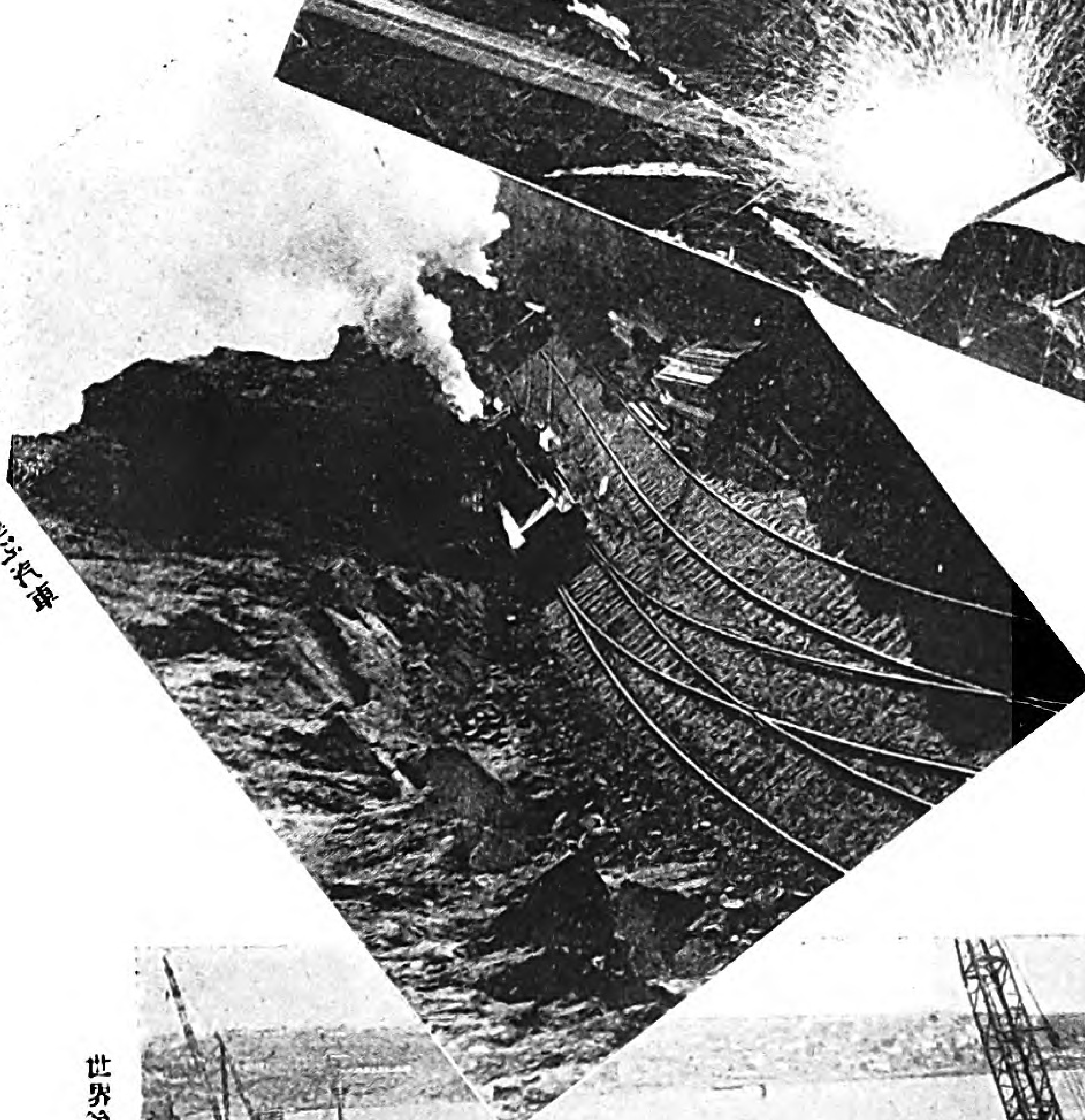
「全線」及說明


蓄音器も…レコードも
ビクター
No. 1-90
¥ 150
HIS MASTERS VOICE
No. 4-3
¥ 260
日本ビクター関東賣捌元
東京銀座三丁目
十字屋楽器店

ソヴエート五年計劃畫報の一（機械化の實狀）



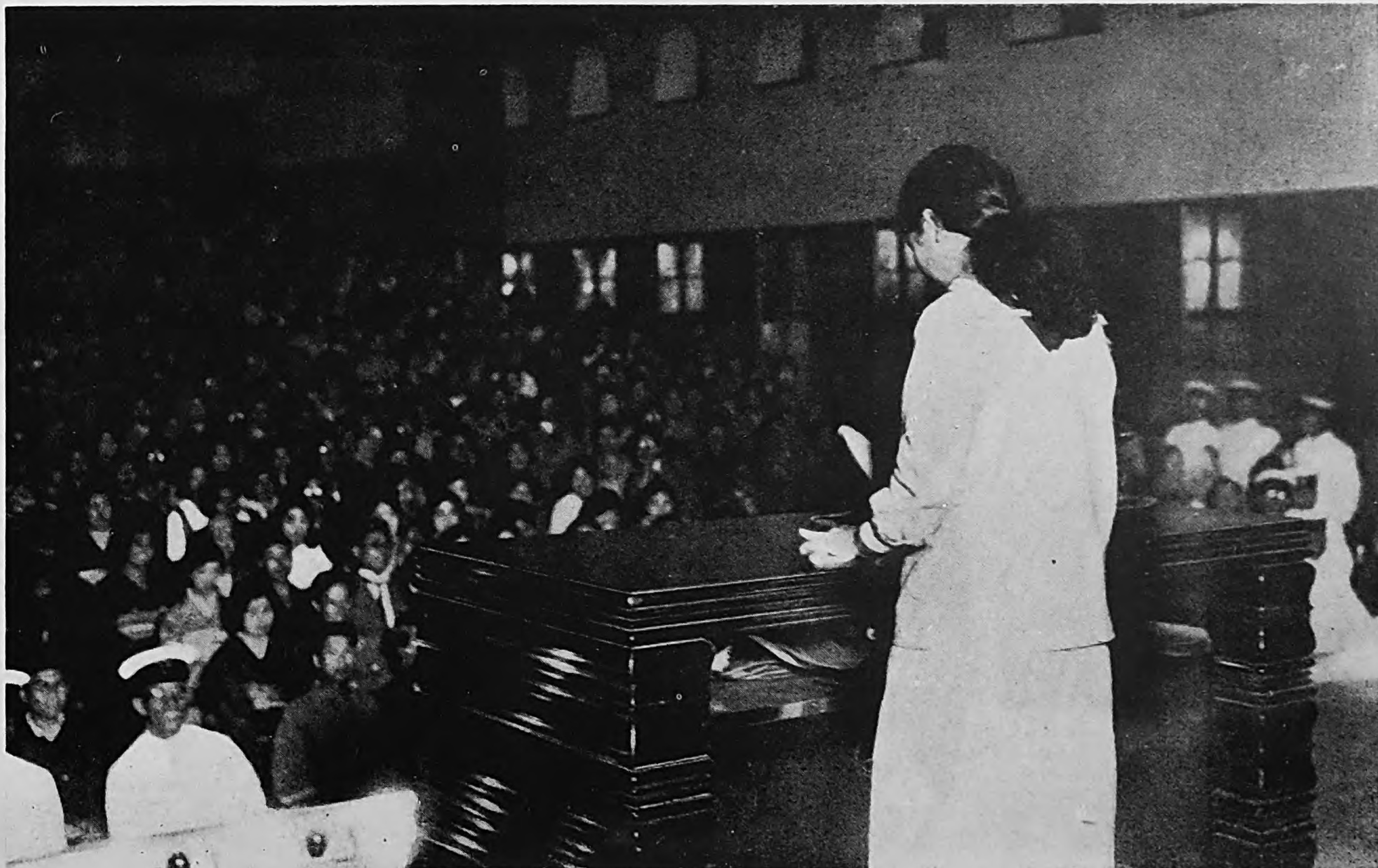
レールを斷る水車



建築材料を運ぶ汽車



世界第一のドニープル河發電所



六月二十八日女人藝術三週年記念講演會の滿員盛況と、壇上の小池みどり——朝日講堂にて

あのころ

令女界叢書の十二

純眞なる若人に呼びかけるべく「春の鳥」を令女界におくつたのは、さうした讀者層をもつ僕のはじめてであつた。嚴密にいへばこの「春の鳥」は時雨との共著である。だから、僕たちの家の軒から、あなた方の机の窓にむかつて話しかけた、我々の共囀りでもある。――三上於菟吉記

發行所　麴町下六番町　平凡社
振替東京二九六三九番

EAGLE

PERFECT REPRODUCTION

Like-living Voice

こんな値段で・こんな優良品・

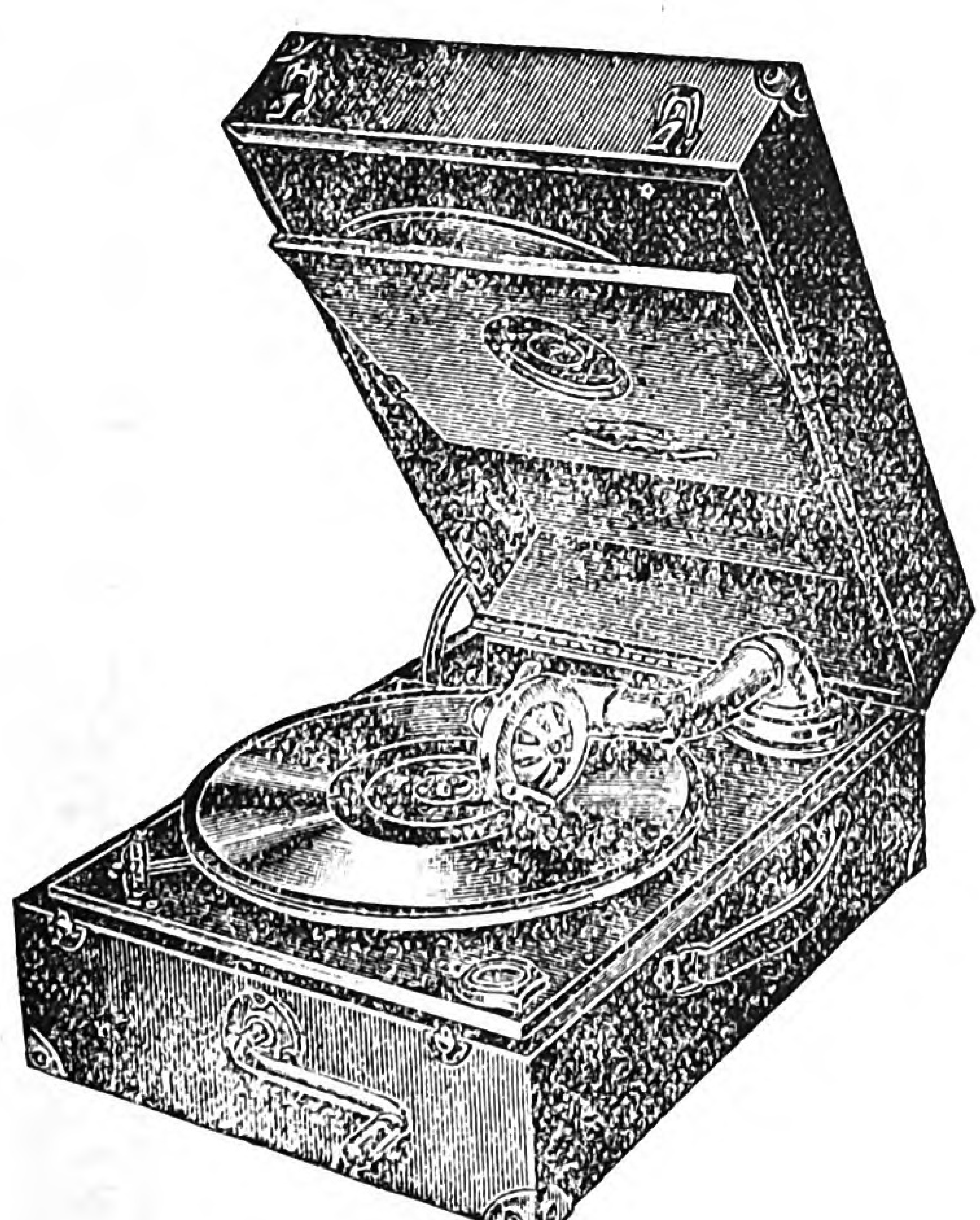
携帯用

イーグル第七號A

Y40

止れ！見よ！聴け！

どうしてこんな優良品がこんな安い値段で買れるのか？産業合理化の結果です。最近最大の設備を以て東洋第一を誇る弊店が蓄音器の普偏化をモットーとして全々營利を度外視した製品だからです。兎に角最寄の特約店で親しく御實驗を願ひます。

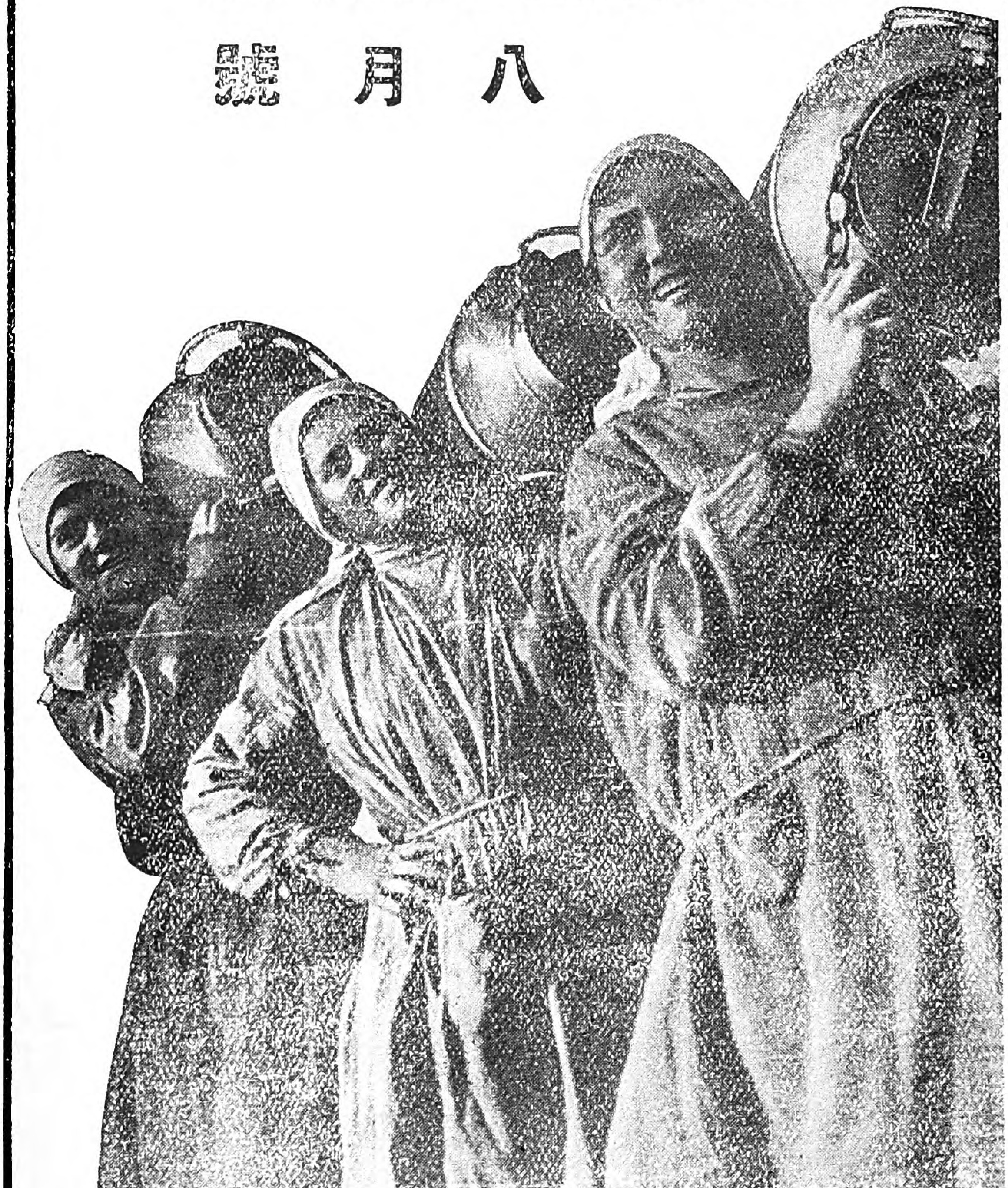


神奈川縣・川崎市

株式會社日本蓄音器商會

女人藝術

八月號



No. A — 樂し氣にトラクターを驅使する農婦



ソヴキノ映畫「全線」の說明

「あらゆる藝術の中で、ロシヤにとつて最も必要なものは、わたしの考へでは映畫である」

ロシヤの映畫を語るものに、幾回となく繰返し引用されたレニンのこの言葉が、いま、映畫「全線」の新しい誕生を見ることによつて、更に生々しく、更に切實な眞理となつて現れる。

映畫「全線」(ゲニエウリナヤ・リニヤ)は一九二六年七月から一九二八年十一月、足掛三年、正味十ケ月の長時日を費して製作されたエイゼンシュテイン、アレクサンドロフ共同の畢生の大名篇である。

この寫眞のテーマは、今更斷るまでも無く、ソヴエート農村の社會主義的建設化にある。

都會プロレタリアートの社會主義的組織化に於て、世界に最も誇るべき段階に到達してゐるソヴエート・ロシヤは、農村のそれに於て、反對に、いまなほ世界有數の封建的非社會主義性をもつてゐる。ソヴエートの社會主義建設に殘された最後の課題は、この野蠻未開の農村經濟を如何に開拓するかに係つてゐる。最近、ソヴエートの國內政治に於ける重要討議は、擧げてこの農村問題に向けられてゐると言ふも過言ではあるまい。

扨て、映畫「全線」は、現ソヴエート國內政治に於けるこの最も

No. 5 —— 集團農場の事務所



重要な農村問題をば、藝術の世界から大衆に訴へ、働きかけ、煽動し衝動を起してゐる映畫である。火の様な熱情で迫るこの美術の力は幾千幾百萬の觀客大衆をして、意の儘に振ひ立たさずにはおかない。

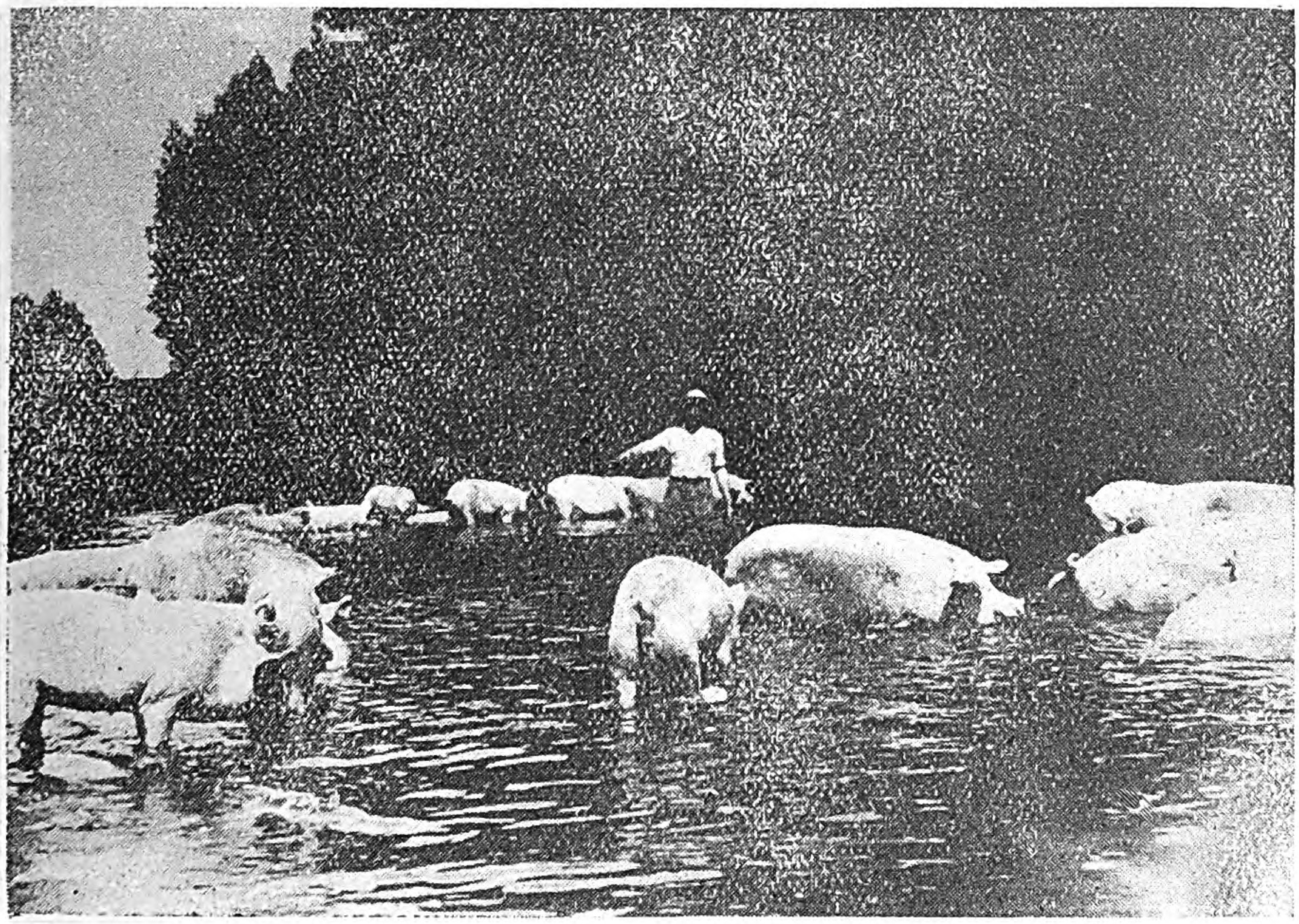
理論の彈丸として、鐵の様に聽衆の理性を衝き貫くものがスターリンの言葉であるとすれば、これは亦、乾いた七月の土にどしや降りする豪雨の様に人々の耳朶に殺到する革命音樂だ。

それならば、この力強い迫眞力は一體どこから來るか？——政治戰線にぴつたりと添つて寸分の隙も無いテーマが、最高度の藝術性にまで溶和され高揚されてゐる所にその原因がある。映畫の世界に未だ藝術的處女地として殘されてゐた日常生活問題、純經濟事象が、極めて高い目的意識から、完成されて藝術的情熱にまで統一化されたところにこの映畫の價値、迫眞力が潛んでゐる。

ヴエ、エトウリンの最近の傑作「トルクシーブ」が、トルキスタン＝シベリヤ間の鐵道建設の純經濟的、政治的意義をば最高の藝術的迫眞力を以て傳へてゐるのと相俟つて、この二つの映畫はまさにソヴエート經濟問題映畫二大双壁である。

映畫「全線」は一貫した筋をもたない物語りである。材料の斷片より材料の斷片へ、——見るものは只、その複雜豐富な、時には飽くど過ぎる程の材料の洪水に眼まひがしてしまふ。而しこの無數の劇の斷片は、常に鐵の様な統一性と、場面の對比性とによつて、極めて高度の社會叙事詩を構成してゐる、この映畫は最初から、豫

No. C ——水浴中の豚群

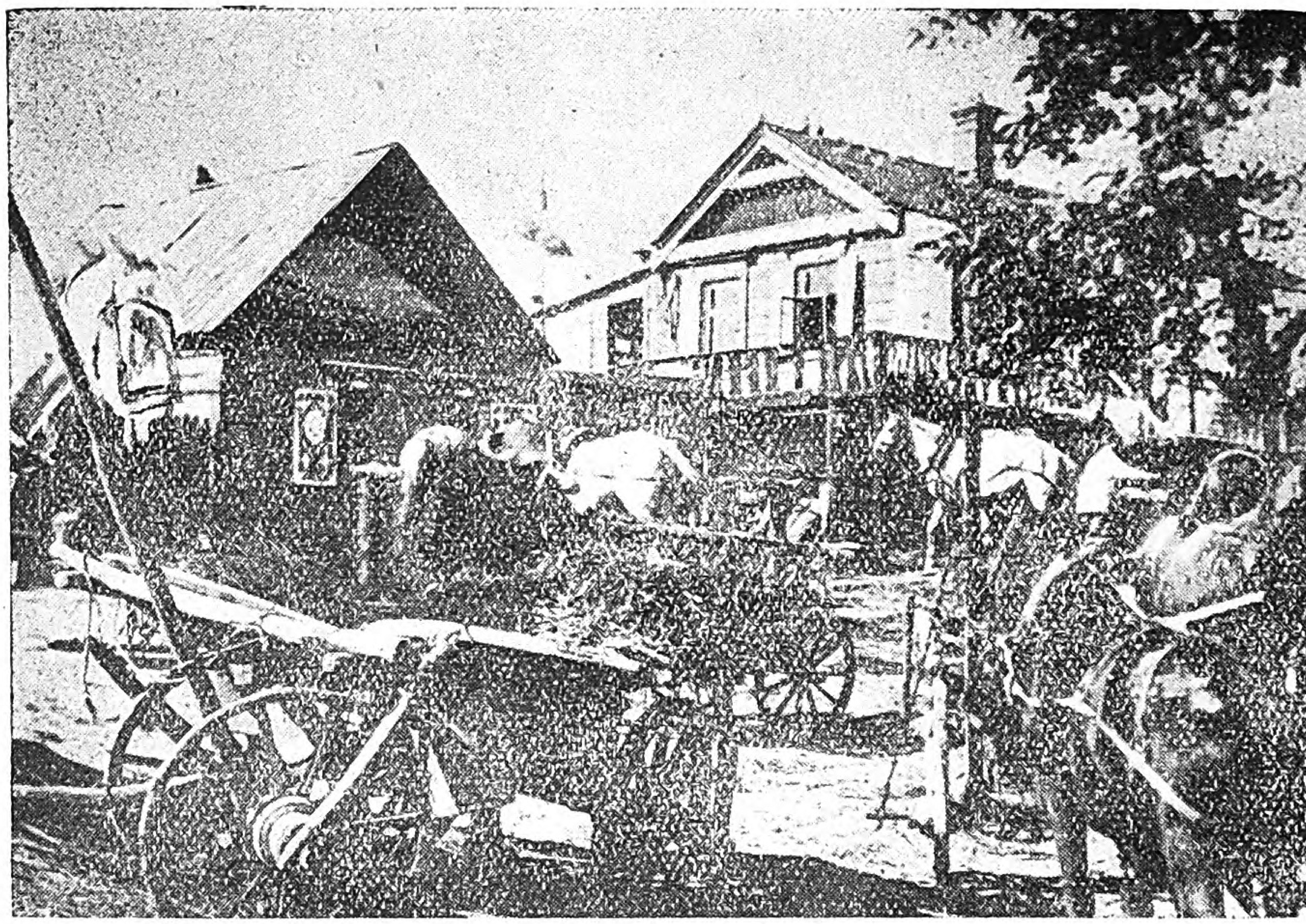


め作られたシナリオをもたない。各場面々々の實寫が、先づこの映畫の臺本材料となつて居り、この材料こそは、この映畫製作者にとつて、恰も作家に於ける「言葉」となつてゐる。場面々々の言葉を一つの文體に構成しモンタージュしたものが、何時の間にか一つの一貫した映畫劇となつてゐる。——觀客はそこに、ありとあらゆる農村の出來事を細大漏らさずに見せつけられる。其處には正にソヴエート農村問題の全線が收められてゐる。併し、限られた映畫の場合に、ロシヤ共產黨の黨政策——政治的全線が餘さず盛られるといふことは不可能事だ。

「全線」は所詮、限られた農村問題に於ける全線であれ、舊いものゝ憎惡より、新しいものへの出發誕生が、より性急なテーマだ。そしてこの映畫は遂に、數回試寫、モンタージュ仕直しの結果、題名も「舊いものと新しいもの」(スターロイ・イ・ノーヴオイ)に改められた。

スクリーンに向ふ人々が、まづ最初におし寄せてくる場面の洪水、無愛想な材料に馴れてくるや、彼は忽ち、憎惡と叱責と憤激の感に迫られる。「こんな風にして居つてよいのか? ——こんな風にして居つてはならない!」奴隷の惰性に生活してはならない。速かに、新しい、よりよき生活を打建てねばならないと。如何にして? ——勞作によつてと『全線』は答へる。それは、勞作に對して、鮮明な魅惑的な煽動をしてゐる。而もそれは、單なる馬車馬的な勤勞奬勵ではなく、一定の目的に對して、よりよき文化生活の獲

No. D —— 革命以前の村の酒場

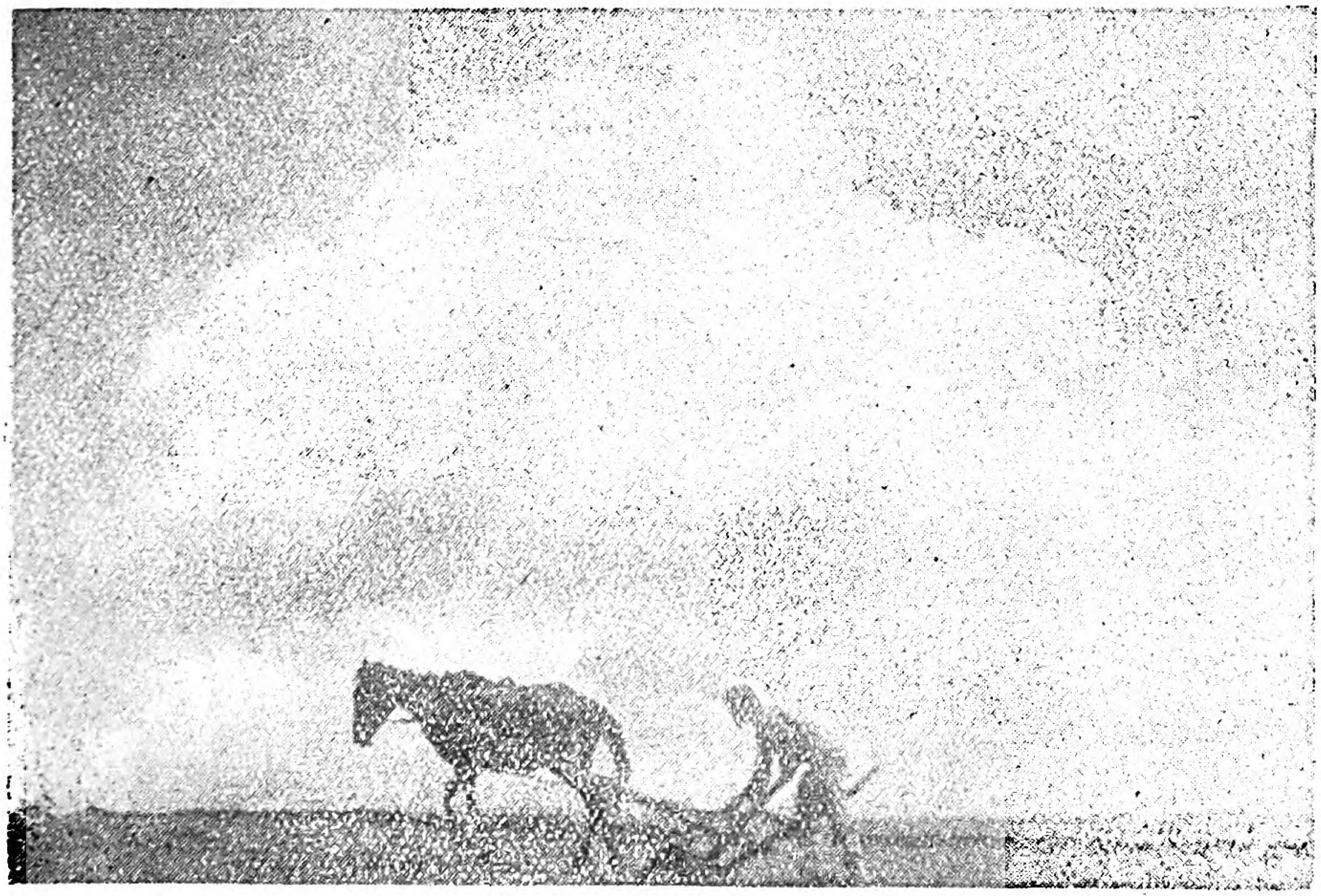


得に對して用意された勤勞に對してゞある。協同的な、統一的な、機械と科學に結びつけられた文化的勞作に對してゞある。」(ヘルソンスキー評)

ステイルNo. Aに示されたカドルは、トラクターを自由に驅使し乍ら、嬉々として勞作に從事する中年の農婦を示す。

僅かばかりの地所で自分や家族たちの生活の糧を得ようとあくせくしてゐる人達、而もこの人たちの目算は、富農の搾取や旱拔や、――人爲と自然の二重搾取から、いつも綺麗さつぱりと外されてしまひ、殘るものは只、馬の樣な勞作の思ひ出と、額に殘る暗い生活の影でしかない。それだのに今、農村の社會主義的建設化は、富農の搾取を取り拂ひ、トラクターによる科學的、集團的農業經營を取り入れて、制度にも天候にも決して打負けない、農民巨人を作り上げた。

單純な天心爛漫な美顏は、三分の得意を交へて、昨日に變る今日の農婦たちの明るい文化的勞働生活を表すに充分である。こゝに一言附け加へたいことは、監督のエイゼンシエテインが、この作中に職業的俳優を一人も用ひなかつたといふことこれである。この作に限らず、彼はどこにも職業俳優を用ひない。如何なる名優でも、否、彼が名優であればある程、必ずそこに不自然な技巧が加はり、映畫のアッピール性をぶち壞してしまふといふのがこの作者の宿論である。そして彼の製作上の苦心は、素人演技者の適役を見付けるといふ困難に倍加されてゐる。この映畫の主役マルファ、ラプキーナも



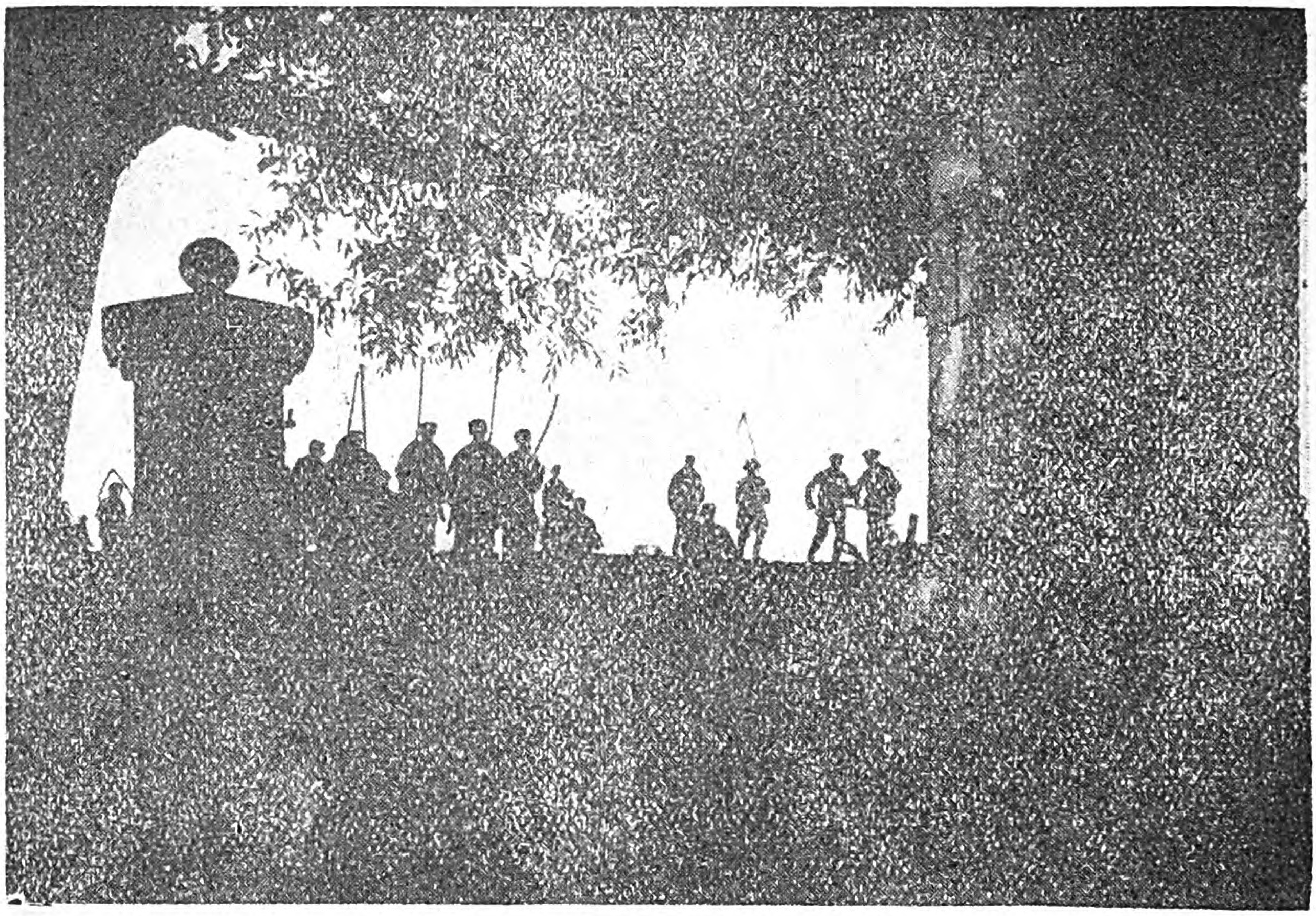
彼が長日月を掛けて探し當てた一農村の農婦である。而も彼女の演技を見た後は、「全世界のあらゆる映畫スターの何と愚かしく、何と意味なく、何とくだらないことよ……彼女の前にはあらゆる映畫スターも全く蒼白む程、しかく力強く、映畫のあらゆるテーマを導き持ち運んでゐる。」

「だが彼女は、自分で理解出來ないこの作品に於ては、全く門外漢であるに過ぎない。そして他の人々と同樣に、彼女は一人の偉大な人生の再現者の手にあつて、受動的な一個の機械人形に過ぎなかつた。」

ステイルBの場面も、今迄眼に一丁字も無かつた中年農夫が、機械に埋もれ乍ら、鹿爪らしい、文化人の顔付で、集團農場の管理をしてゐる所。これは最近ソヴエート新語として用ひられてゐる「穀物工場」(ゼルノーワヤ、フアブリカ)の一範疇に入るべき集團農事經營事務所の一つである。

ステイルC、——水中に游泳する豚の群。ソヴエート農村では最近まで、日本の農村で今でも見られる樣に、豚は不潔にしておく程營養がよくなると思つてゐた。何ぞ計らん。豚は、他の家畜に比し、一層清潔清淨を好むものだ。これは昨日までの豚飼養場を投げ捨て、家畜をその不潔狹隘な豚小屋から解放し、廣々とした流れの中に思ひきり水を浴びさせてゐる風景である。——家畜の改善は、豚小屋の解放より。

No. F —— 集團農業の美しい場面

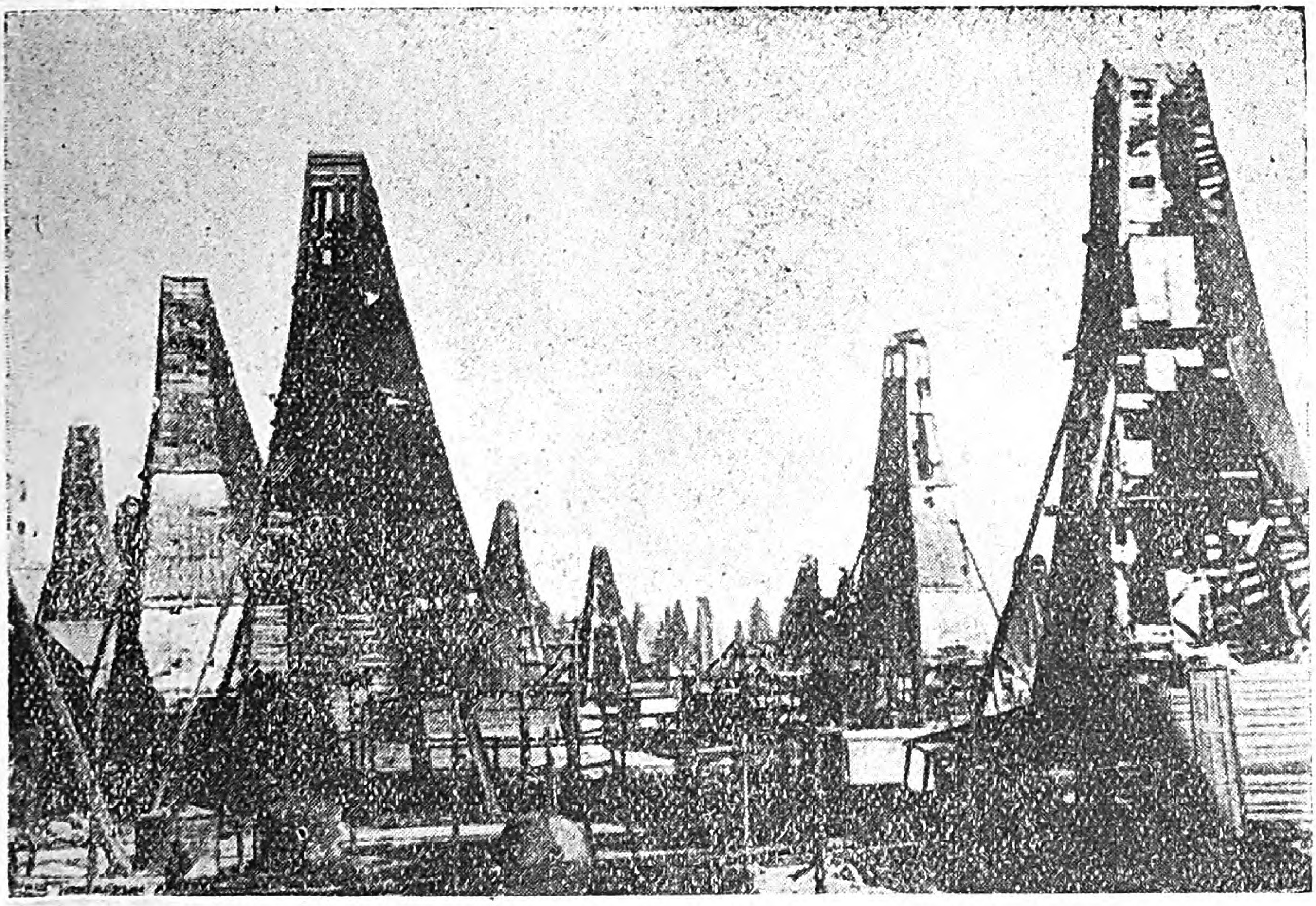


ステイルD、——家畜と一緒に、家畜の樣に一日を働き詰めた農夫たち、街へ荷物を運んで一つまみの銀貨を得た農村勞働者たち、——彼等は今漸く一日のつとめを濟まして村へ歸つてくる。家へ歸つたとて、窮迫し切つたこの農村では、若者に對する何の娯樂設備があるわけではなく、おやぢたちにも只暗い家庭が待つてゐるばかりだ。まゝよ一日の骨休め、入口の酒場で火酒でも一杯ひつかけてゆかう……かうして彼等の一日の勞働の結果は二三杯の酒で消えてしまふ。殘るものはたゞ自棄と頽廢と益々つのる生活の逼迫——誰かこの原始的農村生活に慄然と襟を正さずに居られよう。

ステイルE、瘦馬を驅つた一人の農夫が、大地の上へボタ／＼と汗を落し乍ら耕作に從事してゐる。野には彼の外に一人の人も見えない。險惡な雲が孤獨な馬と人との頭上を覆つてゐる。風になるか、雨になるか、兎に角彼が朝早くから骨を削る樣に忙しんだ勞作は、この大自然の氣分次第で中止になるか、惡くゆけば今迄の結果さへ絶無となつてしまふ。個人經營のさびしい農作風景である。

ステイルF——Bに一寸說明を加へた「穀物工場」の一種である。和氣靄々たる集團農業人が、一日の勞作を終へ歸路に着くところ、ステイルEの個人勞働者の群に比較し面白い對稱を作つてゐる。

ステイルG——荒涼たる荒野と、家畜の樣な勞働と、原始的農具



をしか持ち合さなかつた農村へ、機械が輸入された、科學が取り入れられた、電氣のまばゆい光が導かれた、そして遂に近代工業の一翼をなす油鑛事業が導入されるに至つた。——農村はかくして、一日々々とその原始的經濟狀態より、社會主義的建設への段階に飛躍しつゝある。

ステイルⅡ、——「全線」の製作。向つて右より監督エイゼンシユテイン。撮影チッセ。共同監督者アレクサンドロフ。エイゼンシエテインの矢釜しい監督振りには大抵の連中は參つてしまふらしい。中央の百姓女は、餘り何度も仕直しをさせられるので稍憂鬱な面持ちである。併し、素人演技者の發見に勞力の大半を用ひるエイゼンシュテインのことだ、彼に見出された程の連中は大概光つた出來映えを見せる。併し、その役に於て彼等がいかによい俳優であらうとも、そして彼等がそれを機會に職業俳優を希望しても、エイゼンシュテンはこれを肯ない。相當な報酬を與へて、職業俳優となることの愚を懇々と忠告し、村へ歸して まふ。實に親切な監督の叔父さんである。

「全線」——これは映畫の眞正なる言葉である。「全線」は文學或は繪畫のクラシックの作品と少しも異らない、さういふクラシカルな作品である。「全線」は文學の領域を掴んでゐる。

「全線」に於て風に吹きなびいて居るはだか麥は、レルモントフ或はニエクラーソフの詩に謳はれた處女地の描寫よりも、より惡い、或はより力强いと誰が言ひ得るか？ ——確實な計畫の上で歌つて

No. H ——「全線」製作中のエイゼンシュテイン



ゐるこほろぎ——それは映畫に於て、最も天才的に發見された、最も複雜な且つ高い敍情詩への途である。（ソコロフ）

ゴーリキイから——おい男爵！　なかでもてめえが一番惡いぞ！てめえ何にも解りもしねえ癖に嘘ばかりいつてゐらア。ぢぢいは山師ぢやねえぞ。眞實がどうしたといふんだい？　人間が何より眞實だ！　ぢぢいにやその事がよく解つてゐたけれど、てめえ達は解つてゐねえんだ。てめえ達は煉瓦のやうな鈍間だ……俺らこれでもぢぢいのことが解つてゐる。あいつ、成程嘘をついたさ。だが、それはてめえ達を憫む心から言つた嘘なんだ。人間を憫む心から、仕方なしに嘘をいふ人は世の中にいくらもあらア。俺アそれを知つてるんだぜ。書物にも書いてあらア。な立派に力を籠めて、人の氣を引き立てるやうに嘘をついてゐるんだ。嘘にだつて色々あらア。人の心を慰める嘘もあれば氣を和らげる嘘もある。また勞働者が手を挫いた時の苦しさを訴へる嘘もあれば、餓死する者を詰責る時の嘘もある……嘘にかけちや俺ア通だよ。嘘つてものは氣の弱い奴だの、他人の生血を吸つて生きてる奴には是非なくちやならねえもんだ……或る奴は嘘でもつてゐるし、他の奴は嘘で包まれてゐるだが獨立の人間や他人に頼らない自由の人間には嘘なんてものは更にいらねえんだ。だから嘘は奴隷と主人との宗教で、眞實は自由な人間の神だ！

文藝戰線脫退について

私、今村恒夫、長谷川進の三名は六月二十四日限り文藝戰線を脫退した。その事情については卽日發表した宣言書及び七月六日の讀賣新聞文藝欄に簡略ながら記した。再びこれを要約してみるならば、——

一、聯盟幹部の政治的無關心と、それの延長である所の小ブルジョア的頽廢

二、幹部達の超組織的專制、自己批判に對する壓迫。

三、それらの傾向の具體的現れとしての、今回の代作問題とその解決。我々は、で、內部での改革運動が絕對に絕望であることを知り脫退行動をとつたのである。

所が、それについて、勞農藝術家聯盟から聲名書が出た。我々はその山鳥の尾の長たらしい、曲歪と回避にみちた聲明書の內容を概括的に取上げて、眞相と比較しやう。

一、所謂代作問題とその解決。

我々が今回取上げた所謂代作問題は、一岩藤氏のそれのみではない。他の十二人の作家が某社と契約した長編小說に於いて行はれてゐる葉山、前田河、細田氏の代作をも包含するものである。この問題については代作廢止案を、改革派の一同志が委員會に提案し、表面上では（彼等の聲明書の如く）美しき解決を見たのであるが裏面ではさうは行かなかつた。「その提案者を除名するかでなければ自分達が脫退する」といふ前田河、葉山、岩藤三氏の脅迫に會つて、提案者は、突然天から降つた「解決委員」のために、懲戒されてしまつたのである。彼等の聲明書は一字もこの事實に觸れてゐない。觸れ得なかつた。彼等は、たゞデマによつて「相互不信・感情的不和」が生じたと抽象的に、誰ともわからぬそのデマ當事者に責任をなすりつけてゐる。もし彼等が眞にそれがデマゴーギイによつて生じた感情不和であると信じてゐるならば何故そのデマゴーギイを調査し處分しないか。そして何よりも先に、デマを信頼することによつて、成立した「代作廢止提案者への處分」を取消さないか。そればかりではない。この處置を承認させる擴大委員會に、はじめからの事情に通じ、しかも、この處置に反對意見を有すること明白な私を何故招待しなかつたか、それらの後めたい事實を掩つた幕の前での「滿場拍手」などは滑稽の至りだ。

二、我々三名の脫退についての彼等の認識不足。

我々の强硬意見が一度も聯盟の機關に提出されなかつたと彼等はうそぶく。では、私は反問する。もし、これがこんな小人數の團體での出來事でなく、一萬人五萬人を擁する大團體の出來ごとであつた場合には、その一萬人なり五萬人なりが皆で機關に押しよせて意見を提出しなければ、意見は提出されたことにならないといふのか。委員會は何のためにある？「我々の意志を代表した一委員が改革案の一部としての、代作反對案を提出した。そして、返り討ちを食つて罷免された。」これ程明瞭な事實をさへなかつたと强辯し得るか。

しかしながら、脫退手續について、我々の側に粗漏があつたといふことは認める。我々の一人が肋膜炎であり、他の一人の

平林たい子

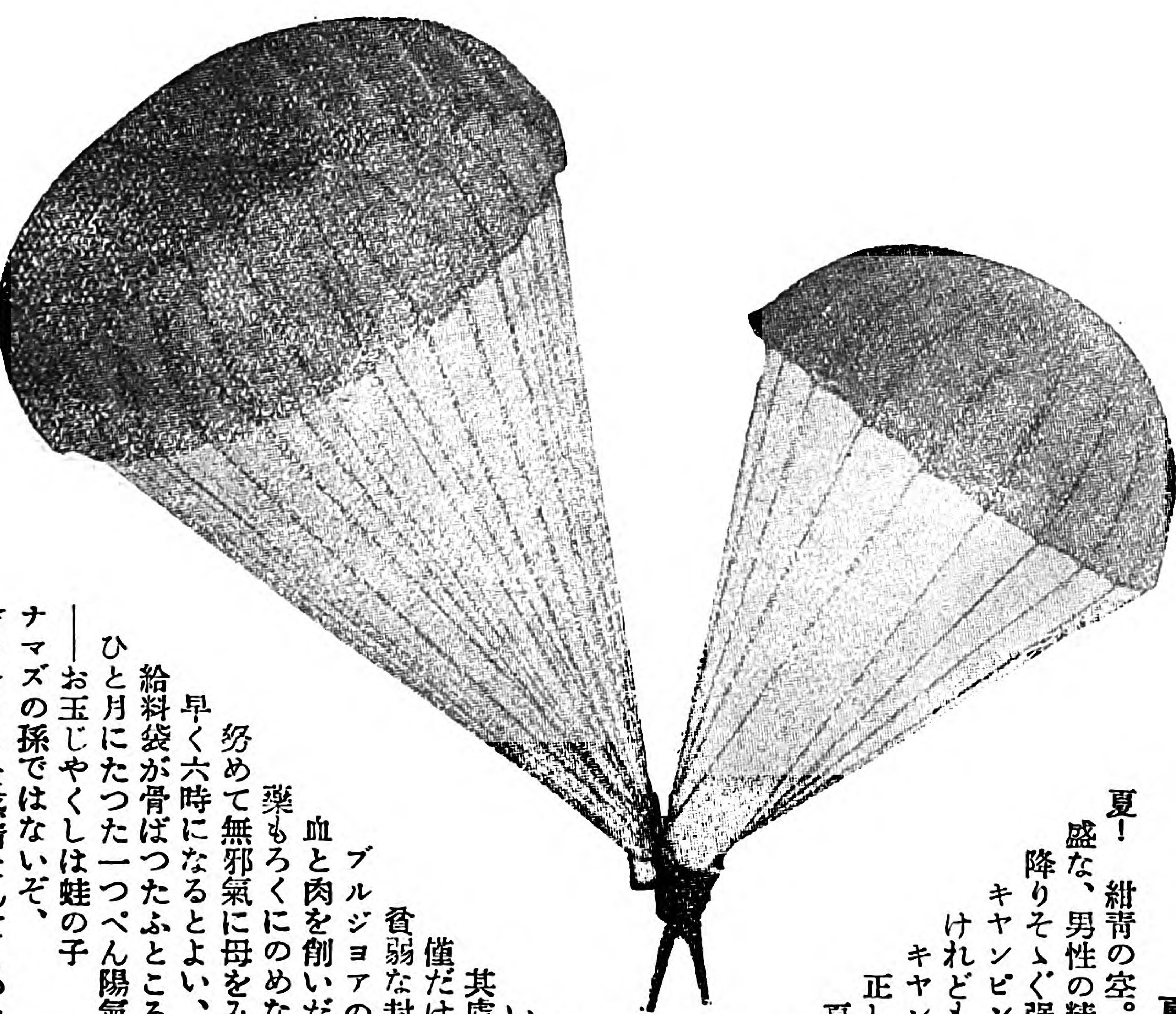
姉が危篤であり、私が長距離を歩けない病氣だつたゝめ我々の聯絡がうまく行かず、若干の粗洩が生じたことは認める。が、聯盟員の中で伊藤永之介氏一人しか宣言書を受取らなかつたといふのは嘘である。我々は、我々の宣言書を受とつた若干人の聯盟員が知らない顔をしてゐる動機を知つてゐるが故に、その名前を公開することを避けておく。私一箇人についてだけ言つても、私は六人の解決委員の面前で、この代作反對提案者への處分が文戰を更に沒落させる一歩であることを極力說き、更に一委員を訪問して、深更まで說いた。委員でない私として、それは最大の方法であつた。同志長谷川が擴大委員會で一言も發言しなかつたといふ報道も全く虛構である。彼は發言を封じられて、憤つて立上つた位である。

彼等の聲明書は我々の脫退を指して「大衆は集團內に於ける少數派運動の意義を全然忘却してゐる事實によつて一見何人にも明かなやうに」と書いてゐる。これは面白い意味深い一節だ。彼等は、この一句によつて、彼等の團體が、彼等が曾て自稱した如き、「マルクス主義藝術家の團體」ではもはやなく、「大衆團體」になり下つてゐることを明白に告白しそれを承認し甘んじてゐるではないか。

三、我々脫退後の彼等

我々が聯盟に對して脫退意志を表明した後、靑野、金子の二氏及び、靑木里村の二氏が來訪して、脫退宣言書の內容の取消し、脫退中止をすゝめた。だが、これは、彼等がいふやうに、決して、「同志的態度」から出でたものではない。それは、さうでなくつてさへ徐々に不信用に落ちつゝある文藝戰線が、これ以上不信用と勞働者農民から買受けることを恐れての行動に過ぎぬ。我々は惡意をもつて故意にかやうな事を言ふのではない。もし、彼等が眞に、同志的立場から我々の脫退中止を勸告するならば、何故、我々が摘出した問題の、階級的な解決を條件として來なかつたか。彼等は我々を慰撫するために、一聯盟員の惡口を口を極めて喋つて去つた。然るに彼等は我々を除名しながら、その聯盟員とは平然と同居してゐる。

紙數がないから、彼等の聲明書の四と五にふれ得ないことを遺憾とする。靑野氏に對する我等の宣言書の內容が、デマであつたか眞實であつたか、我々が「個人的立場」から數人の作家を葬らんとしたか、我等が「最初から惡意をもつて分裂を計劃」したか、「何人かの策動」にのせられたか、その眞相は、吾等の今後の、地味で堅實な、根强い鬪爭が說明してくれる。たゞ、重要なことであるから、一言、吾々の政治的立場について言ふならば、我々の脫退はその宣言書にも明かな如く「指導理論」の對立から起りはしなかつた。したがつて、我々は、彼等の「文藝戰線」が、讀者を欺くために、看板にだけ揭げてあるものを、我等は、我等の實質として踏襲する。「勞農支持」に變化なし。その他プロレタリヤ藝術運動上の意見にも變化なし。而して、この方針のもとに、文藝戰線の一部の同志、及び戰旗の一部の同志と、共同戰線を布き得ることを表明する。



夏

森本正子

夏！　紺青の空。海。
盛な、男性の精力を想はせる夏だ。
降りそゝぐ強い太陽の光と熱は、吾々に闘争への躍動を誘ふ。
キャンピングだ。登山だ。ドライヴだ。山莊への避暑だ。
けれども働く者にとつては、小さな一坪の部屋が
キャンプだ。未來への途が登山だ。
正しく強く堂々と進むのだ。
夏！　みどりは希望のシンボルだ赫灼と
輝く太陽は吾々の未來へのシンボルだ！

給料日

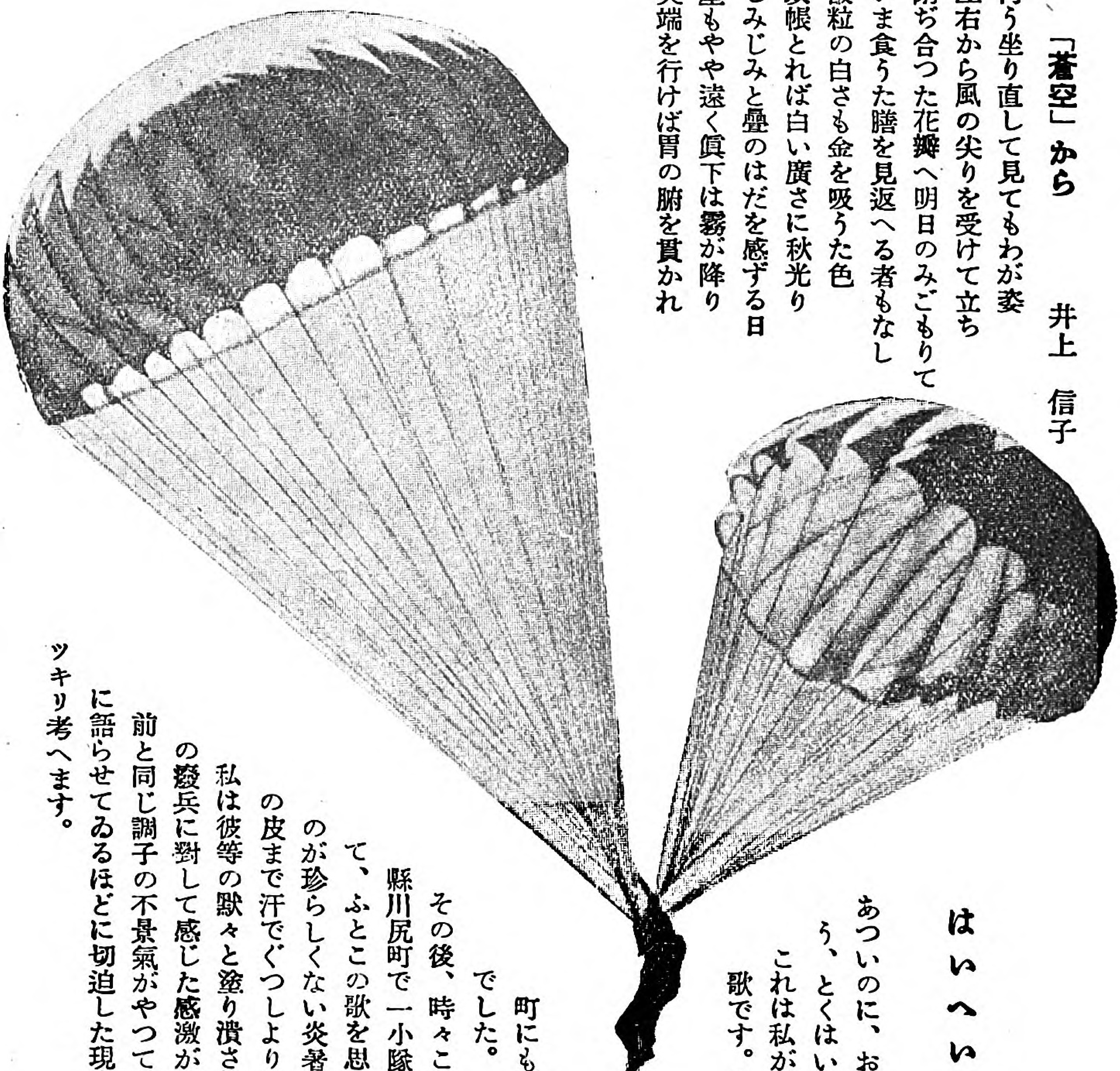
失名子

今日は給料日
工場の隅々まで生々と綠色に充ちた今朝、
ピンセットから朗かに活字がこぼれる、
いんうつな濕つぽい幕は切り落される、
其處には日々自分達の心身を削つて得た
僅だけれど尊い補償が
貧弱な封筒の中にうごめいてゐるのだ、
ブルジョアの極道息子の一晩の鼻かみにも足りない、
血と肉を削いだ結晶は一家三人一ヶ月の食道を辛じてうるほす、
薬もろくにのめない病身の母、かすりの目のぬけた着物を着て
始めて無邪氣に母をみとる頭のよい十一の弟、
早く六時になるとよい、
給料袋が骨ばつたふところでうづく、
ひと月にたつた一つぺん陽氣になれる私、
——お玉じやくしは蛙の子
ナマズの孫ではないぞ、
デリケートな感情なんてものは蹴とばしてこんな歌を唄ふ。

「蒼空」から

井上信子

何う坐り直して見てもわが姿
左右から風の尖りを受けて立ち
閉ぢ合つた花瓣へ明日のみごもりて
いま食うた膳を見返へる者もなし
飯粒の白さも金を吸うた色
蚊帳とれば白い廣さに秋光り
しみじみと疊のはだを感ずる日
星もやや遠く眞下は霧が降り
尖端を行けば胃の腑を貫かれ



はいへい

戸田豊子

あついのに、おほぜいひとにかこまれて、くすりのこうのう、とくはいへい。

これは私が尋常六年の時、生れてはじめてつくつた和歌です。先生に指名されて順々に自分の考へた歌を朗讀させられたのですが、皆の樣にコスモス…たそがれ…月見草…といふ風な歌でなかつたので、私は大分てれたのです。丁度大戰當時で私の町にも藥箱を肩に下げた廢兵が多勢流れて來た頃でした。

その後、時々この幼い歌を思ひ出しますが…今朝も熊本縣川尻町で一小隊が日射病で倒れた——といふ新聞記事を見て、ふとこの歌を思ひ浮べたのです。一小隊、一中隊が倒れるのが珍らしくない炎暑がこれからやつてくるのですが——背のうの皮まで汗でぐつしよりぬらした行軍の兵士等に街で會ふ時など、私は彼等の默々と塗り潰された思想について考へます。幼い時、一人の廢兵に對して感じた感激が、全く別な形で生長してゐます。丁度戰爭前と同じ調子の不景氣がやつて來た——と場末の貧乏人たちをして、無心に語らせてゐるほどに切迫した現在の情勢を前にして、何をなすべきかをハツキリ考へます。

實社會からくり覗き

希望社の反動事業綱

素川絹子

昭和五年四月發行の「希望」に希望社精神とは何ぞやといふのがのつてゐる。

「希望社なるものが最初から主義綱領を設けて起した集團でないから、希望社精神と口癖のやうに言ひ作ら、之を具體的に言ひ現す事は極めて困難である。併し解からないものに誰も熱中する筈はない。然り、解かつてゐる。それは知識的分解によつて、大腦に解かつてゐるのではなく、感じ得る靈の働きによつて心に觸れて居るのである云々」

「第一は敬である。早天修養會を見よ。そこに敬がある。彼等の相互修養會を見よ、そこに敬がある。――今の世の痛ましき姿は、敬の足りないところから起る。――地主と小作人とが互に相敬つてゐるか。資本主と勞働者とは如何。教師と生徒とは如何。」

「第二は信である　私はこゝに徳目をかゝげて修身の講議をする積りではない。希望社精神と稱するものゝ中に、何が生きて動いてゐるかを研究してゐるのである。此の見地から我等の運動を見、また相互の關係を見る時、そこに驚く可き信がある。

――まだ見ぬ私（靜香の事）を信ずることは申すまでもなし、お互をも信じ、或は玄米を常食とし、或ひは國債償還に應じ、或はエスペラントの研究をさえ始めるではないか。――希望社精神は生きたる命である。人間の心に觸れるとき、そこに新らしい生活の始まるのは此の爲である――信ずる生活は實に幸福である。」

「第三は愛である盲人に對する事業も愛から出る、癩病患者の慰問然り・長島の病者へ贈る慰問袋亦然り。希望社精神の中の愛なる命が、幾多の事業を斷行せしめ、又繼續せしめる。寄宿舍も愛あればこそ經營される。――愛すればこそ無實の誹を受けても許す。愛すればこそ惡意を以て妨害する

ものをも許す。愛すればこそ忍ばれる――愛するとき最も幸福である。此の故に明るい顔になる。希望社の集會にはいつも明るさが滿ちてゐる。」

「第四は働きである。希望社精神を解剖するとき、そこに働きを見出す。勤勞教育の主張と實行も其の一つである。我等の同志は必ず働きの人になる。働きを好み働きを愛する、之まで苦痛と思つた働きが、樂しみに變はる。――大學生の自炊寄宿舍、日本印刷學校や勤勞女學校の作業、休暇中の勤勞班等々一つとして働きの具象化でないものは無い。同志の集會が、譯もなくできるのは、誰もが勞を惜しまぬからである――今の社會に「働き其のものを幸福とする」思想を投げ込まなければ、何ほど收入を增しても救はれない。働きのない所に幸福な人生は成立せぬ。働きは愛の現れである」

「第五は學である。學ぶこと、之も我が希望社精神の一要素である。相互修養會が單なる修養會でなく、學修機關である點もそこにある。之まで、我が貧弱な學力に恥ぢもせず、平然としてゐられた人々が、一度び希望社の主張に接するや、心眼が開けて來る。じつとしてはゐられなくなる。彼は讀書を始める。」

「扨、以上、五方面から希望社精神の分解を試みた。敬、信、愛、働、學、此の五文字を以て表現することが出來た。然らば斯る精神の波の動きによつて如何なる結果を見るか。

一、彼は敬の人――自己を尊重する、從つて衞生に注意する。

一、彼は信の人――自己を信ずる人、從つて希望を持ち勇氣を持つ

一、彼は愛の人――自己を愛する、從つて人格の向上に努める、

一、彼は働の人――自ら進んで働く、パンは自ら得られる。

一、彼は學ぶ――故に延びる。頑固にならず、狹い熱狂家にならず、常識と理性をもつ、斯の如き人間が社會の貫き一員となることは當然である。

「この稿終るに當り、說明したやうで、而も何等の說明になつてゐない事を思ふ。然り、之は說明せらるべく餘りに神秘なる、偉大なる眞理である。感じ得る靈だけに感通する。

希望社の事業が、奇蹟の如く發展する理由を悟れ。我等は、此の偉大なる精神――決して希望社の專賣に非ざる日本固有の精神、否々全人類が、その本心に歸る時、誰も希つて來た大精神が、こゝに具象化せられて行くのを見る。

天ッ聲、人類の本願なり、命をかけて惜しからぬ仕事なり」

以上を讀んで希望社の精神を理解出來る人があるであらうか。解らぬ所が神秘で偉大なのだと云つてゐるが、さういふ云ひ方は從來幾多の欺瞞家が不得要領な返辭をして云ひつゞけて來た事である。

同じ本の「のぞみ」の部分に一問一答といふのがある。

甲「日本はどうなると思ふかね」

乙「だん〳〵よくなると思ふ」

甲「日本人の素質は善いか惡いか」

乙「甚だよい。感心する」

甲「今のやうに惡い事が澤山あつてもそう思ふか」

乙「發表されない所に幾らでも善い事が隱れてゐる」

甲「人間は善いものか、惡いものか。」

乙「善い者だ」

甲「君は偉くなるつもりか」

乙「さうだ！ 偉くなる」

甲「君の思ひ通りにならぬ事はないか」
乙「いくらでもある、こゝは地上だから」
甲「思ひ通りにならない事を悲しむか」
乙「否々、一切が感謝だ」
甲「君は死んだら消滅すると思ふか」
乙「不用なものは灰となり必要なものは天に上ると信ずる」
甲「君はうまいものが食ひたいか」
乙「食ひたいね」
甲「君は美人をどう見るか」
乙「美人は美人と見るよ」
甲「君は金がほしいか」
乙「ほしいよ、うんと善い事をしたいから」

ざつとこんな具合だ。生臭坊主の下手な禪問答みたいなこんな會話が解つたら馬鹿だ。大正の初めに樂天的な人道主義を提唱した武者小路氏の著書のやき直しのやうな所も見えるが、どう見てもペンは道化者だ。よくもこんな出鱈目が、如何にも意味ありげに並べられたものだ。一切のブルジヨア自由思想が、無産者の眞の解放には反動的な阻止の役目しか務めないと同樣に、こゝでも見え透いた胡魔かしが自由意志の假面を被つてゐる。前の晩十二時まで封筒書をして働いた人間が四時に起きる事が敬であり、強制的に雜誌を買はされた讀者が一層榮養不良になる爲に玄米を常食にすれば信となり、希望者の反動政策につかれば愛があるといふ。ふつうの資本家なら十三四の子供でも使ふには二十錢なり三十錢なり、たとへその人の生活が最低限度にも保證せられ得ない程だとは云へ、とにかく支拂つてゐるのが普通であるが、働きを敎へる希望社の印刷學校は月謝をとつて商賣ものゝ印刷をさせるのだ。一方では大學生が自炊するのは働きであるし、働いても働いても滿足に食へぬ人間は、食へなくても「働きそのものを幸福に思ひ」さへすれば救はれると敎へるのが希望社の働きの主旨なのだ。こき使はれて、榮養不良になつてお陀佛すれば、たしかに天國とやらに救はれるといふのかも知れない。要するに希望社の精神とは、街頭に太鼓をたゝいて「信ずるものはやがて、みな救はれ」と唄つてゐる救世軍と何の違ひもない。「希望の日本」の附錄にはさんだモッツァルトの子守唄、眠れ、よい子よ眠れや」が最も端的に希望社の眞髓を云ひ表はしてゐると思ふといさゝか皮肉だ。それかあらずか、感謝好きの、自己宣傳好きの後藤氏は希望社經營日本印刷學校の生徒達が、十時間の勞働と、その上の課外勞働を強ひられた上に、他所の仕事をして後藤氏の爲に三千圓の自動車を買つてくれた、子供達は私が彼等を思ふよりもずつと私の事を思つてくれる、私は生徒の可愛がり方が少なかつたと、十幾頁かを費して廣告してゐる。

かういふ事が誰にも本當に思へるであらうか。生徒達は休みたがつてゐやうがゐまいが擔當の先生達は、後藤氏の御機嫌をとり結ぶ爲に時間外の勞働を生徒達に強ひたといふのと、どちらが事實らしく聞えるだらうか。昔から搾取者は何彼と理屈をつけて、小ぎれいな假面を被り度がるものだ。

この後藤氏が盛んに現代の富豪の浮薄さを慷慨し、敬神の念のない事や、貧者を救はうとしない事を歎いてゐるのだ。だが彼は人間の生活をかくまで不平等にさせてゐる根本的の原因――社會組織については一言も及ぼさないで、「進んで働く者にはパンは自ら得られる」等と御法樂な事を云つてゐる。働いてパンが自ら得られたのは幾百年かの昔の話で、今の働く人間達は、働きたくても仕事がない事をよもや後藤氏

は知らないわけでもあるまい。それはばかりではない。人間の食ふものを作る爲に働いてゐる農民が、眞黑になつて働いた揚苦實つた食物は自ら地主に取り上げられてばかりゐる現狀が、現代の暗澹たる人心に思ひをはせる後藤氏であつてみれば見えないのではあるまい。働けばパンは自ら得られるなんて、一世紀前の巫女でも云ひ相もないお目出度い事を云つて、善良な人々を對手に十年に百萬圓ももうけた後藤氏は、人間なんて馬鹿ばかりだとでも思つてゐる氣持で嘲笑つてゐる事だらう。だが純粹な人々は一度目覺めれば、支配階級の太鼓持ちをして、陰性の菌のやうにはびこつてゐる連中など一擊にふきとばしてしまふ強さを藏してゐるのだ。

「社會主義の運動は亂暴で情操がないからあゝいふものにかぶれる人間は救はれない。社會主義が、希望社の運動にまで追ひつくには未だ百年掛る」と後藤氏が教へたその教へ子の中にすら、すでに幾人かの目覺めた、そして後藤氏の巧妙な欺瞞と社會組織の不當さを認識して起ち上らうとしてゐる人間がゐる事を後藤氏は知つてゐるか。

學生と雜誌「希望」の讀者とは後藤氏に云はせれば希望社運動の指導者ださうな。希望社の讀者である學生達が集まつて、共同自炊をしてゐる。それを、男學生のは「希望寮」と云ひ、女學生のは「修省舍」と云つてゐる。どちらも麗々と看板を掲げて、下宿料は廉いといふ宣傳だから、希望社が費用の援助でもして秀才教育でもしてゐるのかと思ふと間違ひだ。普通の家屋を五人から十二三人で借りて自炊し、各々が頭割でその費用を分擔するので格別希望社の世話になつてゐるわけではない。然も雜誌を買はせる事と、讀者獲得のための怪し氣な修養會を強制してゐる。學生達は希望社運動の指導者といふけちな好餌につられて二圓の誌代を拂ひ込み、早寢早起き、電燈代の節約を誇りとする。今時少し氣の利いた學生は見むきもしまいがとにかく親から金を貰つて希望社へ御奉公してゐる時分はそれで無事だ。だが學校を卒業して一人立ちで世の中へ出てみるとまるで見當違ひだ。これはどうしたわけだらう、と浦島のやうに驚いてゐる耳に、「ほら御覽！　希望社はいゝ所だらう」といふ位の筋道の通らないまやかしは絕えず行はれてゐるわけだ。さうしてこれ等の人々は社會に對する希望社の反動事業の柵か塀の役目をつとめてゐるわけである。一種の目かくしだ。

この塀の中にはどういふ事が演じられてゐるか。後藤氏が自分の巧妙さを人知れず誇つてゐる最も大きなものに日本印刷學校と、勤勞女學校と、希望學校とがある。日本印刷學校は前にも一寸書いたやうに、月謝をとつて商賣物の印刷をさせる所だ。

日本印刷學校入學案内

修業年限ハ本科三箇年、研究科二ケ年

入學資格　一、身體强健ナル者、二、年齡滿十四歲以上十七歲迄ノ男子、三、高等小學卒業以上ノ學力ヲ有スルモノ、但シ中等學校中途退學者ハ原則トシテ入學ヲ許サズ。

選拔方法、入學試驗ヲ用ヒズ、出身學校長、又ハ熱心ナル希望社社友ノ推薦中ヨリ本人ノ人物其他調査ノ上入學ヲ許ス。人物、成績共ニ優秀、身體强壯ナル者ニ限ル――中途退學ヲ許サズ。

授業ト作業一日ノ中二――三時間ヲ學業ニアテ、七時間ヲ實習時間ニアツ。

修省寮、本校生徒ハ全部寄宿舍修省寮ニ收容シ規律アル日常生活ヲナサシム

學資、入學金、入學ノ際壹圓

授業料　月一圓（毎月三日納入）

寄宿費　月拾貳圓

文房具　小遣月五圓前後
教科書代　學年始二拾圓位
制服代　夏服　四圓
　　　　冬服　拾五圓
　　　　作業服　四圓

學資送金、前項學資ノ内、保護者ヨリ送金ヲ要スルモノハ、第一學年月拾圓、二學年月五圓、三學年以上ハ不要トシ、殘額ハ本校ニ於テ負擔スルモノトス、

但シ制服代其他臨時費ハ其都度自辨ノ事

就職、本校研究科卒業生ハ本人ノ希望ニヨリ希望社印刷部ニ採用シ社員トシテ待遇セラル、

勤勞女學校は尋常小學校卒業の女子で、印刷學校で印刷した雜誌を製本するのが主な仕事であるが、身體強壯、人物調査學資の高など入學規則は大體印刷學校と同樣で、學校の給費は僅か五圓である。

勤勞女學校の目的は、一、勤勞を訓練敎化の眼目とし二、情操の教育に重きを置き三、女子に對する中等學校の大要を授けて堅實なる日本婦人たらしむるにあり。修業年限は四ヶ年である、從來は本科と．製本科との別があつたが今年からその別は失くなつた。

かうして全國から子供らしい純眞な夢と、憧がれを持つて集まつて來る者こそ福ひなる哉である。お金を拂つて働かして敎くのは大抵な事ぢやない。十四か五の少年に十時間の勞働である。それが規則通り十時間であつてさへ相當過勞である可きなのに、忙しい時には夜の十時十一時まで、無際限の仕事が待ち設けてゐるのだといふ。普通の工場であつたら、規則違反を摘發される所も、學校の名目において、且つ、生徒が自發的に喜んで働いてゐるといふ名目で、かくまで暴戾な搾取を公然としてゐるのだ。だが生徒は眞實に喜んでやつてゐるであらうか。少しの强制もしないであらうか。否、そんな事はみんな眞赤な嘘だ。この學校の作業が如何に過激な暴虐なものであるかは、入學の時にあれ程繰り返し、身體强壯を嚴しく云つて選拔するにも關はらず一ヶ月に一人當りの死亡者を出してゐる事實によつても明瞭ではないか。この學生が病氣になると希望社の病院へ入れて、社員の中で看護の心得のあるものを附き添はせるのだが、本人が家へ歸つて養生し度いといふにも關はらず「こゝで病氣になつた人は社の人々の親切で快くして上げなければならない」と親切めかして、心淋しがつてしきりに故郷の事をいふ病人を決して送り返さないのだ。歸つて病氣になつた經路や仕事のつらさを饒言られては困るからである　だが心配する事はない。病院へ入らなければならないやうな病人は、やがて間もなく彼の世へ救はれて樂になつてしまふ。何事も忍耐して唯々働く事を奬勵してゐるのでこゝの人々は惡い所があつても動けなくなるまでは決して訴へない。かういふ人達が病院へ入る時にはすでに死が約束されてゐる。それが忍耐强い模範的な人間として賞揚されてゐるからである。その爲には入學の時嚴重な人物試驗で、反抗を知らない成可く從順な子供ばかりを選ぶ。各地方の小學校長がまた趣旨を呑み込んで御用を承はる。さういふ人達を以つて希望社を固めさへすれば、萬事は後藤氏の方寸のまゝに虐使出來るといふ積りなのだらう。こんなにして卒業して社會へ出た少年たちはどうなるんだらう。（希望社が社員として採用するのは事實は僅かに五年の虐使に耐え得た研究科生丈だ）大會社になる程、餘程の熟練工でない限り、生半可な仕事の知識のある者は扱ひ惡いので嫌がるのが普通である小學校を卒業すれば職場給仕として、幾らかの日給を貰ひ乍ら、活字や

用具の持ち運びをしてゐるうちに、いつの間にか技術を覺え込んでしまつて、かういふ方がその會社らしい習慣にも馴じんで、ずつと能率を上げる有能な職工になるので、やゝ成長した者は中年者と稱して歡迎されない傾向があるのだ。

だがこゝにやゝ樣子の違つて來たのは、勤勞學園である。最もこれは最近出來たもので、希望社の運動が公然と國家權力と結びつき資本家の走狗である事を明瞭にした後のもの丈に、その意途はます〳〵露骨になつてゐる。現に今春大阪に出來た勤勞女學校といふのは、從業員が待遇改善問題から爭議をやつた事のある大阪の某デパートメントの重役の後援で、盆、暮れの忙しい時には、實地見學の名で、臨時雇に希望學校の生徒を手傳はせる事、卒業者は店員として全部引取るといふ契約が内々出來てゐるといふ話だ。希望社式の極端な從順無抵抗を仕込まれた從業員は資本家には此の上もなく好都合だらう。併し、後藤氏の息込みにも似ず、今春の入學志望者は甚だ少く、成績は振はない樣子だ。

この他に後藤氏の御膝元には數人の地方巡回講師と希望社員と、その候補者たる幾人かの事務員がゐる。彼女等は一體どんな風に働かされてゐるか。大部分は地方の純朴な少年少女で、印刷學校が採用する規則と殆んど同じやうな嚴選を經て小學校長や誌友から推薦された者が多い。最一つは女工募集と同樣に希望社員の募集がまわる。併し連れて來られるものは幾年か「泉の花」か「のぞみ」かとにかく希望社の誌友であつた者でなければならない。大體は十八九から二十歳前後の者が多く、來ても六ヶ月の候補期間を無事に通過しなくては社員にはなれない。その間に大抵の人は駄目になつてしまふのだ。私の知つてゐる二十歳になる娘さんは、看護婦の免状を持つてゐたので、病院へ派出申込みのある時にはそこへやられる。そこの給料は全部希望社のものになつて、電車賃すら與へられない。社内に病人が出來ればその世話をする。そうして間の時には雜誌の帶封書きである。これがまた一通りの仕事ではない。月々、間に合はなくなると夜の十一時十二時まで書きつゞけるので、しまひには目の前が眞白くなつて何が何やらさつぱり解らなくなつたと云つてゐる。ふだんでも一日三千枚書くといふのだから超人間的だ。封筒書きは商賣人でも一時間に百枚が普通で、二百枚書ける人は數へる程しかないといふ事だ。

これすら働いて月に二十圓の手當を呉れる。がそのお金は三十圓の家を六人で借りて自炊してゐる彼の女達には十五圓の食費と、五圓の家賃を除けば一文も殘らない。たま〳〵食費でも節約して無理に殘したとしても彼の女達の自由には使ふ事が出來ない。お金は天下通貨のそれではなくて、希望社特殊の金券といふ物でくれるからだ。今時金券など使はせてゐるのは坑山か、官營事業の購買部例へば遞信省の簡易保險局など位なものだ。だから希望社の人達は社内の購賣部以外で何にも買ふ事は出來ないわけだ。勢ひ電車賃と、被服費は仕送りを受けるより道がない。小遣ひ自辨で、眼の前に霧のかゝる程働かせれば、どんなやり方をしたつて儲かる事は必定だ。その娘さんは四ヶ月目に歸つた時には眼には星が出來、蒼くしなびて、二十の若さはどこにも見られなかつた。外にも群馬縣からはる〴〵憧れて出て來た姉妹があつたが、三月程の間に妹はすつかり消耗して強度の神經衰弱になり「希望社は僞物だ」といひ續け乍ら歸つていつたといふのもある。

こゝは毎朝必ず四時に起こされて屋上で、體操が行はれる。所謂敬の思想を養ふと稱する早天修養會で、體操がすむと廣間に集まつて、後藤靜香の著書「權威」を交る〲讀み上げる。「權威」は基督教の、バイブルと同樣に、彼等の間では絶對的なものなのだ。その次には明治天皇の御製「大御心」を朗詠して、修養會が終る。これは希望寮の學生達もする事になつてゐる。それから七時までに自分達の食事、掃除身粧ひをして七時には仕事にかゝるのだが、昨秋大希望會館が出來てからは自動出勤記入票を使ふ程始業時間は嚴重だ。夕方は四時の規定である。但し、勿論前にものべたやうに事務輻輳の場合はその限りに非ず、で十一時十二時までの例外は始終である。この取締りは後藤氏自身で當らずに義妹細川かほる氏が一切切廻して、後藤氏自身は滅多に姿を現さない。偶像崇拜的な夢をいやが上にも大きくさせる爲である。そしてたま〲姿を見せる時の後藤氏は素晴らしくにこやかな溫顏であの神經質な狡猾をおほふのだ。そして、希望社運動に對して、少しでも疑惑の眼を向けたり、疑問を發したりする者は、直ぐに彼の人は墮落したと云つて排斥される。今年の春新らしい社員が四五人入つた時、後藤氏は「希望社の運動に少しでも疑ひを持つものは速座に出て貰ひ度い。獻身的に忠實に働ける信念がなくてこゝに入つたものは、すでに詐欺であり、泥棒であると同じだ」を多ぜいの前で其の少女達にきめつけたので、希望社に憧れと夢とは持つて來たが奴隸根性までは持ち合さなかつた正直な二人の少女はびつくりして、そのまゝ退社してしまつたといふ話しさへある。資本主義時代に單なる人道主義的な愛を說き敬を說く者の隨所にみられる矛盾と欺瞞とがこれである。

この他に全國希望都市だの、希望村だの學生村だの、希望社全日本聯盟だの、學生聯盟だのと限りなく反動網は張られてゐるが、希望都市希望村は、要するに爲政者の都合と結合して希望社の雜誌販布の手段であり、最近急速に發會式を擧げた希望社全日本聯盟及び學生聯盟は、全國に捲き起つた共產黨の運動に恐怖した彼等が、古い革袋が、用をなさなくなつた事を知つて、慌てて、新らしい反動の革袋を用意した所だ。後藤氏の言葉を借りれば、これまでの希望社の讀者を改めて再組織したのださうだが、何も事あらためて再組織などゝいふ必要はない。國家の危機に面してとか何とか、現政府との間に諒解が成り立つてゐる事は明らかだ、今に在郷軍人や青年團やボーイスカートと一緒になつて災害時の豫備演習にでも參加して、最う一段出世の手づるにでもするつもりだらう。併も、一世紀遲れてゐると稱する共產主義運動の眞似をして、細胞組織だの．同志を獲得せよ等の言葉を使つてゐる所は最も御愛嬌だ。

神前早天修養會と稱して、毎月一回音樂隊を先頭にして希望社員、印刷學校の生徒に近郊の讀者を糾合して、明治神宮まで徒歩行列をする。これをメーデーの示威行進に對抗するものだと自稱してゐるが、勿論こちらには私服も騎馬巡査も來はしない。

問題はたつた一つなのに事實は無際限だ。東京市外西大久保に四十萬圓の廣大な反動希望會館を建てる時に、二十萬圓の寄附を集めた外に

之は（希望館）日本のものです
日本に一つは無くてはならぬお家です
之はあなたのお家です。

煉瓦の一つ一つに血の通ふ
望みと信と愛に輝くお家です。
日本に一つは無くてはならぬお家です
同じ願ひの同胞が心をこめて
建てませう。

などゝうまい事を云つて様々な方法で金を集めた。社債發行がそれであり、證券借り入れがそれである。社の財政は極端に窮乏して雜誌も休刊しなければならない狀態だ、銀行で金を借りるには擔保と分高な利子が必要だが希望社としては今それは出來ない。お金が出來なければ折角計畫丈出來た皆さんの希望館を中止するより仕方がない。此の際進んでといふやうな事をくどくどと雜誌の上でのべ立てゝ何分かの富に利子の安い二十圓社債を地方の誌友に買はして四十萬圓を集めたのは大正十六年頃だ。その頃は毎號金々々だ。雜誌の購讀は一年分先き拂ひでなくてはならない。二十圓先拂ひの終身社友だ。と愛國婦人の寄附と同樣お金の高で社友とか誌友とか名前が違ふのだ。その次には百圓の證券を希望社を信用して貸してさへくれゝば、希望社はそれを擔保に銀行から金を借りる事が出來る。證券についてゐる利息は本人の方へ拂ふやうにしておきさへすればその人は一錢も損をしないで希望社を救ふ事が出來るのだすゝんで貸して貰ひ度い。といつて、地方の讀者から證券を借り込んだ。だがそれを擔保に銀行から借りた金の利息は誰の肩にかゝつて行くのか知つてゐるか。かういふ場合修養の爲と稱する希望社の雜誌は殆んどこの問題でうづめられ、これに應じた人の讚美を大々的に報告して他を煽動する役に立てる。

かうしたお金で東京の希望館を初め、伊勢、京都、大阪、阿蘇山麓などの希望館が建築されたのだ。伊勢の神都希望館は元の勅使齋館を買收したもので三十六萬圓と稱してゐる。

こゝには皇族の間といふのがあつてここに宿つた人達はその部屋で朝の行事(修身講話――權威の朗讀――大御心の朗詠をさす)を行はされるのだ。地方からはる〴〵伊勢參宮に出かけた社友は、ここに一泊。一圓出して泊めて貰ひ、旅疲れでねむくても容赦なく朝は四時に起きて早天修養會に參加しなければならない。何故ならば神都希望館は國家の家、同志の家だからだ。

大藏省直接納入の國債償還促進運動は、希望社が支配階級の御用に立つ晴れの見せ場だつたのだらう、「今度の内閣の態度は眞劍そのものである。自動車の制限に始まり、紙一枚の節約に及び、宴會を簡にし、實行實動以て其の範を垂れんとする意氣込敬服すべき――」と産業合理化で百萬人の失業者を街に溢れさせた反動濱口内閣を極力讚美して、國の借金は國民の借金だ。國債償還に率先して應ぜよとばかり、支配階級の惡辣さが釀しだした六十億の外債を口先き一つで國民に拂はせやうといふ所は政府の口吻そのまゝだ。だから或る一人の看護婦が長年辛苦の百圓を寄附して大藏省に納めたと云つて「彼の女のこの英雄的行爲にならへ」とまで最大級の廣告をしなければならなくもなるのだ。

一昨年あたりは國家食糧問題の解決の爲に、玄米食奬勵をやつて、工場や、地方知事から喜ばれてゐたが、保健問題、食量問題のレベルに達するには今尚程遠い現在の無産者達が玄米食奬勵に何の感興も起さないのは當然な事だ。そこで神社佛閣雜巾奉納運動が始まつた。何處の家庭にもあるぼろ布で雜巾を縫つて神社佛閣に奉納し、敬神の念を養ふといふのだから、全く笑ひ話

にもならない。

だが逐去年まで、何だ彼だと金の窮乏を社友大衆に訴へ乍ら、遂に幾百萬圓かの財産を仕上げた後藤總裁は、先日六月二日に娘を連れて外國漫遊に出掛けた程の素晴らしい景氣だ。その出發前に希望社の社則が變つた。今までは何とか彼とか少なくとも巧妙な言葉が、看板が必要だつた。えびで鯛をつる爲には――。併し、準備は全くとゝのつたのだ。もうケロ〳〵と泣き事を並べたり、讀者にこびたりする必要はない。背後には國家權力がひかえてゐる。幾百萬圓かの財産は出來た。反動權力をふるふ提携はなつたのだ。

これまで一ヶ年二圓だつた雜誌「希望」は三圓になり、その代りに全日本聯盟の稱號を委囑して「希望の日本」を送るといふ。「のぞみ」「泉の花」は「大道」と改題して一圓に値上げ「光と聲」は「學徒」と改稱して、貳圓拂込みの讀者は、學生聯盟委員とする。

總裁、後藤靜香の渡歐――此の際新社友大募集に應じて、師の期待を裏切るな！

とは希業社の特別號外の報ずる所だ。中の樣子を知る人の話では、かうした廣告文まで、後藤氏の筆だといふが、恥かしくもなくよくもこんな自己宣傳が出來たものだ。

希望社の反動事業もこゝに至つてやうやく本舞臺に入つて來た。帝國主義的ブルジヨアジーとファシズムとが、無産者の解放運動に對して狂暴な抗勢を持して來たのに和して、希望社の運動もこゝ暫くは繁盛するのであらう。支配階級の手先きになつて純朴な無産者の眠り込ませに努力するこの山師に欺されるな――といふ丈では足りない。かゝる運動は徹底的に排撃されなければならない。すでに工場からも、農村からも、彼等のお膝元希望社の内部にまで、惡む可き欺瞞に對する反抗と憎惡と嘲笑の聲は上つてゐる。

新刊紹介

細田民樹氏著「眞理の春」が一冊にまとまつた。この作が朝日新聞紙上に連載された當時、毎朝どんなに目覺るのを悦ばしてくれたか知れない。これは我々の讀者層ばかりでなく、ブルジョア級の朝の目覺にもまづ第一に開かれたことであらうと思ふ。然しながらそれらの人々は我々とは違つた苦さと動悸と、安堵とを受取りもしたであらう、まづ今日はわしの方には火がつかなかつたと――だから突然この小説が打斷られると聞いた時殆ど信じられなかつた。あんなに受けた連載ものがなんで中斷されるのだらうこれは當然誰にも抱かれる疑問だ。も一つは、過去に於いて、朝日はちつとも、面白くも、よくもない小說をも、一たん掲載したとなると、大新聞の度量と見識、それから讀者の不平をおさへつけた傲慢さで、中々日延ひでしたと屈服しないだけの度胸を示すのに、こんなにも各階級から受けた連載ものを止めるかといふ審しさ、それはやがてハヽ、だいぶ手强い談判が來てゐるのだなと悟らせた。作者も此の談では引つ込むまいと思つたら、後半は中央公論に載るといふ事をきいた。そして前半がいま纏められて出たのだ。作中ブルジョアの世界は別天地として容作といひ、家村といひ、市枝も初實も私達の前に幾人も生きて動いてゐる人達だ。作者の序にもある如く最近の財界政界の事實を書いた點も見逃してはならない――定價壹圓五十錢、東京丸の内ビルデング中央公論社發行。



職場からの叫び!!!

プレーの見た施療患者

粂村眞玲緒

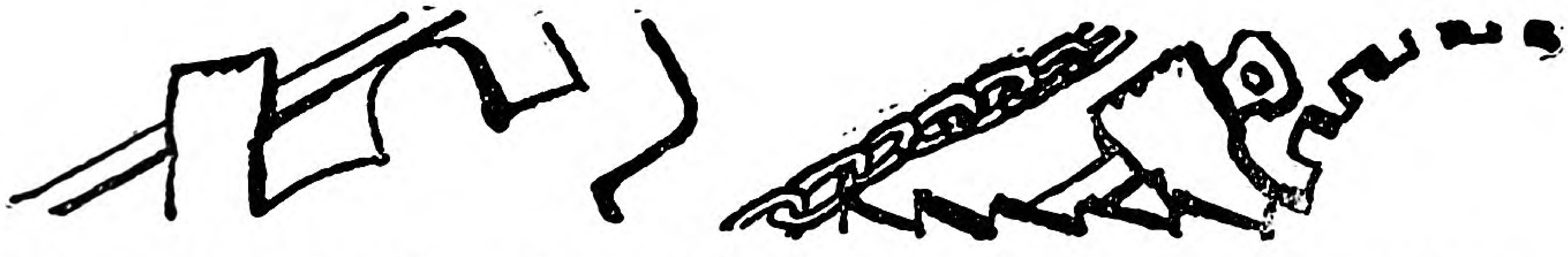
　私がプレー生活を初めてから三年九ヶ月になる。私の働いてゐる病院は有料患者は絶體に取扱はない。皆一戸を持たない貧困者ばかりである。中にはずるい者もあつて相當な地位にあり智識もあつて貧困者を裝つて來る人もある樣だ。此の種類の人が入院したら大變だ。ヤレプレーが生意氣だ、ヤレ不親切だと文句ばかり云ふ。

　施療患者の職業は、有料患者のそれと違つて人夫、土工、行商人等その日ぐらしのプロレタリアが多いのは云ふまでもない。今まで自分自身の勞働力によつて辛うじて、一家の生計を支へてゐた彼等が病氣にとりつかれて施療患者として入院して來なければならないと云ふ事は、彼等自身にとつても又彼等の家族にとつても、致命傷に違ひない。彼等はいかに彼等の病氣を呪つてゐるか！　そこで施療病院には、あの普通の有料病院と云ふ物が聯想させる、白いベッドと看護婦の白衣と藥のほの甘い香りとがかもし出す一種のロマンテイックな雰圍氣と云ふやうなものは、薬にしたくてもない。そこにあるものは、うめきと、のろひと、いかりと……である。ねる間だけは、彼等もすべてを忘れて一番らくな氣持になるやうだ。朝になつてプレーが體溫かけに行つても脈をとりに行つても黑い足をベッドの端に投げ出して布團を横にかぶつてねてゐる彼等の姿をみると、起すのが氣の毒になる。

　この大都會のそこゝにある一流病院の特等室に、幾人かの博士と看護婦にかしづかれて病をやしなつてゐるブルジョアの數の、幾十倍か、幾百倍かの數の働いて生きてゐる人々が、施療患者としての一種のひがみをもつて、配膳される市費の粗末な食物の一椀をも爭ひながら一病室に三十七人或は四十七人も、押しこめられて病勢のおとろへるのを待たねばならないと云ふ事實を眼前に見て、田舍から出てきて、何もわからない私もつくづく現在の社會狀態に對しある感じをもたないでは居られなかつた。

　こんな例がある。

　退院するときはもう袷に羽織の時期なのに浴衣に羽織で帶もなく細紐で退院したどこかのおかみさんがあつた。又歸るに家なく、親類すらなく養老院に送られる老人も時にはあつた。朝鮮人で、歸國するに旅費のないあはれな勞働者もあつた。そう云ふ人々に對して、この病院も經營主である市當局も、何の方法もかうじてはやらないのでプレー同志が、いくらかづつ集めてせめて小遣にでもとあげる事にしてゐた。



かうしたいくつかの悲慘な例と、それに對する病院及び市當局の冷淡さ。それらは我々プレーに憤怒を感じさせる。表面ばかり親切に見せかけた施療病院。その中の悲慘な狀態。そして前にのべた例のやうな場合。これこそ現在の社會の一つの大きな缺陷でなくて何であらう。

　働く者の病氣を養ふために、廣い病室と豐富な滋養物と、熟練した醫師とが無條件であたへられる日のくるのを、私は待たずに居られない。

揚棄

北山雅子

せつかく出して置いた缺勤屆も醫師の診斷書もハトロン紙に封じ込まれたまゝで藥臭い枕許に舞戻つて來た。病氣のお眞が會社にとつて必要がない様に、其の紙片も亦不必要なものだつた。

　今ではもう立派に、會社のよき使用人として、出來得る丈體裁よく、お眞のクビをはねる爲に松倉町の診療所迄押掛て來た矢本は同志と名乘るひとりだつた。

『――でねえ。山崎さんは、かう云ふのよ。會社はこれから非常に忙しくなるでせう。だから幾らあつても人手は足りないんだつて。それに新らしくはいつたばかりのあなたに止されるのは實に惜しいし、會社としても困る――つて。』

　矢本は京都仕込みの舌つたるい語を一寸斷つて、また續けた。

『だけどねえ。病氣の人を無理矢理に働かせる事はいくら會社がなんてつたつて出來ないつて云ふのよ。――で會社でも何とか都合をつけて、他に人をさがしもするから當分――まあ靜かに養生したらいゝだらう――つて。』

　會社では首を切ることさへ恩に着せやうとしてゐる。見え透いた親切めいた打算的な仕打ちにお眞は瞬間啞然として、返す語もなく、それでも、幾分云ひ難くさうにしてゐる矢本の顏に無意味な視線を送つてゐた。

「それでもねえ。それでもよ」

と矢本は妙に力を入れた。

「もしあなたの病氣が癒つて、またあの會社で働きたい望みが有つたら、何時でもいゝから山崎さんの所へ直接來るやうにつて云つてたわ。」

　ば、馬鹿な、誰がそんな馬鹿氣た事をと雷雲のやうな素早やさで擴がらうとする、苦い憤怒を抑へてお眞は脣の端を引歪めた。

「一體、あんた見たいな人に、あんな勞働は無理よ。どうしたつて、女工なんぞになる柄ぢやないわ。何か他にいゝ職業をめつけたげたいわねえ。」

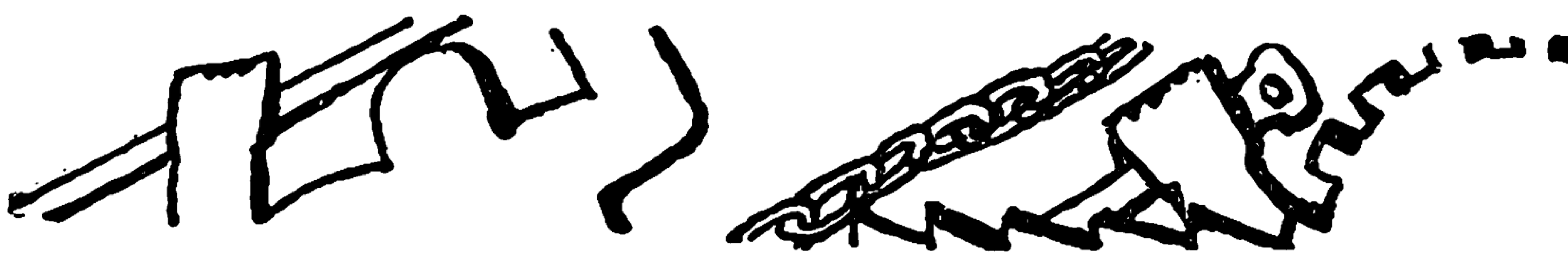
　止しやあがれ――だ。無理でない勞働を一體誰がしてると云ふのだ。遊び半分の仕事ぢやあるまいし。あやふく口先きに出かゝつた語を咳にまぎらはせた。

　ジュネーヴ市のレーマン湖畔に集ふ國際的大ダラ幹連が、かつぎ出したがるやうな「平和主義」で、一文の手當てもなく、お眞は病床に投げ出された。

「いま、會社忙しいの？」

「そりあね。忙しいわ。疑革(レザー)の販路は擴まる一方だもの――」

　國產品の獎勵は、粗製濫造を助長させ



る。産業合理化、大量生産の名をくぐつて模造品や粗製品が、大小工場から巷間に溢出した。不當廉賣を以て、外國資本家へ挑戰する爲に、又は他國より、入り來るそれを、防止する爲に、國産を愛せよの讃美歌は國內資本家群の口々から一齊に高唱され、無類の無自覺なる勞働者大衆の純眞なる愛國心にアッピールして、自己陶醉に陷らせ様とした。

一寸見た感じが革かゴムによく似ていて、それ等の物よりはずつと廉價に生産出來る革布の需要が目立つて多くなつたのも、必然の生んだ結果で有つた。厚地の物は帆船の帆となつて、遠く海洋に乘り出し、あるひは、自動車の幌を形成して、アスファルトの街上をしつくする。

街路樹のかげから、ちよいと人示指を折曲げて、自動車を停めたストリイト・ガールの小脇に、暑苦しい重壓で挾まつてゐる、ハンド・バックも、化學的方法で獨特の激しい臭氣を、除去した擬革であるかも知れない。旺盛な靑春を發育しつゝ有る、女學生達の制服の腰部を、バンドとなつて締めつける。荒れた素足に冷え／＼と絡みつく、田舍娘の鼻緒にもなれば、銀座裏のチャチな酒場のテーブルを被ひもする。病院の廊下にも敷かれる。偉いお役人様方が、間違ひのない調書を創作する特高室の事務椅子も包むし、故郷に見切りをつけて內地へ流れ込んだ鮮人達がワニ皮と稱して、郡部を行商するガマ口を造り上げる爲には押型を使用して斑點を浮出させた製品もある。

販路が擴張すると、注文が足音の様に入り亂れ勞働量が膨大する。ダラシのない居殘りが毎夕打續いた蚊の涙ほどな居殘り手當に、不滿は有つても臨時に入る收入は、一錢でも逃がしたくないので、みんなは默つて働いた。

社會局の統計による、化學工場、男工七割三分、女工二割七分の産業別男女勞働者數の比例と餘り懸隔のない割合で、百人に足りない、男女工が作業してゐる小工場・E革布株式會社。

D・神谷と云ふのが社長で、東京に於ける最初のキャフエー、神谷バーの經營者でもあると云ふ話だつた。

矢本は同じE革布株式會社へ通ふ竹口と共に、會社の近所を間借して、共同生活をしてゐた。窓の外は、京成電車の線路を距てゝ資生堂石鹼會社と向ひ合つてゐた。一日中窓の下を電車が吠え吠え走る。其の階下に移り住んだお眞は矢本の斡旋んでE革布會社に入つたのだつた。

前にも隣りにも、小さい工場がゴミゴミと建ち重つてゐる。ゴム・セルロイド・シャボン・それらの製作所から發する臭氣と、屠殺所の汚臭とが絡まつて、部屋にまで侵透した。

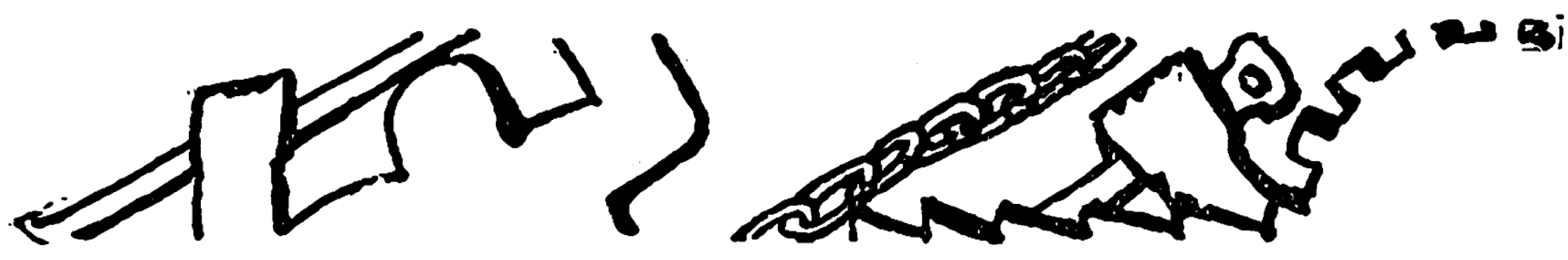
竹口は××合同の若い鬪士だつたけれど、矢本は何等組合的活動をしてゐなかつた。人も電車も寢鎭まつた眞夜中頃、起き出しては萬年筆のサヤを拂つて、『新日本之建設』云々等と云ふ論文の様なものを書いたりする癖をもつてゐた。

「不自由の多い獨身の鬪士と共同生活をして家庭的な面倒を見てやるのが吾々婦人の義務だと思ふ」のが矢本の持論だつた。それを日頃崇拜してゐるプロ作家節森の細君に話したら非常に共鳴して呉たと、お眞にも云つて聞かせたりした。

だが強ひて一二の女工に作文のやうなものを書かせては、少くとも自己流な批判を加へたりする態度に、お眞は到底好意が持てなかつた。見まいとしても、其處にはインテル・オールドミスの自己滿足が得々と轉がつてゐた。

矢本のさうした態度はそれら女工の自尊心を高める以上の事はなさなかつた。

職場の晝休み時、平假名も讀めない様な仲間達の前にブルジョアー婦人の娛樂



雜誌にすぎない婦人公論を持ち出す女工を指して矢本はお眞に囁いたりした。

「ねえごらんなさい。あの人だつて、なんにも知らなかつたのよ。それを私が、あれを讀ませるまでにしたんですからね。ずい分苦心したわ」

お眞は眼の中に浮び上つて來る憎惡を相手に見せないために眼をふせた。

——此の人は苦心してまで、女工を小市民に仕立てゝどうしやうとするのだらう——とお眞は思つた。

果たして女工Aは頗るロマンチックな戀愛を始めた。矢本の妙なアヂテーションが効果を表はし過ぎたのだつた。結局、矢本の周圍は矢本を中心にして、反大衆的な小さいグループを結成した。

それは、工場全體の人達から只敬遠を以て迎へられた。其の中には無論Aも居た。Aの戀人である、オートバイの運轉手も居た。惡性の蓄膿性のために肥大した鼻を始終チクチク鳴らして、部厚い唇を締りなく合はせてゐる職場監督山崎の甥もゐた。鈍臭く、ダレ切つた工場内の空氣に對して、竹口は案外消極的態度をとつてゐた。竹口自身、沒落への何歩かを踏出してゐることは彼も認めてゐた。

折も折狂的な四・一六の撿擧は陰欝な長雨のやうに打續いてゐた。

戰斗的左翼勞働者の根城で有る南葛の野を貫く東武電車は、朝夕のラッシュアワーに、必ず幾人かの正私服スパイを乘せた。沿線各驛の改札口には公然と正服が頑張つてゐて出入りする者の、鼻穴までも覗き込んだ。さうした不安な狀態が重なり財政的困難が、眼について來ると、矢本の人道主義的な持論も全く消え失せて終つた。彼等は、子供よりも他愛のない事で、つかみ合はんばかりに口論する様になつた。おたがひがおたがひを持餘ましてゐると云つた様な風だつた。

「俺だつて、ずつと先から煙草を止してるんだぜ。それに每月の俸給は一體、どつちが多いつてんだい？」

氣のいゝ竹口にも、眞赤になつて叫ぶこともあつた。竹口の前には、自己淸算の必要が急迫した。

もつと積極的に××法的な組織運動に潛り込む爲には、現在のさうした生活形態はひどく有害で有らねばならなかつた

遂に彼は俸給日の夜、彼女達の前から忽然と姿を消した。お眞は彼自身の爲に、そして、あくまでも潛行的に根強く成長させなければならない運動のために彼の行爲を喜んだ。

然し、矢本は、ひどくお眞を疑つた。

「あなたに何か話さなかつた？あの人」

「えゝ。なんにも」

「ねえ。何處へ行くやうな話振もしなかつたの。何時か」

「さあ。聞かなかつたわ」

「ひどいわねえ。まるでルンペン・プロの食ひ逃げぢやないの、鬪士面がきいてあきれるわ。全く。」

矢本は去つた者への罵倒を惜しまなかつた。

「私——何んにも、お錢なんか惜しいんぢやないけれど——あんなに、姉かなんぞの様な氣持で——面倒を見てやつたのに、信用されないと思ふと——本當に信じられないのかと思ふと口惜しい」

激昂した眼の面に、奇妙な黃色い輝やきがあつた。お眞は、老女のセンチメントを押付けられる不快さよりも、何やら底知れぬ無氣味さを感じた。

「ほんとうに、今まで逃れ得たのは、誰のおかげだと思つてゐるんだろう。みんな、みんな私が細々しく注意してやつたからこそぢやない？それなのに——」

其の語から同志的のものを受取ることは出來なかつたけれど、焦燥的な惜別のいろは恐ろしいまでに溢ふれてゐた。



同志社時代の羽織でゝもあつたらしい銘仙で息子の様な若い竹口のために、作つてくれた、坐ぶとんが、カーテンを引いたまゝの薄暗い部屋の隅に投げ出されてゐた。――此の人達の間に何か有つたんぢやないだらうか――むろんないとは云へない。――とすれば――

　お眞はフト矢本の氣持ちを、哀れむ氣にもなつた。それからの矢本は眼に見えてヒステリカルになつた。いら立しい顔付きで、荷物を出したり片附けたりする落付かない様子を見てゐると、見てる方が神經衰弱にでもなりさうだつた。お眞はそんな暮し方を嫌忌した。

　一日中、煤煙に燻された夕陽が、のろのろと墮ちる頃、肥料船の浮いてゐる溝に沿ふて、曳船驛に急ぐ人々の群の中に、お眞の姿が見られる様になつた。彼女は職場歸へりを、部屋にも寄らず東武電車に乘り込んでHへ歸へるのだつた、疲勞を引延した様な長いH橋を渡り切つた、低い地區に、以前同居したことのある綿貫が住んでゐた。

　朝から頭の重い日だつた。床の中で愚圖愚圖してゐてやつと電車に乘込んだために、朝食もとつてゐなかつた。耐へ難い苦痛が空腹を滿たし、やりどこのない不快なけだるさが全身を徧ひずり廻つた。あとから、あとからと氣味惡く浮んで來る生欠伸を嚙殺してゐたお眞は、遂にたまり兼ねて、仕事の合間を矢本の臺に行つた。

「ねえ矢本さん。すまないけれど山崎さんに話して早退けにして下さらない？　とても氣持ちが惡くて――」

　振返つた矢本の、白く光る眼が一直線にお眞の長身を走つた。

「さう。どうしたの？」

「どうつて。なんだか頭痛がひどいの」

「ぢやあ、おひるまで待つてなさい。とにかく、山崎さんに話して見るわ。でも歸へしてくれるか、どうかね、私の知り得る限りぢやないんだから――そこをね」

　矢本の返事は素氣なかつた別に忙しくもない手を止めもしなかつた。

　お眞は半ば希望を失くして、自分の持臺に歸つた。其の日の午前は、なんと久しいものだつたろう、機關場の汽笛が、夏めいた青空へ呼びかけた時は、やつと救はれたやうな氣持だつた。

　機械の停止を待ち兼た人々は、色々肉汁で汚染した手指を、アセトンで拭いて食堂へ立つた。けれ共お眞は辨當を持たなかつたし立上る元氣もなかつた。

　人氣のない職場の機械の間に腰を下ろして、矢本からの返事を、ひたぶるに待ち佗びた。働いてる中は、さうまでも感じなかつたけれどぢつと靜止して、戸外を凝視めてゐる　、眩しい日光が、ガラス越しに强く反射して、何べんも、眩暈に見舞はれかけた。お眞は思はず仕事着の袖で兩眼を掩ふた。

　晝食のすんだ人達が歸へつて來た。

　其の中に矢本の顔を發見しやうとするのは、仲仲至難なことだつた賑やかな、それでゐて緊まりのない談笑を交換してゐるみんなは、急に他々しく見えた。

　此の中の誰がお眞の苦痛を知らう。

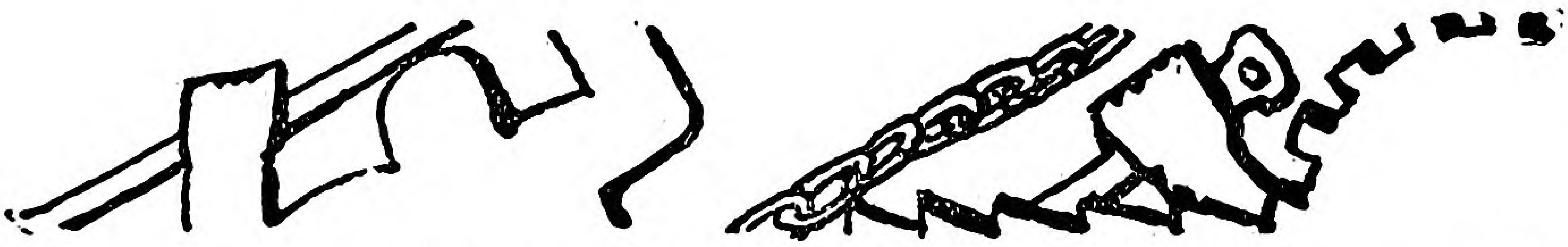
　場内の電燈が點いた。

　シ・シ・シユ――ウウル――ルウル・ル

　ベルトが流れ始めた。矢本の姿は未だ見えない。若い女工が來て、お眞を職場の片隅に導いた。

「あなたねえ。けふからこゝで働くんだつて――」

　蒼白なお眞の顔面に、氣の毒氣な眼を移して云つた。機關場の眞近かなので、ひどく蒸し暑かつた。合理的な新臺は、瞬きする間も油斷の出來ない程、廻轉が



忙しかつた。お眞には、すべてが不可解であり意外であつた。

「矢本さんどうしたの？」

お眞は反問せずには居られなかつた。

「加げんが悪くて、早退けなんですとサ」

もつと、深く立入つて聞かうとした時、相手は逸早く機械越しに監督の視線を感じて、立直つて絡まつた。

「おいッ。ボンヤリしてないで、さつさとかゝれよ」

小生意氣らしい、ルパシカの臺長が我鳴りつけた。お眞は始めて矢本なる人間の正體が解つた様な氣がしたのだつた。

翌朝から、お眞は、動けない人間になつて終つた。

狹苦しい病室の、十六燭の電燈(あかり)の中で、強い利己を表現(あらは)す様な矢本の眉をみつめてゐるとお眞は此の人との色々が交渉が、味悪く憶ひだされるのだつた。

矢本は、振りまき處のない、お愛想を空の花壺にさし向けた。

「花でも買つて來りあ、好かつたわね」

「花？　あまり欲しいとも思はないけれど」

「でもサ、病室には矢張りあつた方がいゝね。だけど果たして入院してるかどうか、解らないんで——」

「あゝら、何故？　診斷書にちやんと書いてあつたんぢやない。」

「ん。でも竹ロ——さんの二の舞をやつたかと思つて——」

鋭い皮肉が、白眼から發射された。

——何んて執念深い人だらう、此の人は、まだ私達を變に考へてゐる——

お眞は憂鬱になつた。

やつと矢本を送り出したお眞の、頭腦の中は嵐の様に惑亂した。

何かの方法として、鬪爭生活を體驗しやうとする日和見的な、攻擊的態度は、男女勞働者の反感を煽ふり立てるのみで有ることを、お眞は、短い女工生活によつて識つた。

そして彼女自身の內部に、於ても、さうした傾向が、否定され得なかつたことを、省みて恥ぢた。過去の、失敗の多い生活を揚棄することによつて、明日への希望を持たう。正しいか正しくないかは結果が、直接、山彥の様に自分自身に反響する。會社がクビになつたことも、矢本との交渉を、キッパリ斷つて終ふためには、却つて好都合だつた。給料の問題を解決する方法は幾らでも有る。お眞自身には出來なくとも背後の同志達が默視する筈はないのだ。

お眞は、混亂した考へを、淸算しつゝ、今後の方針を建て直してゐた。

手紙第二信

京　芙　美　子

ちよつと御免下さい。

もう一度お願ひ致します。私共の工場の倉庫には、此の工場始まつてから今日迄の女工の、途中であまりの苦しさに他の工場に逃げたんや、病氣で家に歸つた人の荷物が一ぱい入つて居て、全で、シチヤの倉の様です。荷物を戻して下さいと、いくら頼んでも、品物も、働いたお金さえ貰へない人達が一杯あります。荷物を返して下さる様にして下さいませ。



工場は大變に風紀がみだれて居ます。支店長樣の妾の山田花子は二度も××をして居ましたがこんどは腹が大きくなつて自分の家に歸る路人力車に乘つたまゝ流產して死んでしまひました。

女工の上にたつ檢番の男が惡い奴です。寄宿舍から工場に行く廊下は晝でも暗くて、人間が步いて居るのさえ、はつきり分らないことがあります。電燈はボンヤリ長い間をおいてつけてありますが暗いのです。

檢番は自分が好きだと思ふ女工を此の暗い廊下へ呼び出します。行かないと、あとがどんなに恐いかをよく知つて居ますから出て行きますと、女の大切な操をうばつて平氣な顏をして居ます。幾人も〲成績の爲を思つて泣き寢入になつて居るのがあります。少し氣の强い人達はサルマタをはいて用心をいたして居ます

その廊下や寄宿舍などに男の××をみたすために×××サックがあちらこちら散らかつて居るのを、幼い見習工女達は、山の中から出て來た何も知らない者ですからごむふうせんと間違へて持つて遊んで居るのをケンバンがみつけては、まつかな顏をしてヤットコ（クギヌキの樣な物）で工女の耳をちぎれるほどはさんで引きづりまわします。アゲワク場の女工春木さんは檢番の男と仲よくして居たのが子供が出來たのを知つた男は同じ友の檢番に春木さんをゆづつて自分は知らぬ顏でまた他の女工と仲よくして居ます。子供が產れたら二人の男から自分の子供ではないから知らないと相手にされないで、一度自殺しかけましたが、子供のため、產後まもなく子供をせなにしばりつけて工場に通つて居られます。子供故ではない――自分の手で多くの家內を食べさせて行かなくてはならないからだと云ふ方が本當の樣です。

みるも氣の毒です。やせこけた赤ン坊――同じ同僚でありながら、心ない女工仲間では、春木さんが子供をおつて通つて來るのを嫌がつて、やめる樣に云ふものさえあります。何と云ふ女達でせう。

同じ貧乏故――働いて居る女工の私達ではないかと腹立しくなります。

こんな事もみんな工場が惡いから出來ることです。

どうぞ一日も早く安心して働ける樣、私達女工を救つて下さい。

校長下駄の話

芦田好子

毎日〲、喘ぐやうな暑さだ。

小學校は七月一日から時間短縮で、午前中授業となつた。當然、午後は自由の時間であるべき筈だ。

「退出時刻十二時半」

職員室の壁には、麗々しく揭げられて居るが、果して、十二時半に歸つた事があるか。

校長の言ひ草が面白い。

「短縮で午前中授業となりました。退出時刻もこの通り揭げられてあります。暑い時の事です。決して遲くまで居る必要はありません。どうぞ、仕事が濟みましたら、どし〲御引き上げ下さい。而し「さあ退出時刻が來た」といふので、やりかけた仕事まで切り上げて歸るのは考



へ物です。そこはまあ、皆さんの御考へによる事として、物事は總て、中庸が一番好い樣に思ひます。」

これが、ゴマカシでなくて何だ。こうした美しい言葉を弄して居乍ら、來るべき秋の學藝會、運動會に備ゆる爲に、それ／＼の部員に課外指導を强制的に命じて居るでは無いか。ヂリ／＼と燒き附く樣な炎天下に、二時間以上にも亘る運動の指導、生ぬるい風が時折這入つて來るだけの唱歌室では、盛に唱歌の特別指導が行はれてゐる。敎へる者も、敎へられる者も、全く好い迷惑だ。

「早く歸れ」と云ふ反面に、次々と仕事を計畫して、歸れない樣に仕向る學校經營者の態度は何であるか？　云ふまでも無く、自分の位置向上の方便なのだ。部下職員の血と汗を絞つて完成した所の仕事――、それは校長の名譽となる。「敏腕家」と、視學に一日も早く認めさせる事は、次の榮轉への原動力となるのだ。その蔭に、平敎員の幾多の犧牲的奉仕のある事等は、少しも考へやうとしない。

然らば、斯る學校經營者の態度に、何故、部下職員は結束して、飽く迄も抗爭しやうとしないか？　ペチブル的な、個人的な、妙に悟り切つた樣な、そんな連中の多い敎員間には、今の所、望み得ない事であらう。萬一、正しい事を、正しいと主張する者があると、それは危險視されて、體よく他の學校へ追ひ遣られて仕舞ふ。さうした危險分子？は、學校經營者に取つて、甚だ有難くない存在なのだ。出來るだけ、目の上の瘤を除去して優良敎員のみを集める――而して意の如くそれ等を操らうと云ふ事になる。今一つ惡い事には、校長に部下職員の、増俸轉任、馘首の權限がある程度まで賦與されてゐる事なのである。平敎員諸君よ、頑な、個人主義を捨てやうでは無いか。同僚の上に見舞つた左遷、馘首は、明日にも吾々の上にふり掛つて來ないと、誰が保證し得やう。徒らな阿諛に依つて、自己の位置を守る事にのみ忠實である勿れ。自覺せよ、而して團結せよ。

×　×　×

校長の仕事は決して華々しい學藝會や展覽會であつてはならない。殊に吾々の學校は、窮乏のドン底にある勞働者の子弟を多く收容してゐる。長屋に住んで（殊に酷いのになると、三疊の部屋に親子六人が生活してゐる。）明日の食を得る目標もなく、不安な生活をしてゐる者、一月の中の半分は職にアブレ、雨が降つては働きを奪はれる悲慘な狀態にゐる者を援へて、何の爲の學藝會展覽會ぞ　學校長たる者は須く刮目して、土地の狀況に相應はしい經營方針を取べきである。人間敎育と云ふ大きな使命を兩肩に荷ふ者が、兒童を一種の方便物とする事は冒瀆だ。時代は移る。緊縮、合理化、失業者の夥しい群、世は正に生き乍らの地獄である。明治時代の敎育方針が、昭和の現在に適用しない事を忘れてはならない。

「一寸、あんたの方に、此の下駄を履いて來た子供がゐる？」

一生懸命に算術を敎へて居た私は、カラリと、不意に開いた戸の音と、續いて起つた隣の女敎師Sの甲高い聲に、度膽を拔かれた形だ。Sの左手には中古の子供下駄が下げられて居る。

「どうしたつて言ふの。」

「あのね。この子供が昨日下駄が無くなつたと言ふので、今、下駄箱を探さして見たら、あんたの方の下駄箱に這入つてゐたのよ。」

「さあ、同じ樣な下駄は多いから、その子供のとは限らないでせう。私の方の子供に聞いて見ませう。」

そこで私は、呆氣に取られて居る生徒



達に向つて、
「今日下駄を履いて來たものは集れ」
　とやつたものだ。命令一下、ゾロ〳〵と六八人集つて來た。
「此の下駄は自分のだと思ふ人だけ殘つて、後は席に御歸りなさい。」
「これ、僕のだよ、」
　殘つた一人の生徒は勇敢にガン張る。だがSは承知しない。
「東京の子供は、皆桐の下駄を履いてゐるわ。此子供は、田舍から貰つて昨日履いた許りなのよ。之は此の子供のだわ。」
「だつて、幾ら東京でも此の邊の子供は桐の下駄ばかり履かして置けないでせう。殊に男の子は亂暴だから、わざと雜木を買つてやると思ふわ。それに昨日頃初めて履いた下駄とも思へないぢやありませんか。こんなに黑くなつてゐるし、先の方は缺けてゐるし。」
「男の子は、一日履けばこんなに黑くしちやふわよ。(自分の級の生徒に向つて)ぢやあ、あんた、お母さんを呼んでらつしやい。お母さんに見て貰へばあんたのといふ事が解るから。」
　飽く迄も、何の根據もない子供の言葉を盾に、純眞な子供を泥捧扱ひにするSの態度には、流石に憤りを感ぜずには居られなかつた。
「あなたの方の子供の親を連れて來ればそして、親が自分の子供の物に相違ないと言へば、こちらは子供だから、事實は自分の物であつても、それを主張し得ないでせう。そんな馬鹿な話がありますか昨日も今日もこの子は、これを履いて來たといふのだし、自分の履物を間違ふ樣なボンヤリではないわ。あなたの方で母を連れて來ると言ふのなら、この子供の方の母も呼んで來させませうよ。そして二人の親を立會したらいゝでせう。」
「?」
　不服さうにSの立去つた後、私はどうなる事かと心配氣に二人の會話に耳を傾けてゐた子供にいつた。
「隨分ねえ。でも大丈夫。先生がちやんと言つて上げたから……」
「あのね、先生。僕んち母ちやん居ないの。父ちやんは、朝早く働きに行つて、晩でなきや歸らないからどう仕樣かと思つたよ。」
「まあ、さう。母ちやんはどうして?」
「死んぢやつたの。家には赤ちやんがゐるんだけど。」
　私は、思はず目頭の熱くなるのを感じた。貧民窟で有名な郊外の學校にはかういふのはざらにある。月二十五錢の月謝と、二十五錢の支給費(學用品――雜記帳年に四冊、鉛筆月一本、紙四枚位、畫用紙など――の費用)つまり五十錢を月月學校に納めるのに、子供は正直で月謝袋を渡すと翌日は早速何とか云つて來る。
「先生お母さんが後から屆けますつて」
「あのね先生、お母さんが、都合が惡いから十六日に持つて來ますつて」
　子供達の家は大低賃金半月拂ひの勞働者なのだ。
「今日は十圓札しかないから後で持つて來るつて云ひました」等々。
　月謝の拂へない子供が每月五六人は決つてある。その率は上級になり次第ひどくなつて、幼ない子供には質へ入れても事缺かせまいとする親心が切實に見えてゐる。と同時に、最近の彼等の家庭の逼迫さ加減が、子供達の上にバロメーターのやうに正確に現れて來つゝある。

× × × ×



再び勞働組合法案・失業問題に就て

―社會時評―

永島暢子

勞働組合法案を廻る勞資戰

既に本誌二月號に於て指摘したるが如く、社會局案として發表されたる「勞働組合法案」は、徹頭徹尾勞働組合運動の取締り法案でしかない事は、資本家と政府との意見の交換に於ても、判然としてゐる事だ。勞働者大衆は、この法案を暴露究明すると共に果敢なる鬪爭を行ひ、既に戰ひ取つた組合を守り、且尙生活の擁護と、解放の鬪爭を邪魔する、無產運動暴壓法令の撤廢にまで發展せしむべきであつたのに、これに對する鬪爭は餘りに聞かれなかつた。然るに第五十九議會に提出を目論見つゝあるこの社會局案に反對して、資本家團體が一齊に起ち上つたのに刺戟され、今やこの問題を中心として階級鬪爭激化の楔機がより濃く、強く生々しく展開されようとしてゐる。

搾取の王座に舌なめづりしてゐる資本家にとつては、勞働者の團結は最も憎むべきものであり、恐るべきものである。實業家團體の代表者藤原銀次郎が、民政黨の社會政策審議會に於て、「實業家は、從來の立法にはだまつてゐたが、(だまつてゐた筈だ。勞働者の虐殺法だから)今回の法案には、どうしても默止する事は出來ない」といひ、「團結すれば勞働者は强い」と告白してゐる如く、彼等は、一切の權力と、あらゆる手段を構じて、勞働者の最後の血の一滴をも吸ひとらうとしてゐるのだ。だから彼等はこの取り締り法案さへ勞働者を特別保護するものであると稱し、法案の中心をなす部分には絕對に反對してゐる。即ち第一條の勞働組合は、勞働條件の維持改善を目的とする勞働者の團體又はその聯合を規定し、第十條の勞働者でなくとも、勞働者たりしもの、或は總會の決議によつて加入を許された者は、組合員たる事を得とした點、第十二條の、雇傭者は

勞働者が、勞働組合の組合員たるの故を以て、これを解雇し、且、組合に加入する事、又は脱退する事を雇傭條件とする事を得ない點、第十三條の勞働組合の役員又は組合員が、勞働條件の維持や改善に關し、勸誘その他の方法により、他人に勞務を停廢せしめたり、雇傭契約を解除せしめたり、若しくはこれを締結させない事によつて雇傭者に生ぜしめた損害に對しては、勞働組合、役員及び組合員が賠償の責に任ぜない。等々の點をあげて之に反對し、更に、第十五條の公益を害する時は、行政官廳これを取り消す事を得とあるだけで、嚴罰を持つて臨まないのが、勞働者保護だといふのだ。要するに彼等は、勞働者に、爭議の楔機、政治運動への進展、團結の自由等の幻影をさへ與へる事がいけないのであつて、飽までも勞働者は、資本家の搾取に甘んずる法令を作れといふのである。

流石に之に對して、勞働組合、無産政黨は賛成はしなかつた。日本勞働總同盟は、單獨的には、政府を激勵して「政府はかねての聲明に基き、資本家の反對に屈する事なく、組合法案の制定に努力されたい」旨の決議文を手交し、社民黨は、安部磯雄の名を以て、首相濱口が、資本家の反對にも一理あるといつた事に對して、その眞相を究明するさうだ。(さまよへるピエロよ、なんと御苦勞ではないか)尚その上に、各支持勞働組合と協力して、資本家團體に對し、貴衆兩院議員に對し、この法案制定の可否に關し、立ち合ひ演說を申込み、正々堂々とその曲直を天下大衆の面前に於て決定するさうである。

日本大衆黨は、最近お好みの共同鬪爭を盛んに持ち出し、六月二十五日、社民黨共同で資本家の反對に對し、反駁の聲明書を發表した。一、企業家は共同の利益のために、組合が明治十七年頃より設けられてゐるのに、勞働組合は、資本家の强壓の下にある。二、勞働組合法の制定は、日本資本主義を高度に發展せしむるに必要である。勞働組合法の制定なくして、産業の合理化を叫ぶは、一切の負擔を、勞働者に轉化せんとする、卑劣なる資本家根性の表はれだ。(オヤ〱今お氣がついたと見える!)三、勞働條件の維持改善を目的としない勞働組合が何處の國にあるか。四、資本家團體が、同一産業のカルテルを超えて、一種の階級的團結に向ひつゝある時、勞働者の團結のみが、縱斷組織に限定される理由がない。五、勞働組合に第三者の加入をいけないといふが、もし彼等の要求に從へば組合リーダーは、組合から除外され、殆ど、組合の機能は、弛緩される。今日所謂職業的ブローカーは、資本家は自己の利益のために作りつゝあるではないか。(民政黨の杉浦武雄は、東京商業會議所書記長渡邊鐵藏のこの點の難詰に對し、資本家團體である同會議所が資本家でもない學者を代表者として雇つておくのに、組合だけが何故惡い、と逆ネジを喰はしてゐるのを參照せよ)六、第十二條の廢除は、勞働者團結の基本的なるものを禁止するのであつて、法案は一片の空文にすぎなくなる。七、第十三條の禁止は、斷然組合の罷業權が奪はれる。等を反駁し、その反對の實行運動にうつる事を決議した。

この共同鬪爭に於て、勞農黨もその勸誘をうけた事はいふまでもない。だが勞農黨は、例の如く、ともすれば、社會局案を支持する

如き右翼の態度を排撃し、飽まで、社會局案に反對したる勞働者の要求する、組合法案を作成し、その左翼的立場を表示してゐる。

だが、勞働運動は、決して少年の時に持つ清教徒的陶醉では、何んにもなりはしない。左翼〳〵と自慰的昂奮にかられてゐても、現實的鬪爭に於て、何等、眞に勞働者の利益を代表して戰ひ得ないものであるならば、かへつてそれは勞働者をごまかす以外の何物ではないではないか。

けれど、この組合法案を中心として、ます〳〵勞資の對立が表面化した。鬪爭が白熱化すれば、當然、共同鬪爭の範圍が擴まらざるを得ないし、大衆は、法案の本質と、合法主義者幹部の左翼的言辭のみにては、到底組合の强力化はなし得られず、唯一つ、勞働組合をボルセヴイキ化する事によつてのみ、戰ひ取る事を知るに至るであらう。

この見通しを正直に成し得たものは、勞働者の味方面をする社會民主主義者でもなければ、資本家でもなく、自由主義者の衣を着て實は最もブルジョアジーに御奉公を怠らぬ人々であり、團體である。卽ち、この案を制定した社會局並に自由主義を標榜する東京朝日新聞は、この法案をどう說明して、資本家團體をなだめてゐるか。少し忍耐をして、それを檢討して見やう。

一、勞働組合法案の必要は、その運動が激烈になつてからは、一定の方針を與へて善導しやうとしても、法の力が及ばないので、その初期に於て、方向と基準を定めて取締る方が得策である。

二、我國の社會制度、經濟組織と相容れぬ主義精神を認容するは不都合といふが、それ等は治安維持法その他に依て取締つてゐる、

三、勞働條件の維持改善を目的とした事は、かへつてそれ以上の目的に（政治鬪爭の事だ）發展せしめない用意である。

四、勞働運動は指導者を必要とするから、第三者の加入を禁じても事實無効だから、寧ろ許可した方が穩健である。

五、組合の政治運動を取締る規定は法案にはないが、それは規定以外の事だから取締る事が出來る。

六、同盟罷業等の免責規定は、何處の國でも與へてゐる最少限度の權利であつて、これがなかつたら、右翼をも贊成させる事は出來ぬ。

七、勞働爭議に關する規定は、更にこゝで附け加へて勞働者を憤激させずとも、現在でも之を取締るに不充分ではない。

といふ事を述べて、飽までも强壓で押して來やうとする資本家をなだめにかゝつてゐるのだ。卽ち之を壓縮していふならば、勞働者は旣に、正面からの强壓的の手段のみによつては搾取が至難になつた。放つておいたらドン〳〵勞働者の力が强くなり、階級鬪爭が激化するが故に、今のうちに勞資は協調し得るが如き幻影を與へる必要がある、といふのである。かゝる資本家と政府の爭ひは、ヤンチャな馬鹿息子と、世間の手前、奴隷の懷柔、お家の安泰の萬全を期する忠義な番頭手代との爭ひであつて、その根本は、いづれにしても搾取を、いかにしてより强大ならしめるかといふにある。

彼等ヤンチャ馬鹿息子に忠言を加へる忠義者の、卽ち自由主義的立場を持つ東京朝日新聞は、更に適確に止め男の役割を果してゐる

る。同紙は再三に渉り、組合法案の制定に盡力してゐるが、即ち六月十一日の社説こそはその最も典型的なものであらう。

「勞働者の團結のみを否認するは、勞働階級に執拗な挑戰を試み、結局階級思想の激成を求めて招くより他はない」とまづ警告を發し「この十年の逆境を經ても、我國の勞働組合は僅か六・七萬から三十何萬になつた。この捨てゝおいても大きくなる勞働組合に、資本家と政府とが共同で、正常な發達を邪魔するといふ感想を抱かせる事は、勞働者の鬪爭氣分を強く刺戟する事」を主張し、更に「若し春秋の筆法ですれば、勞働組合の力を強くしやうと思ふなら、これを酷遇するに如かない。英國に於けるタッフ・ベール事件の判決が如何に組合運動者を發奮せしめ、遂に一九〇六年の勞働爭議法による保護規定を獲得せしめ、勞働黨を立黨せしめる機縁をつくつたか更に一九二七年保守黨内閣による反動的勞働組合法修正が、かへつて輿論に衝動を與へ、勞働黨の大勝に貢献したか」と審に外國の例を引いてゐる。「尚且日本の側に見るも、どこまでも勞働組合を繼子扱ひにし、國際勞働會議代表を勞働組合から認めなかつた當時の勞働組合が如何に過激な指導精神で動いて居り、組合から代表を出す様になつてから、如何に穩健化するに至つたか。（日本に於て第二インターナショナルを支持して喜んで代表の選定に奔走するのは、社民、日本大衆黨系の組合であつて、赤色勞働組合は、斷然そのゴマ化しに乘らなかつた）だから、一日も早く穩健妥當な規定を制定した方が、少くも勞働者をして、現制度に、現政治機構に絶望せしめぬだけでも、その効果は大きいのである」と力説してゐる。

本年五月末日の爭議統計は、既に昨年の爭議件數の半數を突破ししかもいづれも賃銀値下、不拂、馘首、工場閉鎖に絶對反對する殆ど勞働者の最後の生活線を死守する悲痛なる要求である事を政府自ら證明してゐる。最近爭議の特徴として表はれつゝある直接的行動右翼勞働組合に起りつゝある刷新派、勞農黨内に起つてゐる二つの潮流、その何れも大衆の××的壓力を物語るものであり、今や眞實の鬪爭を要求して戰ひつゝある。

かゝる大衆の盛り上る壓力を前にして、勞働組合は今更に飴をシヤブらせてもらひ、白奴隷的な保護を受ける必要がどこにあるか？社會局案は、飽までも勞働運動彈壓の形の變つた法令である。即ちそれは、おためごかしのものであり、赤色勞働組合壓殺を目論んでのものなるが故に、勞働者は一まばたきの欲目を起す事なく、絶對に反對して戰はねばならぬ。僅かばかりの餌に目のくらむ者は全勞働者の利益を敵に賣り渡す資本家の犬でありスパイである。社民・日本大衆その他の無産黨並に、それを支持する勞働組合は、一應は社會局案を反對するも、最後には贊成する腹があり、勞農黨内には贊否兩派が對立してゐると言はれてゐる。勞働者は、資本家政府のこの暴虐に決定的鬪爭を起すと共に、勞働者の味方面をしてコッソリと敵に通ずる社會民主々義者との抗爭を必要とする。この勞働者の糾爭を押へつける社會民主主義者の抗議を勞働者は何と見るか。

失業問題に就いて

失業者の、幾何級數的增加は、今や資本主義社會のガンとなりつ

ゝある。政府は、日毎に無能なる「對策」を大聲で叫んでは、その彌縫策をうまく構じやうとしてゐる。

産業豫備軍の増加が、資本主義の發展、その崩壞に添へられた拍車である事を知らずに、世界的失業者増加の現象が、一の偶發的なものであり、その一環としての日本の現象が英雄の出現によつておさまるであらうかの樣に、まこと、必然的な事物の發展に目をふさぐ資本主義は、尨大な失業者群を影の樣に消し得る英雄を、カ、シの英雄を待望してゐる。既に濱口の緊縮政策に代り、政友會の産業立國政策が、頭を擡げてゐるのもその故であらう。一切の權力の行使によつて利潤を獲得しやうとする資本家、即ち、「資本家の信條は資本さへ培へばいゝのであり」「資本家の懷中を一度くゞらぬ勞働者保護は、徒に生産費を高めて、生産を衰微せしむる」といふ意見を持つ彼等に對し、政府は「如何に國家の全機能を動員する程にまで金融資本を擁護しても、もし失業による社會不安をつのるまゝに放置するならば、根こそぎさらつて行かれる場合なきにあらず」と忠告すべきだ、と、ブルヂョアのよき忠言者東京朝日は言及し、更に政府の弱腰は、資本家に對して、失業問題に對する考慮を願ふばかりで押し強く勞働者の絶對的減少の責を負はせないのは不都合だ。事は既に、失業並に失業者の問題ではなく、就業の問題なのだ、と怒つてゐる。若しこの時に「就業の問題」を切實に取り上げるならば、サヴエートの五ケ年計畫に言及すべきであるのに、そこまで言ひ得ないのは、ブルヂョア番頭の道德であらう。

だが、資本主義的産業合理化が、殺人的勞働強化、それに次で勞働者數の絶對減少を伴ふ事、而もなほ産業の合理化する事の絶對的必要――利潤の減少に對して――を慫慂しつゝある同じ資本家階級に對して、就業の責任を折半して持つてくれと哀願するのは、卵巣を剔出した女に、子を生んでくれといふのと等しいではないか。

彼等、資本家的政府の底を割るならば、彼等に正直な口をきく勇氣があるならば、彼等はいふであらう。「失業者よ、君たちはもう少し何んとかゴマ化して食つてゐてくれ、東洋を中心とする世界戰爭は目の前だ！俺たちはこの投機の主人役をつとめるであらう。その時こそ俺達ははつきりした態度をとる。即ち死なせるか、仕事をやるか、だ」

失業問題は、諸他の矛盾と共に、帝國主義戰爭の一つの契機であり得るし、既にそれに向つて進展しつゝある。だから、資本主義的失業救濟事業によつては、何等失業問題を打解し得ないのは、次の數字に徴しても明であらう。即ち社會局の昭和四年度失業救濟事業の實績は（單位千圓・人）

	勞力賃支出額	使用勞働者延人員	同上一日平均
一般勞働者救濟事業			
起債事業	二四四	一三二、八二六	一、一八五
國庫補助事業	一、九八四	一、〇九六、五四〇	九、〇三〇
計	二、二二八	一、二二九、三六六	一〇、二一五
一、少額給料生活者授職事業	一七一	一一四、二二四	八五三
合計	二、四〇〇	一、三四三、五〇〇	一一、〇六八

之を一般失業救濟事業費として、豫算に計上されたる六百五十三萬圓に比すれば、いかにその事業が不成績だかゞわかるであらう。故にその結果は、救濟豫定員數を莫大に減少し、事業の大部分は五年度に移され、社會局の發表する如く失業者總數を三十七萬二千人(本年四月)と見るも、尚一ヶ月平均二萬數千位しか救濟し得ない狀態である。これを失業者實數一百萬を數へる時には、その微々たる事業はお話にもならないではないか。

「この不景氣及失業者增大の問題は、敢て日本ばかりではない」と內相安達は絕叫する。

それは確である。さればこそ現在ブルヂョア先進國は、軍備を合理的に擴大すること、失業者の激增を如何にゴマ化す事かによつてその內閣のカナへの輕重を問はれる事になつてゐる。その證據に、失業者問題の解決の大旆をかゝげて立つた英國の「社民黨」マクドナルドの率る「勞働黨內閣」の失業者對策を見れば足りる。曰く公共事業の振興、六十歲以上の勞働者に生活費を給し引退させる。義務敎育年限を延して、年少勞働者を減ずる事、失業者保險の改正等々、如何にそれは「就業者」の問題ではなく、失業者へのゴマ化しにすぎないか、日本の失業者對策に比するに、若干の巧妙さが見える以外の何物でもない事は、改めていふまでもあるまい。

所で、ひるがへつて、サヴエート聯邦のこの問題に對する計畫を調べて見やう。

「五年計劃は、生産力の增進の方策が、どの程度に、失業を輕減するかの問題に答へてゐる。最少限度案によれば、失業者は、一九二七＝八年の百十萬から一九三二＝三年の八十三萬に減少する。第二案ではそれが四十萬に減少する。だが第一案でさへも八十三萬以下に減少する成算がある。

かゝる計劃を以て行はれた、五ヶ年計劃內の失業者政策は、かくも素破らしき成績をあげてゐる。

	一九二七＝八年	一九二八＝九年	一九二九＝三〇年	前年に比しての% 二七＝二八年に比して二八＝二九年の	前年に比しての% 二八＝二九年に比して二九＝三〇年の
一、常備勞働者總數年平均(千人)	一、九八九・九	二、一三三・五	二、三六一・四	一〇七・二	一〇六・〇
A類……	九九二・〇	一、〇九一・二	一、二一一・一	一一〇・一	一一一・〇
B類……	九九七・九	一、〇四二・三	一、〇五〇・三	一〇四・四	一〇〇・八
二、七時間勞働日勞働者數(千人)	二三七・一	三九三・六	八九一・五	三〇九・七	二二六・〇
A類……	〇・四	一四五・七	四八五・五	—	三三三・三
B類……	二三六・七	二四七・九	四〇六・〇	一九五・六	一六三・八
三、同じく總數の%	六・八	一八・七	四〇・二	—	—
四、常備勞働者平均一年生産(ルーブル)	五、〇八五・〇	五、八四八・〇	七、二二四・〇	一一五・〇	一二三・五
A類……	四、二三三・〇	五、〇二二・〇	六、二八〇・〇	一一九・〇	一二五・三
B類……	五、七七三・〇	六、七一九・〇	八、三〇六・〇	一一六・四	一二三・六
五、平均年賃銀(ルーブル)	七六三・六	八三二・九	七〇〇・〇	一〇九・〇	一〇八・一
A類……	八二六・二	八九三・四	九六七・三	一〇八・一	一〇八・三
B類……	六九九・七	七六九・八	八二三・八	一一〇・〇	一〇七・〇

註　A類は、生産手段の生産部門であり、B類は消費手段の生産部門である。(産勞時報による)

あらゆるブルジョアジーのデマにも拘らず、着々と大地に足を踏みしめて發展する、サヴエート聯邦の五ヶ年計劃のこの數字は、何

を語るか、ブルジョアジーの國家が、勞働時間の延長、賃銀の切り下げ、總じて勞働の強化によつてする、資本主義的産業の合理化の副産物である、失業の増大を、僅に當面の必要としない公共事業の振興等によつてゴマ化し去らうとする時、プロレタリヤの手に成るプロレタリヤの産業の合理化によつて――五日毎の休日、勞働日の減少（七時間勞働制）勞働者數の絶對數の增加――もの丶見事にこの問題を解決し去らうとしてゐる。

私達は見た。失業勞働者の問題は、ブルジョアジーの手によつて解決し得ない事を。勞働者農民の政府による生産の統制によつてのみ、他の一切の勞働問題と共に、この問題をも解消し得る事を。

而も見よ！自らの墓掘人の强力をおそれて「愛國の精神」を宣傳し、おためごかしの社會政策を云々し、倘あきたらず、殖民地半殖民地の獲物の分け合ひに、サヴエート聯邦の包圍攻擊に消費する、あまつた肉彈をふところに抱いてホクソ笑む醜汚極りなき、支配階級の全意圖を。

失業勞働者は、階級鬪爭の拍車の一楔機である。失業勞働者は、組織勞働者のヘゲモニーの下に、プロレタリアートの黨を先頭として戰ふ時に於てのみ、この失業を就業へ轉化せしむる一大楔機を得るであらう。この意味に於て、失業者の組織は、階級鬪爭の爆彈として、重大な意義を更に加味するものなのだ。（三〇・七・四）

社會民衆婦人同盟を叩き潰せ

逢阪喜代

去る五月三十日午後三時大阪市港區九條會館に於て社會民衆婦人同盟大阪支部創立大會なるものが揚げられ引き續き大演說會が催された。

尖端を行く婦人の結社等々と大每大朝等のブルヂョア新聞の鳴物入りの宣傳で、名士赤松常子、山田フサ、賀川春子の諸氏が無産婦人の爲に大活動を御開始遊ばさる事が報導されたのである。

二重の壓制に惱む、否、呪ひと抗爭の波紋を畫きつ丶ある多くのプロレタリア婦人の注目は一時的ではあるが「社會民衆婦人同盟」に集注された。

吾々プロレタリア婦人は此の社會民衆婦人同盟を餘す處なく解剖、檢討し、その階級的價値を決定づける一任務がある。

先づ彼等は如何なる婦人を組織要素とするか、同盟は社會民衆黨、總同盟の系統である事は明らかだ。

從つて、總同盟大阪紡織勞働組合等の組織にある婦人勞働者がその構成要素であり全プロレタリア婦人が組織目標でなければならない筈だ。

然るにプロレタリア理論のＡＢＣをも解し得ないのか、同盟の指導者、赤松、西尾、塚本、入谷の御婦人連は、先づその宣傳、煽動

の目標を三越、大丸等の各デパートに出入するプチブル婦人に定めたのだ。

一ブルヂョア紙は三越前で宣傳ビラを撒く社會民衆婦人同盟の幹部諸氏を寫眞入りで宣傳した程なのだ。

當日集る代議員十七名、何れも社民系の代議士、府市會議員、其他役員さんの御夫人様者の類なのだ。

同盟大阪支部創立は果して幾許の女性解放の任務を果し得るだらうか？

斷然プロレタリ婦人解放運動の一翼でもなければ無論基本的な組織でもない。

それはむしろ資本主義の一延長であり、反プロレタリア戰線の擴大なのだ。

彼等の政治的意見は反革命的な社會民主々義—議會主義であり、一貫せるイデオロギーは階級協調の反動的なもの以外に何ものでもないのである。

眠れる女性群、それは過去の存在だ！

資本主義搾取下に發生したプロレタリア婦人の出現とブルヂョア自由主義的傾向の發展に連れて封建的遺制並にそのイデオロギーと更に光鋭的に資本主義への革命的對立者とし．の位置を近代女性は占めて居るのだ。

女子青年團、處女會、愛國婦人會は何の爲に生れたか、それは急激に覺性と鬪爭に芽生えつゝある。女性群への强壓と僞瞞、プロレタリア婦人のブルヂョア陣營内への獲得の爲に目ろまれた事は明らかである。

然しそれらの反動性は常識的にプロレタリア大衆の間に見破られたと言つて差支へないであらう。

その事實の上に、社會民衆婦人同盟の存在のブルヂョア的意識があるのだ。

最早單に保守的な、愛國的な女子青年團の類ではプロレタリア婦人を僞瞞しその進出を阻止し得ないのだ。

口先き丈けなりと階級鬪爭を稱へる御用團體の必要が迫つたのであり、社會民衆婦人同盟こそ光輝あるブルヂョアヂーの御めがねにかなつた譯だ。

だがその僞瞞は、面皮は女子青年團、處女會、愛國婦人會と同樣に勞働婦人の鬪爭に依つて引き剝されつゝあるのだ。

好コントラストと云はうか、資本家共の手先き社會民衆婦人同盟大阪支部創立だと騒ぎ廻つて居るこの時、岸和田紡數百の女工は官憲の强壓を飛ばして、工場、××の襲撃等××的鬪爭が大阪の左翼勞働團體の應援に依つて戰はれつゝあるのだ。

勞働黨のダラ幹は逃げ出した。だが××的勞働組合「全協」指導の下に岸紡の女性は一人の裏切者も出さずに××的婦人の意氣を見せて居る。

プロレタリア×命の阻害者、社會民主々義者＝女性解放の阻害者社會民衆婦人同盟のダラ幹は一樣にプロレタリアート女性の協力に依つて絶滅して進んで行かなければならないのだ。

從つて勞働婦人は資本家地主政府との鬪爭の決意を以て、その御用團體社會民衆婦人同盟その同類項無産婦人同盟の叩き潰しを開始すべきである。

ローザ、ルクセンブルグを虐殺した奴は、誰ぞ、改良主義婦人同盟はその犯人だ。

プロレタリア婦人は黨へ組合へ進め！

××主義陣營は男女同權だ。

六月十一日

最近に於けるストライキと

婦人勞働者の急進化

佐野京子



一

最近續發するストライキを通じて吾々の目に映じた特異點は、尨大な婦人勞働者がストライキ鬪爭に參加し、驚異すべき鬪爭力を發揮してゐることである。

四月五日、減俸聲明に反對してストライキを決行した鐘紡三十六工場、三萬六千の從業員のうち、約八割の二萬六千餘が婦人であつた。又東京市電從業員一萬五千のストライキには八百の婦人車掌が參加してゐる。

世上を震撼さしたこの二大ストライキに於てのみならず、すでに昨年末よりの東京市電、東京モス等のストライキに於て然り、最近頻々として勃發する中小紡績工場のストライキに於ける婦人勞働者の蹶起、活動はまことに目覺ましいものがある。最近の二年間をかへりみるならば、世界的に經濟鬪爭を通じて婦人勞働者の從來よりも遙かに重大な役割を演じつゝあるのを見る事が出來る。

ドイツに於てはルール及びヘニグスドルフに於ける婦人勞働者及び勞働者の妻の積極的運動からベルリン鉛管ストライキに至る迄婦人勞働者は鬪爭的ドイツプロレタリアートの第一線に立つてゐる。

フランスに於ても亦、婦人勞働者全層の急進化は過去二ケ年の經濟鬪爭にハッキリと現はれてゐる。幾十萬幾百萬といふ婦人勞働者は北部地方ルアン・ダルヌタールの纖維勞働者のストライキに、ガール地方の鑛山勞働者のストライキに、またパリー地方の金屬勞働者の運動に於て積極的に活動し、ストライキ委員會に於て働いたりまたストライキ破りと鬪爭したのである。婦人勞働者はゼネラルストライキにおいても、またその他ポーランドの各地に勃發した數多きストライキにおいても優秀な活動をなしてゐる。

チエッコ・スロヴアキアに於ては婦人勞働者及び勞働者の妻達は

クラドノの鑛山勞働者のストライキに於て、その他數多のストライキに於けると同樣に、彼女達の鬪爭性をハッキリと立證したのだ。婦人勞働者自身が鬪爭を開始し、組織したことさへ屢々あつたのである。また、ガストニヤの織維婦人勞働者のストライキに於ける英雄的鬪爭はアメリカの婦人勞働者のために萬丈の鬪爭力を示してゐる。東洋植民地に於ける婦人勞働者の進出は、支那に於て、多くの婦人勞働者が上海、廣東、天津等革命的鬪爭に參加してゐる。ボムベイ織維勞働婦人の英雄的鬪爭は、印度の婦人勞働者の階級鬪爭への參加の一例である。

これらのストライキの多くにおいて婦人勞働者自らイニシイアチブを取り、警官や、憲兵との戰ひに先頭にたつてゐるのである。

特に、歐米資本主義國の婦人勞働者に比して、人間性のすべてを奪はれてゐる――社會的生活條件、傳統、習慣及び宗教迷信等によつて縛られてゐる――奴隷化された東洋の婦人の進出こそは、全世界に於ける勤勞婦人の增大しゆく急進化を通じて一つの特別なる意義を有つものである。

かくの如き婦人勞働者の最近に於ける急進化の全世界的事實は、世界資本主義の經濟恐慌の發展が、如何に勞働階級の地位を惡化し、勞働者の生活標準を低下しつゝあるかを物語るものである。一層嚴酷なる資本主義的產業合理化方策の遂行は、婦人勞働者の條件をも更に〳〵惡化しつゝあるのである。

二

我が國の資本主義もこゝ數年來に、極度の窮況に陷つてゐる。即ち我が資本主義も世界經濟恐慌の流れに合しつゝその危機に向ひつゝある。この危機の進展と尖銳化は、工業界の閉鎖機業短縮勞働者の大量的解雇等今日の日本の經濟生活をして由々しき動亂の前夜におかしめてゐるのだ。我がブルジョアジーは、自ら陷りつゝある危機から自らを救ふ重要な要因として、ひたすら產業の合理化方策の遂行にのみ急いでゐる。彼等は合理化方策遂行のためには如何なる障碍をも突破する。每日のブルジョア新聞の報道に現はれるだけでも、何千、何百の勞働者及び婦人勞働者が、一文の解雇手當をも與へられず、それどころか、一月二月の勞働の賃銀すらも支拂はれないで大衆的に街頭に投げ出されてゐる。

日本の勞働者は事實上、明日の飢餓に迫られてゐる狀態だ。

これらの事實と相並んで吾々は、男子勞働者に代つて婦人及び兒童の產業への進出の事實をブルジョア統計においてすらハッキリと示してゐる。私は今、こゝにくはしい統計を示す材料を持ち合はさないが本月十一日の東朝新聞紙上に現はれた『目蒲電鐵の珍抗爭』なる記事は、今度目蒲電鐵株式會社が全國私鐵線にさきがけて女車掌十四名を採用することになつた、これに對して男子從業員三百名が『將來全國の男子車掌の職を奪ふ重大な結果を來す故條文を改正し、採用不許可を通告されたい』といふ珍陳情をなしたのである。

もちろん、資本家にとつては、男子勞働者の生活權を奪ふと否とは問題ではないのだ。それは資本主義社會の出現と共に因果化された慘酷なブルジョア社會の本質なのであるから。彼等にとつては男子勞働者に支拂ふ賃銀の半分で、婦人勞働者を同等に使用し得ると

いふこと――賃銀支拂の上の大節約――こそ、問題なのであつて、男子勞働者の明日の飢餓が何の問題にかなり得よう？

今日、我が纖維工業に於ては、男子勞働者が千を以つて解雇されてゐる場合に婦人勞働者が全勞働者の八〇％從事してゐる。他產業の部門においても婦人勞働者が男子勞働者の地位を絕えず奪つてゐるであらうことは明白である。

婦人勞働者の數の未曾有の增加――この事實こそ、工業生活に於て、經濟鬪爭に於て、婦人勞働者がいまゝでにない重大な役割を演じつゝあるのだ。

三

たしかに、吾々は今日婦人勞働者の數が、男子勞働者の數の減少しつゝあるに反してはるかに增加しつゝあるといふ事實を見る。

然し乍ら又一方に於て現在に於ける婦人勞働者の發展と過去のそれとの間には一つの根本的な差異の存在する事を認めねばならぬ。

現在に於ける婦人勞働者の成長と戰前に於けるそれとの種類についての根本的な相違――戰前に於ては生產は、常に新しき市場（植民地）の創設とそれを世界經濟の圈内に導き入れる事とによつて、生產内に働く勞働者の總數が常に增加したるその基準に基いて擴大した。確かに資本主義の發展と不可分に結合されてゐる規則正しい恐慌は週期的に大衆を街上に放り出しはした。生產の機械化、强化、――合理化――は勞働者並びに婦人勞働者の不斷に增加する所の數を過剩ならしめはした。しかしながら結局に於て戰前に於ける凡ての恐慌は兎に角好景氣の前驅者であつた。如何なる生產力の荒廢後にも生產機關は、失業者の豫備軍が再び吸收されたばかりでなく、更にまた、新たなる附加的勞働力が再び使用せられ得た程にも飛躍的に力强く擴張せられたのである。

今日に於ては狀勢は本質的に異つたものである。生產力の發達と資本主義的所有關係との矛盾は、已に生產の發達が最早や勞働者數の絕對的增加を伴ひ得ない程までに發展して了つた。今日に於ては生產の機械化、自動化――合理化――によつて影響された所の生產の增加は、市場が生產の擴大と步を合せないので、恒常的に增加する所の失業者軍をつくることになるのである。今日に於ては勞働者の數は絕對的に減少してゐる。數百萬の失業者がその證據である。彼等勞働者は英國に於て、獨逸に於て、墺太利に於て、波蘭に於て、更にチエツコ・スロバキアに於て已に數年來の『休業』に强ひられてゐる。昨今における我が失業者の激增、またその證據である。

かゝる事情の下においては婦人勞働者による勞働員中より、男子勞働の排除はたゞに遙かに尖銳化し、遙かに刺戟的に感受せられねばならぬばかりでなく、猶又、婦人勞働の競爭は今日、慢性的恐慌の時代に當つては、所謂「正常的」時代に於けるよりも一層致命的結果を及ぼすものなることは明かである。

更に殘酷なる資本主義的合理化方策の遂行は、婦人勞働者の條件を――男子よりも進步の時におくれてゐる、階級意識に醒めることのおそい防禦力の少ない便利な、男子勞働者に比してより利益のあるところの搾取對象として、――ます〳〵惡化するであらう。

資本主義的合理化による勞働の極度の强度化――いはゆる勞働能

率の增進といふ美名の下になされる――が如何に勞働の搾取によるか、その一例を示せば、昨年の七月からいはゆる婦人の深夜業が廢止されたのであるが、そのために、資本家によつて作られてゐる紡績聯合會が、廢止後も、在來と同樣の、それ以上の生産能率をあげるには、如何なる合理化の方法をとればよいかを研究した。大正十五年から昭和三年四月末までの三年間をその研究期間とし、この間による研究の結果は、次の如く、如實に婦人勞働の搾取強化を示してゐるのだ。

すなはち女工一人の生産高が大正十五年末には月七十八貫であつたものが昭和三年四月には九十四貫となり、女工一人が月十六貫も餘計に作るやうになつてゐる。しかもその賃銀が多くなつたかといふに、十五年一月に平均一圓二十三錢三厘であつたものが昭和三年三月までには一圓二十三錢四厘となつて一厘しか上つてゐない。なほその上、最近鐘紡の如き大基業に於てすら三四割の賃銀値下げを斷行したのである。

以上の如き一例を以つてしても、婦人勞働者に加へられつゝある極度の負擔こそが、婦人勞働の問題を尖鋭化させずにはおかないのである。今迄、溫情主義の鐵壁を以つて如何なる右翼組合すら寄せつけなかつたところの鐘紡の從業員、三萬六千の蹶起こそは、全く未組織のまゝに殘されてゐた溫情主義の牙城をすら突き破つてしまつたのである。東京市電八百の婦人車掌の戰鬪的傳統は、今次のストライキに於ても第一線に起つてそのトップを切り、裏切り者に對するピケ等の活動には最も重用な役割を果してゐる。數度の示威には常に先頭に少年車掌と共に婦人が戰つてゐる。催涙ピストル、騎馬等による官憲との戰に於ても、彼女等は官僚幹部の意志に反して、英雄的態度を示した。

まことに、我が國に於ける、こゝ一年間の經濟鬪爭が示した實狀は、無條件的に、驚くべき勞働婦人大衆の急進化、左翼化を物語つてゐるのだ。

これらの事情からして、婦人勞働者に對する問題を、――男子の勞働者に比して一般的に『無要求的であり從順性を持つてゐる』とされたところの從來の見解を根底からくつがへしつゝある。

近時における婦人勞働者は、鬪爭を擁護するためには何時でも喜んで奮起する用意のあること、むしろ、彼女等の活動が逆襲的性質を持つてゐること、を示してゐるのだ。

四

だが吾々は、一方かくも尨大な婦人大衆が、ストライキに參加し、積極性を示してゐるにかゝはらず、他方我が國に於ては、婦人勞働者の組織數が、餘りにも微弱であることを認めねばならぬ。勤勞婦人百二十萬といはれてゐるうち、勞働組合に組織されてゐる數は僅か一萬餘である。しかも、その大多數は右翼組合の下にある紡績女工であるといへよう。

支那に於ては、一九二七年に四大工業地方に於ける組織された婦人勞働者數が、三十二萬五千に及んだといふ。

我が國に於ける婦人勞働者のかゝる組織率は、從來、婦人勞働者の間に於ける組織的な準備、活動が充分なされてなかつたことを示

してゐる。
ストライキも今日ではまだ自然發生的な範圍内に止まつてゐる。
第一に、今日まで多くの婦人勞働者が參加してゐるストライキでの要求の中に、特に婦人の持つ要求綱領が殆んどかゝげられなかつたことを見るのだ。
鐘紡ストライキは、賃銀四割減に端を發してゐるが、三萬六千の從業員中八割が婦人勞働者によつてしめられてゐる『同一勞働に對する同一賃銀』、『産前産後、月經時に於ける休養』等の要求を始め、特殊な婦人の持つ多くの要求、不滿がある。ストライキ鬪爭に於ても、特に婦人の持つ不滿をかゝげてゐることによつて、更に一層婦人をして鬪爭に蹶起せしめたであらう。
勿論、鐘紡ストライキが、總同盟等の右翼幹部の指導によつて、四割減給反對の要求すらゆがめられたものとして提出されてしまつたといふこと、多年『温情主義』の阿片によつて、日常的な多くの不滿、不平が彼女等の意識から抹殺されてゐたといふような事情の下になされたのである。
東京市電のストライキに於てはこれと多くの異つた情勢のもとにあつた。市電八百の婦人車掌は、今日まで、多くの要求綱領――特にその中には婦人車掌諸君の有する特殊な要求をかゝげて――の下に、數度のストライキによつて、また日常の個々の鬪爭によつてハツキリとした要求を持ち、鬪爭の經驗を持つてゐる。

一、密行制度の撤廢
一、同一勞働に對する同一賃銀支給
一、月經時、産前産後の休暇

等の要求は、彼女等と切り離す事の出來ない密接な問題である。
ブルジョア新聞は、鬪爭期間中に特に澁谷自動車出張所の一車掌の密行問題のために、五十餘名の婦人車掌のみが、電氣局に押しかけたといふことを報道してゐる。新聞の報道によれば、市電爭議の渦中に、このような切實な要求が、ストライキ鬪爭とは切り離されて、婦人のみによつて示威をなしたかの如くである。しかりとすれば、まことに滑稽の極みでなければならぬ。
第一に、かゝる婦人の特殊な、切實な日常要求が、何故ストライキの要求箇條の中に加へられなかつたか？
『賞與一割減反對』外六ケ條の要求中には、婦人車掌が要求する特殊な要求が全く無視されてゐる。
第二に、ストライキの當初にあたつて、要求箇條の中に、『密行撤廢』と『月經時休暇』の要求を、加へることを自動車部全體として提出したといふ。ストライキ指導部はこの八百の婦人、否自動車部としての、切實な要求を何故か加へなかつたといふことだ。
この間の事情は、鐘紡、市電兩ストライキ共に、日和見的指導者によつてそのイニシアチーブを握られてゐたといふこと、――同時に、日和見的官僚幹部によつては、婦人の利益に對して何等の關心を持たれてゐないといふことをバクロしてゐるものだ。
鬪爭の過程に、眼前に起つた直接の問題にも耳をふさぎ、目をおほひつゝ除外し去る所の彼等の本質を直接みせしめられたのである

五

第二に、我が國では、組合の指導機關や、ストライキ委員會に婦人勞働者を參與せしめることが珍しい。そのための積極的な行動がなされなかつたといつてよからう。

勞働組合の機關に於ては、男女間に特別な差を設けてはゐないが、婦人に對する傳統的な差別觀念が一般大衆の頭から拔け切つてゐない。かゝるイデオロギーが官僚幹部の一味によつて意識的に利用されてゐる。

最近、某組合の幹部選擧に當つて、社會民主々義官僚幹部が、婦人の立候補を婦人であるといふ理由の下に妨害し反對したといふ事實がある。ストライキに際しては、特に下からの選出による婦人勞働者の指導部への參加の配慮がなされ得る機會であるが、官僚幹部の下にあつては、これらのことも問題とはされ得ないであらう。

東京市電の婦人車掌の如き戰闘的婦人を有する所に於ても、ストライキの指導機關には一人の婦人をも加へてゐない。

第三に、婦人勞働者の問題と共に勞働者の妻に對する活動も、現時に於ては特別の意義を持つ。

或るストライキに於ては、勞働者の妻が特別の會議を持つてストライキ支持の決議をなし、メッセーヂを送り、積極的な共動の行爲をなしてゐるに反して、或る所では、妻の一團がストライキに籠城してゐる爭議團に押かけて、スキャップ的行動を演じてゐるのである。これらのことは、勞働者の家族が、ストライキに極めて大きな役割を演ずるものであることを敎へてゐるのだ。

ブルジョアジーは、すでに一歩先んじて彼等の闘爭を指導するに當つて、婦人のかゝる偉大なる意義を認識した。

婦人勞働者の勞働組合への組織の僅少に比して、ブルジョア團體に組織されてゐる婦人は百パーセントである。愛國婦人會より女子青年團、女子スポーツ團、何々會等々、反動網に組織されてゐる彼女達は、直接、又は間接に反動的な役割をなしてゐる。

修養團による大阪市電ストライキのスキャップ、東京市青年團による今次の東京市電ストライキ破り等、ブルジョアジーは、やがて、これらのための利用に女子青年團を、或は女子スポーツ團等を積極的行動に導くであらう。いはゆる修養團による反動敎育と共に、女子修養團の魔手が婦人勞働者の間にも、のびつゝある。

かゝるブルジョアジーの意識的・積極的な働きかけと對峙して、わがプロレタリア婦人の組織的活動は、今や最も重要な意義を持つてゐる。

同時に、現下の狀勢は纖維產業界の極度の不振、產業合理化等による婦人勞働者に加へられつゝある搾取の深刻化、婦人勞働者の大衆的失業、その必然的結果として婦人勞働者の最近に於ける經濟闘爭への參加と英雄的行動、急速な急進的傾向等々、廣汎な婦人勞働者を自己の階級の勝利のための正當なる組織に結集せしめる、最もよき條件に導きつゝあるのだ。

わがプロレタリアートは自らの解放に向つてその闘爭に參加せしめるために、百萬の新鮮なる精力——婦人勞働者を獲得し、組織することの急務に迫られてゐる。

未開社會に於ける性と抑壓（四）

B・マリノウスキー
小林すみ子譯



七　小兒期の性慾

今、我々は第三番目の時代——子供時代の後期と呼んでも差支へない——の性生活なる問題にやって來た。それは、五六歳から思春期迄續く自由行動や遊びの時代に、蔽ひかぶさつてゐる。私は元より前の小兒生活を扱つた時、社會的影響を離れて單獨に性の問題を論議する事は差控へてゐた。有機體と社會間の相互の貢獻をはつきりさせる爲、此處でも同樣の態度を取る事にし樣。

フロイドに從へば、現代ヨーロッパに於ては、此の時代に性慾の退行、潜在時代、性的機能や衝動の小休み等の、非常に奇妙な現象が表はれると云ふのである。フロイド派の神經症說の中で、此の潜在時代を特に重要と爲所のものは、それに關聯してゐる健忘である。此の完全な忘却のとばりは、此の時代に於て下され、今迄の幼兒性慾の記憶を塗隱してしまふ。注意すべき事には、此の重要で興味あるフロイドの論說を、他の學者連は確認してゐないのである。例へばモールは、幼兒性慾に關する記錄（大變行屆いた完全な文獻であるが）の中に、性的發達に小休みが存在するとは一言も書いてゐない。寧ろ彼の記錄は、小兒の性慾が絶間無く徐々に發展して行く事、カーヴが少しのもつれも無く不斷に高まつて行く事を暗に示してゐる樣なものである。また注意すべき事は、フロイド自身も、時には迷つてゐる樣に見える事である。子供の各時代の內、此の時期に關する一章は明瞭と正確を缺き、フロイドですら、一二箇所で潜在時代の存在說をためらつてゐる。だが、若し教育有る學童に就いての個人的知識から得た材料に基いて、私が確言するとしたなら、潜在時代は、常に六歳頃やつて來て二年乃至四年は續くものだと言はう。此の期間に、子供は猥褻な事に興味を失ふ。猥褻な物事は、

微かな然し魅力ある多彩を消してしまひ、抑壓され忘れられ、そして新しい事物が興味と精力を滿たすべく起きて來る。

フロイド自身の所見に含まれてゐる齟齬や、他の性學者連の事實に對する無智等をどうしたら說明出來樣か。

我々が此處で、人間の有機質に深く根ざしてゐる現象を取扱つてゐるのではなくて、全部と迄行かなくとも大部分社會要因に決定される現象を扱つてゐるのである事は明かだ。

若し我々が社會各層を眺め比較して見たならば、下層、殊に農夫間では、潛在時代が他階級よりも認定困難である事を雜作無く知るであらう。事柄をもつとはつきりさせる爲に、以前の前生殖器的幼兒性慾の時代を振返り、二つの時代が如何に繋つてゐるかを見樣。

我々は第五節に於て、下層でも上流でも同樣に幼兒には「猥褻」に對する强い興味が存する事を見た。併乍ら農夫の子供の間では、それはもつと後になつて發現し、且つ稍異つた性質を備へてゐるのである。さて、下層や上流階級に於ける、フロイドのいはゆる「肛門色情」の源をもう一遍比較して見樣。ブルジョアの育兒室に於ては、自然な機能――排泄への興味を子供が起す樣に最初は大いに奬勵するが、暫くすると急に禁止する。保姆や母は事實或る程度迄、排泄行爲を促進する樣に努力し、速かな排泄は賞め御褒美をやる。然しその內に、どうかすると子供が餘りそれに興味を持過ぎて、子供に取つては自然なのだが大人の目からは汚いと思はれる樣な方法で、娛しみ出す事を發見する。すると育兒室の長は子供を叩いて止めさせ、機嫌を惡くさせる。そして其の興味は激しく抑壓されて了ふ。子供が生長するに從ひ、秘密な興味と神秘な魅力を持つたその自然的機能は、沈默やしかめ面や色んな技巧で圍まれ始める。

斯樣な暗示に滿ちた不可解な雰圍氣を、子供が如何に强く感じ、且如何によくその意味を理解してゐるか、といふ事を、自分の子供時代からして思ひ出す人は、「猥褻」なる範疇は大人が作出す物だといふ事を認めるであらう。尙又、記憶に賴る許りではなく、觀察に依つて、子供が如何に速かに大人の技巧的な態度を則り、小さなぶつた氣取屋に、道德家になつて了ふかを確めるのは容易い事である。

農夫の間では狀態は異つてゐる、子供達は極く小さい時から性的事項を數へ込まれる。兩親や親類達の性行爲は必然的に見るし、あらゆる猥褻さを含んだ爭ひを見聞きする。又家畜の生殖は家庭に取つて微細な點迄重大關係が有るので、それ等はおゝつぴらに細い所まで家庭內で論議される。斯樣に自然な物事に深く馴染んでゐるので、彼等は秘密な方法で娛しまうとは餘り思はない。もつと色々な方法で公然と娛しむ事が幾らも出來るのである。勞働者の子供は、多分二つの極の中間に立つてゐるのだらう。動物と親しむ事は殆ど無い代り、より多大な寢室の脅威と、淫賣宿からの敎示を授かる。

ブルジョアとプロレタリアの子供の之等本質的な相違が齎らす結果は何であるか。先づ第一に、ブルジョアの子供が自然的好奇心の抑壓に依り育て上げる所の「猥褻性」は、下層階級では餘り見られず、もつと後になつて發現する時はもう既に、生殖器的性慾と結付いてゐるのである。上流階級では、猥褻な事物への好奇心が疲れ果てた此の頃、育兒室から解放され、新な人生の興味が現はれて來

る。此の時潜在時代は始まり子供は新しい興味に吸引される。然るに、教育ある人の子供の通性である性知識の缺乏は、生殖器的興味がこんなに早くから始まる事を妨げる。下層階級では、性知識と生殖行爲に就いての早期な好奇心とが同時に存在し、性的思春期に至る迄の、徐々な不斷の發達を此處に基礎づける。

社會力の本性は之等の事實と協力して、ブルジョアの小兒の生活に、大きな間隙を造らへる。六歳に至る迄は全生活を遊びに傾けてゐた者が、今俄に勉強し學業をやらなければならなくなる。農夫の子供は既に、もう料理を手傳つたり年下の子の守をしたり、鵞鳥や羊を追廻したりしてゐる。で、此の時生活に何の崩れも起らない。

斯樣に、農夫やプロレタリアの子供に於ては、猥褻に關する幼少時の興味がブルジョアより早くそして異つた形で目覺めて來る。それはより秘密的でなく、罪の意識も少く從つてより不道德でなく、より「肛門色情」的でもなく、もつと性に密接してゐる。それはもつと容易に圓滑に初期の性的遊戲に變じて行く。だから潜在時代といふものは殆ど完全に無い、少くとも見出し難い。此の事は、神經症的な裕福な人々を取扱つてゐる、精神分析學が、何故此の時代を發見する樣になつたか、又モール博士の一般醫學的觀察が、何故此の時期を探ね當てなかつたのか、といふ事を説明してくれる。

併し、假令階級間に於ける相違の事實やその原因に就いて、何か疑問が有つたにしても、我々がメラネシアに目を向ける時、それは消失せるに違ひない。此處では、我々の教育ある各階級と比較するに、事相が確かに違つてゐる。第五節で見た如く、幼少時の性的猥褻行爲や、秘密な遊びや興味などが皆無なのである。事實此處の子供達に取つて、上品猥褻、淨不淨の範圍は存在しない、と言得る。我々のブルジョアと比べて、農夫間に於ける方が、此の區別の少い理由――それと同じ理由がメラネシアでは、より強く直接に働いてゐる。メラネシアでは一般性的タブーがないのであつて、自然的機能を隱蔽しない。確かに、子供の場合はおゝつぴらである。之等の子供達が裸體で馳廻り、彼等の排泄機能が公然と且自然に取扱はれ、身體各部や裸體に對して一般にタブーが無い事、等から更に、小兒が三四歳になると生殖器的性慾の存在を知り、之が他の遊戲と等しく彼等を樂しませるだらうといふ事を知り始める――といふ事實に迄考へを進めて來ると、我々は、生物學的要因よりも寧ろ社會的要因が、二つの社會の相違を説明してくれる事を知り得る。

今述べてゐるメラネシアに於ける時期は――我々の潜在時代に相當する――小兒の獨立期であつて、男兒や女兒達は子供の國といつたものを造つて共に遊ぶ。之等の子供の主なる興味の中には、性的遊戲も含まれてゐる。早期に子供達は、お互若しくは稍年長の友達に依つて、性行爲に引入れられる。無論此の時代には未だ滿足な行爲を果す事は不可能であるが、あらゆる類ひの遊戲を行ひ――それ等は目上の者から全く自由に放任されてある――斯くして彼等は、好奇心や性慾を直ちに敵ふ事なく滿足さす事が出來るのである。

斯樣な遊戲に對する優勢な興味は、フロイドが「生殖器的」と稱したものである事は疑ひもない。それから、一般に子供が年長の事や大人の行爲興味等を眞似し樣とする所から、かうなるのである

事、又此の時代はヨーロッパの上流の子供には無くて、ごく僅かの農夫やプロレタリア間に存在する、といふ事も疑はれぬ事實である。之等子供の遊びを稱するのに、土人はよく「性交の遊戯」（ムワイギニ　クワイタ）と言つてゐる。又は、結婚の遊びとも言はれる。

だが、すべての遊戯が性的だ、と思つてはならない。性的遊戯に携らない子供も澤山居る。併乍ら、性的事項が勢力を占めてゐるある特殊な遊びが、小さい子の間には存在するのである。メラネシアの子供は「夫婦ごつこ」を好む。先づ男兒と女兒が小さな隠れ場所を作つて家庭とし、其處で夫婦の營みの眞似をする。勿論此の中には重要な性交の役目がはいつてゐるのである。或る時は、一群を成して野外へ行き、食べたり角力を取つたり、口說いたりする。又は、未だ性的行爲で終る所の交易の儀式を眞似る。未熟な性的快樂のみでは滿足出來ないので、斯樣な想像たつぷりでロマンテイックな興味を持つた、大がかりな遊戯が、混つて來るものに違ひない。

此の小兒性慾に就いての大事な點は、それに對する大人の態度である。前に申した樣に、親達は聊もそれを不埒だとは思つてゐないのである。一般に當り前な事だと思つてゐる。稍々、子供の世界の戀愛悲劇や喜劇を戯談交りに、話合ふのが關の山である。親達が干渉したり、氣に喰はぬしかめ面をしたりしないといふ事は、一方、性的遊戯は家の中でやらず、何處か離れた藪の中へ行つてやらうといふ愼しみを、子供の心に起させる。

就中、子供達は戀愛沙汰には全く自由に放任されてゐる。親の干渉が無い許りではなく、成熟した男女が子供に倒錯した性的興味を持つ事も滅多にない。だからこういふ遊戯に子供達が巻込まれてゐるのを、此處では見られないであらう。子供の暴行も無い。此處に、子供に對して性的暴行を働いた人間が有つたら、きつと、馬鹿々々しく且つ厭らしく思はれる事だらう。

小兒の性的交渉に於て、最も重要な特徴は、既に述べた樣に兄弟姉妹のタブーである。極く小さい時、女兒が始めて草のペテイコートをまとふ頃、同腹の男兒と女兒は、彼等間に親しい關係を許さない嚴格なタブーに從つて、引離されねばならない。もつと小さい頃、這廻りからやうやく歩ける樣になる頃でさへ、彼等は別々に遊んでゐる。其の後、決して彼等は社會的に自由な間柄を續ける事は無い。就中、片方の側の戀愛事件に對して、もう片方はほんの僅かの興味も起してはならないのである。子供達の遊戯や言葉には、比較的自由が許されてはゐるものゝ極く小さい男兒でさへ彼の姉妹から性を聯想し樣とは思はないし、決して姉妹の面前で性的な仄めかしや戯談等は言はうとしないのである。之は生涯を通じてちやんと續行される。そして、兄弟に姉妹の、若しくは姉妹に兄弟の戀愛沙汰に就いて語る事は、最大級の非禮とされてゐる。こんなタブーが賦課されてゐるので、家庭生活は早くから壊れる。爾後、男兒と女兒とはお互を避ける爲、親の家を出て何處へか行かなければならないのである。之等總ての事に依り、小兒時代後期の性慾は、我々社會とメラネシアとでは大した相違が有る事を我々は認める。此の時、我々の教育ある階級には、性慾の途切れや、健忘を伴つた潜在時代等があるけれど、メラネシアでは、非常に早い生殖器的興味の

開始が、我々間に無い樣な或性慾のタイプへと進んで行く。

これ以來、メラネシア土人の性慾は、思春期に至る迄、徐々ではあるが不斷に發達して行く。此の一つのタブーだけは最も嚴格に、完全に尊重しなければならない代り、其の他の、年少者の性慾には全くの自由を、社會は與へてゐるのである。

八　思春期

氣候や人種に依つて異るが、ほゞ九歳より十五歳の間に子供は思春期と呼ぶ時代にはいる。思春期は、轉換期ではないが、多少發達の長引く時代であつて、其の間に、性器管や有らゆる內分泌管や一般身體組織が、改造される。思春期が、性的興味や性的活動の開始に取つて、必須條件であると考へてはならない。何故なら、年頃前の少女は性交可能であるし、成熟しない少年に於ても勃起を見、性行爲をなす事が知られてゐるからである。併し、思春期が、個々の性的歷史上最も重要な境界線を成してゐる事は、疑はれない。

剩へ、此の時代に性は人生の他の分野に、緊密に結付けられて居るので此の章では性的事項と社會的事項とを、前の二つの時代の場合の樣に分けて扱はず共々に取扱はねばならないであらう。今、メラネシアのトロブリアンド人と我々社會とを比較する場合、此の土人間では成年式が思春期に行はれないと云事を大いに注意すべきである。此の事は我々の議論から最も重要な箇條の一つを除いて與れるであらうし、又一方父系と母系間の比較を、より明確に精密に描出させて與れるだらう。何故なら大抵の他の未開社會では、色々な成年の儀式が此の時代を蔽ひ、全く變形されてしまふからである。

我々社會では、少年と少女に就いて別々に述べなければならない。兩性の性的事項は此の時、全く二つのグループに分かれるからである。男子の生涯で、思春期は身體の成熟や性的特徵の完成並びに才能の獲得を意味する。新たに男らしさを獲得するので、彼の人生一般に對する有らゆる關係は、性的事項や家庭內の地位の變化と同じく、非常に異つたものになつて來る。先づ家庭內に於ける地位の變化から始め樣。吾々は、母親姉妹その他女性の親類に對する彼の態度に影響する所の、ある大變面白い現象を認める事が出來る。我々文明社會の典型的な、年頃の少年は、思春期になると母親に對しては非常な當惑を示し始め、姉妹にしては口喧しくなり、或る程度の兇暴性を發揮し、友達の前では有らゆる女性の親族を恥ぢる。吾々の中に、學校友達と愉快に歩いて行く途中で母や伯母や姉妹又は從妹に出會し、挨拶しなければならなくなつた時の、口舌に盡し難い羞恥の苦しみを覺えてゐない者があらうか。丁度、重罪の感、又は惡事の現場を捉まつた樣な感じがする。或る者はその工合の惡い出會者を知らぬ振しやうとし、より大膽な者は眞赤になりながらも挨拶する。だが、誰でもそれは自分の社會的地位に投懸けられた一抹の暗影であり、男らしさや獨立を踏付けにする行爲だと感じる。此の現象を心理學的に說明せずとも此處に現はれた羞恥と當惑は、非禮とされる所のものと同じタイプだといふ事は直ぐに了解る。

此の新たな男らしさは、少年の世界に對する態度――世界觀に深く影響する。彼は獨立した考へ、人格、名譽を持つ樣になり、權威者

や知的指導者の方へ自分の位地を向上させ様とする。之が、父子關係に於ける新しい段階であり、理想としての父を新たに試驗し直しもう一遍總勘定する時である。此の時若し父が、愚者や「とんま」だつたり、僞善家や「時代後れ」だつたりする事が了解ると、理想は打倒れてしまふ。その場合普通父は一生問題にされず、後年に再び一緒になつた時でさへ、もう大いに威光を及ぼす機會なぞは失はれるのである。一方父親が、此の時代の子供に附物な極端に嚴しい詮索にうまく及第すれば、一生理想として仰がれる素晴しいチャンスを得る。勿論此の逆も事實である。といふのは父は此の時期に同じ様に嚴しく息子を調べ、未來の後取りとしての理想に近いかどうかといふ樣な事に、矢張り批評的な態度を取つてゐるのである。

少年の、性に對する新たな態度——思春期に於ける再固定——は父親のみならず母親への態度に、大なる影響を及ぼす。教育ある少年は、漸く今、兩親と自分との間のきづなの、生物學的性質を知る。若し母を深く愛し崇拜して居り——一般にさうなのだが——父を理想と仰ぎ續ける事が可能である場合は、自分が兩親の性交に依つて出來たといふ考へは、最初は子供の心にひゞを造らへるけれど軈て仕末が付くものである。それに反して、父を罵り憎んでゐる場合はよく、人がやる樣に、事實を明らさまにしない方がいゝ。それでないと、かの考へは、母親を永久に汚辱し、子供に取つて一番懷かしい物事を汚してしまふであらう。

新たな男らしさは、就中少年の性生活に影響する。心的には知識を受入れる支度が出來、生理的には、生活に役立つ許りになつてゐる。普通此の時に、性の第一課を學ぶのであつて、恐らく大多數が、ノーマルで正しい方法に依つてゞはなく、自慰や、賣春婦との汚れた行爲等に依つて性的活動を始めるのである。此の時代は多くの點に於て、生涯の分岐點である、強い節制心と寛大な道德とに訴へ乍らも、新たに目覺めた性衝動に引付けられて行つたが最後、それつきり肉慾の大浪に足を浚はれてしまふ。若しくは、他の興味や道德心が強い爲、半ば或ひは全然衝動を防いでしまふ。此のどちらかである。少年が純潔の理想を保持し、それを守り得る限り、性衝動を高方に擧げる槓杆作用が、存在する。勿論、誘惑は大抵社會環境や、少年の生活樣式に依り定まるものである。國々の人種的特徴や道德、文化的價値等は、ヨーロッパ文明の中で、色々な相違を示して居る。或る國々には、放恣な性慾の分裂した力に從ふ事を、少年の常と認容する階級が存在する。他の國では、只機會に乘ずる事だけが可能であり、又或所では、社會が嚴しい道德を定めた爲非常に多くの責任が少年から取除かれてゐるのである。異性に對しては、先づ母や姉妹に對する態度に稍似たものが現はれる。或る當惑や、魅惑と反撥の兩極を備へた態度等がそれである。女性は深い力を以て彼に働き掛ける事が出來、驚かし且つ彼を疑ひで滿たしてしまふのだ、といふ事を少年は感じる。そして、自分の目覺め行く獨立と男らしさに取つて危險な物を女性が藏してゐる事を知覺する。

思春期の終り頃になると、性慾と優しい愛情との新たな混亂が現はれて來るものであつて、それは幼い頃の記憶に殘つてゐる母親の愛情と、性慾の新たな要素とを混ぜ合す。想像殊に夢中の幻想は、

少年の心に恐ろしい混亂を齎らし、且つ奇異なわるさをする。
之等はすべて上流の有產階級の少年に、より多く見る所である。若し、農夫やプロレタリアの少年を彼と比較して見るならば、本質的要素は同じいとは云へ、個々の變化はより少く、一般の行き方が地味で目立たない事を我々は知る。
母や姉妹に對して粗暴に振舞ふ樣な時代は若い農夫に特に著しい。もう若者は自分の力と、後取りとしての地位とを自覺して居り、財產への新たな慾望や勢力を得樣とする野心などを感じてゐるので、父親との間に起る爭ひは一般に激しさの度を增して行く。そして、屢々主權を爭つてお定まりな格鬪が始まる。性的方面ではそれ程激しい危機といふものが無いので、兩親の關係にも、そう直接には反應しない。だが大體の外廓はブルジョアと略同樣である。
少女は此の頃初潮の危機を通拔ける。之は自由を蠶食し、人生を複雜化する。且つそれは神祕な魅力を增し常に熱心に期待される樣になる。併し、思春期は少女に取つて、大して社會的轉換期とはならない。少女は相變らず、家庭に居るか又は寄宿舍で學業を續けてゐる。けれども、有らゆる仕事や躾けは、彼女を平凡な家庭生活にふさはしくする爲であつて、近代的な職業婦人に仕立てる爲のものではない。彼女の人生の目的は結婚する事である。少女の、對家族關係の內、最も大切な要素は母娘間の競爭であつて、これはよく此の時代に起きるものである。其の張合ひが、明らかなむき出しな形で、どの位屢々現はれて來るかと言ふ事は困難だが、家庭の基礎關係に、或る歪んだ要素を齎らす事は疑ふ餘地が無いであらう。丁度此の時代に、或る特殊な愛情が父と娘の間に起り、母親との競爭に關係して來る事がよくある。之が、エレクトラ錯綜の外形である。前述の事からして、エヂプス錯綜とは全く異る性質のものだといふ事が了解る。我々は此處で、一般常態の基礎的研究に携はつてゐるのであるから、婦人に多い病的なヒステリー性は、脇へどけておく事にして、さてエレクトラ錯綜なるものはさうザラに有る譯では無く社會的にも重要性がない。又、ヨーロッパの文化に大して影響を及ぼさないものである。だが一方、その影響は錯綜それ自身を固定さしてしまふ事が多い。そして父娘間の不倫行爲は、生物學的及び社會學的性質に基く多くの理由に依り實際起る數が母と息子間の不倫よりも遙かに多いのである。併し乍ら主として錯綜の文化並びに社會的影響が此の議論の興味なのであるから、今エヂプス錯綜とエレクトラ錯綜との類似點を細かに比較して行く事は許されない
抑壓がより激しく、從つてヒステリー症も多い、けれども實際に不倫行爲が行はれる事は滅多に無い上流階級。少女の性的興味が上流より早期に且つノーマルに發現するので、ヒステリックな歪んだ性質になる事は少いが、その代り父親の迫害に苦しめられる下層階級。此の二つの階級を比較して行く事も亦此處では許されない（註）

（註）農夫の間では父が娘を襲ふ事が良くある。之は殊にラテン人種に多い樣に見受る。此の種の肉親不倫はルーマニアの農夫間では常事されてゐると云ふ事を以前聞いて居たがイタリーでも同樣らしい。事實私はカナリー群島に於る父娘不倫を數件知つてゐる。それは秘密な遣方はなくて公然、破廉恥な家庭を營み而も彼等の間に子生れた供を育てゝ居のであつた。（此項未完）

映畫漫想（五）

尾崎翠



ジイン・アアサア

時のもの、そのほか

「風」荒涼とした沙漠地を吹き捲く疾風のなかに、弱弱しいリリアン・ギッシュを放りだした作品。風の脅威とリリアン・ギッシュが何處まで行つても融和しない畫。この監督者は、まづリリアン・ギッシュの身の置きどころを全然知らない。リリアン・ギッシュは美的効果に於てもうすこし靜かな世界に身を置かなければならない（ことを、この監督者は思はせる）次に彼は映畫にもこんな不快な境地のあることを敎へる手腕を持つてゐる。

不快といつて、これほど不快な作品もあまりないであらう。全篇を通じてただ、風の暴威。風に吹きとばされる砂。砂。砂。風と砂の渦から來る壓しつけられるやうな不快。ただ大自然の脅威が主題として心にのし掛つてくるだけで、それに對抗すべき人事が弱すぎ慘めすぎる。

冒頭にまづリリアンの乘つてる汽車の窓を透して吹きあれてゐる風が彼女の心を恐怖に誘ひ、この恐怖はそつくり觀客の心を囚へる性質のものだ。この不快感はこの沙漠地に風の止まない限り取り去ることのできない感情。そして、風は全篇を通じて絕えず吹き荒れる。じめじめと緊張した不快を永く保たせる手腕に於て獨自の畫。萬一、底おそろしいほどな幸福に見舞はれたばかりの人間があつたら、彼は「風」をみて心に帳消しを感じ、この作品を愉快がるかも知れない。

この疾風のなかで、リリアン・ギッシュの胴は風に吹き折られてしまひさうに細い。彼女は絕えず窓から吹きこむ砂の中に肩を縮め

髮の砂をはたき、砂だらけの皿を洗つてゐる。いくらリリアン・ギッシユが悲劇女優だといつて、不快な疾風と砂の中に放り出さなくてもいいと思ふ。これは、たぶん、監督がひどい癇癪を起し、その渦の中から思ひついた作品か、でなければ彼は觀客に不快を撒くことに愉快を感じる人種に違ひない。

この監督がぜひ一人の女優を疾風に吹かせなければならないとすれば、別に、リリアン・ギッシユなどと對蹠的な、ニタ・ナルデイのやうなタイプがある。野性ニタ・ナルデイがこの作品の主役をつとめ、彼女の體軀で疾風に向つて行つたら、この畫の不快感は救はれるかも知れない。その代り、リリアン・ギッシユの場合のやうに、風の恐怖から心にもない荒くれ男の細君になつて、風と砂の中に埋もれた一生を送るやうな筋の運びにせず、女主人公は疾風に向つて咆え、荒くれ男に向つて咆える、そんな筋を必要とする。この時ニタ・ナルデイの顔は野性の强さに輝くだらうから——想像して來ると、「風」はやはりリリアン・ギッシユよりはニタ・ナルデイの領土。

この畫の中のリリアン・ギッシユは、ときどき他の作品で見なれたあの服裝に包まれてゐる。身幅のきつちりした、贅布のつかない腰の細い、裾ながの、腕を露さない服裝。そして彼女の細い線と表情は、この端正な服裝に適してゐる。この作品にもし風と砂の脅威がなかつたら、彼女はいつものとほり觀客の雅心を淡く滿たしてくれたであらう。ともかくリリアン・ギッシユはこのごろはやりの腕じまんやイットの放散者などからは遙かに遠い、特殊な女優。淡い端麗、淡い清純等等の所有者なのだ。しかし、彼女に幾通りの心理を表情し得るかを思ふとき、心がすこし寂しい、せいぜい五本の指に數へ得る表情しか描けないからだ、リリアン・ギッシユの特殊さは線と容貌の中に潜んでゐるので、演技の中に在るのではない。

「桃色の巨盜」聲畫に仕組んで聽神經を浪費させるには當らない作品、取りたてて科白に巧な役者もゐないし、美しい聲もない。聲畫にしなければならない理由は何處にもないに拘らず、不成功な聲畫の例に洩れず科白に時間を取られ、ただ退屈。

プログラムを見れば女泥棒と紳士泥棒の鉢合せになつてゐるが、何とお二人とも鈍いことだ。筋の運びがだらけてゐて一寸も泥棒の世界らしくない。胡椒をふりかけて欠伸したい焦慮を與へるための作品だ。

女泥棒に扮したイヴリン・ブレントは、容貌に胡椒が利いてゐるくせに、その顔を活かすだけの活躍をしない顔と動作のちぐはぐ。しかしこの罪は原作者に持つて行くべきものかも知れない。氣の利かない原作者が女泥棒に最初から戀心を持たせるからいけないのだ。そして彼女に眷戀される紳士泥棒（クライヴ・ブルック）は、二乗しても泥棒面にはなれない。顔の起伏のなだらかなおめでたい男。

「世界の一億年」——原名「進化」——天地蒼溟から人類發生に到る進化の描寫、とい條、知的興味ぬきの、一種のおとぎばなし觸角に觸れてくる畫。宇宙が煙のやうに渦卷き、星が遊び、熔岩が流れ氷河が砕け、濕氣・蒸氣・細胞・微生物、苔、海月、爬蟲・四つ足、猿・土人——が主演する。心が二十幾分のあひだ地上をはなれ、いざなぎ・いざなみの神様以前に遊離する。間のぬけた涼しい世界。



ジョン・ギルバアト

心が二十幾分のあひだ玩具函のやうな哲學を考へ込む。「私」ががすになり、「私」が星になり、「私」がけむりになり、「私」が氷河の一片になり、「私」が苔になり、「私」がカメレオンになり、「私」が土人になる。文化のはしくれも匂つてゐない世界は、觀客にナイヴな感情移入をはたらきかけることに巧みだ。觀客の心を、一秒のあひだでもいい、完全に「苔」に、「怒り」に、「笑ひ」に沒入してくれる映畫は、さう多くはないのだ。

「風」や「桃色の巨盜」に伍して、人間臭ぬきの「世界の一億年」は饒舌家群に紛れこんだ一人のひどい吃語家。印象派の展覧會にまちがつて運びこまれた一點のユウバア・レアリスムスの繪。

「駕籠」何時ごろの作品か知らない。衣笠貞之助氏の監督になる短い、寡默な「駕籠」。寡默の中に多くのものを語りかける一顆の小さい眞珠。主題はパンでなく心を喰べて生き得た人間の心理描寫。この主題が、小品で引きしまつてゐるだけによけい觀客の心を衝く。だからこの畫への讚辭は原作者も分つべきものかも知れない。

使ひ古した繩のやうに草臥れ、絶望だけを所有してゐる素浪人の顏が路傍の賣卜者に「途上で出逢ふ三つめの駕籠に幸運が潜んでゐる」と教へられて以來急に希望に輝いてくる。この時浪人に扮した風間草六の表情の變化は好い。

第三の駕籠には浪人の父親がのり、第四のには刑場に護送中の泥棒がのつてゐる。第三の駕籠が少しのあひだ停つてる中に第四のが追ひ越してしまひ、浪人にとつては第四の駕籠が第三のに相當する。だから彼は泥棒の親分の駕籠に寄りそひ、「幸運」に蹤いて行く。泥棒が子分等に奪はれ、その代りに浪人は駕籠に打ちこまれ、泥棒無宿なにがしに仕立てられて刑場に運ばれる。駕籠の中で、彼は易者の言葉を信じてゐる。柱に縛りつけられる。彼は幸運を疑はない。槍が胸を壓へる。槍の下で、彼は夢をみてゐる。――「處刑これが俺の幸運だ」

最後に墓標の描寫がある。墓標の下で、なほあの素浪人は叫んでゐるやうだ――「これが俺の幸運なのだ!」

そこで墓標が消え、公樂キネマの天井に佗しい灯のついた椅子の上で、ひとりの觀客は佗しい觀念論者にされ、澄み徹つた靜かな心で考へる「心が所有してる幸運は、そのまま心の外に存在する幸運だ」。――この小品の與へる心理は、ありふれた小さいものではないのだ。衣笠氏の浪漫癖は深い。

「モンテ・クリスト」主演者ジャン・アンジエロの巨軀の均整美のみ

心に殘る畫である。作品そのものは退屈。アンジエロの他に退屈を點綴してちよつと心に殘るのは、杉狂兒に似た若い無賴漢と、蜘蛛に似た女房女優ひとり（兩優とも姓名不詳）。

この退屈な「モンテ・クリスト」を見てゐるうちは、心は假想の「ギリシヤ神話」に飛ぶ。ジヤン・アンジエロの均整美がアポロに適してゐるからだ。アンジエロをもうすこし巧い役者に仕立て、大がかりなギリシヤ神話を作る監督がゐたらと思ふ。

メルセデスを演つたリル・ダゴファは、役と持味とが何處まで行つても融けあはない。彼女の純情役なんて滑稽だ。

「ふるさと」「トオキイ」とは「ヤンキイ」の移り氣のいたづらとのみ思つてゐたら、日本でも藤原義江を俄かに役者に仕立て、「ふるさと」を作つてしまつた！

藤原氏の唄は、レコオドの幾倍のマイナスをつけられて「トオキイ」の中に納まつてしまつた！「ふるさと」が、今日のやうに藤原氏のレコオドの流布されてゐない頃の作品としたら、聯家はうんざりするだらう。「ふるさと」はその程度のものに過ぎない。

にわか仕立ての役者藤原を、役者として評するのは酷かも知れない。しかしこの作品が單にテノオル歌手藤原の唄のみを主題としたものでなく、ものがたりの主人公としてのひと役を與へてゐる以上は、いやでも役者藤原に挨拶が要りさうだ。挨拶はあつさり一言でいい「てんで芝居をする氣を持たない無邪氣な下手くそな役者だ」——此處にひとつの副産物としてのユウモアが潜んでゐる。これはたぶん監督者の企圖外の逆効果にちがひないけれど、藤原は細君役の夏川靜江だけに役者らしい芝居をさせ自分では常に丸太棒のやうに突つ立つてゐる。この二人の非芝居と芝居のやりとりに、ちよつとちぐはぐのおもしろさがあるのだ。その上に、抑揚のない、常に大聲な藤原のせりふが、同じやうなユウモアな逆効果を擧げてゐる。しかしこんな逆効果も「ふるさと」一篇でたくさんだ。こんな役者ぶりを二度三度と我慢できるものではない。

夏川靜江の常に熱心で、精いつぱいを演じてゐる態度には頭がさがる。最後に日本の役者達の聲は、ただ聽き手の咽喉を締め上げるために吐かれてゐるだけだ。「ふるさと」の終るまで聽き手は絶えず咽喉を涼しくするために咳ばらひをしなければならない。「ふるさと」によつて示された日本の女優の聲は、アメリカの女優がヒステリイを起しても出來ないくらゐ疳高い。すくなくも一オクタアヴ下げなければ暢氣に聞いてゐられない聲だ。それからせりふのためのせりふ臭味を拔かなければならない（これは男女優をこめて）それから聲畫を作るくらゐなら、聲にうるほひと幅のある、すこしは美しい聲の役者を準備しなければならない（これも男女優をこめて）それから——だから、今のところ、日本では、聲畫を作る運びには決してなつてゐないのだ。

「肉體と惡魔」ジヨン・ギルバアト。君は鈍くなつた。昔の「モンテ・クリスト」の崇高を失ひ、「毆られる彼奴」の清爽を失ひ、題は忘れたけれどロシアの士官に扮した作品にみた鋭い氣性を失つた。君と同やうな失ひものをした役者が日本にも一人ある。阪東妻三郎が、酒太りで猫の美を失ひ、鈍角化してしまつたのだ。君の表情と



グレタ・ガルボ

軀もこのごろ欠伸しかかつてゐる。この鈍角化はどうも軀の肥胖よりは、君の心の欠伸から來るのだ。鋭角的美感で相通じるもののあつた君と妻三郎が、今となつて二人とも鈍角になつて行くのを惜しいと思ふ。

グレタ・ガルボをこの程度の妖婦ぶりでおくことに焦慮が湧く。額に野性の美を持ち、口に蠻性を持つ彼女を、靜的妖婦に縛つておくからだ。「ヘルマン・ズウデルマン氏原作」などより、グレタ・ガルボを中心にした書きたての脚本を欲しいと思ふ。毒液が脂つこい匂ひを放つのを。或はナヂモヷと色あひの違つた「サロメ」を。

「續フウ・マンチュウ博士」おもしろいものがたりです、と言ひた

いと思ひますが、妖氣が足りません。場面々々にも、役者の一人々々にも、もうすこしくらゐこぢれた深刻さを欲しいのです。何處を探しても平面で、皺がありません、だいいち醫畫にするからおめでたくなつてしまつたのです。ヤンキイといふ人種は、萬物を音で埋めなければ承知しないやつです。だからチヤアリイ・チヤツプリンの悲哀が生まれるのです。ウエルネル・クラウスをフウ・マンチユウ博士にし、ウフアで撮つたら澁つ面の、黑子のあちこちにある「フウ・マンチユウ博士」が出來たでせう。

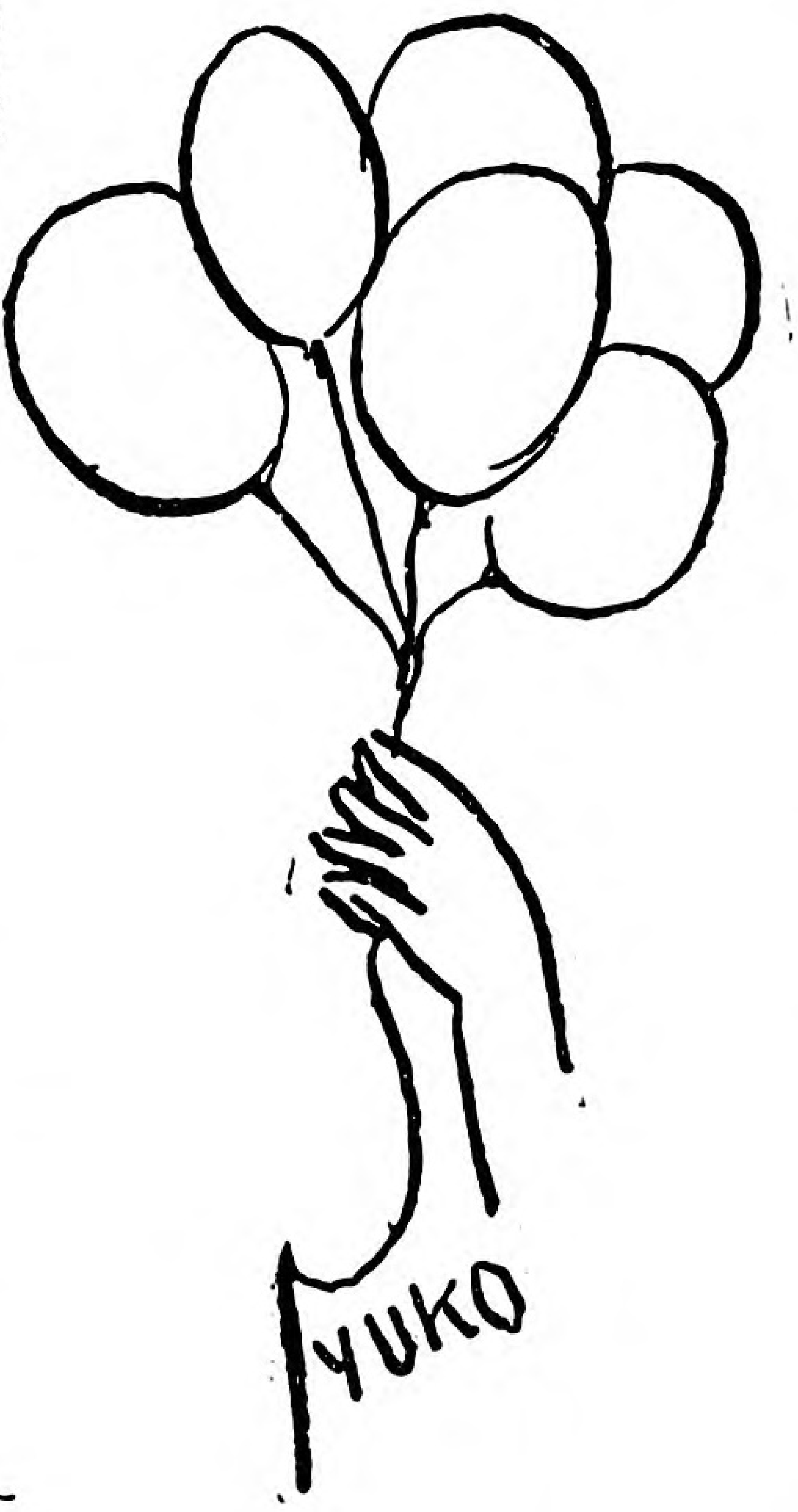
ジイン・アアサアは、どうかすると顔がビイブ・ダニエルスに似て甘ちやんに見える。しかし軀は紐のやうに細く、裾ながの純白の服裝が美しい。聲は非常に低くうるほつてゐる。日本の女優の先生にしたいくらゐだ（どうも、若い女優さんたちに對してはこれくらゐのことしか言 ません。ナヂモヷに捧げるやうな讃辭は、今のところあなたがたの演技が許さないのです。あなたがたは、どつかが美しいだけです）

「曠野に叫ぶ」おたづね者や兇賊が大自然の中をあばれ廻つてゐるだけで、その昔、ルウス・ロオランドといふ活劇女優のあつた事を思ひだしてしまつた。馬の蹄の音に耳をふさぎ、ジヨオヂ・オブライエンやスウ・キヤロル其他の山賊どもに眼をそむけ、空の雲を眺める外に仕事のない畫だ。だから雲だけは美しく撮つてある。

海の祭

——放浪記——

林芙美子



七月×日

ちつとも氣がつかない内に、かつけになつてしまつて、それに胃腸も根こそぎ痛めてしまつたので、食事も此二日ばかり思ふやうになく、魚のやうに體が延びてしまつた。

藥も買へないし少し悲惨な氣がする。

店では夏枯れなので、景氣づけに、赤や黄や紫の風船玉をそえて、客を呼ぶのだそうな——。ちつと賣り場に腰を掛けてゐると、眠りが足らないのか、道の照りかへしがギラギラ目を射て頭が重い。レースだの、ボイルのハンカチだの、佛蘭西製カーテンだの、ワイシヤツ、カラー、店中はしやぼんの泡のやうに白いものづくめ、涼いものづくめだ。

閑散な、お上品なこんな貿易店で、日給八拾錢の私は賣り子の人形、だが人形にしては汚なすぎるし、腹が減りすぎる。

「あんたのやうに、そう本ばかり讀んでも困る、お客様が見えたら、おあいそ位云つて下さい。」

酢つぱいものを食べた後のやうに齒がぢんと浮いた。

本を讀んでゐるんぢやないんです。こんな婦人雜誌なんか、私の髮の毛でもありはしない、硝子のピカピカ光つてゐる面を一寸覗いて御覧下さい。水色の事務服と浴衣が、バックと役者がピッタリしないやうに、何とまあおどけた厭な姿……。

顔は女給風で、それも海近い田舎から出て來たあぶらのギラギラ浮いた顔、姿が女中風で、それも山國から來たコロコロした姿、そんな野性な一本の木が、胸にレースを波たゝせた水色の事務服を着てゐるのです。

ドミエの漫畫！　何とコッケイな、何とちぐはぐな鷄の姿！

マダム・レースや、ミスター・ワイシヤツや・マドモアゼル・ハンカチの衆愚に、こんな姿をさらすのが厭なのです。

それに、サーヴイスが下手だとおつしやる貴方の目が、いつ私をくびきるかも判らないし、なるべく、私と云ふ賣り子に關心を持た

れないやうに、私は下ばかりむいてゐるのです。
あまりに長いニンタイは、あまりに大きい疲れを植ゑて、私はめだたない人間にめだたない人間に訓練されて來たのです。
あの男は、お前こそめだつ人間になつて闘爭しなくちや嘘だと云ふのです。
あの女は、貴女はいつまでもルンペンでいけないと云ふのです。
そして、勇カンに戰かつてゐるべき、彼も彼女も……。
彼いつこの白き手のインテリゲンチヤ！
彼女いつこのブルジョワ夫人！
仲間同志で嫉妬に燃えてゐます。

彼や彼女達が、プロレタリヤを食ひ物にして、强權者になる日の事を考へると、宇宙はどこが果てなんだらうと考へるし、人生の旅愁を感じる。
歴史は常に新らしく生きる――。そこで磨れば燃えるマッチがうらやましくなつた。

夜―九時。
省線を降りると、道が暗いので、ハモーニカを吹き吹き歸へる。
詩よりも小說よりも、こんな單純な音だけど音樂はいゝナ。

七月×日
靑山の貿易店も高架線のかなた。二週間の勞働賃金拾壹圓也、東京での生活線なんてよく切れたがるものだなア。
隣りのシンガーミシンの生徒？　さんが、歯をきざむやうに、ギイギイ……しつきりなしにミシンのペダルを押してゐる。
毎日の生活斷片をよく寢言にうつたえる秋田の娘さん。
古里から拾五圓づゝ送金してもらつて、あとはミシンでどうやら稼いでゐる、緣遠さうな娘さん、いゝ人だ。
彼に紹介狀もらつて、××女性新聞社に行く。本郷の追分で降りて、ブリキの塀をくねくね曲ると、綠のペンキの脫落た、おそろしく頭でつかちな三階建の下宿屋の軒に、螢程な社名が出てゐた。
まるで心天を流すよりも安々と女記者になりすました私は、汚れた綠のペンキも最早何でもなく思つた。
晝。
下宿の中食をもらつて舌つゞみ打つと、女記者になつて二三時間もたゝない私は、鉛筆と原稿紙をもらつて談話取りだ。
四疊半に厖大な事務机が一ッ、薄色の眼鏡をかけた社長と、××女性新聞發行人の社員が一人、私を入れて三人の××女性新聞。チ

ヤチなものだ。又、生活線が切れるんぢやないかと思つたが、兎に角私は街に出た。

訪問先きは秋田雨雀氏のところ――。

此頃の御感想は……私は此言葉を胸にくりかへしながら、雜司ヶ谷の墓地を拔けて、鬼子母神のそばで番地をさがす。

本郷の混々した所から此邊に來ると、何故か落ちついた氣がする。二三年前の五月頃、漱石の墓にお參りした事もあつたが……。

秋田氏は風邪を引いてゐると云つて鼻をかみかみ出てゐらつしたまるで少年のやうにキラキラした瞳、非常にエキゾチックな感じの人だ。お孃さんは千代子さんとか云つて、初めて行つた私を拾年のお友達かのやうに話して下すつた。

厚いアルバムが出ると、一枚一枚繰つて說明をして下さる。此役者は誰、此女優は誰、その中には別れた男のプロフイルもあつた。

「女優つてどんなのが好きですか、日本では……。」

「私判らないけど、夏川靜江なんか好きだわ。」

私はいまだかつて、私をこんなに優さしく遇してくれた女の人を知らない。

二階の秋田さんの部屋には黑い牛の置物があつた。高村さんの作で、有島さんが持つてゐらつしたとか、部屋は實に雜然と、古本屋の觀があつた。

談話取りが、談話がとれなくて、油汗を流してゐると、秋田さんは二三枚すらすらと手を入れて下すつた。

お壽司を戴く。來客數人あり。

暮れたのでおくつて戴く。

赤い月が墓地に出てゐた。灯の湧いた街ではシュッシュッ氷を削る音がする。

「僕は散歩が好きです。」

秋田氏は樂し氣にコッコッ靴を鳴らしてゐる。

「あそこがすゞらん！」

舞臺の樣なカフエー、變つたマダムだつて誰かに聞いた。

秋田氏は銀座へ。

私は何か書きたい興奮で、沈默つて江戸川の方へ歩いて行つた。

七月×日

階下の旦那さんが二日程國へ行つて來ますと云つて、二階へ後の事を賴みに今朝上つて來たのに、社から歸へつてみると、隣のミシンの娘さんが、帶をときかけてゐる私を襖の裂けめから招いた。

「あのね一寸！」

向ふから底聲なので、私もそつといざりよると、

「隨分ひどいのよ、下の奥さん外の男と酒呑んでるのよ……。」

「いゝぢあないの、お客さんかも知れないぢやないんですか。」

「だつて、十八やそいこらの女が、あんなにデレデレして夫以外の男と酒呑めるか知ら……。」

帶を卷いて、ガーゼの浴衣をたゝんで、下へ顏洗ひに行くと、腰障子の向ふに、十八の花嫁さんは、平和そうに男と手をつなぎあつて轉がつてゐた。

昔の戀人かも知れない。
只うらやましい丈で、ミシンの娘さんのやうな興味はない。

夜。

御飯を焚くのがめんだうだつたので、町の八百屋で一山拾錢のバナヽを買つて來る。

女一人は氣樂だなァー。

糊の拔けた三疊の木綿の蚊張の中に、伸び伸びと手足を投げ出してヤーマを讀む。

したゝか者の淫賣婦が、自分の好きな男の大學生に、非常な淸純な氣持ちを見せる、厖大な本だ、頭がつかれる。

「一寸起きてますか?」

もう拾時頃だらうか、隣のシンガーミシンさんが歸へつて來たらしい。

「えゝまだねむれないでゐます。」

「一寸! 大變よ!」

「どうしたんです。」

「呑氣ねッ、下ぢやあの男と一緒に蚊張の中へはいつて眠つてゝよ。」

シンガーミシン孃は、まるで自分の戀人でも取られたやうに、瞳をギロギロさせて、私の蚊張にはいつて來た。

いつもミシンの唄に明け暮れする彼女が、私の部屋になんか、めつたにはいつて來ない行儀のいゝ彼女が、斷りもしないで私の蚊張へもぐり込むと、大きい息をついて、疊に耳をつけた。

「隨分人をなめてゐるわね、旦那さんかへつて來たら皆云つてやるから、私よか十も下なくせに、ませてゐるわね‥‥。」

ガードを省線が、瀧のやうな音をたてゝ通る。

一度も緣づいた事のない彼女が、嫉妬がましい息づかいで、まるで夢遊病者のやうな狂態を演じやうとしてゐる。

「兄さんかも知れなくつてよ。」

「兄さんだつて、一ッ蚊張には寢ないや。」

何か淋しい血のやうなものが胸に込み上げて來た。

「瞳が痛いから電氣消しますよ。」

彼女はフンゼンとして沈默つて出て行くと、やがて梯子段をトントン降りて行つた。

「私達は貴女を主人にたのまれたのですよ。こんな事知れてゐゝのですか!」

切れ切れに、こんな言葉が耳にはいる。

一度も結婚しないと云ふ事は、あんなにも强く云へるものか‥‥私は蒲團を顏へづり上げて固く瞼をとぢた。

七月×日

――ベウキスグカヘレタノム

母よりの電報。

本當かも知れないが、嘘かも知れない。だが嘘の云へるやうな母ではない、出社前なので、急いで旅仕度をすると、旅費を借りに社へ行く。

社長に電報みせて、五圓の前借りを申し込むと、前借は絶體に駄目だと云ふ。だが私の働いた金は取らうと思へば拾五圓位ある筈だ不安になつて來る。廊下に置いたバスケットが妙に厭になつた、大事な時間を、借りる！　と云ふ事で、それも正當な權利を主張してゐるのに、駄目だと云ふ。

これは、こんなところでみきはめをつけた方がいゝかも知れない

「ぢや借りません！　其代り止めますから今迄の報酬を戴きます。」

「自分で勝手に止されるのですから、社の方では、知りませんよ。滿足に務めて下すつての報酬であつて、まだ十二三日しかならないぢやありませんか！」

黄にやけたバスケットをさげて、私は又、二階裏へかへつた。

ミシン孃は、あれから、下の妻君と氣持が凍つて、引つ越しするつもりでゐたらしかつたが、歸へつて見ると、どこかみつかつたらしく、荷物を運び出してゐた。

彼女の唯一の財産である、ミシンだけが、不格恰な姿で、荷車の上に乘つかつてゐた。

全てはあゝ空しである――。

七月×日

驛には、山や海の旅行者が、白い服裝で、凉し氣だつた。

下の妻君に五圓借りる。

尾道まで七圓くらゐ、やつと財布をはたいて切符を買ふと、座席を取つてまづ指を折つた。

―何度目の歸郷だらうか！

露笛（つゆくさ）の莖
粗壁（かべ）に亂れる
萬里の城

何からうらぶれた感じが深い。昔つくつた自分の詩のアタマを思ひ出した。

何もかも厭になつてしまふが、さりとて、ニヒルの世界は道いまだ遠し。

此生ぐさニヒリストは、腹がなほると、ぢき腹がへるし、いゝ風景を見ると、呆然としてしまふし、良い人間に出くはすと、涙を感じるし――。

バスケットから、新青年の古いのを出して讀む。

面白き笑話ひとつあり――。

―四人曰く「あの壁のはりつけの男は誰ですか？」

―宣敎師答へて「我等の父キリストなり。」

四人が出獄して病院の小使ひにやとはれると、壁に立派な寫眞が

掛けてある。
—囚人、「あれは誰のです？」
—醫師、「イエスの父なり」
囚人、淫賣婦を買つて彼女の部屋に、立派な女の寫眞を見て——
—囚人、「あの女は誰だね。」
—淫賣婦、「あれはマリヤさ、イエスの母さんよ。」
そこで囚人は歎じて曰く、子供は監獄に父親は病院に、お母さんは淫賣宿にあゝ—。
私はクックッ笑ひ出してしまつた。急行でもない閑散な夜汽車に乘つて退屈してゐるとこんなにユカイなコントがめつかつた。
眠る。

七月×日
久し振りで見る旅の古里の家。
暑くなると、妙に氣持ちが焦々して、シュンと氣が小さくなるよどこともなく老いて憔悴してゐる母が、第一番に言つた言葉は、
「待つちよつたけん！　わしも氣がこもうなつて……。」
キラキラ涙ぐんでゐた。

今夜は海の祭、おしようろ流しの夜だ。
夕方東の窓を指さして、母が私を呼ぶ。
「可哀そうだのう、むごかのう……。」
二十號大に區切つた窓の風景の中に、朝鮮牛がキリキリぶらさがつてゐる。鰯雲がむくむくしてゐる波止場の上に、ドカンと突き揚つた黒い起重機！　その頂點には一匹の朝鮮牛が、四足をつゝぱつて、ヴアウ！　ヴアウ唸つてゐた。
「あいば見ると、食べられんのう……。」
雲の上にぶらさがつてあの牛は、二三日の内に屠殺されて、粲の印を押される事を考へてゐるのか知ら……それとも故郷の事を、友達の事を……。
視野を下に降ろすと、古綿のやうな牛の群が、甲板の檻の中で唸つてゐる。
鰯雲が、かたくりのやうに筋を引くと、牛の群も去り起重機も腕を降ろして夕べの月仄かな海の上に、もう二ッ三ッおしようろ船が流れてゐた。
火を燃やしながら、美し紙船が、涯木を離れて沖へ出た。
港には古風な傳馬が密集してゐる火の紙船が、月の様に流れ行く
「牛を食つたり、おしようろを流したり、人間も予盾が多いんですねお母さん。」
「そら人間だもん……。」
古里はいゝナ—。

ゴシップ的レポ

講演會ビラ撒きでは平林英子さんが大働き新宿では繩張りだから林芙美子さんが馬力をかける。編輯定任連はもふすまでもない、ビラは翼が生へたやうに飛ぶ、飛ぶ！　神樂坂の田原やでお腹をこしらへた連中、後から來る小池みどり、熱田優子のためにライスカレーの御飯を二人前づつにしておいてよと賴んだとも知らず、あゝペコペコだと駈込んで來て御飯が――足りないだらうと素川さんニコニコ、クックがクスクス、それよりも大出來なのは川瀨美子が二人の中老人が麥酒をのんでゐる卓の向ふ側に、こつちの連中に背中をむけて一人チョコンとすましこむ。あら！川瀨さんそつちがいいの？　御當人はたちに似合はずムフフフと笑つて、だつてそつちがせまいからさ。でも中老紳士連の方がテレて私共でよろしければ結構で……室内がみんな笑つてしまう。銀座では雨止みにブラジレーロに駈込む綠と黃の色調の快のよさ、白マーブルの卓でコーヒーを呑みながら銀座の舖石道の雨の足を眺める。店はお客さんもお給仕の少女もいはゆるシークだ。雨の中でもみんなが傘を傾むけてビラに手を出す、これから行くのだといふサラリーマンがある、今日ぢやありませんといふとでは眞直に家へ歸りますといふ、幸福なる家庭をもつ人だといふ事がしれる、屹度歸つたら「女人藝術」の宣傳をおくさんにして下さるだらう、讀者からの便

牢屋の原

――日本橋――　16

時雨

金持ちになれる眞理となれない眞理――轉がりこんで來た金玉を、これは正當な所得ではございませんとかへして貧乏する。いまどきそんな事はないかもしれないが、私のうちがそれだつた。

御維新のあとのごたくが納まつても、中々細かしいことは何時までも殘つてゐたのであらう、轉がりこんで來た金玉を押返してしまつた人達が、ある日こんなことをいつてゐた。

「たいした土地になつた。」

「だからとつておおきになればいいのに。」

それは小傳馬町に面した大牢の一角を、無償で父にくれやうといつた當時のことを母が詰つたのだ。

丁度首斬り場のあたりだつたといふところの柳の木が、厠の小窓から見える古帳币屋の

りにも、分らないむづかしいところは良人がよく理解させてくれるといつてよこす方がある。萬歳！　と呼びたいいい御夫婦だ。さういふ旦那さんの益々多くなる事をちよつと祈つておく。

講演會の晩の内部をちよつとお知らせすると——みなさん第一の「女性進出行進曲」で大振袖の方が中央に二人まで並んだので吃驚したでせうが、あれは日蓄合唱團のソプラノの歌手河原喜久代さんと渡邊女史が、日蓄のレコードに吹込んだのでお手傳ひに來てくださつたのです。ほんとはピアノも其他の樂器も入れるつもりだつたが非常にお金がかかるので十字屋樂器店の好意で大きな蓄音器が運びこまれた。作者の松田解子さんは大嶋にゐたので、今度はじめて合唱をきくので、來會者一同にわけた歌詞を印刷した繪ハガキをもつてウロウロニコニコしてゐる。そこで第一の戸川靜子さんの「女人聯盟に對して」がすむと小池みどり登壇「明快なる日日」をハッキリした音聲でやりだすと、いけないいたづらおぢさんが一人ゐて「社會が分るかい」といふと「わからないから勉强してる」とやりかへす「そんな事云ないでお嫁においでなさいよ」グッと癪にさはつて水をのんで一睨みして「そんな男が多いからいやなのだ——」道草はくつたが無事喝采裡にすまして降場、即ち持前の處女にかへつてハンケチを額にあて、一ぱいに椅子にはさまつてサメザメと泣く——クヤシイ！

熱田優子ははじめて「プロレタリア美術觀

友達のうちから歸つて來て、あたしが話したつゞきからだつた。

「西嶋屋のならびをずつとくれるといつたのだが、おら不快だからな。」

「お父さんは慾がないから、斷つてしまつたのだとお言ひなのだよ。今ぢやたいした土地なのにねえ。」

母は、土一升金一升の日本橋のまんなかで、しかもめぬきの土地の角地面の地主さんになれなかつた怨みを時たまこぼす。

「あすこはな、不淨場といつてたが、惡い奴ばかりはゐないのだ。今とちがつてどんなに無實の罪で死んだものがあるかしれやしない。おれは斬罪になる者の號泣を聞いてゐるからいやだ。逃れやう、逃れやうといふ氣が、首を斬られてからも、ヒヨイと前へ出るのだしでえことをしたもんで、後から繩をひつぱつてゐる。前からは、髷をひつぱつて、引つぱる。いやでも首を伸す時にちよいとやるんだ。まあ、あんな場處はほしくねえな。」

父が流行の長い刀をぶつこんでゐた時分、明渡された江戸城の守備にいつてゐた時、兇亂暴者内紅葉山に配置してある鹿の置物を狙ひ擊にしたものもあるとかいふほどだから、亂暴者に違ひなかつたであらうと、その人がさういふのだ。その後打首が廢され、絞首になる時その器具を造るのを調べさせられて用ひた夜、どうしても寢具合がわるく、三晩もうなつたので、役人なんざまつぴらごめんだと、嘲りつきたがるはずの椅子を投りだしてしまつた。そんな折の關係と土地ッ子なので、あの廣大な土地を無償でくれやうといふのだつたらう。無償とはいはないで、長谷川この土地はお前の名にしておけといはれたのだつたさうだ。その當時の政府要路に深い緣のない父でさへさうだつたから、その他の懷がふくれほうだいだつたのは言ふまでもなからう。岩崎は丸の內一帶の大地主だ、丸の內といへば諸大名の官宅のあつた土地だ。

を述べてる、參考に讀んだ多くの書籍は彼女の自信を深めたが聲がひくかつたので、彼女の素張らしい身體美術觀をほしいままにした後の方の聽衆モダン金太郎と叫ぶ。身の廻りをかざらぬ松田解子さん、木綿カーキ色ブルーズを着てきて「何しろ一人半だからね」といふ、よくきいて見ると「妊娠したのだ」といふ。こらねとブルーズの下にグルグルまきの扱帶ばかり、みんなその勇氣に感心する。市電爭議團の一員青山みよ子さんが「市電爭議について」といふ名題で登ると、日比谷署の私服さん注意にこられる。十八名は多すぎるといふ話から、女人は女人のみが知る惱み——負擔があるので、どうしても一二の缺員を見通しておかないと來會者へ噓をいつたやうになるから——營て見れば中島幸子さんは自分ではどうしても來るのだといふし、我社の時雨も、どうか早く生れるやうにと中嶋さんのお腹にむかつておがんだけれどもやつぱりだめだつた——で、呵々。まだまだまだ種んなことがあるけれど——嬉しかつたのは、切符賣場にゐたら、市電の片道切符と六錢で入れてくれといつた男の人××さんが「女人藝術」を立ちよみしてゐるのでお買ひなさいといふと、これをもつていつたら妻君に反逆されるからといつたことなど、等々……

吉凶禍福はあざなへる縄の如しとや、さるにても優子女史、昨は求婚者突然現出今日は青バスに軋かれそくなり。樂しくも危うき時機哉。向暑、ボーッとなるとき、御用心

その時、祖母も言つた。

「濱町の三河様の邸あともくれるといつたのださうだよ。」

その時の斷りかたがまたふるつてゐる。折角ですが老母がいやがりますから——あすこは糞船の一ばい寄るところで——と。三河様の邸跡は大樹が森々として、細川邸とつゞき塀越しに大川の水がすぐ目の前にあつた。大橋と兩國橋の間に中洲が出來た。

懲役人が赤い着物を着て、小船にのつて土運びをしてゐた中洲が、女橋と男橋がかゝつて、土地開きをしたころの夏の人氣は、人形町通りから埋たての中洲へ集つてゐた。ただもうめちやくちやに賑かだつた。おでんやは鍋の廻りに眞黑に人が立ち、氷やは腰をかける席がないほどの繁昌だ。氷やといつても今のやうに小體な店ではない。中々廣い店で、巾の廣い牀几が澤山並んでゐた。涼しげな、大きな瀧を忍ばせる硝子の簾——簾がさがつて、提灯や、花瓦斯の光りが映りゆらめき、いせいのよいビラが張りわたされ、ねぢ鉢巻のあにいが二三人手を揃へてガリガリ氷を掻きとばしてゐた。小女が赤いたすきで忙しさうに客の間を走つてゐた。

いま、デパートの食堂へゆくと、ふと思出すのは、様子はかはつてゐるが、あたしの子供の時分の、ゑびすやとかほていやとかいつた呉服やや、そのわきにあつた、おしるこや萩の餅の店のことで、店さきの高いところから、長い後簾がかけてあつて、紺地に大きく彩色したゑびすだのほていだのがついてゐた。その頃流行たてだつたであらう噴水があつて大きな金魚がゐた。だが、食ものは簡單だ。お餅か、お團子位だ。淺草の金龍山にしてもあんと、きなこと、ごまのついた餅、芝の太々餅もおなじくであり、大橋ぎはのおだんご谷中芋坂のおだんご、そのほか數へたらいくらでもあるが——

中洲は納涼にもつてこいだから、川開きの時分の賑ひは別段だつた。夏祭りと兩國の花

朝の映畫

六時ごろ、どこかで、ホイ、ホイ、ソラホイといふやうな元氣のよい懸聲がきこえる。はあ、あれだなラヂオ體操といふのは――ふと、夏の朝の空に目をやる。入梅がすぎてから、かへつて梅雨らしい紫陽花色の薄曇りだ。低いもやが低迷してゐる。晴れたら暑さうな底照りで眞珠色だ。

箱根の五月雨はよかつたなと思ひだす。溪底にいつまでもあかつきがただよつてゐて、河鹿がすんだ聲をふるはせる。麓からホイホイと山駕籠の登つてくるのがきこえる――

だが、その、ホイ、ホイといふかけ聲が、なんと違つて響くだらう、今朝のラヂオ體操と――だから、やつと徹夜したあとで、折角寢つかうと思つたのにと小煩さく思ひながらなんとなく口唇がほころびてくる。それは、ひとつには、面白い聯想がうかびはするのだが――といふのは、「日本橋」で讀者にもおなじみになつてゐる老母のおたきさんが、ラヂオ體操をやる光景を、未だ見はしないが、話にきいて思ひうかべたからで、あの勇敢なる女性は、箱根に在住したころも、駕籠やさんの息杖が登つてくるころ、ポックリと寢床から跳起きると、浴衣がけの頭にはホッカブリで湯穴のケンサに潜りこんで吃驚させた。湯穴といへば、或は高々半間か一間位の堀つた穴だと思はれるかもしれないが、家の向ふ山の横を堀つた穴からはひつて、湯道につきあ

火は夏の年中行事と市民にはなつてゐたのだらう、あんぽんたんも寢床からむりに覺されて、行水の盥の中へ入れられ、お船へのせて花火を見せるからと、だまし〱いやがるのに着物をきせられた。

あたしの家で船を仕立るのか――たぶん、前出の金兵衛おぢさんの船が來てゐたのだつたらうと思ふ。まだ日の高いうちから、金兵衛さんが紺の透通つた着物を着て、白扇であふいで風通しのいい座敷に座つてゐると、顔見知りの老船頭だの、大工の棟梁のところの伊三といふ甥だのが、かはる〲に一升樽だのその他のものを運んだ。ものわかりのいいその人達が、庭の、踏石のとこに立つて、座敷の人と應對してゐたのが、ばかにクッキリと今の私の目にも浮かぶ。

船のつけてあるところは、三河様よりこつちよりの細川邸の淸正公社のそとのところだつた。夕潮が猪牙船の横つぱらをザブンザブンとゆすつてゐた。

「まづ一杯!」

おとな達はおいしさうにお猪口を口にもつていつた。と、河の中の交際がはじまる。

「いよ――」

遠くの方から挨拶をしあふと、兩方の船頭が腕に力をギイッと入れる。

「あれは材木町の船だ。」

竹河岸の材木やは、家内中で派手な船遊山をやつてゐる。宵の花火は、この船遊山の役物なのである。人々は水をたのしみ、空を仰ぎ、せまい家内や、近所の目から開放された氣保養を、涼風と共に滿々とうけ入れ、ゆる〱と樂しむのだつた。

河上の方から出てきた船は、下流の佃の方まで流してゆく。下流の方から出てきた船は竹屋を越えて綾瀨の方まで涼風におしおくられてゆく。そして夕暗といつしよに兩方がま

たるまでの坑道なのである。古い湯の口はだんだん細くなるので、奥へ〳〵と堀つてゆくのである。請負人まかせではいくらでもふんだくられた上、その上まだ出ない、もう幾間横を堀つて見なければ、見す〳〵出る溫泉も、おちよくがすけなければなんといふ、堀らない、なにしろ人の目のない山の地下だから、地圖の上でどこどこまで權利があるといつたとてそれこそ水かけ論だ。といふので勇敢女史四ツン這ひで男達と共に朝涼を利用して這入るのだが、モッとして、ムラムラとして、潜り出てくると昏迷してしまうといふ。何も夏にしないでもよささうなものだが、寒い時分だと、大きらひな蛇が、地熱をしたつて這つてゆく道に長くなつてゐるからいけないので、夏だと、さぞ澤山ゐさうなものだが、食物のある、草の涼しい外へ移動してしまつてゐるから心配ないのださうだ。その人が、當年七十幾歲にかなつて、昨年ラヂオ體操はじまつて以來、一日もかかさずにソラ！一、二の三とやつてゐるのだから――その姿たるや、やはり湯穴にはひつた時と似たりや似たりで、おゆかたで、ホッカブリはしないが、そのかはりに尻つぱしよりなのである。先日來訪自分でいふのに このごろではね、崖下のお宅の子供衆が、朝、泣かなくなつたよ。あたしがラヂオ體操をはじめると、坊ちやんがすぐ緣側へ出てきてこうやつて覗いてね〳〵ちいちやな妹を早くおいで〳〵と呼んでゐる。さやうさ五ツ位にもなる坊ちやんがね。」「一體、あなたはどこでおやりになるのです。」

た漕ぎよせてくる。兩國橋の上下に――

そのころ、五六歲のアンポンタンの感想は――といふとむづかしいが、おしつこのことだつた。小船にはさういふ設備がない、男の人は簡單にすませるが、といつても、まだ暮れきらない大河に、一ぱい船があつてはさう勇敢な人ばかりはない。まして謳ましいその時代の女達の困りやうは察しられる。岸近い船はわたりをかけて、尾上河岸あたりのいき



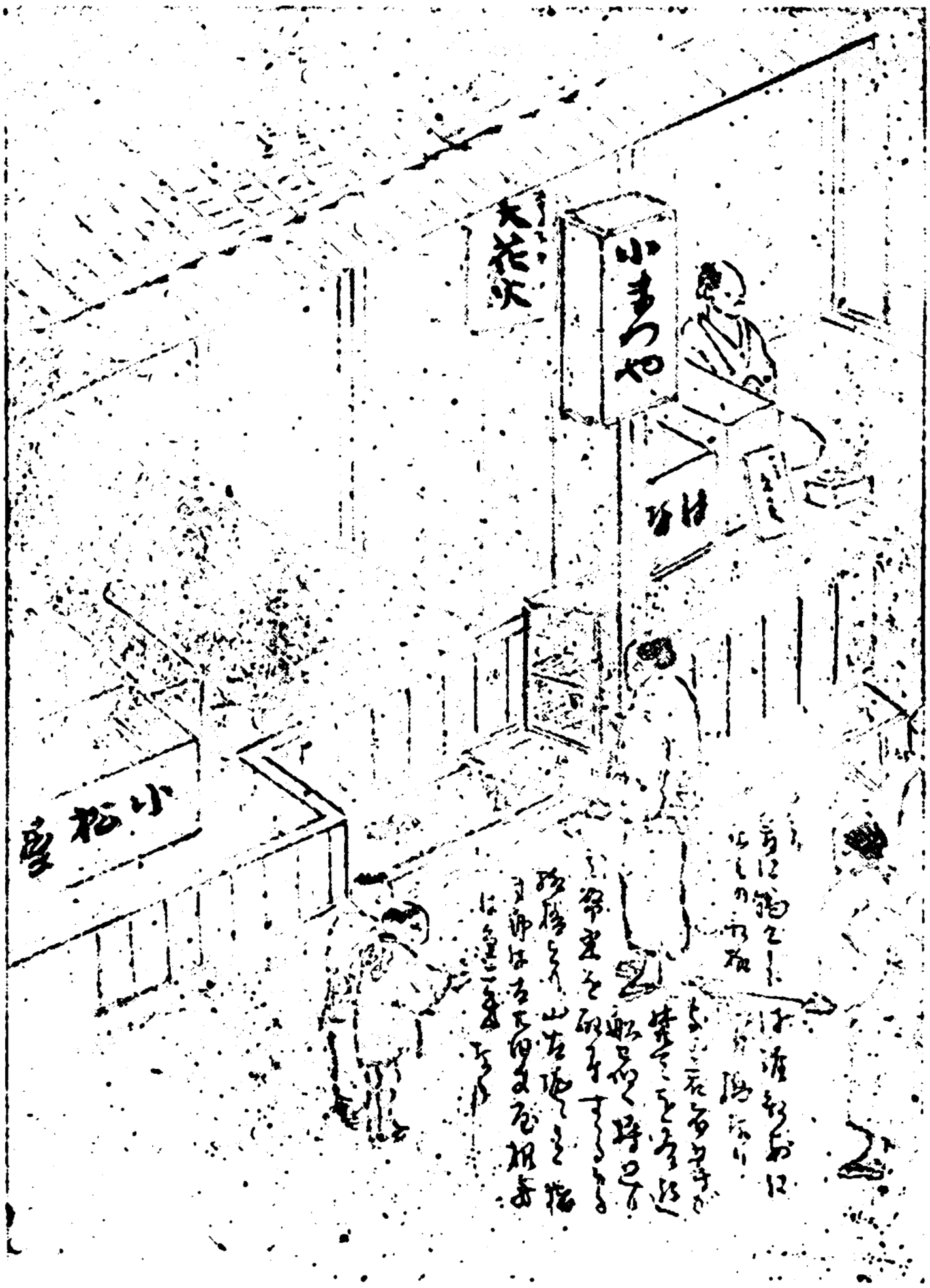
「エランダといひますかね、あの硝子戸のはまつてるところ」きくものゲエ！となる。どこからも見える崖の角の家で、その一番はなつさに突出たエランダなのである。あゝ勇敢なるかなと思はず溜息が出たら、おばあさんまた曰く「このごろは實に巧くなつて、もしラヂオが見えるものなら、先生もさぞ御滿足だらうと思ふ。」この時、さしも勇敢なる編輯の若いものウワーッと喚聲をあげたのだ。

――そこで、私がおもはず笑ひ出したのは非常な妙案が浮びあがつたからだ。

ニヨキノプロダクション考案珍映畫！

全國ラヂオ體操フアンの中の珍なのばかりを集めること。これは蛇度、髭のはえた人や、しかつめらしい人が必らず多いこと受合である。子供ゞそんなことをやらないでももつと運動するよい方法をしつてゐる。若人は、もつたいないほど勞働しすぎてゐる階級のほかは、夜のダンスを樂しむ少數があつて、ラヂオ體操なんぞやりはしない。だから、これは――或は濱口さんがやつてやしないかしらん。或は某樞密院さんがやつてやしないかしらん。あの人この人、誰さん彼さん――それを實寫にする。なんとこんなうまい案を思ひついた映畫會社があるか――。さうだ。諸方からこのスタジオへ集めやう。みなさんの周圍から面白いのを報告して下さい。來月の此欄をそれで埋めます。

ある近縣にはお役所へ出るお父さんから子供が三ツになるのまで十人揃つてやる、その間にお母さんがお臺所これも事實です。



な家にたのむが、河心のはさうはいかない。氣のきいた船頭が、幕や苫で圍ひをして用をたさせると、まるで、源平兩陣から、那須與一の扇の的でも見るやうに、は入る人が代るたびごとにヤア／＼と囃す。人間て、なんて猥なものだと、いつて見ればそんな風にアンポンタンは片腹痛かつた。

「おや？ この子は笑つたよ、何がをかしかつたのだ。」

人魚の水浴

ソヴキノ映畫「全線」の中に、豚が河の水につかつてゐるところがある。豚の水浴なんてめつたに見られない圖だ。支那へいつて、豚の子が仔犬のやうに飛廻つてゐる愉快な景色を見てきてからすつかり豚ずきになつた社長さんがあの映畫説明で悦んでしまつて、みんなにみせびらかしては豚だつてキレイずきなんですとさ、日清戰爭時分に、支那をわるくいふのに豚にまでコヂツケて、さも不潔なやうに言觸してしまつたのですね、氣の毒な——いつたいこの　長さん、動物が水にはいるのがすきで動物園の河馬がせまつこい水にもぐると、實におとなしく見物してゐる。だから白熊が水に飛込んだりしたら非常なよろこびやうだ。それがまた今はじまつた趣味ではないと見えて、中學四年の仁さんが五ツ六ツの時分淺草の花屋敷へいつた時、かはうそが水から這ひあがつたらとてもおばさんを悦ばせるにたると大發見したやうに「早く／＼おばさん、ニヤアニヤがおぶうにはひつてゐます」と呼んださうだ。察しるところキレイ好きなおばさんにお風呂に入れられつけてゐたので、ニヤアニヤ（獺を猫とまちがへたのだ）のお湯好きを報告におよんだわけだ。それほど動物の水浴を樂しくながめる人だから、豚ちやんの汚名のために萬歳をよんだのも無理はない。　豚子）

ちよつともふします、唯でも氣もちのいいものはいいのです。それは、人魚のみづあみ

おぢさん達にはわからない。ちいさな、てんしんらんまんたる幼子だからこそ、赤ン坊でいへば虫が笑はせるといつた笑ひ——この場合では嘲笑を禁じ得なかつたのだ。

「ヤア爺さん！」

とかなんとか、笑はれた男が笑はれて幕の圍ひにはひり、笑はれてテレくささうに出てくるのだ。ばかな奴等！　その水で盃をそそぎ、その流れで手拭をしぼつて頭や胸を拭く三尺へだたれば淸しなんて、いい氣なものだ。

「玉や——」

みんなが口をあいて空を仰ぎ見る。だがなんと、暗い河の水の油のやうに重くぎらぎらすることぞ！　水面を見ると怖い。

アンポンタンは父親の膝を枕にしてボンヤリしてゐた。もう、そろ／＼船が動きだしたあたしは大きくなつてからもさうだが、賑やかなあとのさびしさがたまらなくきらひだつた。ことに川開きは、空の火も家々の燈も、船の灯も、バタバタと消えて、即ちにして如暗夜　沈默がくるからたまらなく嫌だ。遠くの方へ流れてゆく小さなさびしい火影と三味線の音——小さい者は泣くにもなけない不思議なわびしさに閉ぢこめられてしまう。

そのまだ、それほど船がバラバラにならない前、すつと摺れちがつた屋根船から、

「あら——さんだ！」

といふと、これをお着せなさい。川風はさむいわとでもいつたのであらう、艶な聲がして、フワリと私の上に投りこまれたものは、輕いフハ／＼した瀬絹のねんねこだつた。多分踊りの夜風を用心して入れてきたものだらう。私はピヨコンと父の膝から頭をあげた。先方は提燈が澤山ぶらさがつてゐるので船の中はあかるい。私たちよりずつと高いところにゐるやうに、膝の方まで見えた。意氣な年増といふのだらう、女ばかりがゐた。みんな

のやうな、美しき群はいふまでもなく生きた繪ですが、豚だからつてあの通りいい繪ぢやありませんか、以前私の飼つてゐた犬が二匹毎朝兩國橋の下流を渡りきるのです。ごく小さい、尻つぽのみぢかいメリは小さい鈴をコロ〳〵鳴らして橋の上をかけるのです。はじめは大川を突つきる仲間を心配さうにしましたが、向河岸へさき廻りして待つてゐて。三匹揃ふと仲よくこんどは揃つて橋を渡つて駈てかへつてくるのです。可愛ゆうござんしたよ。それから房洲の鴨河で見たのですが、大もな波を泳ぐ犬きありますね。ずつと前、陸中の山間で見たのは、夕方馬が澤山河の中であらつてもらつて好い機嫌なのです。裸の男が、ザツ〳〵と河の水をかけてやると瀧のやうに白く河の中へ流れおちる——それらの馬が水を蹴つて草の堤駈け上つてゆく時は颯爽としてゐます、牛だつてそれを見ると水にはひるのです。苅草を積んで來た牛が河原におりてゆくのを牛方は薄くらやみの中で赤い煙草の火を掌でコロガシながら　細い橋を渡つてゐるのです。牛はゆう〳〵と淺瀨を知つてゐて水にはひります。積んだ草が濡れて河の瀨に波紋がゑがかれる。やがて牛の足音は野路のあなたにポカポカと消てゆく。とても詩的でせう。（洗子）

問、女人藝術社の大家さん三上氏が、犬を洗濯しすぎて病氣させちやつたつて本當ですか？

答、一日に二度ぐらゐは洗つたでせう。

問、一日に二度？　ヒヤアだ。私は風呂ぎら

はでな聲を出した。

あたしは終りの花火なんか、あとがさびしいから見ないで、そのねんねこにふつさりと包まれて父の膝に狸寢をしてゐた。子供といふもの案外ばかにならないと思ふのは、今の自分よりよつぽど不正直で要領を得てゐる。そして元柳ばしぎはに船をつけてもらうと、抱つこしたまま、いゝ匂ひのものにくるまれて、藥研堀の囲ひものの家へ投りこまれた。

話はそれたが、三河樣といふのは、

風ふくなナア吹くな、
三河樣の屋根で、
銀羽根ひろつて……

と羽根つきながら風が出てくると呪ひに唄ふ大川端の下邸である。向岸には大橋の火の見櫓があつて、江戸風景にはなじみ深い景色である。細川下邸の淸正公門前の大きな椎の木の並んだ下には、の少壯時代の前かけがけ姿の淸方さんが長く住はまれて、門柱に「かぶらき」と書いた假名文字の表札がかけてあつた。それより前のことだが、淸正公樣の傍に歯をいたくなく拔いてくれる家があるといふのでいつたら、小さな家で、古い障子を二枚たてて、歯みがきを賣つてゐる汚いおぢいさんが拔いてくれた。大きな樹のうれに、小さい蚊虫がフヨフヨと飛んでゐる夕暮れで、うす暗い障子のかげで、はげた黒ぬりの耳輿を片手にもたされて、上をむきなさいといはれた。おぢいさんの膝頭に頭のうしろをもたせかけ、仰向けにさせられると、その腐つたやうな顔とむきあつた。おぢいさんはやつとこみたいなものをもつてゐる。怖いから眼をつぶつたら、ガクリと音がして掎いてゐた歯がぬけた。ポコンと穴があいて、血がいくらでも出る。口もゆすがせないで、きたない手で

ゐだから一度だつてやだ。私の知つてるおぢいさん一年位はひらない人ありますよ。
答、そりや犬だつていやでせう、だけど、可愛がつてしてくれるのだから。
問、たまんない！　（悲鳴）憎がられた方がいいな。
答、そりやさうよ、なにしろ思ひたつと夕方つからでも、小雨が降つてても、ウン？　キレイにしてやらうかつていいだしたら大變、可哀さうだからなんていはうものなら、ヘン君に犬の心がわかるかいつていふんで、それも、自分がぬるずきだから水のやうなお湯に入れるの。晝間日のあたつてるうちにしてやればいいのに、自分の起るのがおそいから、犬の行水はたいがい夕方。小いさな犬が大きなバケツの緣につかまつて、悲しさうにこつちを見てゐると哀れでねえ。徹底的によくあらふので、犬の顔が濡れてコンなに細くなつて悲しい風景だつたらないの。
問、それでなつきますか。
答、おれの言ふ事はこんなによくきくといふんですが、ちよいと首を振つても、コラッ！——コツンと愛撫するから犬はショゲちやう。すくむのとおとなしくよくいふ事をきくのと間違へてるのよ、妙よ。
問、（獨語）可愛がられるのもそれぢや考へものだ——
答、犬に口があればたしかにさういつたでせうよ。なにしろみんな病氣になるの、風邪をひいてね。
問、好きだつたのですか？

おぢいさんは白い粉の藥りをつけてくれた。殘りを小袋に入れて渡して、血がとまらなかつたらつけろといつた。お代が貳錢だといふので、なんぼなんでも安くつてびつくりした。藏前の長井兵助は五錢の時と十錢の時があつた。大概長井兵助へゆくのだが、お友達におしへられてこの汚いおぢいさんの家へいつてしまつたのだつた。

花火の晩といへば、ある年、丁度花火の盛りな時刻に光りものが通つた。二升もはひる大藥罐ほどの、鈍く光つたものが、地の上二三尺の高さで、プカリ／＼と流れていつた。アンポンタンの家の小さい女中は裏の方にある厠から出たとき、すぐそばをスーッと流れていつたのでキャッと聲をたてた。祖母は金玉だといつた。金盥か鍋でふせなければだめなのだといつた。都會の夏の夜でさへ無氣味なものが、人里はなれた原つぱなんぞでぶつかつたらどんなだらう。

花火の風船のやうに飛んでしまつたはじめの牢屋の原へ歸らう。中洲に賑ひをとられない前は、牢屋の原が小屋がけ見世もの場でさかつてゐた。つとめて土地の不淨を拂はうとしたのであらう。表通りの鐵道馬車路を商家にし、不淨門（死體をかつぎ出した門）のあつた通りと大牢のあつた方の溝を埋めて、その側の表に面した方へ、高野山大安樂寺と、身延山××寺と、日蓮宗村雲別院と、園光大師寺の四ツの寺院を建立し、以前の表門の口が憲兵屯所で、ぐるりをとりまいたが、寺院がさう立揃はないうちは、眞中の空地と共に晝間から綱わたりや野天の輕業がかゝつてゐた。

その中でも、蠟燭屋一蝶といふ仕掛け怪談話が非常にうけた。そまつなつくりではあつたが、寄在席よりも廣いくらゐな地どりで、だん／＼半永久に造り直していつて、すつかり座れるやうになつてゐた。寄席と違ふのは、客席の前の方——入口近くでも曲藝をやり高座でもやるのだ。籠抜け——或は白刃を縦横に突通し、ある時は蠟燭の灯を透間なく、

答、そんなに好きではなかつたのでしよ。戸山が原で野良犬にとりまかれてから犬は大きらひになつてゐたのです。外をあるいても、あすこに犬がゐるから通るのは嫌だなんていつた事もあつたから。をかしいのは、他へいつてゐて歸つてくると犬がしつぽをたれて耳をふせて、しほ〳〵とおとなしくするの、またおせんたくぢやあいかと思ふのでしようね

問、夏むきは水のはなしいいわもつとある？

答、（突然）三上氏はトックリよ。

問、トックリツて――ブクブクのこと？ およげないの。

答、少年の時、川で遊んでて飛込んでもぐつたとたんに、蛇に足ッ首をクルクルと捲かれたので――

問、眼を廻したんですか？ いつたつていいぢやありませんか。

答、とにかく水にはひること大きらひ。

問、たとへば、ニンフの群の中へでも？

答、さあね、その群の肩車にでも乘つたら別だらうけど――

問、ラ、ラだ！ 乙姫さんは龍宮城へ行かなければ得られないわ。先生弱虫だなア、冒險心がなさすぎる。

答、人魚の洗たく〳〵やなら志願者がウジヤとあるでしよう。トックリさんでなくたつて―

全國の同志諸姉

階級鬪爭的な寫眞、及各工場職場の寫眞を送つて下さい。掲載分薄謝呈します。

横筒の蛇籠のやうに長い籠にならべて、その中を桃色の鉢巻きをした子供が、繻子の着物に襟をつけて、掛聲もろとも難なく飛拔ける。その鮮かな曲藝と、曲藝師の身なりが漸くボッポッ拾ひよみする曲亭馬琴の「八犬傳」のなかの犬阪毛野を思はせて、アンポンタンの空想ずきを非常に樂しませてくれた。もとより寄席ではない見世ものだから、その曲藝は客を誘ふために、あるていどまで、外に立見する客へも見せるから、人氣はすばらしかつた。怪談の前になると、立つてゐるものも續々はひつてきた。

高座の仕掛けは、その頃はやつた何段返しとかいふので、後景が幾段にも變るのだつた。場内が暗くなると行燈のそばに幽靈が立つてゐる。靑テルの人魂が燃えゆれる――

「かあいやそなたは迷ふたナア」

と眞打ちの一蝶親方が舞臺がかりでいふと、

「うらしめしや………」

なんとかと幽靈がいふていどだ。だが、あたしはぞくぞく怖がつた。いま考へると、中々策師だつたといへる。江戸人の――いえ、當時の日本人の誰にも感じられる、いやな連想をもつた場處がらである。江戸三百年、どんなに無辜の民が泣いたか知れない、脅やかされた牢屋のあとだ。ことに、世の中が變動する前には、安政の大疑獄以來、幾多有爲の士を、再び天日の下にかへさず呑んでしまつた牢屋の所在地だ。鬼哭啾々、人の心はそこの土を踏むだけですでに傷みに顫へてゐる。その心理を利用したのだ。たねはどんなチャチなものでもかまはない。掴んだものが生きてゐる。見る方、聽く方の、お客の方から働らきかけてくる神經の戰きがある――そして、下座にはおあつらへむきの禪のつとめ（鳴ものの名稱）和讃やらお題目やら、お線香の匂ひはひとりでに流れてくる。

人情の弱點の怖いもの見たさ、客は晝も夜も滿員――夜は通りの四つ角の夜店と、陽氣な櫻湯の緣臺が、若衆たちのちゞまつた肝つたまをホッと救ふ――



街を蹴る

横堀恒子

今日も
食へない人達が居よう
わたしが
このままの着古した袷で
六月の街を歩いたとて
それは恥づべき事でない
ああ！
自ら（みづか）のながい生涯のうちに
いささかも不正を交へず
貧しさに
強く生くるためには

お嬢さんは天才だ

武内利榮子

「あんたんちは貧乏よ」
お嬢さんはいと朗らかに
幼い私の娘をへいげいする。
「貧乏て、なあに」
幼い娘はおど／＼とたずねてゐる。
「貧乏て、なんにもない事よ」
パチ／＼と瞳をしばたたく
貧しい娘よ
何の遠慮がいらう。



背をゆする嘲罵の聲も
胸をうつ蔑視の瞳も
わたしは
冷然とたたきかへしてやる
努めても努めても
のがれきれない貧しさで
明るい街を蹴つてやる

杉

畑に
小さい杉が生へた

この杉が大きくなる
大きな杉の木になる

豌豆と茄子の畑で
この杉は杉の木の意志をついで成長する

ぐん／＼とのびあがる
麥の芽の如く
お前はお前の世界に
强く／＼伸びあがるのだ。
おゝそれにしてもお孃さん
あなたは七ツだ
狹い親の世界にくるまりながら
何と素晴らしい
ニヒリストなんです。
「貧乏てなんにもない事よ」
やなぎはみどり
はなはくれない
いつも變らぬ
うららかなひよりぢやありませんか。

實話三篇

壞れない三角

森川みつる

一

生活戰線へのトップを切つた房江に、何より、當惑を與へたのは足が棒の樣に疲れるのと、小使が次第に消費される外には、何の收獲もない事だつた。

實に就職難だ。

インテリゲンチヤは殊にひどいのだ。

毎日の新聞は日毎に不景氣を書きたてた。

下宿屋の小母さんは、口ぐせの樣に、不景氣を罵つた、房江は心臓をえぐられる樣だつた、房江はまだ部屋代が拂つてないからだ。

生活戰線への努力はもつれた糸を解くよりも困難だつた。

房江の父は總選擧に公民黨から立候補した我が黨内閣で當選は確實だと高を括つてゐたのが、次點で落選した、と同時に黨から除名されてゐた、結果は房江の家出と成つてゐた。

房江はふと或る劇場で知り合ひになつた、K大學の生徒の、大平誠の落窪んだ目の中から教へられた事を忘れなかつた。

（小ブルなんかは今に沒落だよ、インテリゲンチヤもさ）

そして皮肉にも錦紗の袖を大事に抱えてゐる房江の横顔を見て笑つてゐた。房江は何となくこの青年の偉大な魅力に引付けられて行つた。

讀者通信

東京　田崎　直子

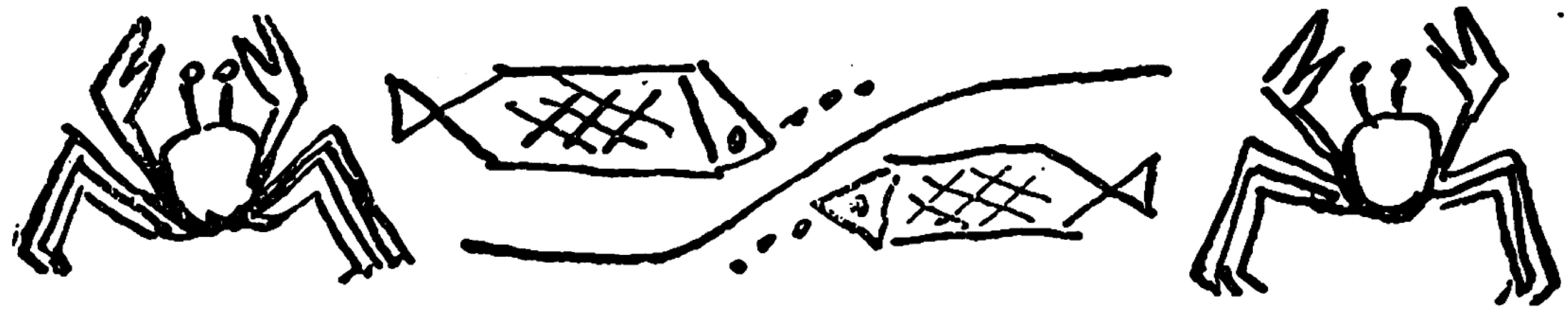
もうきつと來てゐるんだがなあ、といらいらし乍らお金のないのをなげいて居たが、昨日ふいに、三十五錢の金が手にはいつた、一枚の浴衣をぬひあげたおれいだといふ、ありがたいと思つて、づうづうしくその金を受とつて本屋へはしる。

七錢のこつてゐたのを足して、記念號だから、もしかしたら五十錢ぢやあるまいかと、ビク／＼し乍ら――。

でもよかつた。四十錢だ、みち／＼開いてかへるとトラックに泥をはねとばされていつちようらがはねだらけプログラムに講演大會豫告、よく見ると私のすきな林ふみ子氏平林たい子氏、素敵だ何とかして行きたいと思つたが丸之内朝日講堂とか。

さぞ物わかり顏のおぢようさんやおくさまが着かざつておいでになるだらうにと思ふと、三十錢の會費はともかくとして、うんざりする。

なぜもすこしどうかしたとこでやつてくんないかしらんきゝたい



落窪んだ目に魅力があつたのか、それともさつきの一言に魅力があつたのか、その夜房江は幕が下りて歸路につく時、この青年に思はず丁寧な別れの言葉を言はなければすまない様な氣さへしてゐた。

自動車の中でも、絶えずその大平の言葉を思ひ返して見た、なぜ小ブルやインテリゲンチヤの没落をあんなに明瞭にあの青年は、自分の耳にさゝやいたのか――それを思ふと、錦紗の着物が唯何となく恥しかつた。

それが端なくも、後になつて、左翼の一闘士である事が知れた。

其の後房江は大平から數册の書物を借りたそれ以來、房江に取つては一つの最大矛盾が生れた。

地主を父に持つた房江は、父の選擧失敗を口實にして、益々闘士的な自分を誇張させて行く爲めに、斷然家を離れた、文化村の入口の二階を借りての不規則な生活がはじまつた。

間もなく、房江の隣の部屋へKY電氣會社の事務員をしてゐる阿部保雄が住み込んだ。

夕方、境の襖がサツト閉いて、阿部が突立つてゐた。

「僕、阿部ッて言ふんです、お隣りへ置いて頂きますから、どうぞよろしく」

ピシリと戸は閉つた。

房江は襖の閉つた所を見て、唯、茫然としてゐた、阿部はそれ以後會社から歸ると

「唯今、お家ですか」

「ハイお歸り」

襖越しにこれだけの外、二人は何も話した事がなかつた、自然房江には阿部の顔さへはつきり覺えてはゐなかつた。

何時迄たつてもやはり就職口は見付からなかつた、今日も又、晝頃から新聞の三行廣告を見て、出掛けて行つたが一向にそれらしいものはなかつた、

接客掛り給八十圓

今の房江は一も二もなく出掛けただがもうその時には二十人近い人々が押寄せてゐた。

二時間程過ぎてから、先着順に口答試問があつた、その結果は結局美人で、一見上品な人が一人採用された。今迄の房江であつたら、一も二もなく雇はれたかも知れないが、今の房江は、唯、セルの着物一枚にメリンスの帶をしめた、さつぱりはしてゐるもの丶、錦紗

話ばつかりあるのに、乞食見た様なかつこうでもゆけまいに、とつおいつ、一思案だが私はみなりを恥ぢる心と話をきゝたい心とくらべて見た、一體どつちが强い存在であらうと？ よしゆかう、誰かに頼んで月末の勘定日まで三十錢かしてもらはう、話しがきゝたいんだ、笑つたつてかまふことはないと決心した　心が落付いた。

きつとこんな氣持で出かける人は少くあるまいと思ふ、ニュース送つて來ませんよ、まだ。

小倉市　福田美智

私が大阪にゐた時讀みたくても買へない事を友達に話した時七人の同志の讀みかすだと言つて批評をつけたのを下げてくれたのが女人藝術でした。それ以來、燃え續ける太陽の様な熱烈さを持つた愛讀者です。

恥しい事にはそれ迄、私は女人藝術のあるを知りませんでした、農村の貧兒から製絲工女へ女中へと轉々して自ら「ニヒリスト」と信じてゐる私には、闘爭心はあつても、そうした多くの見解を持たなかつたからです。併し四月五月六月とそうして又二三日前七月號が買へました、たとへ四十錢でも、義姉のゐない時、惡いと解つてゐ



の着物と厚化粧の彼の女等から見れば、どうしたつて、プロレタリアだ。

――君なんか、柄ぢやあないんだ――

一言にして飛ばされそうな今の房江であつた、これが現在の社會なのだから仕方がない、大平の言葉ぢやないけど、今にくたばれ、全くそんな氣持で二階に飛上つた。

今迄に聞いた事のない阿部の部屋から思ひがけなくも口笛が聞えた。

「たゞいま」

房江の方からやつぱり襖越しに言つた。

「お歸り、何處かへ出かけたんですか」

「えゝ」

それつきり二人の會話は止まつた。

口笛はしばらく續いた。

口笛ではあるが、確かに大平から教へられたあの節によく似てゐた。房江は夢かとばかり驚いてゐた、思はず口笛に引付けられた。

それが何時の間にか房江の口から明らかに唄ひ出された、

朝燒の空あをげ、勝利近づけり、

口笛はハタと止んだ。

房江は唄ひ止まなかつた、あんまりに惜しい氣がした。

我等は若き兵士

××××××の

隣の阿部は突然襖をカラッと開けた。

「あなたは――あの歌を知つてゐるんですか

「私ね、まだ無茶苦茶なんです」

「今日はすつかり、愉快になつてしまつた、一體何からこんなに愉快になつたのか知ら」

「口笛から？」

保雄は又、自分の部屋に飛入んでしまつた

房江は今、此處に第二の大平を見出した樣な氣がした。

以前に増して房江は机に噛りついてゐた。

「唯今」

「お歸り」

「今日はどれだけやりました」

「ちつとばかし」

これだけ襖越しに語つてから、少し時間を置いて、阿部は房江の部屋に這入つて來た。

「御飯は」

「まだです」

「ぢやあ、もう少し後に一緒に行きませう」

「えゝ、でも近所の手前いけないわ」

「構ふもんか、小ブル根性がまだ拔けない」

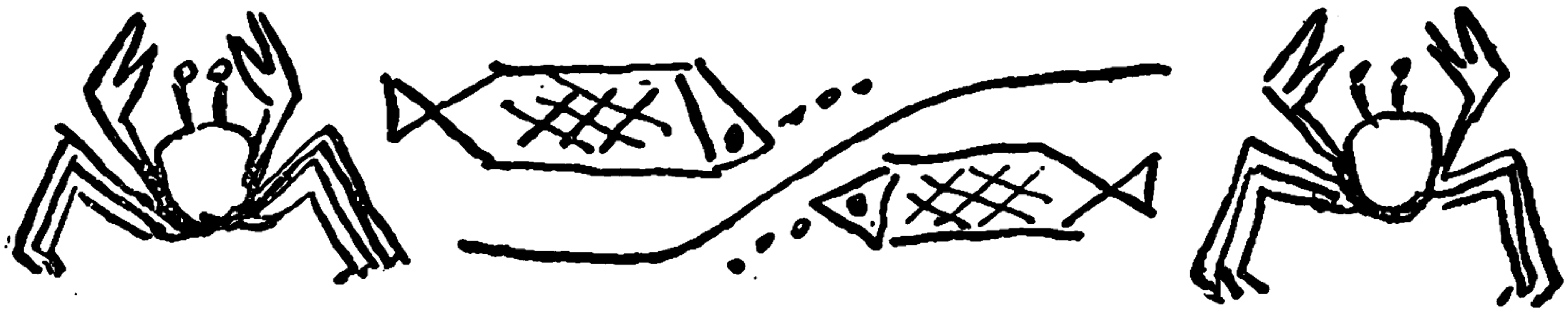
「それに下の小母さんが」

「ハッハッハッ、勿論だね、あの小母さんは僕が這入る時、女ですけれど、あんたでした

ても、夕方の買出しから、ピンをはねたり、活動に行く時、自分一人行かないで、雜誌の代金に廻わしてもらつたりしなければ地を掘つても、出ない今の私の境遇です貧しい者が苦策を盡して購ふ雜誌です。如何に私達に強い感銘を與へるか…表現出來ません。

資本主義社會とあくまで戰つて私達の社會を完全に把握するために血を吐いても…ちかひ合つた私達の唯一つの味方です。私に聰明な認識と深い見解を與へてくれるものは女人藝術より外に何もないのです。無教育と貧乏の兩方を兼ねた私にいばらを押し分けて行手を示してくれるものは女人藝術です。北九州の一隅から石炭ガラの埃りにまみれて喘ぐ貧しい私を何卒お導き下さい。

次に聯盟員申込の事に付いて……先六月號の申込欄を見ました私は早速加入さして戴くつもりで切り離してありましたら義姉が知らずに捨てたのかどうしても見つからないのです、從いて行く樣に惜しくて殘念で仕方がありません、先月直ちに加入しようと思ひましたが、申込欄がないため七月號に又出てゐるかもしれない等、ズルイ事を考へてをりましたがそうは



らまさか、間違ひはないと思ひますからなんて先に網を張つてゐたからね」

「御挨拶でせう――でも私にも、あなたがいらつしやる前に、男の方がいらしても構ひませんが、何時かも男の人と女の人に貸して置いたら二ヶ月程して一處に成つて引越しなさつた、現代式ですなあと言つてましたのよ」

「いや、僕はそつと、知らない顔で、十分程先に出ますから」

阿部は大股に玄關を引開けて表に出た。

二

カフエー、アカツキの二階では、今、彼等若いコムミユニスト達の論爭が火花を散らしてゐた。

大田進はこの中でも熱血兒だつた、

「先づ、客觀的狀勢と言ふものから考へて見よ、俺達の立場ばかりでなく、……さうすれば、今言つた樣に、大衆的ストライキを引起して、それを先づ政治的ストライキとなし、次いで××的ストライキと言ふ樣に行かなくては、とても駄目だよ、もし、最後のこの××的ストライキが起つた時に、最初に起した大衆的ストライキが急激な變化に向つて、はじめて、客觀的狀勢が正當に評價される時なのだ」

大田は右手を固く握つて卓子を叩いて叫んだ

「皆、もつと、組織的にやれよ、日和見主義や、社會民主主義が我々に取つて、一番強敵である事を知りながら、口ではそれ等を非難しながら、お前達の大多數は、これぢやないか、この中に幾人この論爭を否定し得る者があるか、お前達は日増に奴隷の層の中に落されて行く我々の同志を見よ、それを考へた時には、俺達の仕事が、一日たりとも安閑としてゐられない事を知るだらう、客觀的狀勢を完全にプロレタリアのものだと認識さす迄の努力を一日たりとも怠つてはならないのだ」

大田は鐵の樣な固拳と、尖り切つた針の樣な鋭い口調を持つてゐた。

同席の者は一人としてこの空氣を亂すまいと緊張した、時々さへ切つた熱のある拍手が起つた、部屋の中は増々沈默が重なり、大田の熱は膨張して行くのであつた。

この時大田の右隣りにゐた進行掛りの原田は卓上のベルを打つた。

時間が來たのだつた。大田の熱狂的な影響を受けた一同は思はず我に返つた

續いて清原孝順がこれも大田に負けぬ氣を

問屋が卸しません申込票がなければ加入出來ませんか。差しつかへなくば聯盟員の一員にお加へ下さい。

秋田　高橋　葉子

六月號から聯盟加入申込票を切りぬいたまゝにしてゐる中に、もう七月號を見るに至つて了ひました。

女教員生活の怯懦性が、ともすると日々の生活に影の樣に　今尙つきまとふ私です。

でも聯盟の皆樣の御指導によつて、今後の生活を强いものにして行きたいと思ひます。

女人藝術三週年の文字がこれ迄單なる一讀者にすぎなかつた私でさへもがその鬪爭の跡を顧みて深い感激と決意とが感ぜられます。

あらゆる壓迫と迫害と支障とをたゝかひぬいて來たものはこれまで女――と云ふ名のもとに無能視され、征服されて來た女のうでゝあるといふことだけでも、最早、女性は解放され得べき日が來てゐるといふ事を知る事が出來得ると思ひます。

女性の解放――それはプロレタリアートの勝利によつてのみ可能である事はもはや今日に於ては議論の餘地さへないと思ひます。



吐いた。

「唯今の大田の說は最もであると思ふ、我々の組織的な行動の最も賢明な行き方だ、我々はスローガンを如何にして××に導くかを、最も重大視して行かなければならない。其の點に於ける大田の說は大いに同感である。大田の言つた大衆的ストライキを政治的ストライキに導き、次いで××的ストライキに行く處は我々の硏究とそれに對する實際運動が必要なのである、次に、もしこの大衆化の問題を如何にして行くかが第一我々の最も考慮しなければならない處である（この時さうだ、と言つたもの がある）今度のJ・M爭議にしろ、先日のY・H爭議にしろ、我々の 努力がそれ程にもなく實が擧らないと言ふのは、事實まだ、彼れ等に充分なイデオロギーがないからだ、而し、それは後一步にして認識する事が出來るのだ、何故ならば、彼等が、最後迄鬪爭する意志はなくても、資本家に對する漠然たる不滿があるから、あのストライキに參加するのだ。

この漠然たる不滿が、それが彼れ等の社會心理だ、この社會心理がある以上、我々の思想に導き入れる事はもう後一步なのだ、彼等のその漠然たる社會心理を、我々でもつて理論づけ、體系づけて行つてやれば彼等には直ちにそのイデオロギーとなるのである。我々の鬪爭が、各個人のものでない以上、我々は何處迄もそれを敢て實際に運動すべき根據があると思ふのだ」

この時ベルが鳴つた。

淸原は默然として腰を下ろした。

斯くして其の夜の會合は熱狂化して行つた

この中には、阿部保雄も勿論居た。大平誠も居た、次にこの第一運動としてゐる會擴張の爲め、會員倍加運動をやる事になつた。

書記役の河野正重は靜かな彼一流の讀み方で一同にその倍加運動の內容を說明した。

一、會員は今回この會の發展する爲め、一人に就いて、一人宛の會員を造る事（但し婦人もよし）

二、期日は二週間後の會合迄……

最後に、二三名の新しい入會者の紹介があつた、大平誠は紹介役に當つてゐた。

一番末席の靑年三名は、大平の言葉と同時に起立した。拍手が起つた。限りない感激の中に幕は下ろされた。

出る時には、皆一緖に出るな、二人三人と別々になつて、少しづつ、間を置いて出るのだ。何時もと同じ樣に、皆はその行動を取つて

で甚だ潜越ではございますが女人聯盟の步みが今後その方向に大膽になされる樣にと希望します。

中島幸子氏の論說には一〇〇％共鳴です。

一、聯盟の發展と共に聯盟の指導精神の確立が今後益々意識的に敢行される樣にする事

二、聯盟の主要基礎を工場、農村の勞働婦人におくやうにする事

等がそのために必要だと思ひます。從つて女人藝術の大衆化が愈々急速になされねばならぬと思ひます。「女人大衆」の總ルビ付は大衆化の意味において正しいと思ひます。爭議、罷業、消費組合運動等鬪爭ニユースをも、のせるやうにしたらどうでせうか？

グラフは全くすばらしいものです。

ソビエツトグラフ等は私達を端的に憤慨と確信と決意にみちびきます。今後も、もつと〱のせる樣にしていたゞきたいものです。

それから「實話」物語も女人の立場から見た「農村だより」「工場だより」がもつともつと欲しいと思ひます。

私自身も近日中、暇を作つてこの地方の狀勢を御報告したいと思



ゐた。やがて、後三人と言ふ時、ポリスが表を通つて行つた。

　大平と清原と阿部の三人は何氣なく表に出た、ポリスは行き過ぎるかと思つてゐると、又一方から一人のポリスが出て來た、三人は腹の中の機械が一時に萎縮をした様に思つたと同時にがつしりと肩を組合せた。

　この時、眞中にゐた大平は、とつさの機智で酔ぱらひの眞似をした。

「ウウッ、今度はすまん、なあ、君、あの時彼女は淋しい姿をしてゐたよ、忘れようと思つてもさ、ウウイッ、すまん君、忘れられないよ、君、だがなあ――君、彼女に美しい、僕を信じとる、ウウイ、――」

「わかつてゐるよ、わかつてゐるよ、君今夜は酔拂つてゐるんだ、」

「莫迦ッ、これでも、これでも僕は眞面目なんだぞッ、君あ、大膽生意氣だッ」

　大平は右の肩を組んでゐる阿部に向つて言つた。

「こいつあ、何時も何時も酔拂ふと女の事だやり切れないや」

　だが、彼等の千鳥足は早かつた、何だ彼だと、言つてゐる間に、ポリスから四五間離れた、あつけにとられた二人のポリスはすごすごとカフエーアカツキの前から引上げた。

　後見送つて三人は哄笑した。三人は夜更けの町を足音高く鳴らして行つた。

此界隈の種々相

田中いちの

――家には閻魔の大王がア――

　ユーモリストのお登公さんは、内職の針仕事を急ぎ乍らドラ聲を張上げて唄つて居るのだつた。

「お内儀さん、こん日は」と云つてK子が其處へ這入つて來たので、彼女は唄を止めて振向いた。

「まア相、阿歌女々々ッて云ふんぢやア無

ひます。

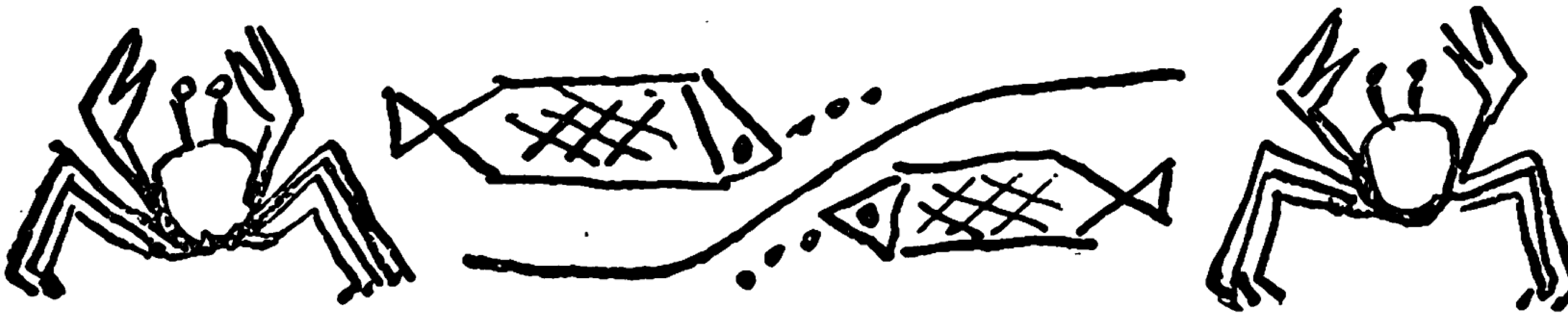
熊本　木村　時江

　いざペンを取ると思ふよう運ばないので今日迄沈默を守つて終ひました。三年前の拾月號から御誌を離しきれないものです、いつも青白い肺病患者のように不景氣顏した私の財布はどうしても貴社へ御金を送る事を許してくれませんので今も又雜誌屋から求めてむさぼるように讀んでおります、貴女方の高らかな歌聲を聞き貴女方の大地をふみしめゐ力强い足音をきく時私も亦生きて行く力强さを感じます。

　二拾四才の今日迄、富む人と貧しい人の餘りにもかけ離れた生活を嫌と云ふ程見てきました私にはしらず〳〵の間に何が原因するんだらうかと考へるようになつておりました、御誌によつておぼろげながらそれが分るようになりました否解りつゝあります。

　景氣不景氣はこんな少さな私達の金入にまで影響しようとは思つてゐませんでした、それは大變な間違ひだつたのです。

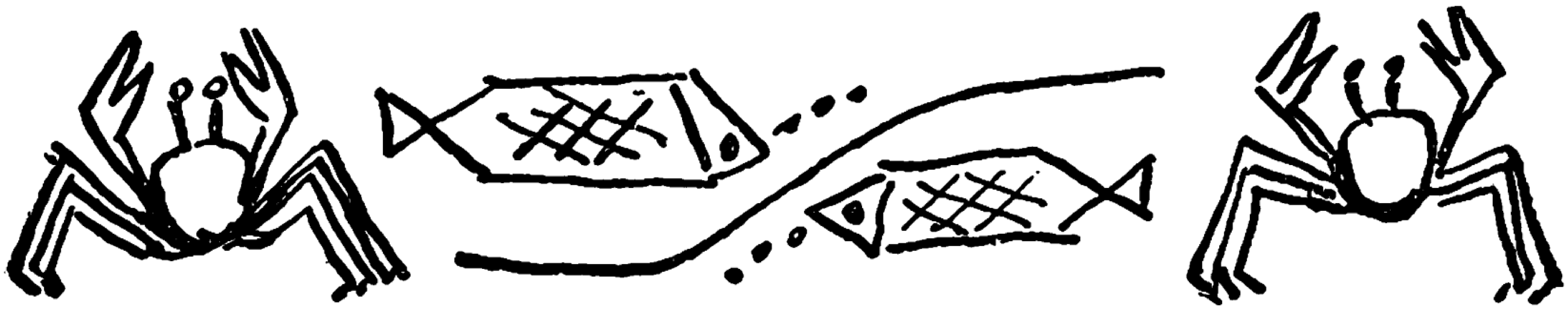
　深刻な不景氣にみんなあえいでおります、その私達に財産も相當あり一椀の茶を飲む茶椀にさへ何拾圓てお金をかけてゐる人達が私



いよK子さん」
「ほゝ阿歌女ですつてェ」彼女の輕口に釣込まれて、K子を嫣然と成る。「まアお掛けやしてお呉れやす」とわざとらしい關西辯で云つて團扇を出して呉れた。K子は腰掛け乍ら訊いた。
「閻魔の大王ッて、お内儀さん誰の事なの」
「聞いて居たんかネ」
「此處は道傍ですからよく聞へますョ」彼女は得意氣に云つた。
　閻魔の大王ッて云ふのは内のお爺さんの事なんや、儲仕事に出て呉れや、ェェのに病人か何ぞの樣に家にへばり付いとッて、鼠や猫の番をして孀に扶養させて居る甲斐しよ無しが、三千世界に二人は無いだらうと思つて、其事を今唄つてやりよる處だがネ」
　K子は何と返事したものかと迷つてどぎまぎした、「でも其内に勤口も有るでせう‥‥今は何處でもねェ」——と云つてから語をつゞけた「私のうちの裁縫も手傳つて下さいョ私がいそがしいから‥‥明日迄に三枚だけ‥‥それが私の家のなら急が無いのだけど頼まれ物なのでネ‥‥」
「わしも急ぎ物ばかりで受合はれまへんのや」と彼女が云ふと隣の間から彼女の夫の聲がした「そんな事を云つて居る間に手を動かせれば出來無い事は無い。」
　そんな事から火蓋は切られて口喧嘩が始まつた。
「何をッ居候の癖に大きな口をきゝやがつて、沈默・てすつこんどれッ、此ひよつとこおやぢめッ」鼻息荒く雷霆のやうな言葉は終りを知ら無い。彼女は手もよく動くのだが口八丁で云ひ出したら仲々あとへは引かない。K子は自己の用事が導火線と成つたと思へば氣が氣でなかつた。
「まアそう云はないで下さいよ—
　彼女は止めにかかつたが、彼女の猛り狂つた心は仲々靜 ら無い、又一しきり夫の惡口を喋舌つて居た。——
　其事が有つて幾十日目かにK子は一枚の紙を机上にひろげて筆をはしらせて居た、貸家疊建具附、此次に御用の方はと書こうか書くまいか、と思案して居ると、表の入口で賣物屋の聲がーて曰く—お蜜柑如何でせう」先刻から家中の樣子でも伺 て居たものらしく、おずおずした女の猫撫聲だ。「今日はいりませんの」K子は机に向つたまゝなので聲音は聞えても相手の顔は見え無い、「お廉く願つておきますから買つて置いて下さい」何ぼ廉くし

の日當をまけてくれつて云ふんですもの。
　夜もろくろく休まないで大小便の世話迄しても日當さへ拂つてくれない人もあります。
　傳染病看護に行つて感染しても不注意だと笑はれる以外金一錢くれる人はないんですもの。
　都の會の規則には色々な事が書いてありましたね—家の生計を立てゝ行く會員が病氣した場合には府乃至縣全體の看護婦の、金で救つて行くつてね、皆樣眞實にそんな事が御座居まして、あれはたゞ規則で實行するものではないんでしよ。會では病氣すれば二三日位の病氣は治る迄ねかしてくれますがものゝ、拾日もねれば御家に歸へつて養生なさいつてほうり出されます。——そして後は生きても死んでもおかまひなしですもの。
　それでいゝでしようか。
　只泣きながら、私達は沈默さへ守つてゐればいゝのでしようか。
　淺學な私にはどうすれば全國の白衣の方と手を取り結ばれるか分りません、御誌によつて白衣の御友達に呼びかけます。今日雜誌屋から、七月號が來る事になつてゐます。

東京×道病院　中岡　光子



てもらつた所で、つわりやみでは有るまいし蜜柑許り食べて居られるもので無い。

「私の家にはいりませんの」

「ただの一個でも買つて下さい」

押問答は家の內と外でやつて居たが商賣人の執念さにK子は、しびれを切らしッと立ち上つて聲を掛けた。

「夏蜜柑なの」……外の女と內の女性とは其瞬間顏を合せた、外の女は手拭の頰かぶりを取つた。

「まあお內儀さんぢやないの」

外の女はお登公であつた、其時彼女は小さい聲で家人の在否をとうた、K子は不在の由を告げると彼女はまあよかつた、と云ふ顏をして暑いのにぴつしやりと戸を締めてはし近な場所に腰を掛けた。何でも彼女はみだらなうわさをのこして家出して田舍へ行つて居るのだつたが、家にのこした小供の顏が見たさに蜜柑賣に成りすまして、此界隈を徘徊して居るのだと云ふ、そして蜜柑は賣るのが目的では無く彼女の夫に出くわした際に飛礫として用ひる爲の物だと云つてK子を苦笑さした。家出の當時夫の着物や縫かけの迄質入したのだから……恐怖して居るらしい。其れから今は幸福に暮して居るので、わしは名にそむかず、得な女だとも云つた、貴女もわしにあやかるように登公と云ふ名をお付けとも云つた。彼女は內々で親子の對面をさせてもらいたさに來たのだつたが、K子は何の恩も無い彼女の便宜を謀る事は出來なかつた。それのみか何時ぞやK子が仕立物を依賴して川來上りを見たら、隨分ひどい事がしでかしてあつた、新調の而も他方からの依賴品を……K子は面目を毀損させられて居るのだから彼女には、うらみこそ有れ何の……とは思へども口に出しては云はなかつた。

「私が會はして上げればいゝけど、今日は都合が惡くてね……」

K子は輕くあしらつて歸した、

「馴れ無いから商賣はむずかしいものだ」と云ひ乍ら、その荷を擔いで「どうも大きに」の聲をのこして出て行つた。——

K子は翌日自家所有の貸家の裏口から漂然として這入つて見た、此家はあき家なのでK子は誰に遠慮も無しに上り口のスリッパを引き掛けると奥へ這入つた、其途端人の話聲が耳にはさまつた。

「何だか此處の家は可笑しいや字が間違つて居るが……」聞耳を立てて居るK子がおや妙な事を云ふぞと思つて居ると又他の聲がした

每月每月生氣溢るゝ所の我等の本、何處迄も私達無產婦人、否、無產大衆の爲に活躍して下さる皆に感謝致します。今迄私はお友達からニュースを拜借して地方の皆樣の樣子も伺つて居りますが、今度は丁度良き機會、何卒私を聯盟員の一人として加盟させて下さい。私達の「グループ」も十五名程の愛讀者があります。

東京×道病院　小林　春江

發行の度每に拜見して居りました女人大衆並に聯盟ニュース。皆樣活字より以上の元氣な發展振りに嬉しく今度聯盟員の御仲間入りをさせて頂きます。書齋から街頭に御誌の爲め、又女人大衆及び社會の兄弟等の爲、ビラまき宣傳ポスター張り何んでも致します。

內容は優秀なもののみ集めず、もつと、もつと、大衆的にして欲しく思ひます。

北海道　小笠原織子

只今は思ひがけぬ多くさんの記念品を御送り下さいまして誠に有難うございました。日頃よりほしい／＼と思つておりました脚本集までお添へ下さいまして何とも御禮の申上樣もなく只々感謝するばかりで、私はその感謝を適切に表現する事が出來ないのが殘念で



「わしも字引を引い見てたけどこう云ふ字は無いなア」

K子は障子の穴からそつと舗道を見たら受持巡査とも一人頭の光つた男と話合つて居る、其二人が通り過ぎてから貼紙を見たら貸家と崩しで書いたつもりが貨家と書いてあつた……訂正して、窓をあけてのぞくと近所の小供が、青蛇爺ぢと仇名する家の伜が銃袖に鳥打帽をかぶつて家を出た、其時葬儀用の自動車が來かかつた伜さん一早く見て取つて「ちエッいんぎでも無い、」と舌打して引返して行く、後部に花輪を結付けた園體は狹い舗道を行く。見て居る傍の者が氣がもめるけれど、此狹い舗道がどうならうと、なげくだけはやぼだ。——演習地で倒れたらしい兵士が双腕を二人の兵士に支へられて歩いて行く。

「おいしつかりするんだぞ」

病兵は殆ど答辯さへ出來無いらしい——街燈も點いて日は正に暮れやうとして居る、製糸工場の女工等が三々五々と歸り出した。紅入ナフトの着物を着て比較的ノーブルな風貌に出來て居る一人の女工の後部から來かゝつた先刻の自動車の運轉手は上半身を窓から乗り出させて、すれ違ひざまに聲を掛けた。

「おい波ちやん乘らしてやらうか……」

「あゝきたない柩を乘せる自動車ぢやないか、私達はまだ息をして居るんだヨ」

女達は顔見合せて笑つて居る、彼と彼女等は日頃同時刻に此處の舗道を通過するので顔馴染に成つたらしい。——

舗道を距てた向ふの畑で二人の老女が御きて居る、喧嘩とは違ひ一人は畑の所有主で、も一人は雇人で有る、一人は氣の毒がつて遲くれたからもう休んで呉れと云ふし、他の一人は少しだから畑を打つてやると云ふ麗しい光景なのだ、鍬の柄は二人の手に握られて右往左往して居る。

「こう云つとる間に仕事が出來るのに離しなはい」

「いゝや貴女はんくたびれてはるのに、そんなにしてもらうたら罰が當たるさかエ……」

一人は有りたけの力を出して鍬ごと他の一人を引張つて歸つてしまつた。珍喜劇の一幕は果て、愈々黄昏時に成つた。道行く自轉車が悉く云ひ合せた樣に孤燈を付けて居無い、此れも又不景氣の影響なるか——呑氣な話は拔にして此處に面倒な問題が醸し出された。事の起りはK子の屋敷と隣合せに何年も鍬を入れた事の無い三アール餘の荒地が有る、此れけ十年以前に×氏が××銀行に數十圓未滿

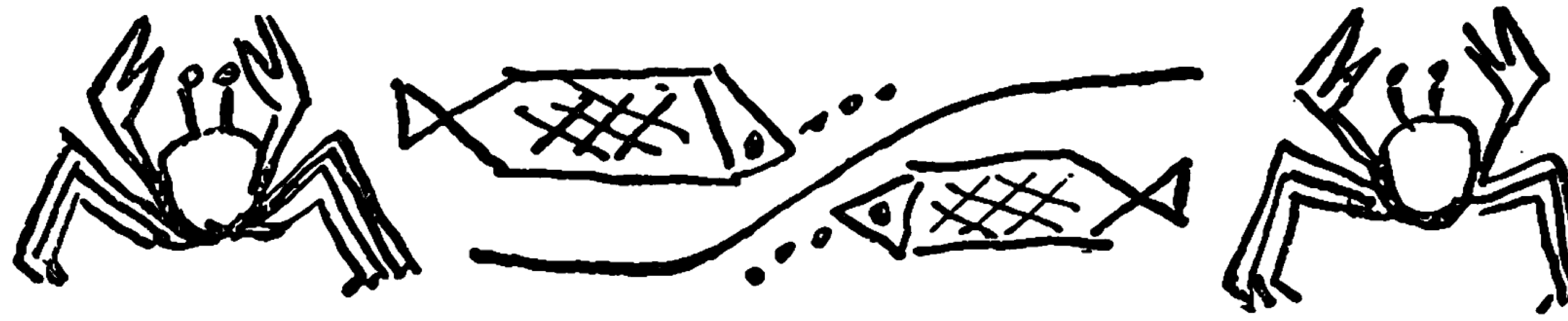
す。女人藝術はむつかしいと思ふのか北國の當地では、一般むきでない樣です。さうかと云つて讀みこなさないでおれば、このまゝでいつも時代におくれてゐなければなりません。目を通してゐるうちには完全に行かずとも、幾分かづつ目ざめて參ります。でも近頃は讀みやすくなつたので、よろこんで皆樣讀んで下さいます。

一年毎に素晴しい發展振を見せて飛躍して行く女人藝術よ、益々堅實に守りつゞけて歩んで下さい。田舍にゐて進歩のない自分が殘念です。暑さの折から、皆樣御身御自愛の程をかげながら祈つております。

鹿兒島　善永　久子

ブラヴォウー・我等が女人藝術。グリーンの大隅連峯のどてつ腹もえぐり拔けよとばかり、諸腕をぐつとつきのばしてみた。大きな歡喜がドッと爆發して來そうだ。朗らかな、何と何と朗らかな初夏の太陽だ、鎖す雲、裂く陽よ……歌ふんだ、高く高くあらゆる末梢的感傷を抹殺しろ！だ。（——女人藝術七月號を手にした時の爽快な感情です——。

各地にどし〳〵支部が設置されて行く、それにまだ聯盟加入の申



の金の抵當に入れた物で今では何百圓の價値が有るのだが何十圓の高價稅がかゝつて居る其荒地とK子との屋敷の境界に杉並木が有る、此は何代か以前K子の祖先培養物との傳言にK子は自家所有物と斷定して居た所、はからずも×氏が自己の所有物だとがん張出した。何程今では四分板に成る位だから材木として採用の可能性が有るK子も私財と思つた物をむざ〳〵と人手に渡す事も出來兼ねる×氏は裁判沙汰にしてしまつた、登記簿に杉の事などは無い裏書する何物も記入して無いのだから勝敗の決は如何なるか…一そ、こつぱみぢんに鋸屑としてやつたら面白からう、其よりも世には一坪に足り無い土地を十幾年前からあらそつて今尙解決のつか無い物さえ有る。何處も此處も慾の衝擊だ、同じ慾張りでも、其れと對角線を成して居る荒地の所有者で、近所の者から蝮おやぢと云はれて恐れられて居るのも有る、其れは小供等が無邪氣に鬼ごつこでもして其敷地に一歩でもふみ入れるや否や見付け次第聲を荒らげて怒號するからだ。草が伸びほうだいなので草刈女が刈取りでもしようものなら其こそ大へんなけんまくで有る、だから誰も寄り付く者が無い嫦も子供もない彼は鰥鰐のような眼をして暇さへ有れば其見窄らしい體軀を草叢の中に立て腕組をしていつも見廻はして居る、

何の變化もない、平凡な田舍であるこの界隈にもかうした事件が次から次へと起つて行く。

誰が殺した

池邊まさ子

一

昭和二年度統系表

	入學率	公立	私立
玉津小學校	八〇%	五〇%	三〇%
川前第二小學校	七八%	三二%	四六%

し込みもやらないこの私だ、——じつとしてゐられない様なこの衝動を感じながら。とらはれの村封建的因習と傳統の重い鎖につながれてゐるこの村の人々、このまゝでおいてはいけない、斷じていけない。ハンマーで叩ききつてやらなければ、そのハンマーは女人藝術でなければならない。私は知つてゐる限　の人に今迄の女人藝術を貸してやつた鎖をぶつきるハンマーを手に持たしてやつたのである。それに、それに皆んな一樣にそのハンマーを親切なハンマーを投げすてた、然し私はこれ位で失望しちやいけないのだ、獨りでもいゝ、女人聯盟に加入さしていたゞくんだ、學資が續かぬ爲に學校からおつぼりだされたこの私に生き甲斐とノゾミを與へてくれるものは實際女人藝術をおいて他に何もないのだから。

どうぞ聯盟員にお加へ下さい。外に規定がありましたらお知らせ下さればけつこうですが。

新潟　靑山　幸子

五月二十日までに日本石油新潟工場は職工を整理しました。整理は表向で內面は馘首でしかも殘酷です。私は或る日山の下の名古屋



新岡高等小學校	五二％	一五％	三七％
川前第一小學校	五一％	一三％	三八％
森岡高等小學校	四六％	○	四六％

森岡高等小學校の右側に、朱筆でぐいと二本棒を引いたこの表が會議室の正面に貼られた時、廿五名の職員の顔には、見えぬ或るものに反抗するやうな興奮とそしてその一瞬後には嘆息に弛んだ顔がじつと下を向いた。

校長は自分自身を宥める様な口調で言つた

「もつとも、この表に由つて學校の成績を云々言はれることは辛いのです。といふのは諸君も御存知の通り、入學率の第一位にあり、然も公立校の入學歩合に於いても驚くべき成績を見せてゐる玉津小學校は此の××郡內でも最も裕富な家庭の子女を擁し、全國の小學校兒童の成績統計に於いても、十指のうちにあるのであります。昨年度におきましても、彼の小學校卒業生八十五名中、家庭に居殘るもの僅かに三名、然もその三名は病弱の理由でありました。」

「それだと、大變に指導が樂ですね。」

「うちの學校ぢや、せい〳〵四割位だから。」

「上に進む者と、居殘りと、どちらを本位に教育していゝかと、いふことに頭を惱まされるのだ。殊に五年六年と來ては、大いにその手加減がありますからね。」

口々に何か言はうとする職員を、兩手で抑へつける格好をして校長は續けた。

「と、いふやうな譯で此の入學率に由つて、迚や角批判されることは甚だ當を得てゐない。然し、何といつても當局及び一般父兄間に於いて、こうしたところに重點をおいてゐるといふことは、動かし得ない事實であつて、實に遺憾に堪へない次第であります。」

この校長の訓話は例に由つて長々しかつたそして今度は、どしんと床を足で叩いて

「諸君大いに奮起して呉れ玉へ。我校の名譽はたゞ諸君の努力に待つのみだ。時將に受驗準備期だ、今度こそうんと、踏ん張つて、一年後の今日、この統系表を見返してやりたいものだ。」

そして一段聲をひそめて、

「教員の成績といふものが、こうした簡單な所で片付けられたらやり切れないが、然し一般にそう見馴されてゐる以上致方がない。」

それか、あらぬか當町議員のうちには、職員の待遇問題がもち上つてゐる由、或る方面から耳にしたのだが、いや現に或るところでは初任級の引下げ及び、ボーナスの一割減を實施してゐるそうだが、こんな有樣では、我

紡績新潟工場へ行く途中に石油工場へ立寄つてみました。そして二三の知人を訪ふて馘首案を聞かして頂いたのです。

勤續三十ケ年に渉る老職工に山口縣の工場へ轉勤を命じさせて、老職工が嫌だと言つたので辭職屆を提出さして大膽に馘首つた。そして僅な金錢がそれを慰めてゐると言つてゐます。夫婦職工には夫は秋田へ、妻は臺灣と轉勤命令を出して嫌だつと言へば馘首つた。その中でも特に女性は慘めなるひどい目に逢つてゐます。その爲めに可愛い娘をカフェーの女給に、女郎に私娼に賣つたものがあります。十四日間の解雇手當さへ上前を取つたと言ふ話があるのです。その様な話を聞かされたとき私は涙が流れて、私達がプロレタリヤ前衛に就いてまだ至つて微力をさとつて私達の陣營を守る爲めに、そして可愛い日石の職工さん達の爲めに近くそのイデオロギーに盛つた作品を書きあげやうと思つてゐます。

日石の職工さん達よ貴方はもつと力强くならなければなりません。そして私が書く貴方々のそして私達の作品を讀んで下さい、三號の「文藝生活」に掲載致しますか

々も甚だ樂觀を許されぬ狀態だ。」

起立してゐた校長は、この時腰掛けて、テーブルに肱を突き上半身を乘り出した。

「君、この不景氣に減俸されたら堪らんよ。いくら四角張つて、君子振つてみたところが何といつてもパンが第一の問題だからね。この際當局なり町會なり、尙一般父兄に對しても大いに信用を得ておかんと困るて、全く困るのだ。此の際萬一、職を追はれた場合は。」と言ひかけて言葉を呑んだ校長は、必要以上に深刻な表情になつた。彼の胸にぐつと突き當つたものがあつたからだ。

「富山」

校長は心でその障碍物の名を呼んで、ちらと視線を彼の上に馳らせた。富山三造は最初から肩を强張らして、神經質な眼で、丁度自分の顏の向ふに貼られてゐる、統系表を睨んでゐた。

二

富山三造が鄕里山形の山のなかゝら這ひ出して、迚も角目的としてゐた東京府下の敎育事業に參與し得たのは、七八年も前のことであるが、當森岡高等小學校に職したのは大正十五年の四月からであつた。

彼は北國の空のやうな陰鬱な感じではあつたが、粘り强い生眞面目なところが多分にあつた。職員室に居ても滅多に、胸を開いて談笑することの出來ない性質らしく、いつも机にくつついて、參考書を耽讀してゐた。

彼は徹頭徹尾職籍に——敎育に非ず——忠實であつて、家に歸つても、すつぱりと、敎職の殼を脫し得ないので、どうにかすると、女房や子供の顏から、いぢけた兒童の表情が飛び出したりした。

その日——職員會議の後に、一人殘されて校長から言はれたそのことを、彼は幾度も反芻してみた。

「先刻も一寸話した事だが、町會の方では敎育費が非常に八釜しくなつてゐるらしい。これは、實は內々聞き及んだ事であるが、來年度からは、專科訓導に一學級を擔任させて、さし當り敎員の節約を、これは甚だ不穩當な言葉だが、迚も角そうした事でもして、豫算の削除をやらうといふ怪しからぬ事を、考へてゐる向き　あるらしいやうな譯であつて。」

つまり、今のうち、もつと能率を上げて貰はねば、君が一番不利益な立場にあるのだ、と言ふのだ。

その時には、默つてひき下つたものゝ富山

ら。

（う）

五月二十日晩の七時頃ろ私は甚だしい巡査の亂業を工場から歸るとき見ました。

ぐた〳〵に醉つたS派出所の巡査です。それが附近の人に聞くと或る金持の家へ婚禮に召待された歸りださうです。その巡査には體格の良い上と亂暴の上に『インジン』と言ふアダ名が付いてあるのです。

なんでも毆られた男は新潟港の陸上人夫で龜田町の人ださうで無燈火でそのインジンにとがめられ逃げたさうです。五月の午後の七時はまだ明るいのにその晩は七名の毆打傷を負せた巡査です。それも制服もつけないで五つ文の禮服着用のまゝです。警察ではそんな規定を許して居るのですか、もしあるとすれば私達はそんな規定があつては思ふ樣に働けないから私達の力で近き將來は取除かねばなりません。

私達の農村では無智な百姓だとあなどつて巡査の端下者や小役人が生意氣を張るのです。百姓が夏など裸體で畑に居ると、

『一寸こい』そして警察で留置する巡査もあります。全く不合理の



三造には、こうした校長の意向にはち切れそうな不滿があるのだ。もつとも、全校で五年の二組（男子組）が一番成績が惡い、素質も劣つてゐる。おまけに出席步合は毎月びりと來てゐるのだ。然しそれは前二年間續いて擔任した若い敎師の無責任な敎育法からこうなつてしまつたことは、校長自分も口を割つていつた事なのだ。だからこそ、その級を俺に振り當てたのではないか。硬敎育を云々いふ奴もあつたが、俺をおいて誰があの不良級に當ることが出來たか。それを今更、成績だ、能率だと、八釜しく言ひ立てられた義理ぢやあるまい。

とこゝまで考へ及んだ時、どかんと彼の胸を衝いたものがあつた。それはつい、一週間前の金曜日の研究授業の時のことであつた。

この學校の行事として、毎週一回宛指定された一級の授業を研究し批判することになつてゐた。

その日は、富山三造の受持ちである、五年二組の作文の時間であつた。「我等の學校」といふ題材を選んだのに就いては、少からぬ彼の思索を要したのであつた。

この不良級の兒童が學校といふものに對して如何に見、如何に感じてゐるかといふ事、そして若しこの兒童にして他の級のそれと幾分でも異つた見界を有してゐるといふ事を他の敎員が如實に識る事に由つて、自然、現在の自分の立場も理解される譯であると思つた。

彼が、この題材の持つ性質及び參考資料に就いて一言も與へず、只管兒童の自由思索に任せたといふ點も、彼としては會心の案であつたのだ。

一、卅分で書き上ぐべし。

二、何でも構はぬ、思つたまゝ書け。以上

この試みを一層有効ならしむ爲、彼は黑板に以上の二行を掲示したのみで、悠々と後手を組んで四列の机の間隔を巡視して廻つた。

彼に準じて他の敎師も、ぞろ〳〵歩きながら特徴あるらしい兒童の、机の上をのぞいたりした。

嚴格に時間は守られて、兒童は後列から順番に、一人宛自作を讀み始めたのだ。

その時であつた。敎室後方のドアが開いて町長を先導に府視學官Kが這入つて來たのは。Kの、多角形の表情は、でもなまずのやうに鷹揚におさまり返つてゐた。

この社會の約束として、最も眞劍、神聖たるべき授業中に於いては、階級の禮儀を認めないことになつてゐる。

話です。

兵庫縣　安家　茂子

私は都に居たが病氣の爲に靜な田舍へ歸つて居る。始めて女人藝術に私は强く强く感じました。今迄色々な職業につきましたが、私等は資本者から受けるあまいみつの樣な言葉にほんろうされて居たが今はつきりと私しの現在の感をしる事が出來ました。

都會のじやたいも知らずに工場に勤めて居る女工等は、鐘紡の女工さん等は、何んと思つて居るのだ。四方を高塀にめぐらした、まるで囚人の樣だ。

八時間勞働は朝から夕暮迄が八時間か、其れとも一時、二、三、四、五、六、七、八時が、どち等が八時間勞働であるかは小學一年生でもよく知て居る事だのに、現在の洲本鐘紡は一部に過ぎないではないか、御つきあいの八時間勞働に過ぎないではないか、四割減給案が發表された當時は洲本分工場の門前にはがんじやうな人々を立たしめた。

そうして大衆の手をふせがんとした。現狀を見た時何日かは私等にも自由の天地がおとづれる事を知つて私し等は戰はずにはいられない。



彼等は、目禮したのみで、些も兒童の心理を亂すまいと務めたが、それでも、どこか他所行きらしい、更つた雰圍氣を釀したのは止むを得なかつた。

視學官、それは彼等職員の首を自由に、切り盛るする手品師であつて、俗稱おいらの神樣であるのだ。

然し兒童は無心だ、てんで學校に寄りつきもしない町長の顔も、ど偉い特權に光つてゐる現學官もたゞ「見知らない小父さん」に過ぎなかつたのだ。

兒兒は順々に聲を張り上げて讀み上げた。明瞭に發音する事を大變いゝ事だと思つて。

ところが、白紙のやうな兒童の魂に、全校の先生から繼子扱ひにされてゐるといふ、ひがみが、そこにはつきり披瀝されてゐた。頭のいゝ兒童ほどそれを敏感してゐるのだ。

「僕は常に思ふのだ。何故我學校中で吾々の級がこう劣等なのだらうかと。今日こそは褒められやうと毎日勉强してゐるのに、何時も叱られるばかりで、悲しくなつてしまふ。友達と手を取つて泣くこともある。」

）これは級長の作つた一節だ。

「毎月末の全校級の成績表を見るのが、もういやになつた。いつもびつりこで、その度に先生から叱られて。だつていくらよくしやうとしても、不可ない奴が多いので駄目なんだ。それにどの先生も僕達の級を可愛がつて吳れないのだもの。たゞ頭から抑へつけられるだけだ。」

「おいらの神樣」の前で、恥を曝されるやうなこうした作文をもう聞いてはおれなかつたので半分の人數で止さした。それにしても、何といふ皮肉だ。一學期に一二度しかおいでにならない、視學の前で、偶然とはいへ、この余技の劣等級を、然もこうした作文の時間を、と、敎員等は內心齒がみしたもの、何とも致方がなつた。

富山三造は、眞赫になつて、引き歪んだ同僚の顔を正視するに忍びなかつた。何とかこの場を上手く繕ふことが、目下の自分の一大任務であることを自覺すると、潔く敎壇に姿勢を正して、

「君達はなか〳〵正直に書いてゐる。然し我等の學校が「我級」のことばかりになつたのは惡るかつた。けれど先生は今君達が、どれほど我級を愛してゐるのかをはつきり知つて淚ぐましいほど嬉しくなつた。その氣持ちをいぢけさせずに眞直に伸ばして行つたら、決度全校の模範級になれるぞ。しつかりやつて

『新聞を見るな』
『演說大會を觀に行くな』
「行くと」と言ふ樣なすご言葉を以て女工等をおどしつけて居る、其れこそ人間の自由を奪つて居る何んたる事だ。今日は工場長の新任式とか、いあん會の樣なものを作つて女工等の歡心を買つ居る。

其れは〳〵表面的な言葉に過ぎない、其の後では、わらつて居る事だ。私しは此れ迄書きました。もうインキがなくなつて來ました。私しは最後にもつと〳〵都合批評されん事をお願致します。

島根　岩崎二二子

毎月を輕い財布の底をはたいて書店を訪ふ私に今月はおもひがけなく早く拜讀させて頂きましたことを厚く感謝いたします。

七月號に私の拙い詩をのせて頂きまして誠にすみませんでした。

今までメランコリックだつた私の思情も偉大なる女人藝術の力によつてボルドの樣な冷たい暗黑の中から或る光を求める事の出來ましたことをお喜び致して居ます。

朝日新聞社五階講堂に於て女人藝術三週記念講演會に集ることの出來ました人々を田舍者の私はうらやましく思ひます。

偏狹な世門と家族制度の鐵鎖が



くれ給へ。」

然しこれで授業を打ち切るにはまだ、十五分の時間が殘つてゐる。それに、彼としてもこのまゝ打切ることは苦痛であつた。何とかこの空氣を轉換させて終らねばと、思つた。

「誰か、もつと上手に書けたと思ふものは手を擧げて見ろ。」

「ハイ」

と一番に上つたのが岡部といふ子供だつた。腕白大將ではあつたが、不良ではなく、どこかにをどけた、面白さを持つた子供だ。作文は下手だが、そのをどけさが意外な效果を見せたり、皆を失笑させたりするのを、知つてゐるので、彼は躊躇なしに「岡部」と指した。

岡部は得意であつた。大きな聲を張り上げた。

「僕は、此の學校はいやだ。何故なれば面白くないからだ。けれどそうしたら、また先生に叱られるから、僕はいやだと言つてゐる。僕は朝起きると學校に行くことを思つて、いやになる。父は、學校を休めといふけれど、出席歩合が惡るくなるつて、また先生から叱られるから、休まない。僕は、先生の方が偉いと思ふけれど父の方が好きだ。」

どつと教室中が笑つた、と同時に彼の、「止せ」といふ癇走つた聲があつた。彼は、この岡部といふ子供が、意地惡い大人の顏に見えた。

三

富山三造は、同僚の一人から、先日の研究授業のことで少からず校長がつむじを曲げてゐることを聞かされた。

それとなく馘首を宣告 た校長の意圖が那邊にあらうとは想像もつかなかつたが、然し矢張りそれが近因らしいと彼は思つた。と言つて今更どうしやう事も出來ない。此の上は一つ、素晴らしい成績を校長の面前に投げつけてやる事だ。校長一個の感情では動かし得ない實蹟を見せつける事より外、自分の採る途はないことを彼は、自覺したのだつた。

富山三造は、神經衰弱氣味で、眠れない時には師範時代愛讀してゐた、ペスタロッチのものや、現代大家の著書などを徹夜耽讀することがあつた。

北國の冬を思はせるやうに、毎日どんより曇つたうすら寒い日が續いた。六年生の受驗準備に刺戟されて、彼の受持ちの級でもずつ

むごたらしく壓制を強めてゐることの安來町に一人として因習を打破して敢然立とうとする同志のみつからないのを悲しんで居ます。

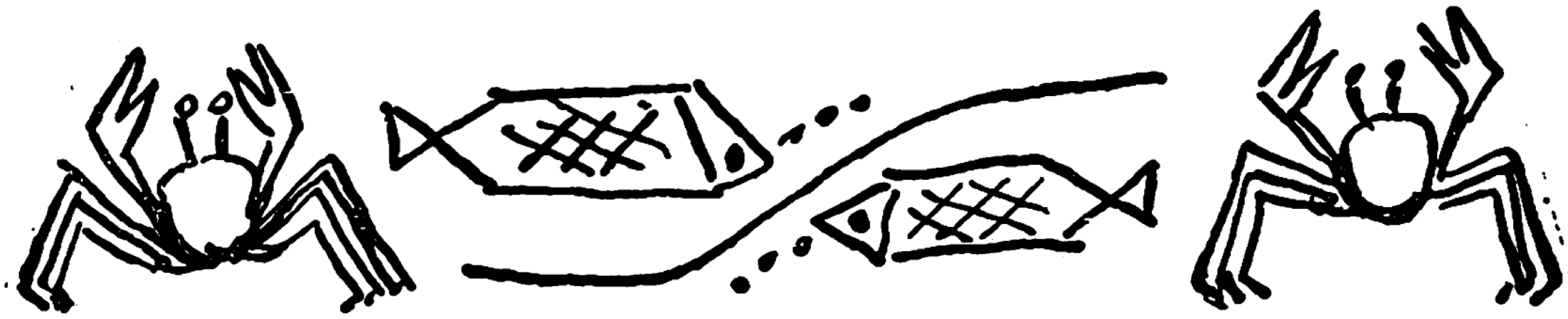
時雨先生の小說「一生」ひき續き讀まして頂きとうございます。

人間の本能なる愛に泣く獄中の嘉十、治右衞門旦那の邸へつれられて行つたおあかの一生はどうなるのでございませうか……。

編輯部の諸先生並に聯盟諸氏の御奮進と御健康を祈ります。

北海道　吉田　薫

先日は御署名ある御著書に御きれいな御風呂しき頂戴いたし誠にありがたう御座居ました。厚く御禮申上げます。毎號を通して皆樣の御元氣な御活動ぶりを拜讀いたしまして田園生活に馴れだれぎみな私も思はず緊張いたします。何野付牛は網走へ汽車で二時間半北海道の中心札幌へは十五時間のところでハッカの産地として世界的に有名な處でござゐます。開基三十年祭が五年前に行はれました新進の町で私ども參りましてから十年になりますがその間の發展振りはめざましいものでござゐます。御誌の購讀者が他にも一人ありますが。努力して讀者をふやし皆樣の御出を願ふ樣にしたいもの



と、授業に油がのつて來た。この時だと彼は腕をさすつたのだ。

　明日算術の研究授業があるといふ前日のことであつた。體操の時間を變更して、二時間ぶつ通しに算術をやつた。五年も二學期の終り方になれば分數の應用問題で、しち面倒臭い。富山三造自分でさへぼうとするほど頭が混亂してゐた。

「出來ない奴に限つてわき見しとる。」

「誰だ、今欠伸した奴は。」

「解らん奴は、放課後殘してやらせるぞ。」

「何ぼんやりしてゐるのだ。こつちを向いてそらこつちを向くのだ。いゝか、この問題をやるのだ。」

　今から今日の正午までの時間は、午前6時から今までの $\frac{1}{2}$ である。今の時刻は何時か。

「よろしいか、この問題の出來ぬ奴は、今まで先生の言ふことを、聞いておらんしるしだぞ。幾度も讀んでせよ。氣を落着けて考へるのだ。」

　子供は頭を搔きながら鉛筆を握つたが、本當に書いてゐるものは一人もなかつた。半數以上は、水から顏を出した河童のやうに、ぼかんと一つところを凝視してゐた。

　富山三造は明日の研究授業の幻影を追ふて狂はしくなつた。こんな樣子だと、明日の成績はどんなに慾目で見ても六十點以上は取れない。彼の頭で、校長のぬらりとした顏が出たり、引込んだりした。

　過日の、作文の時間に大きな破綻の口を開いて、今度の不首尾に、身投げすれや世話ないや。ふふう。

　無氣味な笑聲を振り落すやうに彼は頭を二三度振つてそして眼をむいた。と、彼の視野に擴つてゐたものは何であつたらう。

　疲勞しきつた羊のやうに、どの子もどの子も頭を机にぶつつけて、鉛筆の芯をしやぶつてゐるではないか。

「おい!!」

　一喝と同時にピシリと鞭がテーブルに鳴つた。パッと子供の注意が、こつちを向いた。

「出來たか。」

「……。」

「出來んのか。誰も。一人も。野村どうだ。田原も出來んのか。」

「先生、いくら考へても分りません。」

「どうしても、出來ないのです。」

「しやうがないな、ぢや、先生がやつて見せるから、氣をつけて見てゐろ。」

と存じて居ります。

　こちらは只今か一番よい時節で御座ゐます、野には鈴蘭が咲き、庭には梅も櫻も、つゝじも、ぼたんも皆一緒に咲きます。今頃鈴蘭を御めにかけたいと存じて集めましたが御送りするには少し遲い樣でござゐますから殘念ながらこの次にいたします。

愛媛　波頭　妙子

　私は女人藝術創刊以來の愛讀者でございます。女人藝術が誕生したのは私が女學校三年の折でございました。それから三ヶ年本當に充實した立派な女人藝術になつた事を心からお喜び申上げます。

　本當に嬉しい事を女人藝術七月號に發見してから思切つて御手紙を差上げます。それは七月號 貴社會からくり覗き」反動希望社一覽です。これを拜見してどんなにうれしかつたでせう。

　女人藝術三周年記念の目出たい號に私の考へてゐた通り・否・それ以上私の知らない後藤氏の横暴な行爲が巧な筆で赤裸々にかゝれてゐたのを見てほんとうに喜んでゐます。私はこれで大安心です。滿足しました。これで彼の不正な行爲が世の多數の人に知れたのでございます。昨年でしたか、希望社

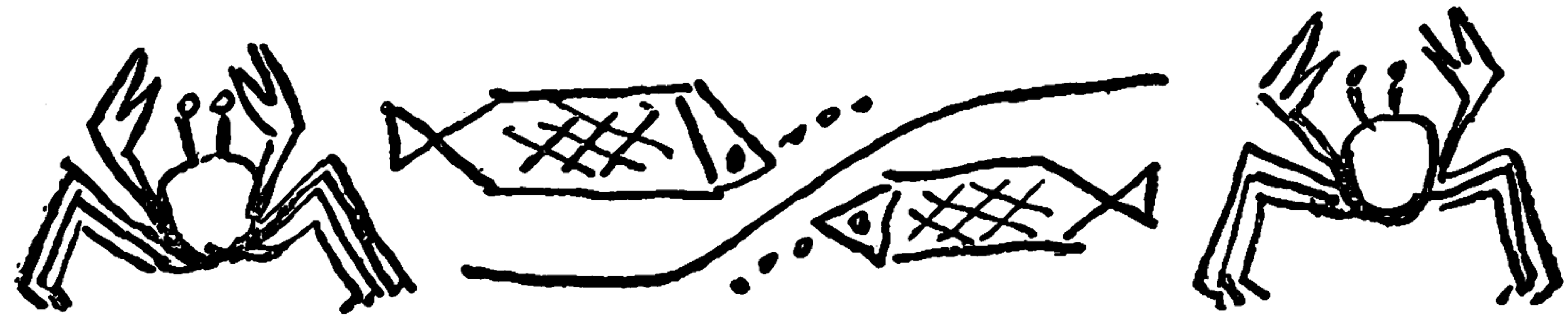


「わき見してゐるのは誰だ。」
「土鼓!!」
電光のやうな聲と共に、その子供の横面にはくぼくの切れが飛んだ。
彼は、こんな子供までが自分を嘲弄してゐるやうで、焦々した。が、奴鳴つてゐるより一問題でも多く頭に叩き込まねば、明日といふ難關が口を開けてゐるのだ、と氣付くと、いくらか、口調を柔げて、黒板に向つた。
「ほら、午前6時から今までを、1と見なすのだ。よいか。その次
12時－6時＝6時・・・午前6時から正午までの時間、それで分つたらう。」
泥田に石を投げるやうなものだ。彼が躍氣になればなる程子供の表情は鈍つていつた。
彼の焦立ちは憤怒に變つた。彼は矢鱈に鞭を振り、鞭で叩いた。おど〳〵怖へた兒童は、もう誰一人わき見する者はなかつた。
「ようし、靜かになつたらその次だ。」
教室はへシ歪んだ緊張に漲つた。彼が再び黒板に向つて説明を始めようとした時であつた。すぐ後頭の邊でコツ〳〵といふ音のしたのは。
「誰だ、授業中に鉛筆を削るのは。」
「だつて先生、僕鉛筆をみんな噛み折つたんだもの。三本ともみいんな。」
どつと、教室中が笑ひに搖めいた。
「馬鹿野郎!!」
その馬鹿野郎が、あまりの興奮に、變色した發音だつたので、子供等は手を叩いて喜び笑つた。
彼はくわつとして、ふら〳〵した。そして殆ど無意識に、最前列にゐた、そして皆と同じ様に大口開いて笑つてゐた岡部を教壇に引きづり出すと、彼はいきなり持つてゐた鞭でピシリと叩いた。鬱憤の塊り目がけて。だがその塊りはたあいもなく倒れた。
岡部は「お母さん」と呼んで大きく泣き出した。
「これ位が痛いか。痛けりやこれから氣をつけろ。」
泣きながら、怖えた眼で見上げてゐる岡部の顔、研究授業のあの恥辱の想ひが甦つて來た。岡部はあの作文の時間に、彼に最後の泥をかけた子供だつた。
彼は、耳の後を押へてゐる岡部の手を振り離して、立たせようとした時、生溫い感觸を掌に感じた。見るとその掌にべつとり血がついてゐた。
岡部の傷口からは、細々ではあつたが、血

から富市の公會堂へ女の方が見えまして「天命」についてお話がありました。學校は授業時間をさいて、生徒一同つれてきゝに參りました。そして「天命」について如何にも勿體らしい話がありました。生徒一同熱心にきいてゐましたが、終はどうでせう。「天命」の話は丁度流星の如くいつか消え後藤氏の人格宣傳に早變りです。更に二三册希望社發行のウスッペラな雜誌を壇上に持上つて、廣告です。一册々々の説明をしてこれを買へと云ふのです。最後に希望社の宣傳です。高い授業料をおさめながら雜誌廣告をきゝに行つたのです。逃げ出す事も出來ず困りました。まるで押賣りです。「天命」は唯お景物です。餘り侮辱された話です。目的は云ふまでもなく

一　希望社の宣傳
一　後藤氏の人格宣傳
一　修養會員募集
一　雜誌の押賣（宣傳）です。

そして「天命」の内容は自分自身と自分の娘の披露でございます私の娘は如何にも普通の娘に考へられぬ事を考へますので娘はかしこいと、娘の善行をならべます。
希望社が誇れば誇る程私達の反感は正比例してまして行きました



が流れて、手首を傳つて、コンサージの袖口に沁んでゐたのだ。

四

次の日、

岡部一郎の保護者から左の如き缺席屆が富山三造の手許に屆けられた。

愚息一郎儀、昨日友人と喧嘩せしとて頭に瑕をうけ、痛む由にて今日一日靜養させ度候に付、此の段御屆け仕候何卒御許し下され度候。

父　岡部　八郎㊞

昭和三年十二月六日

富山先生

ふん、喧嘩か。

彼は上唇で笑つた。あれ位な瑕で缺席する譯はないが、あの子も餘程怖へたと見える。だが、結局いゝわ、またあの子が、どんな、ことをしでかすか知れないのだもの。

彼は、何となく、氣輕い氣分で、その日の研究授業に臨んだのであつた。

次の日も、その次の日も岡部の姿は教室に見えなかつた。彼は少し宛氣がゝりになつたので、それとなく近所から通學してゐる子供に様子を聞くと、矢張り本當にあの瑕が痛んでゐるらしい。

瑕口から黴菌が浸入して化膿して、病院に入院することになつた噂さを聞いた時、彼は今更のやうに身顫ひした。

子供の容態が惡變した頃、子供の父は始めて教師に毆られたことを知つたのだ。それで、學校に怒鳴り込んで行つた時には、もう彼、富山三造は馘首になつて郷里に歸つてゐたのだつた。校長は言つた

「あの教員は少し不都合なことがあつて、出しました。最早や本校の職籍にない者ですから、何とも。」

岡部一郎は、瑕をうけて、五十六日目、K外科病院で淋しく死んでいつたのであつた。

一九二〇、四、二八

涼風を送る　　編輯一同

リトニアの話

ソビエートに隣接する國リトニア第一の歌劇女優が、白色テロにあつた話。リトニアの首府リガの歌劇座で、ミルダ・プレヒマン・シュテンゲルと云ふ歌劇女優が、「タイス」をやつて、やんやと受けてゐた。ところが突然一部の學生が大擧して劇場へ押し掛て唄の最中に口笛と自働車の警笛で騷ぎ立て、

「出て行け、赤ウグイス、おれたちの國に共產主義者はゐちやならん！」とさんぐ〵に彼女の演伎を妨害して、赤大根を投げつけた。どこの國でも役者を侮蔑するには大根を使ふのかどうか、知らないがとにかく、收拾がつかなくなつたので、支配人が舞臺に立つて場内をなだめ、辛じてつゞけやうとすると、今度は「火事だ！」と叫び出したものがあつて、彼等の「赤ウグイス」は遂に立往生した。リストニアはソヴエートの隣接國だといふので、ヨーロッパの帝國主義者が盛んに反ソヴエート熱を煽つてゐたのに、思想的には全く無邪氣なミルダが前日モスクバで興行して歸つてから、ソヴエートの劇場組織を盛に稱揚したからであつた。

明暗

若杉香子

外面（とのも）には七月の青葉重なり
樹洩る陽の鋭どさ――
たけぐしい夏の息吹きが
潮の様に窓を越へておどりこむ。
人の世のたつきに疲れ

夜明前の突風だ！

野地菁子

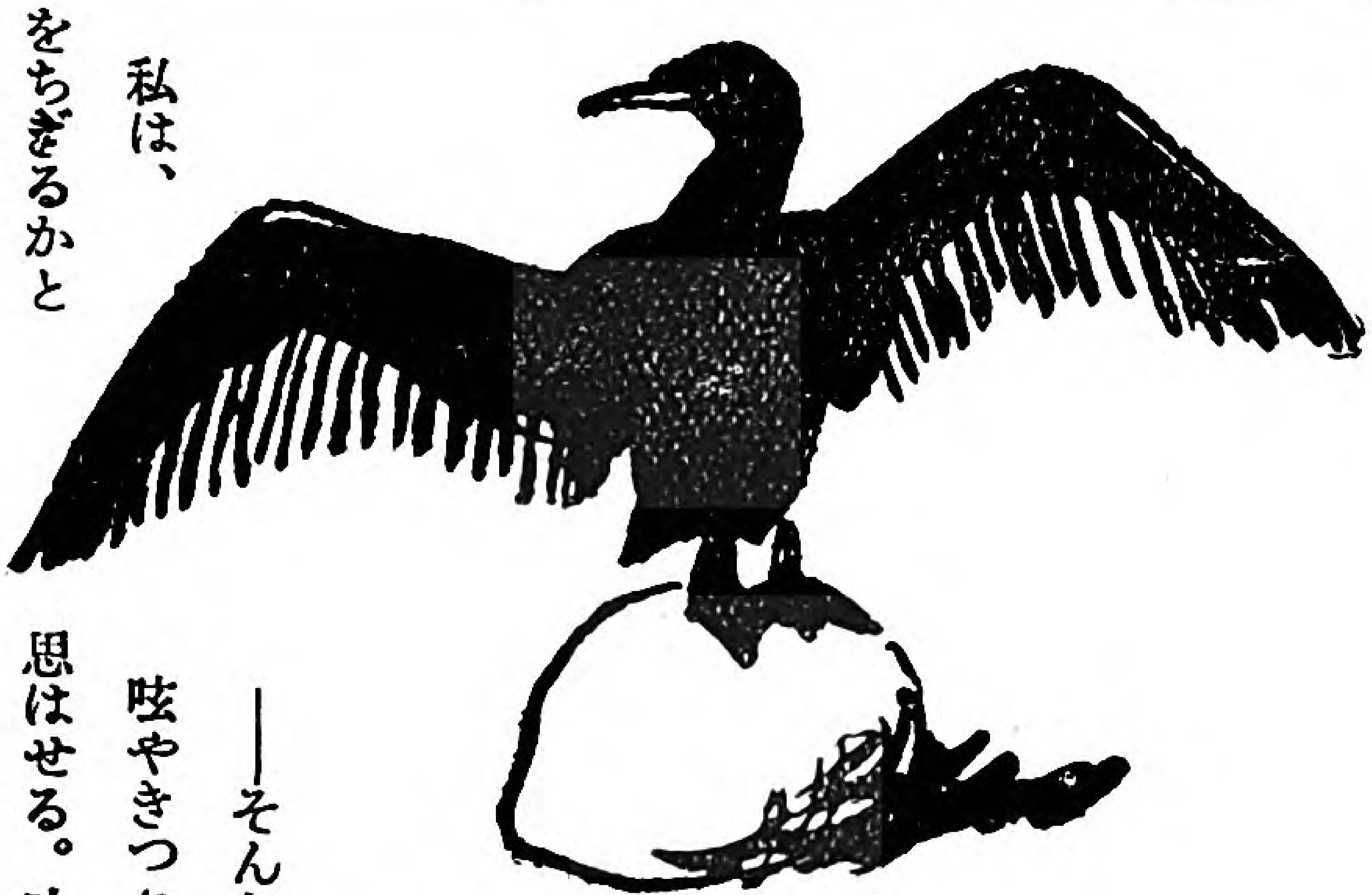
彼奴はもう驢馬ぢやなくなりかけて居るんだ。
彼奴は注意深く己れの蹄の音の緋高さに
きき耳を立てゝ居るんだ。
是れは圓形の演技場であつたぢやないか。
ぺかぺかと己れの馬蹄に
善良な自慰をまろばせて居たのではないか。
おゝ過役に曲んだ脛だ。
赤味に剝げた背骨だ!!
彼奴の愚鈍な眼が、彼奴の空虚な明日の日に向つて、

生き死にの境を越へて、
女は今日も室の中に
肋骨のひだを數へながら
荒々しい季節の壓迫に耐えてゐる。

バサリ

――そうそうと鳴る青葉の層を抜け落ちる――
あはれ病葉のひゞきではないか。
しみじみと湧き上る落伍の想ひをかみしめて
女は今日も病み細つた胸に
々しい明暗の姿を畫きつゞけてゐる。

見ろ！
烈しく燃えきるばかりぢやないか
人間よ！　好加減茶化すのは止せ!!
何時まで、驢馬が痴鈍な動物であると云ふのだ。
痩つぽちの彼奴の腹の中で
逆まく怒吼が聞えないのか？
夕暮れると夢のやうな乾草を喰らひ
甘い匂ひの嘶きをいなきもしやうが
驢馬のどてつ腹は、たゞれた流血の花が
いつぱいなんだ。
空氣を引裂く鞭のしたに、人間よ!!　見ろ！
夜明け前の突風ぢやないか。



貰き御事業

——大都市の一角で、百貨店のやうに膨張して行つた私立女學校の話——

大谷藤子

——そんな金を頼めるもんか。

私は、呟やきつゞけるのだ。激しい咳が、胸をちぎるかと思はせる。吐き捨てた唉は、舗道で、べチヤツと大きくひろがつた。その青味がかつた白い粘液から、漠然とした不安が、心の奥底へ染みこんで來た。私の頭の中を、ちらと、體溫器が細長く通りすぎた。私は、苛立たしくなつた。私の肺臓は、腐敗しかけた二つの果物に似てゐるではないか。

夕食のお茶は、解りきつてゐた。鯖の煮付け一皿だ。その時、校長は奧の室で、洋食の皿を疲れるまで取り換へてゐるだらう。五十人近くの寄宿生だ。彼女らが、毎月納める舍費は、校長の小遣をいよいよ潤澤にしてゐる筈であつた。

——大勢で飯を食うのぢやから、しよつぱなのうちは、腹一杯にするのが、まこと氣がねで仕方なかるまい。コツソリと、蕎麥屋へでも行つて、うどんの二杯も食うたら腹の足しになるであらうがな。田舎者は、何ごとによらず遠慮なもんぢや。

私を寄宿舍へ殘して歸らうとする時、父は唯一の注意として、この言葉を云つた。

二年ほど前のことだ。父は私を連れて、上京した。私は、大都會の青白い群衆の中で、始めて、父の膚の色を恥ぢた。それは、何十年の月日を働きつゞけて來た百姓の膚だ。鈍く緩んだ褐色で、ところどころに小さい斑點があつた。都會の中で見る父は、石のやうに重たげで愚かしかつた。私は、彼が俄かに聾になつたのではないかと、

さへ疑がつた。彼は、一さう年老いて見えた。彼はよろ〳〵と頼りなげな歩調で歩いた。電車の中で、彼は、幾たびか横倒れに倒れた。人々の嘲笑を感受しないほど、父の瞳には光がなかつた。彼の手は、麥や土を扱ひ馴れて、ガサガサに固くなつてゐた。彼の頭は、いつも高い税金に脅かされ、天候の不順と、大地主の狡猾と尊大さに、押しひしがれてゐるのだ。

――百姓が歩いてゐる！

銀座であつた。私は、この言葉がグンと胸を衝くのを感じた。その時、父は、飾窓の前に立ちどまつてゐた。頸を〆めつける程、秩父銘仙の衿を固く合はせてゐた。周圍を見廻せば知識の洪水だ。

父は、小學校の教育さへ、完全に受けてはゐなかつた。彼は、遺傳的に百姓であつた。私は何時のまにか、都會の群衆の中に割りこまうとしてゐる自分を感じた。そして、父の後姿に冷笑を送つたのだ。十七歳の私であつた。誇りが欲しかつた。併し次の瞬間、私は父の側へ走り寄つた。私は、彼の右手に縋りついた。

――淋しがることはなかるまい。

父は低く呟やいた。左手に持つた古いメリンスの風呂敷包をわざと、元氣さうに振つてみせた。その包の中には、母へ土産のコートが入れてあつた。私は、そのコートが十五圓あまりだと聞いた時、父が狼狽して斷念するだらうと信じた。けれど、父は默つて、太い不恰好な指を鈍感に動かしながら、尙、そのコートをいぢつてゐた。そして、長い紐のついた大きな蟇口を取り出した。

――お前らがゐなくなつて、お母さんは力を落してゐるであらうがな。

父は、そこで子供のやうに笑つた。

私は、母の手に渡される、そのコートを懷しく思つた。母は、肥桶さへも擔ぐのであつた。彼女は、菜の葉や大根を漬けた。大豆を煮て味噌をつくつた。自分たちが金持になれないのは、まだ何處かで生活に贅澤をしてゐるのだと、彼女は信じてゐた。金持になるためには、粗食して働くよりほかはないと信じてゐた。

釜の底に殘つた飯粒を、一粒一粒、ていねいに拾つて食べてゐる母の姿が、私の目の前でチラついた。

――お前らの髪は、おかしう見えるがな。早く工夫せんと、田舍者だと笑はれるに違ひなかるまい。

銀座を通りすぎた時、父が云つた。私が驚いて彼を見あげると、相かはらず、その瞳はドンヨリ濁つてゐた。父は橋の上で立ちどまつて、脂だらけの煙管を取り出した。

――お前らが、早く學校を卒業して、女學校の先生になつて呉れたら、わしらは、どのやうに助かるか知れん。

父は、この言葉を繰り返すのだ。彼は、親らしい慈愛と、投資者らしい打算とをもつてゐた。二年あまり後には、娘が相當な俸給生活者になることを信じてゐた。頼りになる娘にするために、彼は、

金を注ぎこまうとするのであつた。
彼が選んで呉れた學校は、私立山田裁縫女學校であつた。そこに、二ケ年卒業の中等教員養成科と云ふのがあつた。卒業生は、文部省の検定試験に合格すれば、女學校の裁縫教師になれるのだ。しかし、その合格者が、五十人位の級から、二人か三人しか出た事はないのであつた。父は、私から其の合格を期待すると云ふのだ。
私は、裁縫が好きではなかつた。針箱を見ると、頭痛がして來た。三十分も縫ひつゞければ、肩が固く凝つた。けれど、それにしてさへ、百姓より結構な職業ではあるまいか。私は、百姓は厭だ。私の血管には、まぢりつ氣のない百姓の血が、流れてゐる。だから、私は誰よりも、百姓の惨めさを知つてゐる。粗食と大食とで、生涯を營養不良で終るのが彼等だ。そして、あらゆる社會層の下積みになつて、生活の餘裕を見失つてゐる。全身に、虻が食ひついてゐるやうな姿だ。
私は、養成科へ入る前に、半年ばかり豫科で勉强した。
全校の生徒は、朝の一時間目に、運針をすることになつてゐた。手拭へ短かい針を突き刺して、兩肩を張つて身構へた。
——運んで！
教師が聲をかけると、若い娘たちは、颯つと兩手を振りはじめる。頭を左右に搖するものもあつた。手拭が、掌の中で無數の襞をつくつた。終つたものが素早く手を擧げる。
——一、二、三、四、五、……
手を擧げた生徒を、教師が數へるのであつた。二十名ぐらい數へると、また初めから、やり直す。私は、曾つて一度も手を擧げたことがないのであつた。教師たちは、私の存在を忘れがちであつた。
しかし、私は今養成科の生徒であつた。
苦しい咳が突き上つて來た。私は立ちどまつた。腰を折りまげると、肋骨を突つ切る様な咳が續いた。その後は又粘つこい咳だ。
——とても、そんな金は頼めない！
私は、再びその事を思ふのだ。山田裁縫女學校では、校舍を増築し様と計畫してゐた。そこで大々的な寄附金募集が始まつた。
——一口、二十圓。但し、五口以上、御寄附の方には數ケ月にかけて、御分納の便宜をはかります。
これは、卒業生一般に向けられた募集であつた。發起は、校友會と學校後援會の名だ。
——皆様。校長先生の貴き御事業を、心から、お手傳ひ申しあげやうではございませんか。私どもは些かなりとも、先生のために、母校のために、お役に立てば本望であります。勿體ない話ですが、校長先生は、最近、夜もろくろく御休息なさらず、御奔走あそばしていらつしやいます。先生に、そのやうな俗事で御心勞をおかけすると云ふことは、私どもの恥辱でございます。私どもは結束して奮起し、今回の一切の費用を負擔しやうではありません

か。そして、校長先生の光輝ある御事業の完成を祈りませう。御慈愛深い先生は、愛する教へ子に迷惑をかけたくないと、固くおつしやいます。しかし、どうして私たちが默視できませう。そのお言葉に對してさへ、感奮して、出來るだけ多くの負擔を負ひたいと願ふのは、教へ子としての自然の人情でございます。

と云つたやうな刷物が、無數に送り出された。在校生にも配布した。多額の寄附者に對しては、今後、學校の相談役としての特典を與へると云ひ出した。

ある山間の小學校に奉職してゐる一卒業生は、これから一年間、俸給の一割を寄附しやうと誓つた。結婚した若い妻君は、持參金の一部を割くと云つた。山田裁縫女學校は、それらの金を貪り吸ひこんだ。まるで、二十圓の小爲替を食ふ生物に見えた。

忠實な三十七歳の教師がゐた。老孃らしい疲れた顏に、追從笑を浮べて云つた。

――これは、勿論在校生だつて默つてゐる筈がありません。

彼女は、裁縫が巧みであつた。たゞ、それだけの理由で教師なのだ　黑板へ書く字が、たど〳〵しいので、生徒が見かねるほどであつた。セルの袴を引きづるやうにはいて、小刻みに、ちよこ〳〵と歩いた。動くのが見えないほど、薄い唇が、よく動いた。蔭口と理窟とが、趣味であつた。生徒たちは「雀婆さん」と云つてゐた。

二日後に、雀婆さんは教員室でイキナリ叫んだ。

――まあ、私の生徒をほめて下さいな。私が何も云はないうちに、學校の爲に寄附をしたいと申出たのですよ。ほんとうに、何て純情なのでせう。私はしみ〴〵自分の教育の效果を感じましたわ。

そこで、彼女は一段と聲を甫高くした。

――寄附したいと申出た生徒は、揃つて成績のいゝ子ばかりですよ。これは何を意味するでせう！

他の教師たちは、雀婆さんの言葉に火を點けられた。彼女らは早速、次の時間の豫定を變更した。そして「校長先生の貴き御事業」と「母校に對する生徒としての義務」について、しやべつた。

在校生の寄附は、決定的なものになつた。一時に拂ひ込めない者は、月額二圓以上として分納を許すと云つた。特別な事情のある者は、教師に申出て、許す範圍で出金する樣にと云ふのだ。總てこれらの寄附金は生徒の自發的行爲であると、教員室では宣傳された。

教師たちは、暗默の間に一つの競爭を始めたやうに見えた。雀婆さんは、一層、おしやべりになつた。彼女は金持の娘らしい生徒には、諂らう事さへ平氣であつた。出來るだけ、自分の手で、多額の寄附金を集めやうと、教師達は露骨に焦燥した。いつの間にか、「校長先生の貴き御事業」は、轟々と、校内に渦卷きをつくつた。

――私には、そんな義務はない！

私は、父の百姓姿を思ひ浮べるのだ。

恥づかしさのために、腹一ぱい食べられなかららうと、父は云つ

た。しかし今は、それとは別な意味で、腹一ぱいではないのだ。

またしても、私の末梢的感傷だ。

――よし、右角の蕎麥屋へ寄らう。

そして、寄宿舍へ歸つたら、餅一皿を輕蔑してやるのだ。

外では、濕つぽい黴風が流れてゐた。

六月であつた。曇り空が、何日つゞいたことだらう。

この季節になると、山田裁縫女學校の寄宿舍は、一しほ濕氣に悩まされた。暗い、饐えたやうな古い建物であつた。五十人近くの若い娘たちは、階上と階下に分れて、四つの室に、雜然と寢起きしてゐた。これらの室は、晝間は教室に使はれた。裁縫用の低い細長い机は、片隅に、高く積み重ねることになつてゐた。放課後になると、寄宿生たちは、糸屑だらけになつて、ゾロゾロと廊下を歸つて來た。縫ひかけの着物を、大きな風呂敷包にして抱へてゐた。刺繍臺を提げてゐるものもあつた。

その時、寄宿舍には、まだ人いきれがムーッとするほど殘つてゐた。疊の間には、綿ぼこりが、黒ずむほど積つてゐるのだ。寄宿生たちが歩く度に、煙のやうに埃が漂つた。彼女らは、勞働したあとのやうな疲勞を、全身に表情させながら、グッタリと休息した。

階下東側には、窓が二つしかなかつた。窓と摺れ摺れに、朽ちかけた塀だ。指で押すと、塀が、ボクンボクンと凹んだ。濕氣のために、いつも白つぽく黴びてゐた。夕方になると、塀越しに、胸が疼くやうな下手なヴイオリンの音が聞えて來た。夜になると、私は其の窓ぎわに床をのべた。そこは、二日も物を置きつ放しにすると、疊に黴が浮いた。私は、窓をあけないことにしてゐた。鬱積した不快な臭氣が、室内に流れこむからだ。

西側は、鍵の手に緣側をめぐらせてゐた。そこに狹い庭があつた。散歩する事も出來ないほど狹かつた。上草履で歩けるやうに、細い板が張りつめてあつた。山田裁縫女學校の唯一の庭なのだ。

ある朝、私の兩腕に、赤い斑點が幾つともなく浮き出してゐた。

――南京蟲だ!

誰かゞ云つた。病的な痒さに、私は顏を引つつらせた。爪でボリボリ掻くと――地圖を浮き彫りしたやうに腫れあがつた。このために私は、一日、神經を疲らせた。

その同じ朝、一人の寄宿生が昂奮して駈けて來た。

――まあ、校長先生が便所のお掃除をしていらつしやるのよ。

瞬間、若い娘たちの顏を、感動の表情が通りすぎた。私だけが、南京蟲に刺された痕をボリボリと掻きつゞけながら、冷たく白々と笑つてゐた。

――皆さん、早く行つて、校長先生にお禮をおつしやい。

舍監の野村が叫んだ。彼女は二十年も前から、山田校長の手傳ひをして來た。その頃は、まだ「御仕立物所」と云ふ看板を下げてゐ

たのであつた。若い娘が、七八人通つて來た。そして、山田女史のことを「お師匠さん」と呼んでゐた。

舍監としての彼女は、あまり嚴格ではなかつた。彼女は、日曜毎に教會へ通つてゐた。寄宿舍の中を、讃美歌と祈禱で充したいと、口癖に云つた。そして、誰も不平を云はず、祝福と感謝に溢れるやうにと神に祈るのであつた。ある夜、私が教室へ忘れ物を取りに行くと、闇の中で、人の氣配がした。

――誰？

と問ひかけられた。舍監の聲だ。彼女は、そこで祈禱をしてゐたのであつた。寄宿生たちは、舍監に媚びるために、教會へ通つた。信仰のためであると云へば、多くの自由を得ることが出來た。夜だつて、快く外出を許された。少し位の過失は、勘忍して貰へた。私も、その自由が欲しさに、教會へ通ふことにした。牧師の說教が初まると、私は、直ぐ居眠りをするのであつた。營養不良と、不健康から來る疲勞が、激しい眠氣を誘ふのだ。

教會の若い青年たちは、四十五歲の舍監に接近する風を裝つて、寄宿生に近づきたがつた。彼等は、十字架の毒氣にあたつて、病的にセンチメンタルであつた。白痴かと思はれるほど、感情の技巧を知らなかつた。

すべて寄宿生は、遠い田舍から出て來てゐた。濕氣の中で、田舍訛りを次第に振り落して行つた山田裁縫女學校には、寄宿舍の設備はないと云ふことになつてゐた。特に、寄宿するところのないものに限つて、教室の一部を解放すると云ふのだ。恩惠的であつた。そして舍費は、他の學校のものと同額に徵收してゐた。

寄宿生たちが困るのは、縫物の材料がないことだ。しかし、それは事務所で貸して吳れることになつてゐた。事務所では、仕立物をドン／＼受けて、生徒に縫はせることにしてゐるのだ。仕立代は、學校として馬鹿に出來ない收入なのだ。

舍監の野村は、校舍增築の寄附募集には最も熱心であつた。彼女は、卒業生の家々を訪問して步いた。「神の御名にかけて」彼女は、この寄附が意義ある貴いものだと、宣傳した。彼女は、校長先生の貴い御事業とは、決して云はなかつた。山田裁縫女學校の芽生へ時代から働いて來た彼女は、增築のことを、自分自身の問題であるやうに、習慣的に考へたのだ。

夜、私は二階へのぼつた。またしても、十八歲の氣まぐれなのだ。暗い教室から、輝やく電車通りを見おろすつもりであつた。

私が、窓ぎわに寄らうとした時、二つの黑い形が、ひそかに動き出した。私は、ハッと驚いた。咳が、同時に込みあげて來た。

雀婆さんだ。他の一人は同級の細川といふ娘だ。美くしい少女だと噂されてゐた。寄宿生たちは、彼女を奪ひあつた。彼女の布團に、幾つかの瞳が吸ひつくのだ。

十日あまり後に、試驗問題が洩れたと云ふ噂が、波紋となつて校

内にひろがつた。

——細川さんよ。

——まあ、きれいな人は違つたものね。

細川は、噂の渦巻きの中で、窒息しさうに苦惱の表情をしてゐた。柔かく白い顏が、壁色に疲れて見えた。

再試驗を要求しやうと、生徒は騷ぎはじめた。彼女らは、嚙みつきさうに、氣が荒くなつた。四五人づゝ寄り集つて、ひそ〱と、顏を紅潮させて、重大げに語りあつた。しかし、私だけは默つてゐた。私は、それとは別なことを思つてゐた。まだ、寄附金のことを申出てゐないのだ。それは、恐らく私一人かも知れなかつた。

——私には、出來ない！

私は、同じ事を呟やく丈だ。百姓娘らしい物惜しみの心であらうか。再試驗を要求するより、私は舍費の値下げを要求したかつた。

山田裁縫女學校生は、卒業生を教師に引き上げる習慣があつた。それらの若い教師たちは、寄宿舍に寢起きしてゐた。彼女らは、小遣にも足らぬ月給を貰つて働いた。そして思ふ存分、學校の膨張力を手傳つた。寄宿生たちの納める舍費の中の食費は、これらの教師と、校長の家族の食事を生み出して、尚、餘裕があると云ふのだ。そして、學校では、この教師たちの俸給から、嚴密に、食費を差し引くことを忘れはしなかつた。

七月であつた。

同窓會が開かれた。この機會に、寄附金を倍額にしやうと、雀婆さんは力んだ。彼女は試驗問題のことで、氣を腐らせてゐた。生徒が、ひそかに穩やかならぬ結束を固めてゐることを、彼女は、感づいてゐるのだ。そして氣味惡がつた。

——赤い思想が入りこんだのですよ！

と、彼女は結論した。

想像もしなかつたほど、同窓會には、少數しか集まらなかつた。この少數さと、寄附金募集とに、太い連絡があるやうに噂された。

——うちの生徒は、種が惡いからね。

校長が、さう呟やいたと、誰かゞ云つた。

學校に隣接した數十軒の家は、校舍を增築すると云ふ聲が起ると同時に、その價格を暴騰させて行つた。學校が交渉を始めた時は、半年以前に較べて、三倍半の價格になつてゐた。そこで校長は、郊外地に分校を建てやうと計畫した。自分の娘を、その分校で働かせやうと決心した。現在、山田裁縫女學校は、夜學生をも數へると、千人程の在校生を呑込んでゐた。「校長先生の貴き御事業」は膨張しに膨張するのだ。梅雨があけてから、私の體溫は三十七度五分から下らなかつた。私は靑ざめ、次第に衰へて行つた。全身が凋んで行くのを感じた。校長が、文部省の屬官と、午前一時頃、自動車を走らせてゐたと云ふ噂を、私は體溫器を握りしめながら聞いた。今は寄宿舍の埃りと濕氣だけが、私の神經の焦點であつた。

女を連れに行つたルミ

大田洋子



紫いろを帶びた靄が、巨大な建物の竝んだ港灣附近の薄闇を這つてゐた。と、三人連れのかたまりが、浮き彫にされたやうに、靄をくぐつて、金陸公司の倉庫の角を曲ると、古めかしい異國風な高いビルジングの前へ出て來た。二人は未だ若い靑服を着た、たくましい體付の職工で、それからもう一人は女で、これは又純白のベロアらしいオーバを細い體にぴつたり喰つつけてゐた。そして同じやうに白いベレーハットを、氣輕に斷髮の上に乘せてゐるのである。

三人は無言で舊突堤の方へゆつくりと步いて行つた。波止場の廣い十字路の隅々には、幾軒かの關東煮屋の屋臺が竝んでゐて、顔の半面に赤々と灯を受けた勞働者が、もうもうとほけの立つ關東煮を口に運んでゐた。その中にはロシア人らしい若い勞働者も交つてゐた。彼等は芝居に出て來る勞働者のやうに、白々と秀でた横顔を、湯氣の中に朦朧と浮べ乍ら、日本人の仲間と肩を摺りよせて、若い娘と散步でもするやうに步いて行く三人連れの方へ明るく振り向くのだつた。十一時をすぎた突堤には人影が無く、たゞ夜目にも黑々と川崎造船所の建物が、港の波に影を落してゐた。

『あゝ、川崎のドックが見える』

娘はつぶやいた。男達はだまつてゐた。男達の胸には、異狀に膨れ上る資本力の蔭で、喘ぎ鬪ふ數百の同志の姿が押しよせてゐた。

潮の香は甘く、碇泊してゐる船の灯が無數に重なり合ひ、華やかな街の夜景のやうだつた。

突堤のはづれまで來ると、肩許り横に張つた、口元のしまつた男が、さつきからの話しのくり返しらしく云つた。

『だから、いまいましいつてんだ』

娘は珍らしさうに靑い星を見てゐた眼を、その田中と云ふ、快活なものゝ云ひ方をする男の方へ流した。

『監督の尾川の奴め、工場主がのろまだからつて何も、七臺の機械で、十臺分の金をせしめやがることあないぢやねえか。方々と結たくして、修繕もしねえ機械を修繕したことにしやがるし、だから、どしどし、機械と人間とを置きかへやがるんだらう』

『機械は文句を云はねえで動かし放だいだからいゝやね。いくらあいつ等が、俺等を、鐵か電氣見てえに思つてやがつても、勞働者の證には眞赤な血が流れてるんだ』

脊の高い、やたらに血の氣の多い情熱を押し包んだやうな眼を持つた福澤は、突つ離すやうに云つた。

『尾川の奴が、資本家の肚から何を搾り出さうと、俺等に關りのないことだ』

『さうさ、俺等は、俺等が搾取されることを防げばいゝのさ、だが彼奴のことを俺等の仲間が知つてるんで、ことのついでに脅かしやがるのさ』

『大丈夫だよ。あいつも自分が一番大事だよ』

『何て脅かすの尾川の奴』

小娘は福澤の眼に似た大きい眼を、きらりと輝かせた。

『俺たちの運動をだよ。彼奴の不正をこつちで發くと、俺等にビラ一枚すらせねえつてのさ。交換條件さ』

『いゝ面の皮だ。資本家こそ。だけど、私たちは、やれるところまでやるのよ』

『聲が太えや、馬鹿野郎』

福澤は荒い聲で、だが微笑をふくんだ眼で小娘をたしなめたが、直ぐ苦々しげに火のついてゐる短いバットを吐き捨てた。

『又、怒り出したわ。兄さんは、だんまりが一番好きね。だけど、いやな尾川ぢやないの。知つてるの、あたい達のやつてること』

彼女は女工上りの美しい踊り子で、踊り子名をルミと云つた。ルミは港の町の踊り場でかせいだ金を、一つの鬪爭組織に向つてゐる兄や、勞働者達にみついでゐた。

『さうさ、よけいなことを感付いてやがるんだ。肝心の、人間の首のこたァ知らねえ振りをしやがるくせに』

今日はルミの公休日なので、彼女のおごりで、さつき、安つぽい支那料理屋へ入つて、酒を飲んだ田中は、工場の中の蒼白さを捨てゝ元氣だつた。

『止せ止せ！もう歸らうぜ。お前たち見たいに、ところかまはず、ぼか〳〵よけいな事をしやべる奴あ、同志として質がよくねえや』

福澤はこそりとして、オーバのない肩を怒らせ、海の方へ脊を向

けて、大股に歩いた。

それでもルミは輕く笑つて、細い聲で話しつゞけた。

『ね、兄さん、いよいよとなれば、あたいもう一度女工になつて、實際運動に役立つやうになりたいの』

『女工になつて、もう一度、工場主や、そいつの息子に口說かれりや世話あねえ。桑原、桑原だ』

福澤は苦々しく笑つた。

『ルミは踊場の金持ちを相手に働いてゝくれりやいゝんだ』

『安心して働けつて云ふけど、つくづくいやだあ、プルジョアつて奴あ。どれにしたつて金持ち相手は辛いねえ。ひとを小馬鹿にする神經しか持たない男たちに抱かれて踊らなきやならないなんて』

ルミは紅の濃い唇を嚙んで、思ひ返したやうに石を蹴つた。

二

稅關の前の廣い十字路には、まだ靄が低迷してゐて、赤いポストが浮いて見えた。タクシーがぎつしりと竝んでゐるオリエンタルホテルの大玄關前を通つて、三人はさつき通つた支那人街のせまい露路へ入つて行つた。支那料理屋のレッドランタンは赤さを增し、支那食料品店には、動物的な奇怪な食料品材料が、むせるやうな匂ひを發散させ乍ら、重なり合つてゐた。

その露路からは、繁華な榮通りへ拔ける細長い幾つもの通りがあつて、その通りには又變に色つぽい毛唐好みの家が、バアのやうな形式で竝んでゐるのだつた。そう云へば、どこからともなく支那街から流れ込む特有な匂ひの外に、强い煙草の匂ひや、安つぽい香料の匂ひや、女の股の匂らしいものなどが、たしかにそれと分る程濃くたゞよつてゐるのだつた。

それ等の家々は、寢てゐるのか、起きてゐるのか分らないやうに、そつとひそやかに呼吸を低くめてゐた。

『おい、こゝ等に例の女が、巢を喰つてんだぜ』

田中は今擢つたマッチを、焰のついたまゝ赤いカーテンの下りてゐる小さい窓めがけて投げつけた。マッチの火は微風のやうに流れ落ちた。

『そうかい。尾川が月賦で買つた女か』

福澤は面白くもない、と云ふ風に、なまめかしい色電氣の光が流れてゐる洋風の二階へぢろりと一べつを呉れた。

『月賦で女？　どう月賦でさあ？』

ルミは思ひ切り眼を見張つて訊いた。

『あの監督のやりさうなことなのさ。あいつはこんなところへまで女を買ひに來るんだからね』

『こゝ、女を買ふところなの』

ルミは事情を知らない娘らしく卒直に訊いたが、彼女の智識の中から慘めな憤慨が反り上つて來た。

『こゝらの變な家は、みんな淫賣屋なんだ。お前と同じやうに、貧

乏に生れついた女が、體を賣つて生きてるところだ』

福澤はふと、興奮を押さへるやうに口を閉ぢた。

『そいで尾川がどうしたの。月賦つて何？』

『尾川がこゝへ來て、とても蒼い顔をしたやせた女をからかつてゐたんだとさ。すると女將が、ぜひその女を買つてくれつて頼むのだそうだ。尾川は、とてもやせて小つちやいその女を買ふ氣がしねえんで、どこまでも、いやだで通したんだそうだがね。しまひに、その女が自分で、まるで手を合さん許りにして、本當に私を買つて頂戴、毎晩、毎晩、私だけは誰も買ひ手がないんだもの、とにかく安くしとくから買つて頂戴よ。などゝ涙ぐんでゐるんだとさ。そこで尾川の奴、冗談に、そいぢやあ、月賦にして、それなら買はう。そして、今月一げい買ひに來やうと、云つて見たそうだ。金は來月から月賦だ、そのかはり、通ひを作つてくれ、俺が來なければ、誰か外の者を買ひによこすから、とぬかしたそうだ』

ルミの眼尻が赤く血走つて、下を向いたまゝ動かなくなつた。

『結局どうしんだい』

福澤がいまいましそうに訊いた。

『恐ろしい奴さ。本當に月賦で拂つてやがるそうだぜ。工場の下らねえ奴等に、手柄話しのやうに話してるよ』

『そうまでして、賣らなきや、いけないの』

『そうさ。賣らなきやあ、死ぬぢやあないか。自分で死ななきやあ、殺されちまふのさ』

『本當の話しかしら。いやな話しね。あたい、汗をかいちやつた』

ルミは、肌に風でも入れるやうに、オーバーの胸を開いて大きく吐息をした。オーバーの中は、ひなげしのやうな赤い布で包んだ栗(くり)色の若々しい肌だつた。彼女は踊り場で着る眞赤なイヴニングの胸を張つて、細い露路から抜けて、榮通りへ出て來た。

だが饒舌家の田中は、その話しにはもう直接の興味はなさそうな福澤とルミとの間へ割込んで、もう一度未練らしく話すのだつた。

『その、とてもあごの短けえやせた女つてのを、俺は一度見たんだよ。その女、自分で尾川のところへ金の請求に來てゐたつけ』

三

或る朝早く、田中は、外人の多い山の手の坂になつた通りを歩いてゐた。そこ等のどこかを曲ると尾川の妾宅がある筈だつた。冬近い風が吹いてゐて、御用聞きらしいものゝ外には、銀色に光る髪をした小さい子供を乘せた黒塗りの優しい乳母車を引いて坂を下る、支那人の女中の頭髪をくくつた赤い紐が目につく位のものだつた。

田中は色々な秘密や、こんたんを持つた尾川に呼びつけられてゐたのだ。田中は又、それを幸ひに初期の手段として尾川に通じて、工場主に傳へたい要求を、勇敢に云つて見る積りでやつて來たのだつた。田中は坂を半分以上も上つたところで、敎へられた通りに左の通路へ曲り込んだ。探偵小說にでも使はれそうな、人氣のない小

さい古びた洋館が押し合ふやうに竝んでゐた。

田中が、紅葉した唐蔦のからんだ洋館の、薄みどり色の壁のところまで來た時だつた。一人の女がまるで壁のいろとあまり違はない蒼ずんだ姿で立つてゐるのだつた。田中はその蒼白い細さに、ぞつとした。薄い唇だけが赤く、眼は擴大して、顔の輪廓の外まで切れてゐるやうに暗かつた。彼は女につけた視線のやり場に困つて、その家の表札を見上げた。尾川寓と、それは如何にも、尾川の女の素性をでも語るやうに、氣障な表札が目についたのだつた。

『あゝ、こゝか』

田中は直ぐ扉を押して見たが、まだ一度も開けた事のない門のやうにかたく閉ざしたまゝだつた。

『あ！兄さん、あんたも、こゝの家へ來たの！どうしても開かないのよ。私一時間餘りも立つてるんだけど』

女は田中を兄さんと呼びかけ、甦つた犬のやうにじやれて來た。

『今、幾時かしら。隨分寢ぼうならうちね。あんたも尾川さんに用があつて來たの』

女は黒い毛を女學生のやうに小さく、引つくるめて、黒つぽい垢じみたちりめんの袷の上に、朱色の繻子の帶をくる〳〵と巻いて、羽織も着ないでゐた。そして、薄い素足に、紫いろの鼻緒のついたキルク草履を片方と、フエルトの古びた赤緒の草履とを片々に履いて、爪ののびたほんのり赤い爪さきをちゞめてゐるのだつた。

『俺も用があつて來たんだが』

田中はぶつきら棒に云つて、しみ〲と女に目をくれた。

女は死んだ人間を立たせてあるやうに、身動きもしないで、しばらくだまつてゐたが、儚なげに眼を空に据ゑて云ひ初めた。

『私ね、お金を取りに來たのよ。どうしても貰ふ金なんですもの。何だの彼だのつてくれないの。二號をこんな家に置いとく金があれば、可哀相な私達に、少し位、投げつけてゞもいゝから、呉れてよこしてもいゝと思ふんだけど』

女はまるで、病死する前の紅雀のやうに、枯れ果てた中に僅かな美を持つて身をもだへてゐた。

『それにね、昔、生んだ私の子供、よそへあづけてあるんだけど、その子供、今、チブスで死にかけてゐるの。今すぐお金を送つてさへやれば、助かるんですつて。でも私、一錢の金も自分のものはないんですもの。お金がないばつかりに、子供を見す〳〵死なせるなんて、私、辛いの』

女の眼は涙をためて、涙をかくすために横へ流れた。

『そいつあ困るね。だがな、俺等の階級は今に、自分の子供へ對する愛慾をも淸算して、鬪ふ時が來ると思ふよ』

田中は相手の弱々しさに却つて興奮を强ひられてゐた。女はもう一度門の扉を、こんこんとたゝいた。

『やつぱり駄目よ。ぢやあ私、仕方がないから歸るわね。夜は出ら

れないし、晝間はこんな不景氣な様子では歩けないから、朝早く來たんだけど、ぢやあさよなら、あんたは待つてるんでせう』
女は、小首を傾げておじぎをすると、鼻緒のゆるい片ちんばの草履を引いて廣い通りへ出て行つた。田中も工場へ出る時間なので、咽喉へ塞るやうな憤慨を持つたまゝ、女の後から歸り初めた。
廣い通りへ出ると、目の前には角から角まで一丁半もあるやうな日本風の豪奢な邸宅があたりを拂つてゐた。高く廻らされた灰色の塀には深々として秋色を帶びた樹々の蔭影が層をなしてゐた。
『まあ！　こゝ等はみんな、隨分大金持許りなんでせう？』
女は漂々と歩いてゐたが、後から來る田中を待つて、何かそこらから受けた壓迫に、自分自身を笑ふやうに、鼻の先きで、ふふ、ふふ、と笑つて見せた。
『昔、私に子供を生ませた人つてのも、とても金持ちだつたの。だけど私が下宿屋の娘だからいけないつてんで、子供まで一緒に捨てちまふんだもの。私、相手が貧乏人だつたらこんなにまで、落つこちはしなかつたと思ふの』
瞬間に彼女の眼は、怒りを帶びて輝いた。そして彼は直ぐ次に眼に寫つた情景に見とれてしまふのだつた。
『まあ、シーンと。子供たちが遊んでる』
そこには日本の子供と、支那の子供と、毛唐の子供とが、日本語で大人の歌ふ唄を朗らかに眞似乍ら、喜嬉として遊んでゐた。
『三國同盟だね。子供は何も知らねえからな』
贅澤な洋服を着た子供も、八百屋の鼻たれ子も、紫色のぶくぶくした支那服を着た子供も、手をつないではね廻つてゐるのだ。
階級を知らない子供達を田中と女は違つた意味で珍しがつた。
『私、子供が羨しいわ』
女は何かにつけてすぐ泣けて來る程弱々しくなつて涙の光つて來た眼で、初めて甘へるやうに微笑しながら田中の眼を見詰めた。

四

田中から其の話しを聞いてから二日目の、踊り場へ出かける前に、ルミは思ひ切つて、その女のゐる家をさがし出した。
だがそこの女將は、まるでその女が樂しさうに紅葉狩りにでも行つたことのやうに、女の死んだことを教へたのだつた。ルミは、化粧した顔の眞ん中を故もなくひつかゝれたやうな絶望的な侮辱を感じた。肚の底を卷きあげるやうに上つて來る暗涙を嚙むと、髮の毛が熱を帶びて、一本一本立ち上るのを感じた。彼女はそれでも、大丸髷の愛相のいゝ女將に、彼女も踊り子らしい愛嬌を見せて云つた。
『あのひと、私の從姉妹なんですよ。ねえマダム、すみませんけど、せめてあのひとの居た部屋だけでも見せて下さらない！』
『えゝえゝ、どうぞ。うちは皆一部屋づゝ持つてるんですから。それにあの子、やつぱり肺で失くなつちやつたので、當分誰もあの部屋に入つてくれないんですよ。だから、そのまゝになつてます。そ

こから上つて下さいな。』

女のゐた部屋へ入ると一番に、消毒劑の匂ひが、强く胸を突き刺した。藤いろのシャンデリアが中央に下り、ベッドは部屋に比べて馬鹿に大きく、支那どんすのふとんが、ふんわりとかゝつてゐた。

ルミは、ふとんの中に、葉つぱのやうに蒼ざめて、ぺしやんこになつた女がひそかに生きてゐるのではないかと思つた。花模樣の壁紙をはつた厚い壁で三方を塞ぎ、一方の壁には、精巧な猥畫や、そこに不似合な外國の子供のプロマイドがはりつけてあつた。枕元の小さいテーブルには、枯れて白くなつたアネモネの鉢が冷く凝結してゐた。部屋の中は、甘つ酸つぱい腐敗の匂で充滿してゐた。

ルミは自分の胸の鼓動を聞いた。自分よりも、もつと貧しく不幸な女を、自分のところまで引きあげることは出來る筈だと思つて來たのだつた。自分が今までよりもつとはげしく、四肢がしびれることを我慢して踊りのチケットの額を多くすればいゝのだと思つた。

彼女はブルジョア娘の夢にも知らない憤激を以つて、一人の女の脱出を試みやうとしたのだ。だが當の女は死んでしまつてゐた。ルミは冷く一人の淫賣婦の死を嗅いだ。しかしそれは、一人の女が生れ乍らに持つてゐた運命の一つの型を踏み終へたのだとはどうしても考へられなかつた。――何かゞ惡いのだ。何かゞ一人の母性を娼婦にし、何かゞ靑春期の女をむざ〳〵と枯らしてしまつたのだ。ルミは鮮かに頭の中へ浮上つてくるものに向つて白い齒をむいた。

それにしても女は、一かけらの怨恨をも形の上に殘さないで風のやうに吹き飛ばされてしまつたではないか。床の下に、寢臺の中に壁紙の中に、無數の涙の斑點だけをでも女は殘して行つたと云ふのだらうか。ルミは、寢臺の鐵の足のところで片方が裏返しになつたまゝ轉つてゐる赤いスリッパを眞直ぐに揃へておいて寢臺へ近づいて行つた。彼女は幻影にかり立てられ乍ら靜かにふとんをはいで見た。すると、ふとんの中には、最後まで女が抱いてゐたものは、これだつた　だと云はぬ許りに、一尺五六寸の脊を持つた女の子の人形が、眼をふさいで寢かせてあつた。ルミは靜かに泣き初めた。

その次にはぎいつと扉の開く音がした。

『長くいらしちや駄目よ。死ぬ時はもうとても惡かつたんですからね。子供が死んだものだから、よけいに、がたつと來ちやつたらしいですけどね。まあ花でも供へてやつて下さいな』

女將の眼は艶々と媚をふくんでゐた。

『えゝ、どうもありがとう』

ルミはどこからともなく香水の匂のたゞよつて來る暗い廊下へ出て來た。そして踊り場でチケットを渡す紳士　やうに慇懃　、一枚の紙幣を女將の手に渡したのだつた。

『すみませんね。ぢやあこれでお線香だの花だのを供へますわ』

女將もぬけ目なく小走りに玄關へ下りて、ルミの小さい靴を揃へてゐた。



ある村の人々

合屋コズヱ

一

九州山脈の流れに添ふたその村の周圍には、巨大ないくつもの山が連座して圓い堤防を築いてゐた。山のふもとの其處彼處に、點々とした藁ぶきの人家は、秋の雨にぬれて腐りかけた茸のやうに、それぐ\しめつぽい沒落のかげを抱いてゐた。

村人達は、土から產れた生物のやうに、一切の勞力を土に奉仕して、その生涯をすごすのであつた。常に土垢で黑く汚れた、彼等の節くれ立つた指先からは、さうして働らいても尙苦しい、日頃の生活のにほひが、痛々しく流れてゐた。村人達の中にはまだ海を知らないと云ふものもゐた。汽車に乘つたことがないといふ人も多かつた。都會的な、プロペラのひゞきも自動車の疾走も、工場のエンヂンの騒音も、永久に訪れさうにないこの村の人達の生活は、依然として遠い時代の習慣と固く結びつけられてゐた。井戸のないこの村では、山から湧き出る泉を汲み取つてそれを飮み水に代へた。

人々は、朝起きると、百足(ムカデ)のやうに兩方から手の出た、ぺしやんこになつた藁草履を、前日の疲勞のぬけ切つてゐない、重い足の先に突つかけると、ひとつまみの食鹽をもつて近くの水の流れてゐる場所まで洗面に出かけるのであつた。每朝、村人達の顏を映す水の流れは、いつも無神經に澄んでゐた。顏を洗ふと、村人達は聖壇に立つた人間のやうな敬虔さで、東の山のくぼみに向いて、掌を大きく音立てゝ太陽を伏し拜んだ。

自然の偉力は、卑順な村人達にとつては不可解な脅威だつた。人間のつくつた權力に、永い間屈服させられて來た村人達は、無意識のうちに自然の偉力をすら怖れるやうに仕向けられてゐた。

『まあ、お前たちは、何するんぢや、お天道樣を鏡に映つしたりな

んぞしてみい、今に罰があたつて、めくらになつてしまうけ。』
小さな、鏡の破片を見つけて、それに太陽の光線を反射さしてよろこんでゐる子供達を捉へて、大人は眞顏で自然を怖れる心を注ぎ込むのであつた。

雷が鳴ると、人々はあはてゝ蚊帳を釣つてその中にかくれた。蚊帳を釣つてその中で線香をたいてゐると、そこには雷さまがは入つて來ないといふ愚な迷信を、人々は信じてゐた。かうした村人達の無智さから産れた幾多の迷信は、彼等自身の生活の底に、數知れぬ不幸の醱酵素として深く喰ひ込んでゐた。

――四月になると、毎年村の周圍の山には、赤いつゝじの花がこぼれるやうに咲いた。田や、畑の畔は、ゑんどうや空豆の花で、遠く、どこまでもうす紫に色彩られるのだつた。その年も順吉の家の傍の柳には、やはらかい春の陽がポカ〳〵もえてゐた。

近くの小川を、登り下りする目高は日増しに肥つていつた。すべては、明るく、朗らかに、移りかはつたなかに、順吉の家だけは、いつまでも陰慘な冬の世界に、置き去りにされたやうな、暗い不幸に包まれてゐた。この家の不幸の原因は、奥の納戸に終日苦惱にあえいでゐる、狂人の順吉の姉だつた。

ふた月程前に、村長の次男と、隣村の地主の娘との結婚がうはさされ出してから、順吉の姉の顔には、深い憂鬱なかげが刻まれて來た。ある日の夕方、順吉が母親に言ひつけられて、裏の菜園に大根を取りに行かうとすると、蒼い顔をした姉の香代が雞小屋の前にしよんぼり立つて、染め絣の前かけでそつと涙をふいてゐる。順吉は、十二の子供心に、誰も知らない姉の秘密を、うつかり自分がのぞいたのではなかつたかといふ輕い責めを感じた。

香代は、順吉の姿を見ると一寸ためらつたが、すぐとりなほして
『順吉、姉さんが泣いちよつたこと、お母つさんにも、だれにも云ふちやいけんで……』
さういつて、前下りに着てゐた順吉の袷を、腰あげのところをもつてやさしくなほしてやると、順吉のために、大根をとるのを手傳つた。順吉は自分の姉に對して、それまでにもつてゐたとは違つた別な新鮮な親しみを感じて、何度も大きくうなづいて姉に誓つた。

自分には何かわけは判らないが、ひとつの秘密を、大人である姉の味方をして、一緒に守つて行くといふことに順吉は小さなナイトのやうな、かうふんと誇りを感じた。

その夜、香代は結婚の噂があり出してから、ちつとも取り合はなくなつた情人である、村長の次男のところに、こつそり訪ねていつた。
『義男さん、義男さん。』
ひくい、けれども強みのある、香代の聲は、いつもと違つた緊張さで、相手の耳にひゞいた。
『――お香代か、びつくりするぢやないか今頃――』

あきらかに、不機嫌な態度を示しながら、義男が雨戸を開けると、部屋のランプの明りが、さつと、庭石のうへに流れ出た。

豫想はして來たものゝ、眼の前に直接男の冷淡さを見せつけられると、香代は急に自分の存在を情けなく思つた。香代の頭には、何も話し出さない先から最後の絶望が描かれた。

『お聞きしたいことがあつて來たんです。あげて下さい。』

行きがゝり上、香代は日頃使つたことのない他所行の言葉を投げてわづかな反撥を示した。けれども、それは、最初から敗北を意識してかゝる鬪ひのやうなものだつた。

『話といふのは何だね、あまり時間をとつて家のものに知れると困るからね。』

義男の言葉は、人事のやうに、他所〳〵しいものだつた。

火鉢の傍から、一間も遠ざかつて座つた香代の背中には、二月末の惡寒が、ぞつとするやうに應えた。

『義男さん、お嫁さんを貰らうと言ふのは、ほんとうですか――』

『そんなことをどうして問はねばならないんだ、そりやいづれ、結婚はするさ、いくら僕が結婚したつて、僕はおまえからとがめられることは何もないよ。』

『だつて、義男さん、あなたは私と――』

『おまえと交渉があつたから、僕あ他のものと結婚しちやいけないのかね、ハヽ…僕あ、おまえと結婚しやうなんて約束した記憶は一向ないがね。』

義男は平然として、無恥な言葉を、香代にあびせかけた。香代は、ひどいその屈辱を、じつとかみしめた。

『義男さん、あなたはそんなことがよう言へますね、夫婦になる氣もなしに、たゞ女をなぶりものにしたんですか、そして、そんな平氣な顔をして――』

言葉をしらない香代は、かうふんで顔を蒼くした。

『馬鹿だなあ、男がたつた一人の女をしつて、その女と夫婦になるものだと思つてるのか、そんなことを言つたら僕あ、これまでだつて何人もの女と結婚してなきやならんよ、藝者だつて、それから、この村にだつて、まだ一人や二人は、おまえのやうなことを言ふ女がゐないとも限らないよ、そんなことをむきになつて突つかゝつて來るのはおまえがまだ世の中を知らないといふものだよ。』

義男に取つては香代の存在も、それまでに自由にして來た數知れぬ女の一人でしかなかつた。

『そんな――そんな、義男さん金持で、學問のある賢い男は、そんな事を言ふのですか、私は貴方がそんなひどい人間とは……』

幻滅で打ちのめされた香代の兩眼から、失意の泪が、ポト〳〵落ちた。

『いくらでも、わるく言ふさ、貧乏な家に産れたおまえが、身分の違ふ僕と結婚出來るなど考へたのが、おまへの不幸なんだよ、僕だ

つて、おまへの都合ばかりも考へて居られないからね、家のこともあれば、自分の名譽も考へねばならないしね。』

相手をみつめてゐた香代の眼は憎惡にはげしく光つて來た。

『義男さん、言ふことはもうそれだけですか、あなたに言はれないでも私は、貧乏人の子だと言ふことは忘れたことはありません。それでも、私はあなたのやうに、お金もあれば學問もある偉らい人間のすることを習はうとは思ひませんよ、だれが、あなたのやうな腐つた人間と、結婚なんか――』

香代は、自分がすべてを許した情人の口から、眞正面に階級的な辱しめをあびせかけられたその羞恥に堪えかねて、疊に打つ伏すと聲を立てゝワッと泣き出した。

『おい、泣いちや駄目だよ、お香代――家のものに知れるぢやないか。』

義男は、あはてゝ香代の肩に手をかけやうとした。

『馬鹿ッ、さはつていらん。』

思ひきり相手の胸を突き放すと香代は暗い庭に向いて、一散に飛び出した。不意を喰つた義男は火鉢の角に當つてよろ〱とした。

母家から、庭を傳つてこそ〱はなれの方に出て來た飼犬が、だしぬけに飛び出した香代の姿を見つけると、驚ろいたやうに、後から、二三度大きく吠え立てた。

『しつ!!』

犬を制止する義男の氣配がした。

二

『お香代、また頭が痛えのか、分限者の娘のやうに、頭が痛え位で、ブラ〱しとつちや、罰が當らうで。』

生活に追はれ通してゐる香代の母親は、病氣など貧乏人にはぜいたくだと考へてゐた。香代は、母親から口汚なくのゝしられてもそれには何も答へなかつた。蒼ざめたその顏には、この四五日ちつとも活氣がなかつた。時々、じつとひと處を視つめてゐる瞳の底には、深いなやみのかげがひそんでゐた。

――村人達は、それ〲自分の家の麥畑の土に、くわを入れるために毎日野良に出かけるので、家の中にはよほどの老人か子供かでなければ殘らなかつた。

水田の少ないこの村では、麥が一年中の主なる收穫だつた。小作人は、小作米の代りに、小作麥を地主に拂つた。香代の家でも、地主である村長の家から、何段かの畑を借りて小作麥を作つてゐた。

二月は麥のなかをするのに忙がしい月だつた。香代の兩親は香代の病氣よりも、畑の仕事の方が大切だつた。うつかりして、麥の收穫が少なかつたりすると、そのために一年中生活がおびやかされねばならなかつた。

麥畑にやつと手がはぶけるやうになつて、一寸ばかりのびて來た

畑の畔の空豆の芽が、やはらかさうに人の眼に映りだした頃、香代の母親はやつと香代の病狀が少し違つてゐることに氣がついた。

『お父さん、お香代は、どうしたんぢやろうかなあ、わしが物を言うても、ひとつも返事をせんと口のうちで何か獨り言ばかり言ふてゐるが。』

　母親は心配さうに、父親に向つてうつたへた。

『ほつときや、いゝがな、仕事がしたうねえけ、あゝしちよるんだろ、そのうち氣が向いたら、ようならうで。』

　父親が呑氣さうに、さう言つても、母親には氣になりだした。

――ごしんさまにいつぺんみて貰らうて來う、あの子の病氣は、どうも變な――さう言つて母親は晝めしがすむと家を出かけた。

　――村人達の共通な迷信は、この村に何時頃からともなく一つの偶像をつくりあげた。村人達は、等しくその偶像によつて、憐れむべき支配を受けてゐた。この村で、地主の他に百姓の仕事をせずに暮らしてゐる一家があつた。その家の奥のうす暗い部屋には一つの祭壇が、設うけられてあつた。祭壇の兩側には、奇怪な蠟燈の灯が絶えず明滅してゐた。

　四十をすぎた、デップリ肥つたこの家の主が、秘密ぶかい瞳をして、白い裝束で、毎日二回づゝ祭壇の正面に端座するのであつた。村人達は、彼のことをごしんさまと呼んだ。そして、聖者に對するやうな尊敬と信頼を彼に拂つた。

　村人達は、さまざまな病苦や、生活の惱みを、子供のやうに彼に向つてうつたへた。

『今年、十八になるをなごの病氣をおたづね申しまする。』

　香代の母親は祭壇の下座に控えた四五人の村人達の中に交つて、神妙に頭を下げた。

　無心な村人達の前に、白裝束の男は、よほどの技巧を加へたひどい變化をその顔面に現はすと、體を小さくふるはしながら、呪文のやうなものを唱えはじめた。村人達は、皆んなそれを神のお告げだと信じ切つてゐた。

『ごしんさまは、どう申されますかの、やつぱり、お香代さんにや何かつきもんでもしとりますかあ。』

　香代の母親が氣がゝりさうな顔をして、祭壇の前からはなれると、うしろにゐた近所のものが同情深くたづねた。

『おがんで貰らうてよござりましたよ、何んでも、わるい風に祟られとりますさうな、困つたもんです。』

　人のよさゝうな香代の母親は、ほんとうに困つた顔をしてゐた。香代の母親が家に歸つて見ると、香代は出がけにみたときと同じかつかうで、納屋のすみに、ぼつねんと座つてゐた。

『お香代よ、困つたもんぢやのう、おまえは。』

　母親が、いたはるやうに傍に寄つて來ても、一寸眼をあげただけで、香代の顔には、何の表情も浮かばなかつた。

『こりや、ごしんさまのお札ぢやけ、頂くんぢやぞ。』

母親は、懐から大切さうに、文字の書いた小さな紙片を取り出すと、めし茶碗に水を汲んでそれに浮かべて、香代の口のところに持つていつた。香代は默つてそれを飮んだ。

姉の香代が病氣になつてから、順吉は竹馬に乘つて遊んでも、姉のことが氣になつて面白くなかつた。父も母も畑に出てゐない留守に、順吉は時々納戸の香代の傍に行つてみた。

『姉さん、この字はなんちゆうて讀むかのう？』

順吉が、學校の讀本をもつて行つてみても、香代はそれまでのやうに順吉に敎えてはくれなかつた。たゞ默つて順吉をみるだけだつた。そんな時順吉は、ずつと前の日の夕方雜小屋の前に立つて泣いてゐた姉の姿が、遠い昔のなつかしい想出のやうに、頭に浮かんで來るのであつた。

——三月には入つて、霜が降りなくなると、畑の麥はめき〳〵丈を延ばして來た。

村長の家で、次男の結婚式が擧げられるといふ晩だつた。

香代の家では、香代の病氣をなほすために、祈禱の用意がされてゐた。ランプを取りのけたその部屋には、ローソクの灯が、ふらふらとゆらひでゐた。白裝束の男のさしづで、めつきり衰ろへの目立つた香代は、糊の固い單衣を一枚着せられて、床板の上に敷いた荒むしろの上に座らされた。

『ごしんさまに、おがんで貰らうたら、ぢきようなるけの。』

香代の母親は、痛々しさうに、香代をみた。

白裝束の男は、しばらく默禱のうち、何か口のうちで他人には、はつきりしないことを唱えだしたかと思ふと、いきなり香代の背中を平手で、ピシヤリと毆ぐりつけた。そして病人をかなり亂暴に扱ひつくしたのち、部屋の隅に置いてあつた七五三繩のかゝつた水桶を持つて來ると、その中の水を香代の肩から、ざつとあびせかけた。香代の顏色は、恐ろしい程蒼白に變つた。紫色になつた唇は何か言ひたさうに、ピク〳〵動いてゐた。

隣の板の間で、障子のすき間から、そつと、部屋の情景をうかゞつてゐた順吉は、しらず〳〵のうちに體をこは張らせてゐた。

そして、病人の姉に對する同情と、白裝束の男に對する小さな反感から、わざと障子をガタ〳〵音立たせた。

祈禱がすむと、母親は晝間たまご買ひから受取つた銀貨を何枚か、順吉が學校にもつて行く紙挾みの中から白紙を一枚出して、それにていねいに包んで白裝束を脫いだ男の前にさし出した。

『これは、ほんのおろうそく代だけで——』

けれども、それは、この家の生活程度で、けつして容易な支出ではなかつた。その夜香代は、ひどい發熱で一晩中苦しんだ。香代の母親は御祈禱のごりやくが現はれたのだと云つて有りがたがつた。だが、その熱がさがると、當然快くなる筈の香代の病狀は、反對に

以前よりはずつとわるくなつた。時々、物を投げたり、人を見ると罵倒したりするやうになつたのはそれからのちだつた。

香代は完全な狂人だつた。

母親は香代をなるべく人に見せないやうにしだした。

『――かう貧乏人が、氣ちがひの病人をかゝえてこの先どうならうにのう、快うならんもんなら、いつそ死んで呉れたら――』

香代の病氣が癒ほりさうにないのを感じた父親は、娘に對する憐びんよりも、生活苦の方を痛切に考へた。

『東京とか、大阪とかに行きやあ、氣ちがひでも癒ほす醫者があるちゆうことぢやが。』

母親は、のぞめさうにもないことを言つてみた。

『因果なもんよのう、金さえありや、今の世の中ぢや、どうともなることぢやろうがのう――』

『ほんに、村長さんところの祝言に費かうたほどの金が、今うちらにあつてくれたら……』

一つの階級をつないだ弱いあきらめが、營養の乏しい香代の兩親の顔面に、共通なさびしいかげを浮き出させた。

麥の穗がだん／＼ふくらんで行くのにつれて、香代の病氣はます／＼わるい方へ進んだ。それまで、毎日母親がもて餘ますやうに暴れてゐた香代がどうしたのか、この二三日急におとなしく靜かになつて來た。そして何をやつても食べやうとしなくなつた。顔色は死人のやうに蒼ざめて兩方の頰骨がぐつと尖つて來た。時々夜おそくかすかなうめき聲が、香代の寢てゐる納戸から聽えた。

『おつ父うさん、――はやう來て、お香代が――お香代が！』

ある朝、五月の空がまだ明けきらないうす暗がりの中で、香代の母親のうろたへた聲が、あたりの靜けさを破つた。

『おう、どうしたんか、お香代がわりいのんか？――』

あはてゝ飛び起きた父親は、そこら中をうろ／＼した。

『おつ父うさん、早やう、大崎さんとこに走つて行つておくれ、お香代が――お香代が死んでしまうが――』

最後の苦痛にさいなまれてゐる香代の體を抱いたまゝ、母親はおろ／＼と泣き聲を出した。

――一時間ほどして、一里近くへだたつた隣り村から、この近くでたつた一人の醫者が香代の父親につれられて來た時には、もう香代は死んでゐた。貧乏人に取つて、常に醫者は死亡屆を書くに役立つ存在以外の何ものでもなかつた。

どんな名醫も、どんな高價藥も、貧乏人の病氣を癒ほすことゝは永久に何んのかゝはりもない緣遠いものだつた。

翌日の夕方、香代の家から出た貧しい葬ひの列が、麥の穗の黄ばみかけた畑の横の道を、村はづれの墓地へと通りぬけて行つた。

三

いつせいに麥かりに取りかゝつた。村人達はとぎすました鎌をもつて、廣い麥畑の中で、把蟲類のやうに體を半分に折り曲げて、ひと握りづゝ麥の根ぐきを切つて行つた。高い空には、追ひ立てられたやうに雲雀がやかましく囀づゝてゐた。そこゝの畑の畔には、永い間さらされて見すぼらしくなつたかゞしの殘骸が、敗兵のやうに放り出されてゐた。

『早やいもんですの、麥を蒔いたのは、ほんのこないだぢやつたが……』

『このまゝ、日和がつゞくと助かりますがのう。』

畔道の行きずり合ひに言葉をかはしながら、百姓はそれ〴〵胸のうちでその年の收穫を計算してゐた。

『かうして、收穫れとる麥が、みんなわし等の手には入るのなら百姓しても、ちつたあ樂しみになりますがのう。』

『ほんに、つまりませんよのう、半年かゝつてやつと作りあげたこの麥も、地主さんとこに拂らうてしまうたら、あとはどれだけも殘りあせんけ――』

『さう言やあ、わし等、皆んな地主さんのために働らいてるやうなもんぢやなう。』

大部分の村人達は、かうした小作人の悲哀を、一年中働らきつゞけて行くその生活のうしろに背負はされてゐた。

畑から麥のすがたが消へてしまうと、そのあとにはきまつたやうに、梅雨の雨がしと〳〵降りそゝぐのであつた。そして、麥のなくなつた畑には間もなく、いものつるが移し植ゑられた。米の乏しいこの村では、一年中どこの家でも、甘庶のかげは絶へなかつた。

――梅雨が晴れると、大きな青桐の植つた村長の家の門を、困惑した顔色の百姓が、毎日何人も出入りするやうになつた。

『ご無理なお願ひちゆうことはもうようわかつとりますが、そこを、その、何んとか、地主さんの方で。』

『そんなことを、毎年言ふて來て貰うちや困る、わしの方でも、一段なんぼちゆう税金を、ちやんとお上に支拂はにやならんのぢや、なんぼ云ふてもおんなじだが絶對に、負けるちゆうことはなりませんよ。』

階級的なへだゝりを造つてゆう然と座つた村長は、床の掛軸に畫いた、だるまの眼によく似た、底意地の悪い光をもつた瞳で相手を威壓しておいて、今朝から何度目かの同じことばをくり返へした。

『そりや、まあ、さうでもありませうが、それぢや、わしの方は肥料代もないちゆうやうなわけで、……』

『なんぼ云ふても、わからんのかなあ、あんたにや、そんならいゝいつそ畑を返へしてもらひませう。』

地主は、常に小作人の前に最後の鐵槌を振りかざす權利をもつてゐた。

『さう言はれりや、まあ、なんですが――』

結極、小作人は、それ以上追求することの出來ない弱さを意識して、悄然と歸つて行くよりほかはなかつた。

村長は、かうした機會ごとに、どんなものにもおかされない、自分達に屬してゐる階級のもつ强みを味はつた。

『あいつ等が、何を言ふて來たところで、いざとなりや、手も足も出るんぢやないけ――』

夕方二人の息子を相手に、晩しやくを汲みながら、村長はさも得意さうに、胸をひろげて語つた。

次男の養男は、晝間小作料を値切りに來た百姓達の中に、死んだ香代の父親の嘆願的な姿が交つてゐたのを思ひ出して、一寸香代のことを憐れんでみたが、間もなくそんな考へは、吸ひさしの煙草のからを捨てるよりも、簡單に打ち消された。一人の地主の存在は、多くの貧しい村人達の生活の咽喉部を、太い鎖のやうに、ギユツとしめつけてゐた。

『――あんたとこも、まだですかいのう、わし等も早やう拂らはにやならんのぢやが、他に工面のしやうゝないでのう、どうにもならにや、あの屋敷地でゝ書き入れにしてこらへて貰らひませうて。』

『どう言ふても、分限者にや、勝てませんのう、わし等もいつぺんあゝした身分になつてみたいもんで――』

小作料の拂へない村人達は、顏を見ると、互ひに嘆聲をもらし合つた。だが、さうした權力の壓迫をうけながら、尙、多くの彼等の意識のどこかには、その權力に對するあこがれが殘つてゐた。

さうした村人達は、どこまでゝ從順だつた。たのんでも、きゝ入れられなかつた小作料の不足を、彼等はそれ〴〵不自由に慣れた頭の中で　ありたけの智惠を絞つて工面した。貧しい家の臺所の飯びつには、一年越しの水つぽくなつた蒸した甘庶の切れが、河原の石塊のやうにごろ〳〵と重なり合つてゐた　村人達の胃袋は、毎日砂のやうな粗食を消化することに、慣らされた。

――七月の陽を浴びた甘庶のつるは、勢ひよく畑中を氣まゝな線を描いて這ひまわつた。夕燒雲が村の子供達をよろこばせだした。

『もう、ひと月もすりや盆ぢやがな――』

少數を除いた村人達の顏色は、盆が近づくに從がつて更に陰鬱になつて來た。

『――わしや、いつそ百姓をやめて、どこか町に稼ぎに出やうかと思ふちよる、町に出て仕事をすりや、その日〳〵に金がは入つて來るさうぢやけ――』

ある日　村の寄り合ひから戾りがけに、この盆の期限でわずかな所有の畑を抵當にして、地主から借金してゐる一人の男が、連れのものに話しかけた。

『それでも、手に職もない人間が町に出て行つたところで…』

『なあに、職はなうでも、百姓の仕事で體をきたへたものにや、何んなと喰ふて行くぐらいの仕事はあるさうぢや、百姓しとつちや何

時までたつても、いもか、大根しか喰へんのぢやけのう……』

『さう言やあ、お互ひに百姓ほど馬鹿らしいもんはないのう。』

惠まれない百姓の生活に、同じやうにあへいでゐる二人の會話は、やがて貧しい村人達のなかで現實的なものとなつて來た。

『忠造さんとこは、とうとう町に行つてしまうんぢやさうな、この村も一けん少なうなるよのう。』

『町に出りや、田舍と違うて、水からたき木まで錢を出さにやならんさうぢやが――』

産れた土地の土に、人間は生涯蠣がらのやうにしがみついて死んで行くものだと決めてゐる村人達にとつて、その仲間が永久に、その土地からはなれて行くといふことは、わけもない心細さだつた。

二三日降りつゞいてゐた雨があがると、忠造の家ではいよいよ旅に出る仕度をはじめた。

町では使へさうもない古い家の道具を、大切さうに薄いむしろに卷いて荷造りした。

『町に行つたら、まあ氣をつけて患らはんやうに――體さへ丈夫にしとりや、また逢へますよのう――』

平常は、それほど親しくなかつたやうな村の人達でも、みんな忠造の家に、それぞれ乾大根や、大豆の袋などを持つて別れに來た。

『ほんに、ながうお世話になりましたのう、わし等も産れた土地を離れて遠くに行くのは、ほんに辛らうてかなはんのですがのう』

三十を過ぎたばかりの忠造の女房は、老母のやうに技巧のない泪で顏を汚しながら、いちいちあいさつした。

――忠造の家族を取り圍んだ村人達のぞろぞろした群が、村はづれの峠の一番頂きまで登つて來た。

『――皆さん、もうどこまで來てもらひましてもおんなじです、もうこれから歸へつて下さい。ほんに、ありがたうございました。』

忠造は、立ち止ると皆に向いて言つた。

『そんなら、もうこゝらで、皆さん歸へらしてもらひせう。何分まあ、お大事に――』

『皆さんも、どうぞ、おたつしやで――』

『さやうなら。』

『氣をつけて。』

女達は、みんな同じやうに泪をふいてゐた。

忠造の眼の前には、遠い町につゞく一筋の途が、彼等をどこまでも追ひかけやうとする苦惱のやうに跌々と延びてゐた。

村の眞ん中には、村長の住んでゐる大きな邸宅が見事な山吹色の朝の太陽に、染め出されてゐた。――それから、間もなく、順吉の一家も、この峠を越して村から姿を沒した。(完)



科學(シエンツア)の愛人

アマリア・グリエルミネツチ作
下位文子譯

廣い講堂は、一時に輝きわたつた。すると燕尾服を著た講演者は、畫用紙に描かれたペン畫の木偶人形のやうに、眞白いスクリーンに背を向けて、講演の結びを有效化する爲にその最後の一言一句を、まるで燦然と耀く星座のやうに聽講者の上に投げつけた。

殆んど婦人で占められた聽講者の群は、椅子のきしる騷音の中から、女らしい拍手を送つて、低い私語(ささやき)を交しながら、席を立ちかけた。

――まあ、ノーラさん。あなたも此處へいらしてたの？――

突然、閨秀畫家のデリア・リーギは、椅子と椅子の間に立止つて、數年前からアルセア夫人と改まつたノーラ、マルチーニに聲をかけた。

修道院女學校の昔の同窓二人は、互に手を握りしめた。けれど、彼女等は鍔廣い帽子の端(ふち)に邪げられて、接吻はしなかつた。二人は一緒に外へ出た。そしてこの意外な再會を或は驚き、或は歡び、互に問ひもし、問はれもして感嘆し合つた。

二人はかなり長いこと會はなかつた。それはノーラ・マルチーニが獨逸で結婚して、良

人の研究上から、久しい間其處で暮してゐたからであつた。彼女はつい一月前、郷里へ歸つて來て、良人がその市の公立學校のかなり高い敎授の地位を得たので、其處にづつと落付くことになつてゐた。それで、彼女は友達にいつでも遊びに來るやうにとすゝめるのであつた。

けれど、勝氣な、皮肉家のデリア・リーギは、とうに打ち解け難い間柄となつた昔の友達と新しい交際を始めることを躊躇した。そして生活と時とに變化し、培はれてゆく相手の外見と內心とを見極めやうとした。偶然は彼女等を遠くと距たぬ閑靜な、といふよりもの淋しい並木道に沿うた街に住はせてゐた。リーギは幾分好奇心に駆られ、又幾分好意に惹かれて、近い內訪問する約束をさせられてしまつた。

二人は足に任せて、通りを歩いてゐた。不圖、アルセア夫人は仕立屋へ廻るのだといつて、デリアに其處まで同行を求めた。

——あなた、藝術家でらつしやるでせう。それにあなたは、お召物のお好みなんかがそりやお上手でらつしやるんですもの。だから、わたしのいゝ相談相手になつて頂きたいのよ。——

彼女は天鵞絨のスカートと淺綠の羅紗の上衣が獨創的な美しさを表現してゐる修道院女學校の友に目を注いで言つた。

——良人は私が着物の選び方が下手だつて小言ばかりいふんですのよ。——

——あなたの旦那樣、無理な事おしやるのね。——

しとやかに相手を眺めた。そして相手の男の無理からぬことを內心考へてみた。

——良人は云ふんですの。それがわたしの缺點だつて、でも、私、そんな風に考へてくれるのも皆、私を愛してくれるからこそと思つてますわ。そりやまるで、十八、九の戀に初心な男かなんぞの樣に、それこそ盲目的に私を愛してくれますの。まあ、あの人にしてみたら、私の外に女なんてこの世界にないんですわね。—

——でも、それ程に愛していらつしやるんだつたら、お好みがどうあらうと、そんな事、お氣につきますかしら？——

とあやふくリーギは問ひ質す處であつた。けれどさうは彼女は言はなかつた。

——まあ、あなたはお仕合せね。——

——そりや、もう仕合せですわ。あなたも良人のやうな男の方をおみつけになつたら、目をつむつて、その方と御結婚なさいませよ。私、さういふ方をあなたにお世話しますわ。——

——ありがたう。——

友達は微苦笑を浮べた。

——でも、私、aを大文字にしてArte（譯者註—藝術＝女性名詞）と結婚してしまひました。文字から云へば女性を現はす名前ですけれど、私、それで充分滿足なんですの。——

――あなたは本當に良人にそつくりですわね。あの人たらいつも言つてるんですよ。お前を妻として、それから戀人としてはＳＣＩＥＮＺＡ（譯者註―科學＝女性名詞）を選んで、お前と一緒になつたんだ。それで僕は滿足だなんて云つてますの。――

――全くその通りですわ。人生の事柄なんて、皆とりやう一つですからね。私、一寸、この通りの研究所へ立寄りたいんですけれど。――

――ぢや、私、お送りしますわ。仕立屋の方はもうおそくなつちまいましたし、それに今夜、お食事にお客樣をお呼びしてますし、私、主人の言付通りにテーブルの支度をしなけりやなりませんの。――

デリア・リーギは門口で彼女に手を差し延べた。そして友達の執拗な言葉を微笑を以て聞いてゐた。

――覺えてらして頂戴。私、あなたをお待ちしてますよ。お騙しになつちや駄目よ。そのお召物を是非、召してらしつてね。本當によくおうつりですわ。すらりとして、すつきりと見えるんですもの、私、本當にあなたを羨しく思ひますわ。良人はね、私が肥りすぎてるつて言ひますのよ。――

――あなたの戀敵のＳＣＩＥＮＺＡは本當に、もそつとやせぎすかも知れませんわね。――

さう言つで、デリア・リーギは別れの挨拶を告げた。そして研究所に上つてゆくふりをして、相手をやり過し、遠ざかつてゆくのを待つてゐた。

それから靜に階段を下りて來た。そして、いつまでも失はれぬものゝやうに思へる幼子の純情の或物によつて心に結びつけられてゐた、曾ては蟠りのない氣立の娘であつたあの無智な女の事を思ひ浮べながら、當てどもなく足を運んでゐた。かうして長い間、そゞろ歩きをしてゐる内に、いつかその足は習慣的に彼女の家の前を通る並木道の方へ向つてゐた。霧深い冬の夜のもやは灰色の水蒸氣で彼女を包んだ。人も、物も、夢幻的な又非現實的な姿の裡に消えていつた。彼女はそれを藝術的に洗煉された彼女の感激によつて、宇宙の人爲的な幻として醉ひ浸つた。その奇怪な情操を彼女自身の上にまで引延ばさうとして、彼女は歩みをゆるめた。その途端、誰かしらすぐ後をつけてくる者のあるのに氣付いた。

その男は彼女には未知の者であつた。けれど未見の者ではなかつた。彼は彼女と同じ方向に向ふので、屢ゝ出會ふ男であつた。そして、彼女が彼に對して無關心を裝うて、門口から姿を消すと、彼はいつも低聲で儀禮的な言葉を投げるのであつた。

霧深い夜。彼女は彼がいつもよりもつと露骨な厚かましさを以て近附くであらうと思はれた。案の定、彼は彼女の耳許近く例の『美くしいお孃さん！』をさゝやき初めた。

デリア、リーギは、もう飽き〱してゐた。けれど取り亂される

事もなかつた彼女は歩みを早めようとはしなかつた。皮肉でもなんでもなく彼女は考へてみた。

――通りすがる女の尻を追廻す男なんて、何んといふみぢめな幻、そして何んといふ貧弱な言葉しか持合せないんだらう！この長い歳月の間、私の生活はこの廣い世界の道を獨りぼつちであるかせてゐた。私をつけ狙つた最初の男のお世辭と、最後のこの男のそれとの間には、何のけじめもない。もし私が男の立場にあつたら、私の好いた女を虜にするためには、もつと變化に富んだ、もつと斬新な、もつと、ぴりつとくる言葉なり、表情なりを作つてみられるやうな氣がする。――

男は、今は女の横まで迫つて來た。彼女は彼の呼吸さへ、はつきり耳に入る位であつた。彼は彼女が夢想してゐる氣持とかなりにかけ離れた態度を露骨に出して來た。

――あなたは本當にお奇麗ですね。たつた獨りで、こんな人通りもない夜道をお歩きになるなんて、物騷ぢやありませんか。あなたの騎士として、從順な護衛として僕を選んで頂けないでせうか。――

彼女は阿るやうなその口調と胸を塞がれるやうなその執拗さに氣を腐らして默つてゐた。

――あなたのために何處までも助力致しませう。自分でも怖ろしい位、僕はあなたが好きなんです。何處か靜な處で、もう一度あなたにお會ひしたいんですが。約束して頂けませんか。いゝでせう。ね、いゝと云つて下さいませんか。いゝでせうね・・・

男は抱きすくめるやうに、あやふく彼女の肩へ手を廻はす處であつた。けれどその瞬間デリア・リーギは、ほんの數歩の差で、戸口に遮ぎられてゐた。そして彼女の姿はその中へ隱されてしまつた。

あの未知の男はすばらしい幻と、そして豐富な言葉を表現しかけたことを考へて、彼女は階段を上つた。けれど、この出來事にしろ、この男の事にしろ、好感とか、嫌惡とかいふ印象の何物をも、彼女の心には殘されてはゐなかつた。

にも拘らず數日後、彼女をひどく吃驚させる出來事が起つた。彼女は友達から無理押に承諾させられた約束を履行して、アルセア家を訪れた。薫り高いお茶の香と藝術味の豐な部屋を彩る花の香の中で、彼女はノーラとあれこれ、取止めもなく語り合つた。別れ際にアルセア夫人は家中を、勿論良人の書齋――彼女の言葉によると法悅の笑みを持つお寺――をも友達に感嘆させたかつた。

立てきられた戸口をかるやかにノックして書籍のぎつしり詰つた絨氈の深々としたSCIENZAの神聖の爲には適はしい幽しい廣間に足を踏み入れた。教授は書齋に續いた狹い實驗室から研究服をつけたまゝで姿を見せた。

一べつで充分であつた。二人共見知り越しの仲であつた。一つの考で充分であつた。二人共無智な女の平和の爲に、最近の彼等の單

なる會合の記憶をお互の心に密閉してしまつた。

けれどデリヤ　リーギはしほれ返つた相手をやんはりやゆするに如才はなかつた。

――私ノーラさんから伺ひましたの。先生、あなたがSCIENZAを戀人にお選びになつていらつしやるつていふことを。――

彼女は四邊を見廻はして眞顔で云つた。

――本當に私、このお部屋はなんだか淨らかな、侵し難いやうな氣ひんがこめられてゐるやうな氣が致しますの。何といふすぐれた理想家でゐらしやるのでせう。社會から遠ざかつて、研究に沒頭してゐらつしやる立派なお方！　でも、先生、あなたはまだこんなにお若くていらしやいますのね。私、存じ上げて居ります。あなたが奥樣の外には女といふものを躰よく嫌厭してゐらしやることも、又劣等動物として自負的な漫侮を以て女達を廻避していらつしやることも。――

ノーラ、アルセアは言ひ知れぬ禮讃に充たされた微笑をたゝへて、物靜に煙草を燻ゆらし、デリア・リーギの揶弄的な言々句々に頭を打ちふる良人をみまもつてゐた。

幾分か過ぎて、彼女が人通りもない、すつかり闇に鎖された通りに出て、あの無智な、男から裏切られてゆく女と、技巧的に勝れたあの僞善者を心に嘲笑して歩いてゐた時、彼女は足早に追すがるものゝ氣はいを感じた。

――一寸一言、辯解を聞いて頂きたいのですが。――彼女の側に身を寄せて教授は嘆願した。――僕は先夜、あなたに對して今日のあなたの嘲弄に價するやうな大膽な行爲に出てしまひました。

――私の嘲弄ですつて？――デリアは彼に眼をうつさずして笑ひかけた。――どう致しまして、それはあなたの奥樣ので御座いませう。あのお氣の毒な、視覺の鈍る程愛に眼の眩んだあの方の。――

――僕は今、あの女のことを考へてなぞゐません。――男は心に期してさう云ひ切つた。――僕の身近い事の外には何にも心には入りません。僕は眩惑に惱されてゐるのです。僕等が今日、顏を合せた事が意味深長な偶然であるとは、あなたには思へないのでせうか、あなたが、今日、豫期もせず、又期待もされずに僕の書齋に偶然、いやまるで夢の中の出來事のやうにお見へになつたといふ事は尋常一樣の事でないとは云へないでせうか。僕は運命といふものが、僕等を近づけたのだと信じてゐるのです。何故つてそれは僕等がその運命との協力に逆はないでゐるからです。――

――私には――デリア・リーギはもの靜に言つた――今日、私達を近づけたものは單なる偶然であるとしか思はれません。私達は御近所に住つて居ります。妾達は同じ時刻にそして同じ道を歸宅するので、時折、おめにかゝつて居ります。あなたは御自分の側を通りかゝる女といふ女に、片輪者でない限りは、『美しいお孃さん！』とおつしやつておいでなのです。あなたの奥樣、澤山な女

のお友達を持つておいでの奥樣が私をお宅にお招き下すつて、そして單なる偶然から私達はおめにかゝつたのです。意味深長な偶然でもなく、尋常一樣でない事でも御座いません。もし尋常でないものがあるとすれば、それはあなたが奥樣にあなたの淨らかな戀人がSCIENZAだとおしやつて、お騙しになるその技巧でしかないのです。——

彼女は自分の家の門口へ來て、立止つた。そしてアルセアに手を差し延べた。

——では？——彼はその手を握り、その手に唇を近づけて思ひ惑ふて訊ねた。

彼女は彼を見詰てゐた。測り知れぬその容貌の裡に、沈默が續いた

——何を考へていらしやるのです？——心の落付を失つた男は彼女をうながした。

彼女は靜に握りしめられてゐたその手をふり解いて、やがて、口を切つた。

——私は考へてゐるのです。男つて二人の女がその男の爲に爭はねばならぬ程、尊いものでもなく、そして又二人の女を幸福に導く程非凡なものでもないのだといふ事を考へてゐるのです。——

彼女はかう蟠りもなく自分の考を相手に傳へると、踵を返して、彼を殘してたゞ獨り歩き出した。

蚤

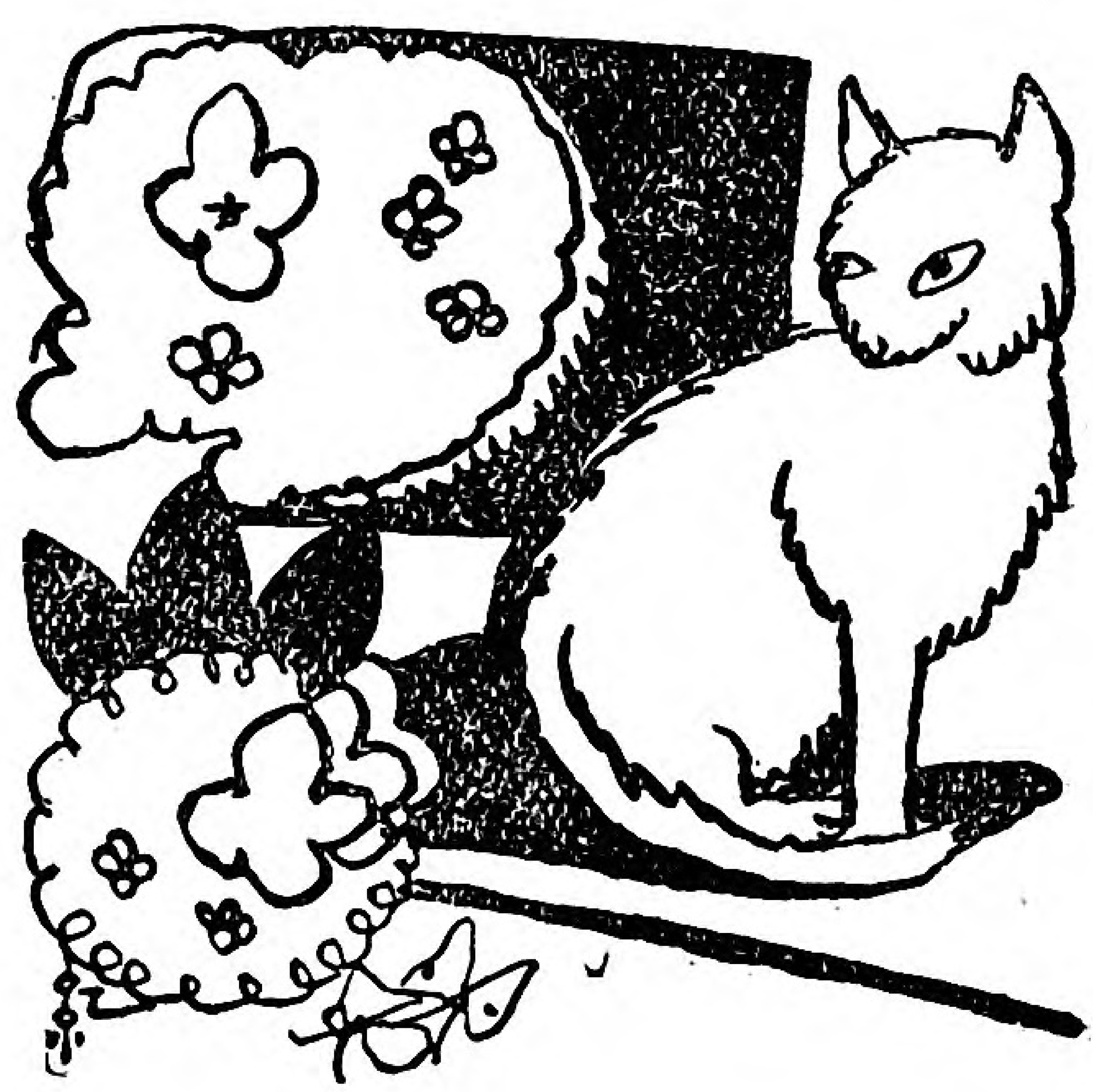
飯塚かよ子

白い敷布の上に
空しく逃避を企てるより
蚤よ
赤い火の中に
勇敢に投ぜられて
今日の晴れをほがらかに
唄つておやり

やもめは

方等深雪

ほゝゑみの一つをも
なげてはいけないといふ
ほとばしるまつかなちしほをしづめ
ひむろのかぜになれといふ
まつくろなふくめんをして
にそうのごとく
いきてゆけといふ——



母權黎明（みちづれ）

ヴイクトオル・マルゲリット
望月百合子譯

第二章――八

『坐りませう、私、少し疲れ始めたわ』とアニックが言つた。

朝早く家を出た彼等は、サン・タントアン門からロカンクウルの町に入りマルリイの森の縁に着いた。彼女は姙娠七ヶ月になつても、常と變らない快活さで活動してゐた。

彼女はこゝの昔のお城の跡を一度も訪ねたことがなかつた。だから、あらゆる史跡に興味を持つてゐる彼女は、長い散策が出來る間に、こゝの城塞まで散歩の足を伸したいと思つてゐた。こゝの大瀧と厖大な十二亭の池の間に建てられた四角形の小宮殿は、かつては漏斗形の森の底に、呼吸してゐたのであつた。……

彼女は全く壞れてしまつた卓子を見つけてびつくりした。かつ瀧が流れ落ちてゐた粘土地は辷り落ちてしまつてゐた。あとは只一面の荒れ地だ。何かの小鳥たちが、再び大森林になつてしまつた後園で唄つてゐた……そしてこの、廢墟さへも思ひ出さないであらう、一つの名の虚榮の上には、孤獨、放棄が只いたづらにあるのみ……

『こゝをも××が通つたんですね』とアニックが言つた。

『あらゆるものを寸斷してしまつた黑い群を從へてね』

彼女は、民衆が王權にとつて代つたのに、かうした場所を、萬人に有用な建物として復活せしめないのにびつくりした。たとへば、物理化學試驗所とか、農業試驗所とか、養老院とか、夏期休暇中の夏の家とかに……たゞ大統領用の狩獵地として放棄しておく代りに！……

『どこまで、私達は君主政體時代のまゝでゐることでせうね！進步といふものは緩漫だこと。』

『さうは言へないよ』とアメデエが激しく遮ぎつた。

彼は暗い、併し執拗な步調で、自分の考へを追つてゐた。彼女は

その言葉の意味を悟つて、かすかに微笑した。

『だからなほさら、進歩が出來る人々は先きにゆかなければいけませんわ！』

『まあさう急ぎ過ぎちやいけない…』

彼女は休んでゐる傍の、木の幹のまわりに繁茂してゐたグラミネの芽を、ステッキの先で機械的に曲げた。そして默り込んでしまつた。彼女はいつもの樣な戰法で、議論を避けてゐたのだ…後になればよくなるだらう。一日經つ事はそれだけ、二人の幸福の爲だ。

彼は何か他の方法で彼女を追及しようとして、前夜、二人の間に、彼の全理性が、全感情が彼をして爆發せしめようとした、その問題に歸つた。そして繰返して言つた。

『さうだ、あんまり急ぎ過ぎちやいけない！でなけりや、いつか元へ引返さなければならなくなる。ブランシエもさう言つてゐた』

『何の問題で？あなた、あの方に助言をお求めになつたの？あの方なんか御自分の奥さんのことを考へてゐらつしやればいいのに、もつと悧巧に！その方がよつぽど賢いわ』

彼女は立ち上つた。二人は歩き出した。

『あなたは、あなたの太陽の上に一寸でも他人が足を踏み入れると思ふと、どうしてそんなに神經質になるんだらう！…いや、僕は僕達のことをジョルジュに話したんぢやないよ。あの男が、僕に、妻君を働らかせることが出來ないのは、かつて妻君があんまりあの男を離れすぎてゐたから、今度も、二人の幸福のために、ある取卷き連を恐れるからだと、告白したのさ…』

『モニックは、現在ジョルジュが信じていゝだけ十分に、過去の過ちを悔いてゐますよ！』

『僕もあのひとには同情を寄せてゐる…』

『それでも、貴方はあのひとが悪いと仰有るでせうよ！』

『それやさうさ。ブランシエは自分の平和を願ふと同時にモニックの平和をも希つてゐるのだから。あの男の言ふことは正しいよ』

『勿論！』

『あの男が男だからといふのではないよ。あの妻君の過去を考へるとき、あの男の立場としては…』

『あのひとの過去ですつて？ぢや、あのひとばつかりが過去を持つて結婚したやうに聞えますよ！ではあの男は？あの男の過去は？あのひとはそれをあの男に責めますか？そんなことはジョルジュとして馬鹿げた腹立しいことですよ。そんな疑ひを抱くなんて…あんなに賢さうに見えるあの男が！過去に對する嫉妬程馬鹿々々しいものはありませんわ』

『だつてどうしようもないよ』

『どうでもしようは澤山ありますよ。若し女が、愛する男の過去を抽象化さないなら、一人だつて幸福な女といふものはないでせう……私だつても！』

彼は與へられた機會を幸ひとばかり乘りかゝつて來た。

『おゝ！一つのことで苦しんでゐなければ、人間といふものは、きつと他のことで苦しんでゐるものだ。ブランシエを心配させるものはモニックの過去で、僕は、僕の屈托は僕達の未來だ。あゝ！あなたはたつた一言で僕のこの悲しみを消してくれることが出來るのに、若しあなたがさう望みさへすれば…』

彼女はやさしく彼の手を握りしめた。

『あなたの悲しみですつて？』

『あゝ、僕の深い、深い悲しみさ！あなたにはよく分つてゐる筈だ！』

彼女は調子外れの陽氣さで胡魔化さうとした。

『ぢや、貴方はもう私をちつとも愛してはゐらつしやらないの？』

『あゝ！僕はあなたを餘り愛しすぎてゐるんだ。それだのに貴女はその愛に慣しないんだ！どうか僕の言ふことを聞いておくれ……』

彼女は仕方がなさうに溜息を吐いた。

『貴方はだれをお望みになる？……お話なさい、それ程氣にかけてゐらつしやるなら！……そしてもうこれきりそのお話はしないことにしませう……結局、貴方が正しいのかも知れません……傷を惡化するまゝに放つて置けば、餘りに重大すぎるものにしてしまふ危險がありますから』

『第一、あなたは昨日、あなたの働らくこと、モニックがもう一度やらうとする仕事に比べたら十倍もあなたを占領してしまふ仕事をすることに對して僕が言つたことを輕蔑してゐる！僕は時に、あなたの仕事があんまりあなたを僕から奪ひすぎてゐることや、僕が家にゐる時、僕の傍にあなたもゐて欲しいと思ふのに、さう云ふ時間をも僕から盗んでしまふことが癪にさわることがある——併し僕はあなたの樂しみまでも止めてくれと頼む程エゴイストではないが、その樂しみといふのは少しでも、こんなにしてあなたの自由を確保するものではない……』

『私のその樂しみは、私の力相當に萬人のために私を役立てることです』

『野心家！あなたは多くを望みすぎるよ……萬人のために役立てるだつて！』

彼女は微笑した。

『一人の人の氣に入る、それで澤山だと仰有るんでせう？』

彼は反對した。

『いや、アニック！僕は只僕自身のことだけを考へてゐるんぢやないんだよ。生れ出ようとする小さいもののために……あなたの沈默や、決定しなければならないものを正面から熟考することを避ける氣紛れが、僕を心痛させるんだ……』

『だつて、あなた、私達は愛し合つてゐるし、お互にお互のために生きてゐるし、それにやがて生れて來るものは私達にもう一つ餘けいの幸福をもたらして來るだけなんですもの……あゝ！それよか運命が本當の不幸をあなたにもたらすかも知れないことを心配なさつた方がいいわ』

『僕はその不幸を持つてゐるんだ。僕の生涯の妻が、僕の永遠の伴侶者が、この僕のものである人間が、僕を愛してゐると言ふその人間が、僕の子供の母に僕の名を與へる僕の喜びを拒絶するなんてことを、どうして理解することが出來よう』

『あらまたそのことを……』

彼女はそこにあつた、苔蒸した石の壞れた腰かけを指ざした。

『こゝに腰かけませう。そして嵐が起るままに任せませう。私たちの空が再び青空に歸るために……どうして貴方はそんな小さな社會的な滿足に執拗にこだわつてゐらつしやるんです？私はそんなものに對して無關心であるばかりでなく、反對さへもしてゐるのに』

『だつて僕達は、あなたがいやだと云つても、社會の中に生活してゐるんだもの。そして此の社會で、僕は、僕の子供の母が尊敬され、祝福されてあることを望むからだよ』

『だつて私はそんなこと何んとも思つてやしないんですもの！』

『僕は馬鹿な女達が僕に電話をかけて來たら、そら、昨日のプロムビノのやうに、僕一人だけ食事に招待されるやうな目に會つたりしたくはないんだ！』

『そんなこと何んでもないぢやありませんか？』

『腹が立つよ。そして不愉快だよ。僕の仕事の爲には必要な人にでも、僕は近頃少しも會はない人々があるんだよ……それは、僕がその人々の家に一人だけで行きたくなかつたり、或はその人々の妻君連中が僕の處に來ることを拒んだりするためだ。若しあなたが、そこらにざらにある只の妾だつたら、あのひと達も、あなたをジャクマン夫人と呼んで、僕達を結婚したものと信じてゐるやうな風が出來るだらう！だが、誰でも、女辯護士のアニック・ラムペル孃は知つてゐるんだ。だから、あの僞善者共には眼をつむつてゐることが出來ないんだ。あなたがいくら、それは昔から變らない迫害の泉だと言つた處で仕方がないんだ』

　彼女は微笑した。

『若し私がゐるためにそんなことになるなら、そして貴方がお困りになるなら、私は私の住居に引返へすばかりですわ』

『アニッタ、その考こそ、あなたにも似合はない考へだよ』

『だつて私のために貴方が迷惑なさるんだもの……』

『もつといい解決方法があるのをあなたも知つてゐるのに、あなたは意地悪くそれを避けてゐるんだ』

『怒らないで下さい、あなた！冗談を言つて、御免なさい！……だけど、どう考へたつていい方法はないと思ひますよ。私が結婚したくないことは貴方も御存知です。そしていまは前よりももつと。だつて私は一つの小さな魂を形づけてゆく責任を持たうとしてゐるんですもの……』

『僕達は一緒にそれを形づくつて行くんだよ！』

『勿論、そして貴方の御忠告がいい以上は、私はそれに從ひます。それはほんとに信じて下さい』

『だが、この子供はあなたのものであるのと同じだけ、僕のものであるんだよ！』

『いいえ、同じぢやありませんわ』

『そんなことが！』

『貴方のお腹の中でも子供は暴れますか？……泣き出したい程ひどく貴方の腰をも壓迫しますか？……若し子供が、私と同じ程度に貴方のでもあるとしても、今迄子供は貴方のためには何んの苦痛にもならなかつたぢやありませんか！』

『おゝ勿論！だが何んと言つたつて、僕は子供の父親だ。そして子供は僕の姓を名乘るだらう。だつて、若し僕がそれ以上のことが出來ないとしても、少くとも僕は子供をあなたも同時に認知する……そして子供は僕達の間で成長するだらう……さうすれば、あなたが僕の妻であらうが、無からうが、僕は子供に對して父親としてのあらゆる權利を持つことはあなたも知つてゐるだらう。だから、あなたが結婚しないと云つて頑張つてゐることは只單に不條理であるばかりではなくて、許しがたいことなんだ！』

『靜かになさい。そして、私が考へてゐることをすつかり貴方にお話することが出來るために、怒らないで聞いて下さい』

　彼は硬い表情をした。

『若し私が、よござんすか？』彼女は言葉に力を入れてもう一度繰

返した『若し私が、いま私のお腹の中にゐる子供に對して、もつと高い義務を感じないでゐられるならば、私は誓つていますぐにでも貴方と結婚するでせう。私をよく知つてゐらつしやる貴方がどうして只私が頑張つてゐるやうにお考へになれるんでせう？…』

『あなたは、あなたが他の女達のやうに行はないから自分が素晴らしいんだと思つてゐるんだ！』

『それなら、貴方は全く私を誤解してゐらつしやるんだわ！』

『あなたは僕を無益に苦しませる事に熱中してるんだ。僕は貴女の全部を欲しいんだ。それだのにあなたはまるで疑つてでもゐる樣にそれを拒むんだ…あなたは將來のために要心してゐるんだ！』

『私は疑つてやしません。私は貴方をほんとに愛してゐます。けれど、どんなに愛し合つたからと云つても、二人の人間が一人になることは出來ませんわ。私達は二つの體を持つてゐるんですもの。つまり各々の反應作用を持つてゐる二つの異つた器官を持つてゐるんですもの。貴方は男です。男は自由だから强者です。結婚すれば、私は貴方の妻でしかなくなります。つまり、貴方がた男性の法律に依つて凡てを奪はれてゐる弱者にすぎなくなるのです』

『だからこそ女は保護されるために、彼女を愛する男を持たなければならないんではないかね』

『おゝ！そんなことがあるもんですか！だからこそ新しい女達のあらゆる努力は、自分達の力だけで立つために、男性から自分達を解放すべく、擴張されなければならないんです』

『あなたは慢心のために錯亂してゐる』

『さうかも知れません！だけど私は、私を導いてゐる感情も、信念も慢心といふことを知らないと思ふんです。只私は、私の子供達を、私自身危うく止つてゐようとしたこの社會のからくりから奪はうと思ふだけなんです…そして子供達を、あの自由、平等、博愛の濫用された大袈裟な言葉が、言葉以外のものであるやうな、もつといい社會を造り得る眞の男と女にしたいと思ふんです…分つて下さい！分つて下さい…子供達の幼ない頭に新らしい理想と、不正や暴力に對する恐れを注ぎ込みたいんです…戰爭に對する憎惡や…金に對する嫌惡を…』

彼女は自分の夢を追つて默つた…

『結婚してもあなたが子供を思ふやうに育てる邪魔にはならないだらう』

『邪魔になりますとも！だつて私は法律上では何の權利も持たないでせうから。假りに、子供達の敎育に就て何か貴方のお氣に入らないとする。そして貴方が貴方の御意志を私に强制なさらうとする。それに對して私はどう云ふ方法で反對することが出來ますか？方法は何んにもありません』

『あなたは妙なことを言ふね。結婚してもしなくても、子供達に對する僕の權利は同じなんだよ』

『いいえ』

『同じだとも！』

『いいえ…今迄貴方に言ひ得ないでゐましたけど大きな犧牲を拂つて頂かなければならないんですよ。いまこそそれを貴方にお願ひしなければならないんです…』

『お默り、お默り、アニック！あなたはどうかしてゐる…どうかしてゐる』

『貴方は私が何を言はふとしてるか御存知ないぢやありませんか』

彼は泣き聲になつて言つた。

『僕の子供達を認知してくれるなといふんだ！』

暴風雨は炸裂した。彼は兩手で頸を抱えて引きつけるやうに泣き出した。この痛ましい絶望を見て、アニックも泣き出して しまつた。そして彼を抱きしめた。

『愛する貴方、泣かないで下さい。お願ひです！私は貴方を愛してゐます。私を信じて下さい。いいえ、私が貴方に申上げたのはそんなことぢやありません。いいえ、いいえ！……いくら何んでも私はそれ程の慘酷も、それ程の馬鹿もしないでせう。いいえ…若し貴方が、貴方のお悲しみを私がどんなに苦しんでゐるか御存知だつたら！ああ！どんなに私は貴方を滿足させて上げたいと思ふかも知れないんです…利己的な幸福を無視して、他の人よりよくしようとすることは辛らいことですわ』

彼女は彼の兩手を執つて顔から引きはなした。併し彼は倘頑くなに眼を閉ぢたまゝしやくり上げてゐた。

『お話し、お話し、僕は平靜だ。あなたの言ふことを聞かうとしてゐる…あなたは倘何を僕にしろといふんです？』

彼女はこれ以上話したり、彼の苦痛を增したりする勇氣がなくなつてしまつた。限りない疲勞がのしかゝつて來た。彼女は彼が子供のやうに泣いたのを見て、全く呆然としてしまつてゐた。

『いいえ何んでもないの、何んにも大したことぢやなかつたんです…あとでお話しますわ…後で…』

『どうして直ぐ話してくれないんです？』

『私、もうお話したくなくなつてしまつたんですもの。私は疲れてしまつたの、疲れてしまつたのよ…』

『あなたは僕をほんとに愛してはくれないんだ！』

『貴方は私の生命です。そして貴方は私の生命をお取りになることが出來ます。それは貴方のものだから』

『ぢや、ほんとに僕の妻になつて下さい！』

『若し私だけの問題なら勿論！…私の生命は、貴方のものです。けれど私の子供達の生命や、未來は、貴方に差上げるわけにはゆきません。玩具ではありませんもの。母親達が、自分達の內に持つてゐるものは、それはみんな人類の幸福です…今迄母親達はそれを保護することが出來なかつたし、知らなかつたんです。つまり世界の發生以來、彼女達は讓步して來たんです。靑年になる迄も子供達を愛育する母親達が、まだ人間の內にある戰爭の觀念を殺すことが出來ないでゐるんですもの！』

『ぢや、他人を高めようと主張する前に、女達はまづ自分を向上させればいいんだ！』

『貴方は貴方がたの過誤を私達にお責めになる！…だからこそ自覺した母親達は、まだ何んにも知らないあらゆる母親達を敎えなければならないんです。その人達に對して「貴女方のお產に、肉體的の生命の後に精神的の生命をも形づくつた時でなくては安全ではないのです」と叫ばなければならないんです！』

『そんなことが出來る前にまづ！…』

『まあ見てゐらつしやい、見てゐらつしやい…いま、あらゆる國々に女敎師達が擡頭しかゝつてゐます！…それに私がこの爭鬪を放棄するとお思ひになつて？…いいえ、いいえ、貴方にも、私にも拘はらず、私にはそんなことをする權利はありません』

弱い日の微光に對して、重たい憂鬱な夜を伴つた、長い長い幾世

紀の間に、黎明の光はゆつくりと登りつゝあつたのだ。父性は幾世紀以前から、あらゆる主權といふ道具と、法律と風習に依つて確認された支配權とを持つてゐる。……それだのに突如として、母性が、同等の位地と、同等の權利とを要求しつゝ、對立して來たのだ！

『ね、貴方のお考を正直に仰有つてよ！……貴方の理性も、貴方のお心も、私をきつと同感して下さるんです。舊い男性さへ影をひそめれば……』

　彼は叫び出した。

『あゝ！僕にはなんにも分らない！昨日、僕がブランシエに贊成したのは、單なる反射作用に過ぎなかつたかも知れない……あなたにまだ決定的の『否』を言はないでくれと賴むのは反射的な作用かも知れない……理性で考へて見れば、僕達が結婚しようとしまいと同じやうに幸福に生活出來ると僕も思ふ……あなたの考へに從つて、僕達が育てる子供が、立派な植物のやうに、高く眞直ぐに育ち得るといふことは僕も確信してゐる……併し、ねえ、たつた一日では、社會も、人間も改造されはしないんだよ……不正な法則を憎む餘りのあなたのその寛大さが、過度に他の人々に向けられないやうに氣をつけなさい！……あなたが知らない人々に來やうとする苦惱を避けようと努力して、いま、あなたが愛してゐる男を不正當に苦しませないやうに氣をおつけなさい……』

『あなた』彼女は思はず彼を抱きしめて言つた。『それを私自身が何んにも悲しんでゐないのだとお思ひになつて？……そして若し私に、私達のこの苦しみが豐かな土臺になり、それからもつといい未來が生れるといふ絕對的な確信がないなら、私だつてこんな苦しみはしませんわ。貴方は私を愛して下さる。そして私は貴方を愛してゐます……どうぞお願ひですから、もつと今迄のやうに生活してみて下さい……ねえ、後になつて……子供達が大きくなつた……』

『大きくなつたらだつて！……おゝ！そんな時は……』

『どうだと仰有るの？』

『僕達の未來がどうなるか分るもんか！いま、僕の苦しみに同情を持つて欲しいんだ……後になつてなんか！』

　アニックはある危險を感じて默つてしまつた。彼は威脅するやうに言つた。

『大きな苦痛は、大きな喜びと同樣に一つの平衡の破裂だ。それがいつまでも續けられるものではない』

『では！……待つてゐませう……』

　彼は彼女に突き當つたやうな氣がして、どうも仕方がないといふ風をした。併し彼はまだ諦めるまでにはならなかつた。そして怒りといふよりも寧ろ苦痛を感じた――併しいくら頑張つてゐてもそれよりも強い生活が彼女自身にも不意な出來事をもたらすかも知れないといふ漠然とした希望をも感じた。かう云ふ變化は常に可能だ：

　彼等は默つて歸途についた。彼女はどうしても犧牲を拂はなければならないのだと彼に言ひ得なかつたのでいら〳〵してゐたし、不滿足でもあつた。彼の心も悲しみで一杯だ。彼は一年間の間隔を思つた――ヴエルサイユの輝やかしい後園の片隅から、マルリイの仄暗い後園の片隅までの――ほんとに一瞬間でしかなかつた短かい時は彼等の間に……。

　神秘な實を結ぶ、彼等の肉體の結合！そしてしつかりと結びついた×と×の關係からやがて生れる子供を二人は劇的な爭鬪で爭ひ合つてゐる。

◇女人聯盟へ御加入下さい!!

女人聯盟の發展はその後益々盛んで各地の讀者の皆樣から非常な熱心をもつて加入の申込あり積極的に支持されることを表明して下さることは感激の外ありません。女人聯盟は本誌愛讀者を中心としてあらゆる婦人が思想境遇、地域、年齢等を超越して親密に團結し女性のめざましい社會的進出や向上のために何等かの力となりたい、將來は聯盟員のために研究機關を設けあらゆる方法によつて女性の親睦の綱となり智識の泉となる事を企畫してゐます。奮つて聯盟に御加入下さいませ。

支部をつくりませう!

五人以上の愛讀者のあるところでは支部を設けることが出來ます。支部と本社は特別の緊密な關係を保ち其他の通信、講演、本誌販賣等にもいろいろな便宜を得ることが出來ます。支部設置に就ては既に申込みや質問がたくさんありますが規定其他は追つて詳報いたします。

一通信部　讀者のために通信の便を設けまた御感想などお寄せ下されば紙面のゆるす限り本誌通信欄に掲載いたします。

一講演部　本社には種々の方面の女性が多勢をりますから地方聯盟員の御希望によりましては喜んで講演に出かけます。

一質問部　東京における學校、職業方面圖書その他のことで御質問がありましたら調査の上お答へをし尙ほ交渉の便をも圖ります。

●投書を募る……聯盟員のみならずひろく愛讀者の女性から投書を募ります。從來も毎號創作や評論欄に新人を紹介してきましたがよき寄稿は喜んで掲載いたしますから力あるものをお送り下さい。

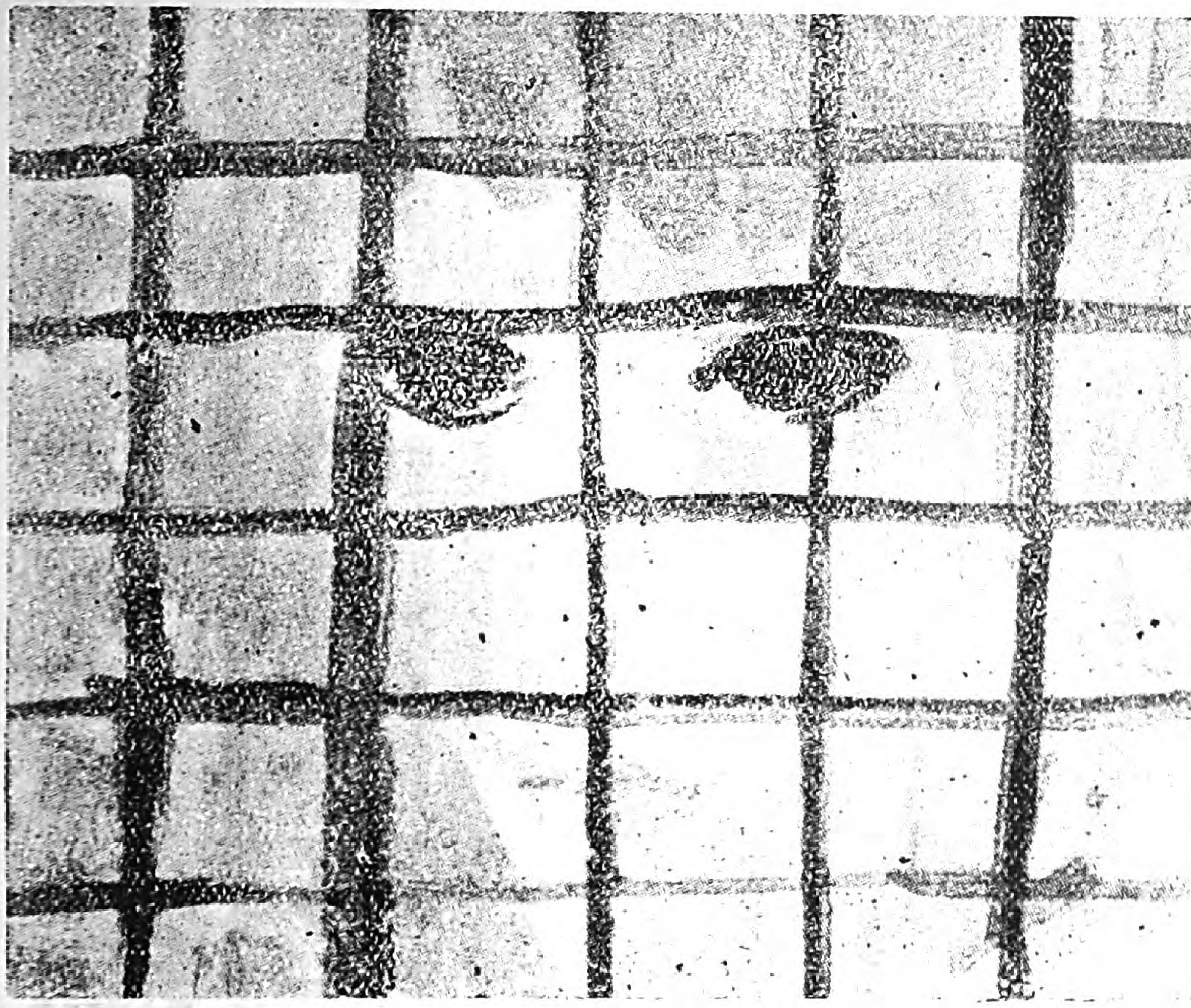
●本誌につきての御希望を……愛讀者諸氏の本誌に對する御感想は非常に興味深いものが多く集まりました。尙ほ本誌の内容及び將來に對しての御希望をどしどしおきかせ下さい。

女人聯盟
加入申込票

住所

氏名

◇女人聯盟に就き皆樣の御希望を御寄せ下さい!!



血を吸ふもの（六場）

大野倭文子

第一場

人物

山内義明　山内慈惠院病院長醫學博士
山井芳美　同病院女醫
吉村はるの　同産婆見習生
須崎愛子　同
野本千夜子　同
中村ふき子　同
佐賀よし子　同
田中菊枝　同
杉浦房緒　賣薬家の妻、慈惠病院の入院患者
杉浦まち子　房緒の娘
山内鐵也　義明博士の弟、勞働者無料診療所長
川本忠一　同自動車運轉手
ラヂオ屋の男　メガホンの男　産婆見習生　看護婦大勢

小石川小日向臺町にある、私立病院山内慈惠病院の玄關先右手は受附及薬局になつて居り、洋風の玄關を隔てゝ左手は廣い患者控室。中央の廊下は長く右手に續いて左は階段で行きづまりになつて居る。

夜、十二時近くの事で、薬局其他全部扉を固く鎖してある。玄關のシャンデリアがぼんやりした光りを放つてゐる、その下を産婆見習生の少　中村千夜子と佐賀よし子との二人が、一人づつ嬰兒を背負つて、眼を擦り〳〵靴下を編んでゐる。時々、背の子をゆすり上げ乍ら、眠むさうな欠伸をする。

右手廊下から看護服の吉村はるのが、患者用の便器と氷枕を持つて通りかゝる。

吉村。（驚いた風で立止つて）あら、二人とも未だお守り？可哀想に……。もういゝ加減にし下して頂くといゝわ。夫れに、貴女(あんた)達、明日(あした)學説の試驗ぢやない？

中村。さうなの。でも、もう諦らめちやつたわね。（佐賀の方を見て、淋し相な顏をする）

佐賀。何うせ駄目なんですもの。――それよりは私眠むいの。だつて、又明日四時なんですもの。

中村。それ、（吉村の持つてゐる氷枕を、編物の先きで指し乍ら）杉浦さんの？　未だ熱が下らないの…

吉村。えゝ。四十度が此處五日も續いてるの。腎盂炎(じんうえん)で四十度の熱が繼續してるのを、放つとくなんて言語道斷だと思ふわ。とても冷淡ぢやないのよ。院長先生は勿論、山井先生まで、あれから一度だつて見舞つて下さらないし、パントポン注射一つしちやあくれないんですもの。薬を催促すれば薬局で怒られる――内緒で冷やして上げたいにも、氷を買ふお金はなし……。仕方がないんで水で冷やしてるのよ。（段々に憂鬱な表情になる）

中村　貴女も内緒で見て上げるんでせう見つかつたら大變――今日は皆外出だから良いけれど……。

吉村。全くよ。これで、院長先生始め、一家眷屬は御繁昌で、お芝居見物なのですものね。今日も杉浦さんのお孃さんがいらして、お母さんと手をとつて、おい〳〵泣いてるのよ。四十度もある高熱の患者さんとよ。――ほんとに金があつたら、院長の面――（一寸周圍を眺めて）へ叩きつけてやりたかつたわ。

佐賀。ほんとにね。でも、貴女(あんた)があるから仕合せだわ。杉浦さんも喜んでるでせう？

吉村。當然よ。人間ですもの……それ位の事するのが……。入院料が出せなくなつたからつて、急に待遇を變へるなんて、人間ぢやないわ。あゝ！　くしや〳〵する。――早く休ませてお貰ひなさいね。（階段の方へ引き返へす。）

中村の方の嬰兒が、何かに驚いた様に急に大聲で泣き出す。と、佐賀の方の子供もその聲に驚いて泣き出す。二人の少女

はそれを困つたらしい様子であやし乍ら子守唄を歌ふ。

ねむれ〳〵歌をきゝて花の如き幼兒よ――

少女達はホツとした風で顔を見合せて微笑する。

中村。「産褥婦に發する疾病」覺えて？

佐賀。（泣きさうな顔になつて）知らないわ。

中村。（追つかける様に）あんた、「子宮破裂の徴候」言へて？

佐賀。（いよ〳〵泣き出しさうな顔になつて）私、忘れちやつたわ。

中村。‥‥私も！（悲し相に吐息をする）

突然自動車の爆音が間近に起つて、院長を乘せた自動車が、玄關先きに横着けになる

佐賀。
中村。あら、お歸へりよ。（顫へ聲で云つてあわてゝ奥へ引き込む）

川本。（狼狽したらしい風で）お歸へり――院長先生のお歸へり――

院長。（自動車から飛び降り乍ら）馬鹿ッ。そんな聲で聞えるかッ。（大聲で）集れ！　皆、集れ！　（川本の方を向いて）川本。貴様はあの八號室に居る奴を、引つ囚へて來るんだ。確か野本の奴だつた。

四五人バラ〳〵と、不安相な顔をした白衣の産婆見習生達が集つて來る。運轉手の川本あわてゝ靴をぬいで階段を駈け上つて行く。

院長。オイ、何をボヤ〳〵してるんだ。早く行李を持つて來ないか。――畜生！　貴様も野本の奴の仲間だな？　一緒に野本を逃がさうとしたんだらう？（須崎愛子の腕を掴む）

須崎。まあ‥‥先生！　私‥‥そんな‥‥（泣き顔になつて、恐る〳〵院長の顔を見上げる）

院長。うむ、お前か、須崎か！　お前なら其麼事はないだらう。表へ行つて行李を持つて來て呉れ、二階の八號室の窓の下だ。野本の奴が逃げようと思つて、上から行李を下しやがつたんだ。

見習生。まあ、野本さんが？

二三人の見習生はどや〳〵と玄關を表の方へ出て行く。又、六、七人ちり〳〵に見習生が集つて來る。その後から先刻の運轉手川本が、野本千夜子を引つ立てゝ來る。その後からも二三人の見習生が恐し相について來る。

川本。先生。――院長先生こいつでした。野本でした。（荒々しく院長の前に突き出す）

院長。よくも貴様は‥‥。（矢庭に拳を固めて二ツ三ツ顔を打つ）

野本。御免下さい。御勘辯下さい。（泣き叫ぶ）

先刻の見習生四人がかりで、重さうに二ツの行李をもつて來る。そして、院長の方へ怖々と置く。

院長。（少し落着きを見せて）野本！　出て行きたければ出て行けッ。その代り、この行李は永久に返へしてやらないぞ。――恩知らずめが‥‥。何も知らぬ、鼻たらし子の時分から、救はれて來て一人前にして貰つたのを忘れたのか？お前には年季があるんだ

ぞッ。八年間の年季が、未だ切れてないんだぞッ。

野本。(急に起き上って、烈しい聲で)餘りです。餘りです。――年季なんかありません。私は……家を出る時には……學資金が先生に……(段々昂奮して來る)

院長。(狼狽を見せ乍ら)云ふなッ。貴様の云ふ事は皆嘘だ。何が學資金だッ――

野本。眞實です。眞實です。確かに渡してあるんです。國を出る時に五十圓に……月々十圓の學資金が、兄さんの手から確かに出てるんです。(急に激しく啜り上げて)それを……それを年季だなんて、あんまりです〳〵。

院長。馬鹿ッ! 未だ云ふのかッ!(突然野本を引き寄せると、手當り次第に撲りつける)

玄關のドアを開け女醫山井芳美が洋裝姿で歸へつて來る。

山井。(さも驚いたらしく眼を瞠つて)あら、先生。何うなさつたんで御座居ます。

院長。(急に相好をくづして)山井さん。今お歸へりですか? まあきいて下さい。呆れたもんぢやありませんか。こゝに居る野本が、今逃げ出さうとしおつたので、懲しめてやつて居る處です。無教育な輩は度し難いつて全くですな。この就職難の時代に、この慈惠院の天國を出て何處へ行かうとするんだか、馬鹿の心は俺には些とも判らん。

山井。まあ。驚いたもので御座いますね。私なんか、全く慈惠院を樂園と思つて、後生大事に齧りついてゐますのにね。ホヽヽ(輕侮的な、しかし哀れみの眼で野本を見る)

院長。貴女などとは人間が違ふ。山井さんなどは此處を出られゝば、買ひ手が手を受けて待つてゐる――ハヽヽ、さあ、あちらへ行きませう。昨日フランスから歸へつた友人が持ち歸へつた、珍らしいウキスキーがありますよ。觀劇の後の一杯のウキスキーは又格別ですからね。今夜はすつかり正體がなくなる迄、山井さんを醉はせて上げますよ。あなたは毎も性が惡い。大切な場所へ行くとするりと脱けて了つて……。ハヽヽ。

山井。あら、先生! 厭で御座いますわ。あんな事仰有つて……

院長。ハヽヽ。今日は私が介抱して上げる……。(山井の肩に手をかけて去らうとする)

野本(口惜し相に二人の方を凝視めて)畜生! 畜生! 人を盲目だと思つて……

(狂氣した様に叫ぶ野本を、運轉手の川本は狼狽し乍ら、云はせまいとして爭ふ)

院長。(きつとなつて振り返へつて)言つたな、何うするか覺えて居ろ! 可哀さうだが今夜からはあの、一號の窓の無い暗い部屋へ監禁だぞ。麥の飯が戀しいとほざくな。川本! 何をぐづ〳〵してゐる。早うせんかッ。一號室だ。

川本。はつ。

院長。皆もよく見て置くんだぞッ。生意氣云ふと。この野本の通りだ。他人事ぢやないぞッ。

野本。吸血鬼！　畜生！　吸血鬼！

　野本、川本運轉手の手を振りほどいて、狂的に叫ぶ。　急速に幕

第二場

調書

入院料自三月五日至五月廿三日	金三百六十五圓
嬰兒手當自至六十三日	金百六圓
分娩料	金五十圓
分娩具費	金三十圓
看護婦自至六十三日	金百五十七圓五十錢
水嚢、氷枕	金五圓
滋養品料（牛乳五十本）	金五圓

計金七百十八圓五十錢也

山内慈惠院病院會計

杉浦房緒殿

慈惠院病院の二階病室。日本風の床、違ひ棚、藁蒲團を高くしたベットの上に、母親の房緒が横つて居り、その左側の小兒用ベットにすや〳〵と嬰兒が眠つてゐる。娘のまち子は母親の右側に、ベットに寄り添ふ樣にしてゐる。

　第一場の翌朝である。

まち子（調書を怨めし相に眺め乍ら）ねえ。お母さん。仕方がないぢやありませんか。私は決心したんですから泣かないで下さい。この場合、お父さんをお助けし、お母さんを此處から救ひ出すには、これより他に道はないのですわ、矢來町の伯父樣は伯父樣で、百萬長者でいても、血も情も無い方なのですし……。もと〳〵人に頼らうなんて思つたのが私達の誤りだつたのですからね。

房緒。それは、人に頼らうと思つた私達がいけないのは云ふ迄も無い事だがね。この場合、何うして頼らずに居られるだらうか？お前、もう一度山内さんに……院長さんにお願ひして見てお呉れでないか？――あの方も人間であつて見れば、よもや不人情な事は仰有るまいと思ふのだけれど……。

まち子。駄目。あんな院長さんなんか！　恐しいわ。あれは人間ぢやないわ。人鬼よ。――あんな人の自由になる位なら、私は身賣りをした方が、餘つ程いい

房緒。（さつと顏色をかへて娘の方を見て）ぢや、何か山内さんが？――（まち子の頷づくのを見ると、絶望的になつて）あゝ！　一體何うしたら好いのだらうねえ。（堪へかねたと云ふ樣子で、顏を枕

に押しあてゝ烈しく泣く)

まち子。お母さん。お泣きになつては厭。泣かないで頂戴。もともとこんな贅澤な病院へ入つたのが悪かつたのよ。ねえお母さん。お母さんにはお氣の毒だけれど、實費の産院か何かで、極く樂に濟むところへ行けばよかつたのですわ。夫れをお父様が前々からの關係で、此處へお入れになつたのがいけなかつたのよ。こんな時に腎臓炎なんかゞ出たのも不幸だつたんだけど……こゝの院長なんて……山内博士なんて……其麼義理も人情も構つてゐる樣な男ぢやないわ。未だこの部屋へ入れて置くのが、不思議な位よ。今に屹度この部屋からも退却を命ぜられてよ。廻診の時此處だけをわざとぬかして行つたり、藥りを吳れなかつたりする位、あの人としては、未だ〳〵恩惠のつもりかも知れないわ。此處に置いて吳れてゐるつて事だけでもねえ……

房緒。恩知らず——未だ山内さんが、此處で開業したばかりのころ、何一つ無い哀れな貧乏醫者の面倒を見ておやりになつたのが、お父様なのだからね。私はそれを思ふと口惜しい。——それをよくもお前に其麼事を……。(少しづゝ興奮して來る)

まち子　あんな人は人間でないんですもの。さう思へば、何ともありやしないわ。たゞあんな奴——人非人の自由になる位なら、首をくゝつて死んでやるつて云ふのよ。——

房緒。首をくゝつて?——(鸚鵡返へしに云つて、鴨居を見上げる)

まち子。眞實よ。お母様。——だけど、私、其麼事はしないわ。どんな場合にだつて生きて行くのが、强い人なのですものね。死ほど卑怯な事はありやしない。死ねば誰れだつて樂になれていゝけれど、それぢやあんまり卑怯すぎるわ。苦しんで生きて行く處に、人間の價値があるのよ。だから、私決して死になんかしないわ。その代り、身賣りをしてこの急場を救ふわ。

房緒。お前に身賣りをさせて、お母さんやお父さんが安閑としていられるとお思ひかえ。例へ私がこの場が辛いからつて、自殺をしたからつて……お前にそんな事が……

まち子。お母さん。でも、さうするより他ないぢやない事? 私、金策に行つて……失望しきつて歸へつてらした時の、あのお父様のお顔を見て、泌々決心させられたんですよ。お父様のお身を縮めるやうな心配、お母様のお慈悲地獄の生活、それを見てゐて、何うして私が知らん顔して居られるでせうか? 藝者でもお女郎でも……なんにでもなれるものならなつてお金を作つてお上げしたいと……昨夜も夜つぴて考へ明したんですのよ。(泪ぐんで來る)

房緒。まあ、——お前に其麼思ひをさせる位なら、私がこの梁に紐でもかけて、首をくゝつた方が……

まち子。(癇高い聲になって)お母さん! 飛んでも無い。そんな心は起さないで下さい。ねえ、お母さん。私は……私は……(感極

つて吸り上げる）お母さんを此處から出し度いばつかりに、もう決心して口入屋の主人と約束までもして來てるんですから――

房緒。ま……。お前は……まあ……。（同じ樣に泣きじやくる）

まち子。（つと泣きやんで、何かを思ひ返へした風で強く）お母さん命さへあれば又何とでもなりますわ。お母さんは此處から出度いと云ふ事を、もう二ケ月も前からずつと思ひ續けていらつしやいましたわね。（念を押す樣な調子で云つて、母を凝視する）

房緒。それはお前、今の私にはこの子を連れて（隣のベットの嬰兒を振り返へつて）こゝを退院すると云ふ事より他に、今の私の願ひは無いのだけれど……。最初は恐しいと思つた病氣も、今はもう些とも恐しくもなんともないのだからね。昨夜もあの親切な看護婦さんが熱をはかつて與れたら、四十一度あつたさうだが、私には其麼事は問題ではない。たゞこの病院から脱れ度いそればかりなのだからね。こゝの窓に赤い朝日がさし込むと、「あゝ今日も一日辛い日が始まるのか」と、身も縮まる念ひをし、この部屋に薄暗が迫つて來ると、「あゝ今日も一日暮れた」と、丁度、獄に居る囚人と同じ念ひで、朝夕を送つてゐるのだからね。――出たい事はどの位出たいか判りやしない。原町の家は雪の降る頃に出たのに、病院の庭に梅の咲くのを見、櫻の噂も遠にすぎて了つた。幸福も平和もこの病院の外にはあるかも知れないが、それは皆夢だ。こゝにある、この恐ろしい病院の調書の爲に、出るにも出られない私だが、この上にも日一日と、幾らかさんで行く事かと思ふと、夫れが空恐しいし、全く私はお前の前だけれど（泌々となつて）子供を殺して死んで了ふか、それとも、放火（つけび）でもして、この場が脱れられるものなら脱れ度いと、時には無鐵砲な事も考へて了ふのだよ。

まち子。だからお母さん。私の云ふ事をきいて頂戴。私は決して輕卒に云つてるのではありませんのよ。ねえ。お母さん。そんな死ぬだの放火するだのつて、飛んでも無い事を考へないで、私の考へをきいて下さい。この場さへ一時助かれば、又お母さんが此處をお出になつた後で、後は又何とかなるぢやありませんか？世の中には立派な貴婦人や令嬢のやうな風をしてゐても、心の腐つた人が澤山あるんですよ。私はたとへ操の無い、表面的には汚れた女になつても、心だけは正しい、自信を以て生きられる人間になり度いと思ふんです。調書に六百圓とあるけれど、これは暴利で、こんなにはいりはしないと思ひますわ。五十圓の保證金が納めてあるし、最初にお父樣が二百圓院長に保證金外にお渡しになつたつて云ふから、本當はこれで充分實費は出てると思ふんですけれど、でも營利病院へ承知で入つた此方が惡いんだから仕方がありませんわ。――ぢや、お母さん。これから行つて來ますからね。（起ち上らうとする）

突然扉をノックする音がして、看護婦の吉村が顏を出す。

吉村。御免下さい。あら、お孃さんもいらしてらつしやいますのね。ようこそ。――あの、私…今日は申し上げにくい事を云ひに參つたんですけれど…。

まち子。（泪をかくして、わとざ元氣らしく笑顔を見せて）毎も母がお世話になつて、有り難う御座います。お蔭樣で何うやら…。あの…（幾分氣がかりさうに）仰有りにくい事つて、何で御座いませう？

吉村。（さも云ひにくさうに、そして、同情にたへないと云ふ風で）實はね。今日突然入院患者が出來ましたんで、この部屋を移つて頂けつて、院長先生が御無理な事を仰有るんですの。お熱もお高いんですし、絶對安靜を要する患者さんに私、夫れは餘りだと思ひましたから、何度もさう申し上げたんで御座いますけれど…。

まち子。ほら、お母さん。矢つ張りね。（母の方へ一寸輕侮的な眼をやる）

房緒　まあ何と云ふ…。（聲をのんで啜り上げる）

吉村。（泪聲になつて）ほんとにお氣の毒で…。私、口惜しくつてくやしくて堪らないんですけれど…。院長先生も餘りですわ。

まち子。いゝえ。いゝんですのよ。夫れが當然ですものね。最初は大切なお客樣だと思つて、特等室へ入れた私達が、不時の失敗から、一番厄介なお客に急轉したんですものね。――で何時までに空けろつて云ふの？

吉村。それが、只今直ぐにつて仰有るんですの。入院なさるのは夕方なんですけれど、いろ／＼準備をしなきやならないさうですから…。

まち子。大掃除もしなきやならないでせうしね。――貧乏神の住んでた跡だから、緣起が惡いからねェ、、。で、今度の福の神樣はどんな人？

吉村。それが、厭なんですのよ。あの、御存じありません？　有名な強慾親父で新聞で叩かれた、千秋樓つて女郎屋の女將なんですのよ。こゝのとても大切なお客になつてゐるんですよ。女郎を酷使して儲けた金ですから、乾度病院ぢや綺麗に使ふんだと見えますわね。大切な戀女房の病氣の事ですから…。

ラヂオ屋の男。御免なさい。（遠慮なくつか／＼と上つて來て、さつさとラヂオの線（コード）を取り附けて出て行く）

吉村。（呟くやうに）あんなに面あてがましく、ラヂオまでもつけに來るんですものね。（頂垂れる）

（三人無言）。

まち子。（きつとなつて）お母さん。直ぐ退院しませうよ。吉村さん。院長先生にさう仰有つて頂戴な。二時間後には乾度調書通りのお金を揃へて參りますから、つて…。ねえ吉村さん。よくつて？　その通りにお取り次ぎ下さいな。

房緒。（驚き顏で制する樣に）まあ。まち子。お前…。そんな…。

まち子。い丶のよ。お母さん。默つていらつしやい。吉村さん。お願ひしますわ。

吉村。は、畏りました。ぢや直ぐ申上げますから。――ほんとに口惜しう御座いますわね。今日こ丶から退院なさるんでしたら、私も什麽に嬉しいか知れやしませんわ。ぢや……（一禮して去る）

まち子。お母さん。ぢや、暫らくの辛抱ですからね。こ丶にじつとして待つて丶下さいましね。（優しく母親の肩に手を掛ける）

房緒。まあ、お前……。（不安げにまち子を見上げる）

まち子。い丶のよ。お母さん。何も心配しないで此處に居て頂戴。私が來るまで移らなくてもい丶わ。こ丶に威(いば)つていらつしやい。二時間の辛抱よ。二時間よ。

床の間の隅に置いてあつたスカーフを取つて、手に持つとす速く扉を開けて去る。間、軈て烈しく嬰兒が泣き出す。

房緒。お丶。どうおしだえ？ どうおしだえ？ （ふら／＼とした足どりで、無理に起き上つて、嬰兒のベッドに近より、さも愛しげに抱き上げる）

嬰兒は母親に抱かれると、又すや／＼と眠入る。房緒は嬰兒の額の上にポロ／＼と大粒な泪をこぼす。次第に聲を揚げて悲しげに慟哭する。間、軈て何事かを決心した風できつとなつて顔を上げる。嬰兒をそつとベッドに寢かして、枕元に置いてあつた調書を取り上げると、物怖した樣子でそれを眺めた後、ずた／＼に引き裂く。

房緒。金！ 金！ 金！ （狂氣した樣に叫び乍ら、枕元に置いてあつた手拭を細(ほそ)にして、嬰兒の首へ卷きつけ、力に任に任せて引っ張る。そして、ふら／＼と起ち上つて來て、先刻見て置いた鴨居にしごきを掛ける)。

ドアの外の聲。（烈しく扉をノックし乍ら）杉浦さん！ 杉浦さん！

徐々に暗轉

第三場

慈惠院病院の後庭。雜草の生えるに任せた空地。左手は一面の野菜畠、右手は長く續く病舍の建物の片形が見える。

第二場より數日の後、田中菊枝と見習生一、二、三が病舍の方から、どや／＼と出て來る。

見習生一。（顫へ乍ら）あ丶怖！ 怖はかつた。――

見習生二。可哀相に。あの人達の怒るのも無理はないわ。あの老爺(ぢい)さんは死にかゝつてゐたんですもの。

見習生三。もう、今頃は死んでるかも知れないわ。あの老爺なのだし、重病の患者を擔いで歩いたりして……。屹度あの人達は冷くなつたのを知らずに、醫者の家を次ぎから次ぎへと、探し歩いてゐるに違ひないわ。可哀相にねえ。（ほつと吐息を吐く）

田中。あれが、私達プロレタリアの姿なのよ。私はもう今日と云ふ

今日は沁々と、この醫師と云ふ職業が呪はしくなつて來たわ。人を助けるのが醫師ではなくて、人を見殺しにするのが當今の醫者だつて事が、ハッキリ判つたのですもの。だつてさうぢやありませんか、一寸手を下せば、病狀から手當法まで判るものが、金にならない患者だと云ふだけの理由で、それを拒むのは、完全な殺人罪――でなければ、殺人幇助罪ではない事？

見習生三。殺人幇助？ 全くね。夫れが、事實部屋が無いとか何とか正當な理由でもあるのなら、兎も角として、今日の樣な場合には、當然入院させて治療さすべきだわねえ。――この間のあの杉浦さんの事件だつてさうぢやありませんか？ 私思ひ出してもぞつとするわ。（氣味惡げに肩をすぼめる）

見習生一。（ふと病舍の方に誰か居るのに氣付いた樣子で）あら、あすこに居るのは、あれは、杉浦さんのお孃さんではありません？ 又來てるのかしら？

見習生二。（同じ樣に病舍の方を振り返へつて）あら、さうよ。又今日も來てるのね。毎日〳〵「お母樣を返へせ〳〵」つて院長先生を責めに來るのよ。院長先生も堪らないわねえ氣違ひにかゝつちやあ……

見習生三。いゝ氣味だわ。鬼の樣な院長先生を責める事なんか、とても狂人でなくちや出來ない仕事だわ。いゝ氣味！ うんと虐めてやつてくれるといゝわ。

田中。全くね。でも、あの娘さんは可哀相ね。自分がお茶屋か何かの女中に身賣りをして迄、お母さんを退院させやうとなすつたつて云ふぢやありませんか？ それが、お母さんがあんな事をなすつたんで、すつかり力を落して發狂して了つたのよ。無理もないわね。私だつて……あの場合だつたら、屹度氣違ひになるかも知れないわ。――それはさうと、皆さんの遲いこと。矢つ張り思ふ樣に手が離せないのかしら？ 吉村さんだけでもいらつしやればいゝのにね。（病舍の方を背伸びして見る）

見習生一。（同じ樣に病舍の方を見返へり乍ら）あら〳〵噂をすれば影つて、こちらへまち子さんがやつて來るやうよ。赤いものなんかぶら下げて……。

右手の病舍の影から、まち子が、赤い着物をきせた人形を抱いて、ふら〳〵とした歩調で來かゝる。見習生二、三人がその後から追つかける樣に出て來る。

まち子。何？ 院長先生が居ないつて？ ハヽヽヽ。怖いんだわね。おつかないんだわね。いゝ氣味だわ。――大事のお母さんを殺したんだもの、私が怖いのは當然よ。ハヽヽ（後庭の方に集つた見習生達を見つけると、突然さも嬉しさうな表情をして叫ぶ）あッ！ お母さんが居た。（急に駈け出す）

先刻から集つてゐる見習生達の側まで行くと、きよとんとしてハヽヽと無心で笑ひ出す。見習生達は顔を見合せて感慨

無量の表情をする。右手から吉村はるの、須崎愛子、中村ふき子、佐賀よし子其他、二三人の見習生がバタ〳〵と駈け出して出る。

吉村。 有り難う。集つて下すつたのね。もうこれで全部？　未だ少し足りないやうね。（一同を見廻して、まち子が側に居るのに氣付いて）まあ。杉浦さん。あなたは何うして這麼ところにいらつしやいますの？　今、お父樣が診察室の方をお探しになつていらつしやいましたよ。――（優しくまち子の肩に手を掛けて）さあ、いらつしやいまし。こゝはね、お孃さんなんかいらつしやる處では御座いませんのよ。それは〳〵恐しい處なんですから……。ねえ。お父樣とお歸へりなさいませね。

まち子。（きよとんとして）お父樣つて誰の？

吉村。（驚いて）あら、まち子樣のお父樣ぢや御座いませんか？――（悲しさうに）ぢや、あなたには私も御判りになりませんのね？

まち子。 厭な吉村さん。（呆れたと云ふ樣子でじろ〳〵と吉村を眺めて微笑し乍ら）私が吉村さんが判らないなんて……。可笑しいわ。そんな事…私よく知つてるんぢやありませんか、あなたは私のお母樣を一番親切にお世話して下 つた方なんですもの……。

吉村。 あら、御存じなんですの？

まち子。 勿論よ。私こゝの病院のうちで、あなたが一番好きなの。――今に私が洋行したら、あなたを御一緒に連れてつて上げますわ、私、もう一月したらら、ニューヨークへ行くんだから……

見習生一。 あら……。

見習生二。 まあ……（吹き出す）

まち子。 お母樣がね、ニューヨークからお手紙をくれたんですのよ。バーデンの街がとても美しいつて……。

吉村。 さあ、あちらへいらつしやいましね。私達はこゝで少し御用をしなきやならないんですから……。あなた御一人でいらつしやれますわね。まち子さんは何ともないんだから……。

まち子。 私？　無論一人で行けてよ。皆さんは何故私を病人扱ひなさるの。厭になつちやいますわ。私…洋行する事だつて眞實なんですのよ。院長先生が外國へやつて下さるんでもの。

吉村。（驚いて）えツ？　院長先生が……？

まち子。 ホヽヽ。院長先生なんて私大嫌ひ。――ぢや、私、あちらへ行きますわ。（つまらなさうに去る）

吉村。（改つた調子になつて）皆さんに集つて頂いたのは他でもないんですが、私達はこのまゝ安閑としてゐちや、いけないと思ふんです。考へなければならない時が來たと思ふんです。それで皆さんに集つて頂いたんですけれど……。

田中。 同感。

見習生一、二、 同感。

吉村。（演說口調になつて）私達は永い間欺されて來ました。產婆、

看護婦と云ふ、有り難くも無い資格を貰ふ爲に、惜むべき資本家の喰物にされて來たんです。

習見生三。産婆なんて下らない。——看護婦なんて下らない。——

吉村。さうです。その下らない産婆、看護婦の免狀を貰ふ爲に、私たちはあたら靑春の七年間を棒に振つたのです。

田中。資格が出來たら……就職難だ、開業難だ。あゝつまらない。

見習生二。惜しい……。靑春が惜しい！

見習生一。さうだ。あたら靑春の浪費だつた。

見習生四。私達は這麼つもりではなかつた。東京へ來たらもつと幸福になれると思つてゐた。

見習生五。産婆にさへなれたら、幸福が摑めるとばかり思つてゐた。

（一同天を仰いで歎息する。佐賀よし子、中村ふき子其他年少の見習生達は、悲し相にすゝり泣きを始る。）

中村。姉さん。私は辛い。（年長の見習生の胸に顔を埋めて泣く）

佐賀。お母さんの處へ歸へり度いわ、鄕里へ歸へり度いわ。

須崎。可哀想に……。泣くんぢやありませんよ。今はあなた方が幸福になれる樣にその相談をしてゐるのですからね。——まあ、可哀想に……。（佐賀の手をとつて）この手ぢや痛いでせうね。——此處ぢや病院ばかりか、奥にまで一人の女中も置かないのですものね。産婆見習生と云ふ名義で抱へられて來た少女達が、朝は暗いうちから起こされて、子守の仕事からおさんどんの仕事、下男の仕事までもさせられるんですもの。少し大きくなれば入院患者の附添看護婦代りをさせられて、夜もおち／＼眠むれやしない。——

田中。それで警察の表面だけでは、この病院には一人の看護婦もないと云ふ事に、立派に屆出がしてあつて、税金さへも不用だと云ふんだから、癪に障つちまふはね。入院患者から看護婦料一日分二圓五十錢也を立派にせしめて置き乍ら、巡廻の巡査さんに、「うちには一人の看護婦も居ません。皆産婆見習生ばかりです。」とはよくも云へたわね。私達こそ善い面の皮だわ「貴女方はいゝですね。一日に二圓五十錢なんて儲けて……。」なんて仰有る、何も知らない患者さんの言葉に、腹が立つけれど、怒れもしない。——こんな馬鹿馬鹿しい事が又つてあるでせうか？

須崎。私達は見習生に來たんぢやないわ。——女中や看護婦に使はれに來たんだわ。

見習生一。さうよ。永遠に、無給の看護婦やおさんどんになりに…。

田中。口惜しいわね。あの募集係りの人達の言つた事を思ひ出すと口惜しくなつちやふわ。よくも云つたわね。あんな事……。

見習生二。さう／＼あんな事を云つたわ。——ピアノもひける、勉強もさしてやる。後にはえらい女達にもさしてやるつて……。

見習生三。あら、其麼事を云つて？ 私には毎週一回位は帝劇や歌舞伎座位連れて行つて上げるつて……。

見習生四。音樂會や講演會位お望み次第だつて……。私あんな嬉しい時はなかつた。（昔を追想するやうな懐しげな表情になる）

田中。私たちの方へ來た時もさうだつた。——何しろ、こゝの先生お二人は、私達の村——九州ぢや立志傳なんですものね。唯一人として尊敬してない者はなかつた。——いゝえ今だつてさうだけれど……。その先生のお膝元へ行けるつて云ふんだもの。自分だつて、いきなり、その先生のやうな立志傳中の人物になれるやうな氣がしたのも、無理はないわね。——あゝ。それがその憧憬（あこがれ）の東京へ來て見ればこれなんですもの。——

須崎。善良な田舎の人々の心につけ入つて、何の誓約もしないでうやむやで連れて來るのね。それがさて、此處に連れて來ると、やれ五年だの、やれ十年だのと、恐しい年季が獨り定めに出來上つてる事なんですわ。

見習生一。私は五年ださうよ。

中村。（泣き相な顔をして）私は院長先生が十年だつて仰言つたは。

見習生二。私はもう三年になるわ。でも、こんなに忙しくつて、勉强する暇もないんぢや、何時産婆になれるんだか、見當もつきやしない。何も知ら無い善良な田舎者の親馬鹿は、今でも五圓、十圓て大金を、時々小使だつて送つて呉れてゐるわ。親馬鹿子馬鹿——こゝに居る人間は、みんな馬鹿にされて了ふ。

吉村。今迄は馬鹿だつたのよ。でも、之からは皆で結束して賢くなりませうよ。何時までぐづぐづ云つてゝも駄目。要求する事をハツキリと要求して、頑冥な資本家にも反省を促してやるのよ。斯うした横暴な資本家共が、猛威を奮ひ得る時世——制度がいけないのは判りきつてるんだけれど、私たちとしては先づ、直接その資本家の一人にでもぶつゝかつて行つて、勇敢に鬪ふより他はないと思ふの。で、その爲に、今日此處へ集つて頂いたんですけれど、要點だけをずんずん進めて行つてもいゝ？

田中。何うぞ。

見習生三。贊成！

吉村。要求する事は澤山ありますが、私達は先づ第一の要求として野本千夜子さんの無暴緊禁を解かせなくちやならないと思ふの。次ぎには私達の待遇の改善とか、賃金の請求とか色々あるんです。——で、私は先づ、私達の尊敬してゐる山内鐵也先生の處へ使ひを出して、先生に應援して頂き度いと思ふんですけれど、皆さんのお考へは如何？

見習生三。贊成よ。鐵也先生は院長先生の弟さんだけれど、私達の味方だわ。

田中。鐵也先生は純正のマルキシストよ。院長先生なんかとは同じ兄弟でも、人間が違つてらつしやるわ。

見習生一、二、贊成！　贊成！　それが好いわ。

吉村。有り難う。ぢや、誰か適當な人——鐵也先生の處へ報告に行

く人を二人――適當な人を選んで下さい。

見習生一、須崎さん――吉村さん。

見習生二、吉村さん――田中菊枝さん。

見習生三、田中菊枝さん。須崎愛子さん。――

吉村。では、須崎愛子さんと田中菊枝さんの二人にお願ひしませう。――私は今は病院に殘る必要がありますから……。皆さん。異議はありませんね？

一同。異議なし。贊成々々。

吉村。では、須崎愛子さんと田中菊枝さん。身にかへても先生に傳へて下さいね。御兄弟とは云つても、思想の相違から絶交になつてゐる鐵也先生の方へなんか、お願ひに行つたと云ふ事が判らうものなら、貴女方お二人は勿論、私達までに大きな影響のある事なんですから、充分に自重して…少しも早く報告して下さい。

須崎、田中。は……はい。屹度お願ひして參ります。

吉村。萬一院長側のスパイに、何處かで見付かつた場合には、何の用事で鐵也先生を訪ねたかを絶對に云はない事。――よくつて？それだけを必らず誓つて下さいね。――それから、皆さんもこの病院の中には、到る處にスパイが居るんですから、充分に氣をつけて下さい。――では、皆さん。有り難う。（一禮する）

皆々一禮して去る。　急激に幕

第四場

病院内の洋風の院長の部屋。開け放たれた扉を通して、寢室のベッドが見える。部屋の正面は扉。第三場より數時間の後。

院長。須崎――愛子。もういゝ加減に觀念したら何うかね。何時まで强情を張つてゐても、此處へは誰も來つこないよ。

椅子に腰をかけて固くなつてゐる須崎の肩に手を掛け乍ら好色らしい樣子で私語く。

須崎。私……そ……そんな事は些とも思つてなんか居ません。（唇を嚙みしめて瞑目する）

院長。ぢや。何が悲しいんだ。戀しい男が……山内鐵也つて男があるのに、それにも會へず、俺に突然引つ張つて來られたのが悲しいのか？　え？　さうだらう。さうで無ければなんだつて鐵也なんかの處へ逢ひに行く必要があるんだ。――（しつこく須崎を抱からとし乍ら訊く）

須崎。鐵也先生が戀人――まあ……。

院長。戀人でないつて云ふのか？　だつたら、何であんな男の處へ行かうとしたのだ。あんな色魔の處へ行つて居たら、今頃は何うなつて居たか判らん。俺（わし）が今日偶然本所へ用事があつて出掛けたから、都合よくぶつかつたものゝ、もしさうでなかつたら、お

前はあの鐵也の餌食ぢやないか。自動車に乘せて無理矢理連れて來た俺を怨むより、自分の幸運を感謝したらいゝんだよ。鐵也なんて顏は生つ白くて若いが、あいつは馬鹿だ。あたら醫學士が何だつて、あんな乞食醫者の仲間入りをして、こ汚い勞働診療所なんかを作る理由があるだらう。あれが、あいつの馬鹿の證據だ。あいつは下らない自由勞働者や、立ん坊と一緒になつて、眞黑になつて働いてゐる。あんな馬鹿が世間に二人とあつたら大變だ。社會が見る〳〵うちに小汚くなつて了ふ。――俺などは今日も一寸行つて來たゞけで、この通り（ポケットから十圓札束を出して見せ乍ら）五十枚轉げ込んで來たんだ。これなんざ、ある未亡人の例の私生兒の後始末なんだが、ちよつとした良家のお孃さんの處女證明書の二つ三つも書いてやれば、樂にこの病院の經營費は出るんだからね。――その代り恐しい曰く附きのお孃さんなんだが、それが處女でましまして、立派に富豪の花嫁になられるつて寸法さ。いや、飛だお孃さんで何も知らずに、醫師の診斷書を信用して貰ふ、相手こそいゝ面の皮だが、しかし、その花婿たるや、又御同樣の品行方正確實の代物なんだからね。醫師の責任はとんとない譯だね。ハヽヽ。これが、世間の裏さ。人間は表ばかり見て生きて行けるもんぢや無い。お前なんかも、もつと世間の裏をよく見て、賢くなつた方が得だよ。嘘は云はない。――ねえ。何うだい？　お前だつて滿更、木や石ぢやないだらう？

須崎。（興奮して）もう云はないで下さい。私が今貴方の仰有る事をきいたら、何でも思ひ通りにしてやらう。金が欲しければ金もやらう。――着物がほしければ着物も買つてやらう。その代り、きかない時には、私は勿論、母も弟もこの病院には置かないと仰有るんでせう？

院長。（少してれて）うむ。それは……

須崎。よして下さい。この場脫れの事を伺つて、安心してるには、私は世の中を知り過ぎてゐるんですから……。私はもう〳〵……金なんていらない……。物質なんていらない……。でも〳〵（さめ〴〵と泣き出す）

院長。泣かなくてもいゝ貞操が大切だと云ふのか？　判つてる〳〵（いよ〳〵寄り添つて行く）

須崎。貞操――貞操――がなんだ。貞操は金持ちの、有閑階級のもつものだ。――小さい無智な弟や、お母さんのパンの代りになりもしない貞操なんかに少しの未練も持つちやいないんです。でも私は口惜しい。私は悲しい。――可哀相な小鳥が大鷲の爪にかゝつたやうに、資本家の强慾老爺の手で、自由に蹈みにじられるプロレタリアの娘の魂を思ふと、死にもしたくなるんです。云ひませうか？　私にはこの病院の中に愛人があつたんだ。――それがしがない通ひの藥局生なんですもの。もし明るみへ出したら早速私達親子の口に關はるのは判りきつてゐるんです。可哀相に先方

の心は私は知らない。思ふ心さへそれが恐しくつて、打ち明けも出來ない私たちだつたんです。――それが資本家は憎らしい。……永い五年――六年の間を大切に心だけに培つて來た純な戀の芽生えを無慙に摘み取つて、直ぐにも自分のものにして了ふかと思ふと、それが、殘念なんです。口惜しいんです。

院長。（會心の笑みを見せ乍ら）口惜しいか？　殘念か？――口惜しくても殘念でもいゝ。俺は自分の自由にさへすればいゝんだ。俺を嫌つて他の男を思つとる女でもかまはぬ。俺は斯うと思つた女を何でも自分のものにさへすれば好いのだ。――藥局生？　誰ぢや。大月か？　千田か？　俺が一緒にさしてやらうか？　うむ？　誰なんだ？（無理に抱きかゝへ乍ら、好奇的に訊く）

須崎。煩いッ。誰が先生なんかに（興奮してやゝ自棄的になつて）先生は敵です。先生は仇です。男は敵です男は……資本家は……。

院長。ハヽヽ。男は敵か……資本家は敵か……。敵でもよいのぢやハヽヽハヽヽ。（強い力で女を抱きかゝへる）

扉の外の聲。（あわたゞしく）院長先生！　院長先生！　こちらにお出でになりますか？　只今一號室の八木さんが、急に容體が變つて、大變お苦しさうなんで御座います。何うぞ先生お速く……。

院長。何だ騷々しい。今一寸重要な用件があるんだ。鎭靜劑でも服用せて置いて與れ。山井さんか內山にでもさう云つて、カンフルでも注射しとけばいゝんだ。其麼事位に何も、多忙な俺を煩はす迄もない事ぢやないか。――今直き行く。

扉の外の聲。（泣き出しさうな聲で）內山先生も山井先生も、院長先生でなければと仰有るんで御座います。……もう、いよ〳〵駄目のやうなんで御座いますから、何うか先生お早く……。

院長。（五月蠅さうに眉を寄せ乍ら）今行く今行く……。少し待たせといて與れ。（いよ〳〵強く女を抱き締めて莞爾とする）

暗轉

第五場

第三場と同じ場所。第四場の直後。須崎愛子が獨り木の根に腰を掛けて、忍び泣いてゐる。其處へ產婆見習生一、二、三、どや〳〵と出て來る。

見習生一。あら、須崎さんがこんな所に居るわ。

見習生二。まあ……。よくもこんなところに平氣でゐられるわね。裏切者のクセに……。

須崎。（慟哭し續けてゐたのを、突然狂氣した樣に起ち叫ぶ）責めて頂戴。責めて頂戴。私は裏切者よ。憎むべき裏切者よ。貞操と生命とをすり替へにさせられた、不幸なプロレタリアの娘なのよ憎んで頂戴。罵つて頂戴。食べて行けない爲めにする淫賣が、それでも罪せられなければならないと云ふのなら、私の罪も完全に死に償する――自分の生命だけなら惜しみはしないけれど、私は

死ぬ事の自由さへ與へられては居ないのよ。私がもしもこのまゝ死んで了つたら、盲目で辛じて洗濯や解物をさせて貰つてゐる、私の母は何うなるでせう。白痴の弟は誰が食べさせて呉れるでせう。私は‥‥私は‥‥こゝを逃げ出さうとした野本さんが羨しい。私は逃げ出す事も出來やしない。敵――憎い敵と承知で身を任さなきやならない私なんです。――責めて頂戴。責めて頂戴。

見習生三。惡魔！ 惡魔！ 院長の惡魔！

見習生二。――さうだわ。さうだわ。須崎さんだけが惡いのぢやなかつたわ。惡魔は他に居るんだわ。

見習生三。何うしたら好いんでせう。須崎さんだけを責める事も出來やしない。私たち搾取されるものゝ、血を啜られるものゝ姿なのだわね。（絶望的な聲を揚げて慟哭する）

見習生一。その先生が社會の名士――昨日は講演、今日は放送‥‥醫界淨化放送ですものね。あゝ！ 何處まで腐つた世の中なんでせう。社會の眼はフシ穴――虐げられる者の叫びは悲鳴で‥‥。立志傳の名士の人格を傷ける事には容易にならない。ああ！（頭を抱えて煩悶する）

病院の方から山内鐵也と田中菊枝、其他二、三人の見習生がどや〳〵と出て來る。鐵也は粗末な服、頭髪は長くのびるに任せてある。しかし、理智的な純情な青年らしい眸が、美しい輝きを見せてゐる。

見習生一。（喜びに滿ちた表情になつて）あ‥‥先生！ 山内先生！

見習生二。（感激的に）鐵也先生！ 山内先生！

見習生三。（感激的に）鐵也先生。

吉村。（狂喜して駈けて來て）山内先生！ よく御出で下さいました。

一同で感激的に一時に鐵也の周圍を取圍む。

吉村。先生。お待ちしてゐました。私達を救つて下さるのは、先生より外にはないんです。山内先生。山内先生。私達を導いて下さい。

山内。皆さん。あなた方を救ふものは、あなた自身です。そんな事を云つてちや駄目です。さあ、行きませう。助産婦看護婦大會の席場へ‥‥。もう日比谷公園の、あの運動場には一ぱいの同志が集つてゐるのです。あなた方はあなた方の團結を持たなければならないのです。

一同を率ゐて病舎の方へ引き返へさうとする。見習生の一人が慌しく走つて來る。

見習生四。大變です。大變です。院長先生が拘引されました。院長先生が‥‥。

一同。（一同に顔色を變へて振り向いて）えゝ？ 院長先生が？

山内。（落着いて）兄が何かしたんですか？

見習生四。（緊張しきつた表情で）墮胎罪ださうです。――放送局へ自動車が着くのを待つて居て、そのまゝ拘引されちやつたんださ

うです。今、放送局から電話で云つて來ました。
田中。（小聲で、小氣味よささうに）いゝ氣味だわ。
見習生三。（氣味よささうに笑つて）たら〳〵ね。
山內。（平然として）醫界淨化について——の講演會の、山內義明氏が墮胎罪で拘引——ハヽヽ。社會は皮肉ですね。しかし、ジャーナリズムがこれに對して、如何な態度に出るかゞ見ものです。さあ、皆さん！　行きませう。正しい要求を提げて、正しい裁きの廷にまで…誰に遠慮もいりません。貴女方は今日までの資本家の橫暴を、勇敢に公衆の前に曝露しておやりなさい。私は最後まで皆さんの味方です。正義の前には、主義の前には骨肉もありません。利害もありません。私達は等しい同志です。
皆々。感激して）先生！　山內先生！　鐵也先生！

（聞け萬國の勞働者、轟き渡るメーデーの、示威者に起る足どりと、未來を告ぐる鬨の聲——）メーデー歌を歌ひ乍ら隊伍を組んで病院の建物の方を去る。　急激に幕

第六場

日比谷公園舊音樂堂前の廣場。音樂隊がメーデー歌を奏してゐる。看護婦、產婆見習生數百、思ひ〳〵に歌ひ　聲を揚げてゐる。その他の大衆は遠卷きにちり〴〵に見物してゐる。正面の右側前方にスローガンが掲示してある。

一、我等に組合加入の自由を與へよ
一、八時間勞働
一、看護婦、助產婦見習生の待遇即日改善
一、助產婦見習生の實金の確定、並に看護婦及見習生の賃銀三割値上げ
一、週一回の休日を與へよ

割れるやうな拍手につれて、吉村はるの登壇。

吉村。（緊張しきつた面持で）皆さん！　私は私立病院に飼はれてゐる、產婆見習生の一人であります。—哀れな產婆見習生——私は斯うしたセンチメンタルな言葉は使ひ度くは無いのですが、現在の私共の狀態は、哀れなの三字を冠せずには居られない狀態なのであります。（感激の聲起る）小學校を卒業すると直ぐから、重い鐵の鎖で繫がれて、資本家の奴隷として、徒らに搾取階級の私腹を肥す爲にのみ、勤勉忠實に働いて來た私たちであります。燃えるやうな青雲の志を抱いてゐた私達は、甘い勸誘員の言葉に欺されて、東京へさへ出れば立身成功の道は開かれると思ひ、直ぐにも幸福は私達に來るものとのみ思つてゐました。けれども私達も、今こそハッキリと知る事が出來ました。それが、その希望が、如何に果敢ない私達の夢であり、私達は永い間資本家から盲目人として扱はれて來たかと云ふ事を…。病める人々の爲とし

て、愛と友情とに生きる美しい看護婦の生活、或は産婆見習生としてこの病院の生活――其處には輝かしい希望がある代りに、底知れない就職難と生活難の惱みがあり樂しみにして居た勉學の代償に豚のやうな酷使があつたのであります。衞生と榮養とを第一とする筈の病院の食堂で、腐りかけの切身が使はれ、ヴイタミンAやBなど、疾くに何處かへ退散して了つた野菜類が、宛も榮養食顔をして、患者の食膳へ登されるのです。――お大根のしつぽを鹽漬けにして漬物にし、汚い塵埃でメタンガスを發生させて利用する事を知つてゐる程の、經濟智識の發達した院長が、何故私達を人間並に遇する事を忘れたのでせうか？　街頭を車を挽いて行く牛や馬にも動物愛護が叫ばれてゐるのに、私達産婆見習生や看護婦だけは、今も尙牛であり馬であるのです。何も見るな！　聽くな！　目隱しをして酷使さへすれば、私達は永遠に盲目者だと考へてゐたのです。恐しい資本家のカラクリは、表面に人格者を裝ひ、模範的の醫師と呼ばれる爲に彼等の立志傳が各種の婦人雜誌や娛樂雜誌に書立てられる。皆さんの中で、このモハン的院長の計畫によつて一人でも眞の幸福を得られたと思はれる方があつたら、手を揚げて下さい。（否々を叫ぶ聲、私達を不幸にしたばかりだ。等、口々に叫ぶ）制限のない終日の勞働に疲れきつた私達に、何が體育奬勵の體操が入りませう？　私達は體操の三十分よりは、睡眠の三十分を如何に渴望してゐる事かしれません。古臭い黴の生えた言行不一致の宗教家の修養講談をきくよりは――そして說明の無い安物の家庭フイルムを忙しいヒマで覗かせられるよりは、ゆつくり讀書の時間でも與へられた方が、什麼　幸福でせうか？　十の仕事をした上で、修養講演をきけ、體操をしろ、映畫を見よと云はれる事は、いよ〳〵重壓を加へられる事になるのです。私達は體のいゝ院長の模範廣告の犧牲になつて、いよ〳〵被搾取階級の悲哀を味はゝされるばかりです。――永々と不平を並べたやうですが、之は私達一私立病院の助産婦見習生のみに限らず、他の助産婦見習生――又、看護婦見習生の皆さんも、ホヾ同樣の狀態だらうと存じます。で、私達は今日この幸福な會合を期しまして、先づこゝに揭げてあります通りの五箇條を請求しようと思ひます。私達は鬪はねばなりません。一端眼覺めた以上、結束を固くして飽くまでも頑迷な資本家と鬪はねばなりません。皆さん！　奮起して下さい。私達は强い意志と、大きな團結力とによつて死力を盡して鬪ふより他はありません。すれば、必らずや勝利は私達の前にあると思ひます。鬪ひませう〳〵。全日本の看護婦並に產婆見習生が手をとつて對へば、如何に大きな勢力とても、私達の前に勝利を與へないと云ふ事はありません。私たちは最後まで鬪ひませう（降るやうな拍手につれて降壇。）

メガホンを持つた靑年、壇の上に立つて叫ぶ。

メガホンの靑年。只今全日本看護婦、助產婦同盟で決議致しました

スローガンを今一度報告致します。第一、我等に組合加入の自由を與へよ。――第二、八時間勞働。――第三、看護婦、助產婦見習生の待遇卽日改善。第四、助產婦見習生の賃銀の確定。並に看護婦及見習生の賃銀の三割値上げ。――第五、一週一回の休日を與へよ。（拍手のうちに降壇）

A。私は只今の吉村さんの演說に大變感激させられました。そして、大きな喜びを感じさせられました。私達も目覺ねばなりません。闘はねばなりません。私は看護婦會に雇はれてゐる、派出看護婦でありますけれども、私達は會長から同じ搾取にあつてゐるのであります。私たち正看護婦は規定によつて、滿十八歳以上の年齢に達したもので、しかも正看護婦の免狀を有し、その上滿一ヶ年を勤めた者なのでありませうが、その正看護婦が僅かに一ヶ月に十五圓の月給にしかならないのであります。傳染病の場合は一日に附き二圓五十錢と云ふ事になつてゐますが、普通病の場合は一日の勞働賃金二圓なのであります。一ヶ月の平均派出日數十五日と見まして、正看護婦の普通病に派出する場合がやつと、三十圓にしかならないのです。その中から看護婦會費一圓五十錢をとられ、手數料六圓をとられ、その上派出しない日の會費代として一圓五十錢――十五日分で七圓五十錢を差し引かれるのであります。これが、搾取でなくて何でせうか。私達はこの十五圓の中からお湯錢を出し、切手代を出し半襟代を出さねばならないので御座います。重病患者の枕頭に侍つて、夜の目も寢ないで働く私達の賃金が一ヶ月僅かに十五圓であるのに對して、電話で契約をして吳れるだけの手數料が、六圓と云ふのは、餘りに甚しい搾取ではありませんか？　會の維持費としての會費が必要と云ふのならば、手數料は當然二分の一、乃至三分の一にすべきです。――私達一等看護婦――正看護婦ですらもこの通りなのですから、それ以下の二等看護婦――準會員などになれば一層悲慘です。東京府下にだけでも、三百五十餘あると云ふ、看護婦會に附屬してゐる數百人に近い派出看護婦の意見をきいて見たら、病院附の看護婦、產婆見習生の皆さんと同樣の要求があるのであらうと存じます。私共は私共として、又別の日を期して集り、會費全廢、手數料の値下げを要求しなければなりません。今日この同盟が生れた事を悅ぶの餘り一言意見を述べさせて頂きました。（降壇）

B。（登壇）皆さん！　私は產婆見習生の一人であります。私は昨年檢定を取りまして、有資格者の一人なのですが、病院では私達見習生や看護婦を遇するに、病院の附屬物か機械位にしか扱つて吳れません。否、機械でもレントゲンの機械とか破損し易い器物なら大切に取扱はれますが、私達の機械は雨風に晒され通しの運動場の遊動圓木並みです。產婆規則によれば滿二十歳で營業が出來るのですが、產婆と云ふ職業が、他人の大切なお產の場所に立合つて、その大事の瀨戸際のキイを握ると云ふ、重大な責任があり

ますだけに、實際の經驗と云ふ事が、非常に大きな役割を持つてゐるのであります。産婆見習生を置く産科病院の院長は、その點を利用して、弱い者虐めにも今日迄無給や、無給に近い報酬で酷使して來たのでした。私たちはそれを、口惜しいとは思つてゐたのですが、力が弱いので何うする事も出來ず、今日まで泣き寢入をさせられて來たのでありました。看護婦だの産婆見習生だのは、人眼には大變樂さうでよい樣に思はれてゐたらしいのですが、實際の私達ほど悲慘なものはありません。私達は若いのです。白粉もつけたければ、たまには美味しいものゝ一つも食べ度いのですが、それどころではありません。私達は働き乍ら…牛や馬のやうに酷使され乍ら、一錢の正當の報酬さへも與へられないのでした。私達に一錢のお金でもあつたとしたら、それは、貧しい郷里の母や姉が、賃仕事の中から裂いて呉れた、血のしたゝりさうなお金なのです。――でも、今日からは強くなれるのです。到らない私も皆さんと一緒に、今日は五つの要求を致しました。これによつて、私達も自分の金と云ふものを持つたら、どんなに元氣づけられる事でせうか？　私は故郷の弟や妹にも、姉さんから贈り物だと云つて、アメチヨコやコドモブツクでも送つてやりませう。この姉さんは五年になるのですけれど、キヤラメル一つ買つてやるお金さへもつた事がないのでした。まざりけのない自分の勞役から得たと云ふ金が五圓でも十圓でも得られたら、私は…私たちは、什麼に幸福になれる事でせう。私達の希望は早く一人前の人間になつて、故郷の父や母の貧しい生計を、少しでも助け度いと云ふ事だけでした。（方々で啜り泣きの聲が起る）今日の私達の同盟のする要求が容れられるか容れられないかは、私の家庭に…いゝえ、此處に集つた何百人――何千人の人々の將來にかゝつてゐる大きな問題です。もしも私達の要求が容れられない場合には…（堪りかねて泣き伏す。「ノー。ノー。」の叫び、「全力を出せ！」「最後まで鬪へ！」「必勝を期して鬪へ！」等の叫び處々に起る。奮然として顔を上げて）さうです。必勝を期しませう。――萬歳！萬歳！（狂的に叫んで降壇する）

メガホンの青年。（登壇して）最後に山内鐵也先生が「醫學界への提言」と題して話されますから、お靜かに願ひます。

聽衆一瞬に靜まる。山内鐵也登壇。

鐵也。皆さん！　私は今日の白熱的盛會を衷心から喜ぶものです。突然の集會であつたのにも關はらず斯く豫想外の盛會となりました事は、皆さんが夙に目覺めて、今日の日のあるのを疾く待ち望んで居られた事によるのであります。斯く多數の人々が、タツタ一人の掲げた叫びによつて集り得たと云ふ事は、皆さんが如何に大きな勢力の前に苦しめられ痛められて居られたかを、雄辯に物語るものであります。今日は此處に目出度く、日本看護婦、助産婦同盟が結成されました。そして、私達は醫師會に對して、五

の要求を提出致しました。勝負は一に皆さんが、如何に勇敢に辛抱強く闘はれるかの、全日本看護婦、助産婦同盟諸君の熱誠と努力とによるのみでありますが、私は皆さんにこの激勵の辭を贈ると共に、最後に一言醫學者に對する希望を述べて置き度いと思ふのであります。これまでの病院經營者――資本家が如何に弱い者虐めの、搾取に搾取を重ねて來たかに就いては、吉村さんその他の方々の悲痛な叫びで、充分に了解が行つた事と思ひますが、さて結論として申し上げて置き度い事は、貴女方は決して一個の院長、一個の醫師も憎むのみに止めてはいけない。院長を！―彼を何故にかゝる搾取魔たらしめたか！　を考へて頂き度いと思ふのであります。我等の望むユウトピアは何處にあるか？　その理想を申しますなら、一醫學博士の往診する往診料と、一看護婦の一時間の勞働に對する賃金とが、殆んど同一化される日が來る事にあるのであります。不徹底な論文の提出によつて、粗製濫造された醫學博士のほんの一擧手にすぎない打診料が五圓十圓で看護婦の一日の報酬が六十錢乃至八十錢――と云ふのは、皆この資本主義制度の釀した不公平であります。しかもこの被害者はあなた方使用人のみでなく、顧客側である患者も同じ被害者なのであります。一人の不德醫業者の存在は、如何に大勢の人々に不幸を與へ、社會惡の原因を爲すか、その量ははかり難いのであります。「醫師よ。社會人として眼覺めよ！」私は斯う叫び度いのです。勞働組合――或は何々組合――從來ある組合の醫師となるのもよいでせう。或はこれまでにない新しい各種のプロレタリア同盟――例へばサラリーマン組合、或は職業婦人組合、小賣業者組合、自由勞働者組合等を作つて、その醫者となり、全プロレタリアートの罹病時の安全を計るのもよいでせう。それには、總ての無産階級の人々を、各々の組合に加入させて、月々集める五錢十錢の零碎な會費によるとか、或は眞の藥價の實費のみを徴集するとか方法は幾らもあるでせう。各自の有する病院の一部を、或は全部を提供して、無料診療所を設け、或は夜間無料診察を行ふのもよいでせう。看護婦、產婆見習生を見るに使用人としてゞはなく、同等の助手としての尊敬と待遇をなし、しかも患者に對するに營利を捨てゝ、一社會人として對する人――これこそ眞の醫師、模範的の醫業者と言ふ事が出來るでありませう。私は從來の開業醫の間に、或は新しく校門を出られる新醫學士の間に斯かる人の輩出される事を期待する者であります。プロレタリアが完全に健康を保證される日、それこそ我等のユウトピアであります。其處には階級なく搾取なく、壓迫にありません。私達はこの日を期して突進しようではありませんか。――（降壇。白熱的な拍手）

群集。（誰からともなく起立して叫ぶ）萬歲！　萬歲！　全日本看護婦、助産婦同盟萬歲！

萬歲裡に急激に幕

女人藝術三週年 記念講演會記

—朝日講堂に於て—

六月二十七日午後五時。會場の準備はすつかりと〻のつて、合唱に使ふためのエレクトラ蓄音機がもう十字屋から會場へ運ばれて來てゐる。

一番手の私と永島さんと、二人で切符賣場の位置につく。何と云つても降りつゞきのお天氣だし世間は、不景氣風にふきまくられてゐる時ではあるし、こんどは實力で行かうといふので、宣傳もこの前程至れりつくせりではなかつたしこの前の時はあんまり滿員ではちきれすぎて歸された人が多くコりさせたから今度は前賣切符にせいげんをつけたのを知らないで、また歸されたらなんて、いくらかおつくうに思ふ人もあらうからと云ふコンディションだから、どうかなと思つてゐると、これはしたり、四時半にはすでに最初の二人連が入場して入口の切符係りを面喰はせる。五時半頃になると、スーッとエレベーターで上つて來た人達が、みんな私達のところへ來る。

「今切符をかつておいて、あとで來ても入れるでせうね」と念を押して、どこかへ行く。

だん〲切符賣場が忙しくなる。地方の聯盟員からの祝電〲にます〲元氣づく。

「おつり二十錢」「こまかいものでねがひます」

「切符をこちらへいたゞきます」

「これを、おもち下さい」賣る方とプログラムを渡す方と、二手にわかれて目のまはるやうな忙しさだ。この頃になると例によつて白い正服のお巡りさん、私服の背廣さん、金ピカのえらい人をとりまぜて、今日の會場整理のため、靴音たかくのりこんで來る。入口に、二手に分れてがんばつて、一々入場者の身體檢査がはじまる。

「これ何だ。」「何でもありません。どうぞお改め下さい。」「何でもないではわからん。何かはつきり云へ、はつきり」「つとめ先からかへりで足袋と辨當箱」「ウハハ……」傍の人達が一齊に笑ふ。お巡りさんも、一寸テレて苦笑する。うれしい風景だ。

午後六時。會場は、もう一杯で盛んに拍手の音がきこへ、講演者の顏ぶれもそろつたやうだ。「歌の練習をしてゐるから行つてらつしやい。日響の河原さんと渡邊さんが來て」と素川さんの言葉。それでも餘り忙しいので、歌は大丈夫もうよく練習してあるのだからと切符を渡しつゞける。

突然、場内がしーんとしたと思ふとやがて、

「とざす雲、さく日よ……」

「あらもうはじまつてゐる。大變よ」と、この二三日社の大家さんの蓄音機で、せつかく猛練習をしたのに、歌はなくてはつまらないと切符の方は、ほり出して、平林英子さんと、壇上にかけつける。歌は大きく場内にひゞく。

「……………」

あれくるふ嵐よ
山とうねる浪よ
起て！燃えつゝ行け……」

東京における、講演會に、はじめて合唱される「全女性進出行進曲」新らしい感激だ！これを二唱し終へると、場内は拍手の嵐。

つゞいて一人壇上に殘つた戸川靜子氏先づ「女人聯盟に對して」と題して、女人聯盟に對する希望を語られ、次に小池みどり氏「明快なる日々」を明快な口調で話し滿場の拍手と野次を一手に受けて奮闘する。

蔡イッ子氏「低い展望臺」

熱田優子氏「プロレタリヤ美術觀」やゝ専門的でありすぎたのとやゝ低調であつたのとで聽衆は盛んにさわぎたてる。

「失業者の事」松田解子氏。詳細な、失業者の統計になると、場内は、盛んに、さわがしくなる。

深町瑠美子氏の「現實のある風景」に聽衆は、ワッと、よろこばされる。

「市電爭議について」の題の下に簡單なワンピースで現業員の靑木みよ氏が登壇すると、さすがに場内は緊張してしづまりかへる。細い、しかし、よくとほる聲で、自分自身が體驗したところの、バスの女車掌の、みじめな、おびやかされた生活を語り、何故ストライキをはじめなければならなかつたか、くわしくのべられる。

平林たい子氏が登壇されるや場内はわれるやうな拍手がおこる。今日勞農藝術家聯盟を脱退された氏は、闘志滿々、現時のプロレタリア作家が、一時的なブルジョアジャーナリズムにのつて、小ブルジョア的な安逸をむさぼつてゐる事をなじり、文藝戰線一派を、痛罵して降壇。

「表現派漫想」尾崎翠氏。

「演劇雜感」辻山春子氏。堂々たる態度で演劇に對する希望をのべられる。

「女性の解放」の名の下に、松村喬子氏は、いつもながらの雄辯で聽衆にアッピールされる。

次は、「酒と詩と人生」の林芙美子氏、今夜の林さんはいつもとはやゝしんみりしてゐる。

「無產婦人同盟の仕事」岩内とみえ氏。

「ソヴエートロシアの『母と子供の家』」園田時子氏。はじめてにもかゝはらず落着いた態度と、はつきりした口調で、革命後の、ソヴエートにおける『母と子供の家』の施設及び、その他ソヴエートがいかに女性を尊重し、その福利を計る事に、努力してゐるかについて話される。

最後に、織本貞代氏「工場町所感」と題して、熱辯をふるひ、聽衆を、わきたゝせて降壇される。

この日中島幸子氏がおめでたの爲、小林たね氏が病氣の爲、講演されなかつたのは殘念であつたが流石に講演會と選擧應援演説との區別をあきらかにして、滿場すべてよき理解のもとに、講演者は充分に述べ得て、盛會裡に會をとじた事は、この上もなく愉快な事であつた。

會がはてた頃いぢ惡く、雨が降り出した。だが、このよき聽衆が持つ新らしい感動は、明日の「女人藝術」にどんなに無言の力を與へるかしれない。私達は雨の中を勞れもわすれて元氣に朝日講堂をあとにした。おゝ！やがてまたの日に開かれる會にも、この感激と悅とあれ！

（美子）

大阪女人聯盟支部

大阪聯盟支部では、六月二十八日午後六時半から大丸六階で、六月例會を開いた。大每事業部長西村眞琴氏の「自然科學と文藝」についての講演があり、中々盛會でありました。八月には講習會の準備中です。

廣島女人聯盟支部

廣島聯盟支部では、七月六日午後六時半から、廣島市八丁堀葵屋喫茶店の二階で、七月例會を開いた。合屋氏が旅行中なので、萬事住岡氏の計らひによつて、細川先生を招き、色々な質問をする事が出來た上に、「マルキストの觀たる婦人運動について」と云ふ題の下に、至極有益で平易な御講演を、伺ふ事が出來た。その後で、新會員の方々から、支部の仕事について色々の希望が出て有意義な會合であつた。

婦人彙報

▼**新組織する教員組合**

小學校教員の生活權確立と伸張の爲の組合は切にその必要を感じながら、當局の監視闘渉の劇しいためにしば／＼行き悩みになり、遂に一昨年十月約百五十名のメンバーをようする小學校教員聯盟が秘密裡に組織され、昭和四年七月ドイツ國際教育勞働者組合に加盟し、一萬人の失業小學校教員、及び現職教員の生活確立に目指して着々同志を叫合中本年一月警視廳の檢擧に逢ひ、東京を中心に數縣にわたり主なるもの約五十名が懲戒、退職の處分に附され、自然組合の潰滅を餘儀なくされた。が、益々逼迫する生活恐慌は、第二の國民の指導者といふけちな目かくしで胡痲かされ勝ちだつた小學校教員も急激に生活に目覺めて、全國の現職教員を網羅してとにかく合法的な組合組織を計畫した。第一回「全日本教員組合」準備會を五月二十五日神田一ッ橋帝國教育會館內に開き、出席者十七名、委員をあげて更に六月三日第二回準備會を開き、左のスローガンを揭げて大々的に活動を初めた。

一、轉、免職權の濫用絶對反對
二、初任級引下げ、賞與其の他諸手當搾取反對
三、定期昇級を公平履行せよ
四、性別、資格別による待遇の差別撤廢
五、强制出費絶對反對
六、講習會出席反對
七、教員の住宅を保證せよ
八、消費組合へ積極的に加入せよ
九、政黨加入權の獲得
一〇、言論集會結社の自由獲得

の十項で現在のメンバー約五十名、中央委員會、中央常任委員會の下に各府縣町村の支部を置く。本部には組織、國際、政治、事業、教育出版、共濟、財政、婦人の九部を置て會費一人三十錢である。合法的な組合組織を目ざしてゐるにも關はらず當局は極力彈壓現職教員の加入者は容赦しないといきまいて彼等の恐怖病と石頭とをさらけ出してゐる。

▼**中學校長軍教反對**

所謂、配屬將校に依る大・中學の軍教は設置當時に全國的學生の反對にもかゝはらず實施され、已に六年になるが、今回はしなくも學校當局側から配屬將校に對する猛烈な非難の聲を卷き起し文部當局を面喰はすに到つた。即ち目下開催中の全國中學校長會議で「軍事教育は學校で行ふ教練である以上常に教育の一部であるにもかゝはらず徒らに軍事教練のみを考へ校長の意見も無視するが如き態度の配屬將校は絶對に排斥する」との意見が滿場一致で叫ばれた。教育者ならずも、身心共に發育中の者に對して苛酷過る軍教が如何に影響するかは一目瞭然な事である。

▼**積立金を流用する工場主**

此程警視廳工場課で各種大小工場の經濟狀態の調査の結果工場主が職工積立預金四百二十四萬六千三百七十三圓と云ふ巨額の金を工場資金として流用してゐる　が判明した。この積立金の中三百五十二萬五千六百八十圓は職工の汗の結晶の賃銀から食ふや食はずで半ば强制的に積立てたもので、工場主の自由になる樣に工場主の名義で預金してあつたものである、この結果は支拂不能となり、ストライキとなる。これに反して工場主の自由にならない郵便貯金は年々減少してゐる、勞働者の血と脂を吸ふ資本家の溫情主義の假面もこゝに至つては遂に型無しである。

▼**自動車勞働組合の結成**

自動車運轉手の勞働組合としては舊評議會系の自動車從業員組合、總同盟系の自動車運轉手組合があつたが、前者は評議會解散と共に消滅し、後者も不振狀態にあつたが、最近勞資對立の猛烈なる抗爭の結果、東京自動車勞働組合が結成された。この新組合分子は社民黨系で既に會員七百名を持ちグン／＼新會員を獲得しつゝある。自動車運轉手は市內丈でも五萬餘に達してゐるので市電の交通勞働、青バス從業員組合と提携して將來資本家を威脅するに足る勞働組合となる事を希望する。

▲**日本軍縮會議費百萬圓**

最近歸朝したロンドン軍縮會議隨員住野氏は會議で使つた費用はざつと百萬圓であると傳へたがこの百萬圓が世界平和のために爪の垢程でも貢獻出來たら見物である

▲**芝居王國松竹の減俸**

諸方面で不景氣を柄に減俸の流行の今日それをしないのは不名譽とばかり松竹も二割減俸を敢行する事に決定した。會社側では久しく缺損を續けてゐるから現在の儘では自滅の他はないと嘯いて居るが新派俳優等は震災後已に三度目の減俸で震災前に比して五割減とは實に慘めな事で、泣寢入りをする等は何と弱腰な事ではないか。

▼**土木工事で失業者救濟？**

東京市では失業勞働者救濟の爲新に七十五萬圓を以て懸案中であつた土木工事を愈々今月中に開始し十一月末迄繼續する事になつた。これは失業救濟を主とするので日給一圓四十錢平均として延人員廿八萬四千人の失業勞働者が救濟されるそうだが、こんな事が燒石に水である事は知れた事である

▼「女性共有」の惡宣傳

下村咸北警察部長が滿洲里在勤當時の思出話として某新聞に「ソビエットでは女は共有で男との情痴の生活は非常に自由な爲め私生兒や親の確定せぬ子が多い」等と故意にソビエットを過らせる樣な惡宣傳をしたので、過般淸津方面に出張中であつた赤露の副領事クヅネフツオフ氏は咸鏡北道知事に對し抗議を提出した。

▼軍縮と新國防計畫

海軍省側の承認を得て出來上つたすばらしい新國防計畫の重な內容は左記の如くである。

空軍(一)潜水艦二萬五千トン縮少による航空隊十一隊增設、現有既定計畫十七隊を加へ二十八隊とし更に巡洋艦保有量の二割五分に對し飛行機搭載を實現し艦載飛行機の充實を圖る。(二)航空母艦一萬二千トン一隻建增。潜水艦は條約により二萬五千噸減少の爲、小型潜水艦を可及的多數を建增し製艦技術の進步と演技により十分性能發揮を圖る。その他巡洋艦、主力艦等に於て、軍縮條約の拔道を大いに利用し軍數と相俟つて大いに軍國主義を鼓吹してゐる。

▼失業群に巡査拔劍

毎日曉かけて職業紹介所に殺到する失業群は日に日に激增し、押しかけた全部が仕事を得ずに歸へる始末なので最近紹介所に向つて險惡な空氣を釀し出した。去る二十六日淺草區玉姬町の東京市紹介所に押しかけた失業者百四五十名は無駄足をして仕事にあぶれた結果「俺達にパンを與へろ」と紹介所になだれ込んだ。急報により附近の巡査が馳けつけ制止しようとしたが「生意氣な巡査を殺して了へ」と同巡査を袋毆きにし派出所をも破壞しようとして遂に木場巡査の拔劍となつた。彼等にとつては實に生命の問題なのだから巡査も、何もあつたものではない。

▼母子扶助法の制定

最近頻々として起る家庭悲劇の原因はその生活苦にある事は明かだが之は失業者自身の問題のみでなく愛兒及び母性の問題だと云ふので、社會民衆婦人同盟全國協議會では去る二十一日母子扶助法制定要求に關する決議文を可決し赤松常子氏等八名が內相を訪ひ決議文を手交し全國的大衆運動によつてその促進運動開始を申合せた。

▼警官の給與ガタ落ち

經費緊縮の犧牲は常に下級者にひどいのは資本家の常套手段であるが近頃警視廳では警官勤務合理化を行つてゐる。現在の狀況によると日勤當番、非番の警官中非番の召集は成べく排し日勤者は敎養時間を少くしても動員する方針で八時間を原則とするが最近は過勤二時間を限つての使用動員を各署共勵行の有樣である。倘高等係は近來機密費の削減から少い月給の中十圓も自腹を切らなければ仕事が出來ない程で事實上一割以上の減收になつてゐる。警官諸君も人間である以上生活難の苦しみは人間並に身に泌るに違ひない。

▼社民黨が劇團組織

左翼劇場がすばらしい勢ひで新劇界に乘り出したので社會民衆黨も大いに眞似がして見度なり劇團を組織して黨の主義を宣傳する事になり同黨中央執行委員小池四郎龜井貫一郎氏が先づ第一線に立ち劇に理解ある靑年勞働者を集めシンクレア、オニールの作を始め日本に於ける同黨支持の作「彼の物」等民衆的なものを上演する由。

▼女性高文試驗受理さる

大正七年に改正になつた高等試驗令では行政科試驗に於て男女の性別を除かれ法制上女性の受驗資格が出來た譯だが、事實文部省では之の反對を續けてゐたが、去る十六日から開始される高文行政科試驗に一女性が願書を提出し受理された。之が通過すれば女知事や女辯護士への途が開ける譯である

▼フオード氏引退

米國自動車王、ヘンリー・フオード氏は最近十年來社長の職にある息子に萬事を引渡し、事業界から引退し一億ドルを以て餘生を工業研究及び人類の幸福の爲に捧げる由だが、世界の何人の爲にそれが幸福を齎らすか聊か馬鹿げた氣がする。

▼控訴院の統一審理

水戶地方四・一六共產黨被告の第一回控訴公判は去る廿三日日下部裁判長棚町檢事係りで開廷する事になつたが突然同事件の首領山代氏が併合審理されない限り出廷しないと頑張つたので協議の結果併合審理は拒絕されたが今後共產黨事件は同一裁判長によつて統一審理される事になつた。

編輯後記

七月になつていよ〳〵暑い。講演會があつて編輯がおくれたので終り頃になつて急に忙しくなつた。暑くてねむくて誰でも本なんか讀むのはいやになるだらう。だから雜誌も輕く涼しくねむけを覺す樣に心がけた。夏休みの清涼飮料の代りには少し無理かもしれないがねむけざましにはなるでせう。是非讀んで下さい。講演會には聲が低くて大分やぢられました。今度から大いにどなりますから又聞きに來て下さい。（俊子）

裸の腕が大氣を切る時夏の日は力の滿ちた爽やかさを持つ。右も左も綠、綠の編輯室の外、むれあがる木の息吹にづつしりとおしてくる力。風の涼しい日、無氣味に澱んだ空氣の汗の孔までふさいで仕舞ひさうな日、だるい日も、はり切つた日も夏は好きだ。小さな子供の樣に海ほうづきをならしながら、かすかな潮の香に海を想ふ都會の眞晝の夏はたのしい。

三週年記念の講演會も盛會で、未熟ものはやじでやじりとばされさうだつたけど目方の重いせいかとうとうとばされず、之も肥つてゐる餘德か。家に歸つて消氣て居たら知らない間にきゝに來て居た弟から「初舞臺であの位ならいいよ」僅かになぐさめられて、之も娘心のしほらしさ。（みどり）

外へ出かけてかへつてくると目がぼーつとする暑さだ。だが一度私自身の感じる暑さの、幾倍かの暑さの、工場で、野良で、そのいろ〳〵の職場で働かねばならぬ人達の事を思ひ浮べると、まだまだ私自身いかにぜいたくな心が多く、仕事に不忠實であるかを強く感じる。この健康とこの若さで――しつかりやりませう。本號は特輯號の後で、しかもあついさかりなので、編輯の上にはらはれたいくつかの注意と、努力は、讀者諸氏によつてたゞちに、みとめられる事と思ふ。海に、山に、出かけ得る層の人も、又あらゆる快樂を犧牲にして、酷暑とたゝかいながら生活せねばならぬ人も、本誌をよき伴侶としていたゞきたい。（英子）

今日からまた新らしい一步を踏みはじめる。然しながら昨年の一步より、また一昨年のほんとの步みはじめより前へ進んだ線の上にたつての一步であることはいふまでもない。だが、まだ、まだ、まだである。たゞ今年は昨年よりよりよき進出を心がけねばならない。

讀者通信欄で讀まれたことと思ふが、「女人藝術」の讀者にはいかにして四十錢の金を作つて買はうかと苦心されてゐる方が多い。それを思ふと、私の胸は嬉しい涙にふくらまる。どうにかしてなる可くよくなる可く早く安價にしたいと

昭和五年七月十五日印刷
昭和五年八月一日發行（毎月一回一日發行）

送料一部 壹錢五厘

定價	
1部	40錢
6部	2.40錢
12部	4.80錢

仁誌代の拂込みは成可く振替利用を乞ふ
仁郵便切手代用は一割增の事。

發行兼印刷者――長谷川ヤス
編輯者――素川絹子
印刷所――秀英舍
大賣捌――東京堂　北隆館　東海堂　大東館

東京市牛込區左内町三十一番地
發行所　女人藝術社
振替東京七五八二五　電話牛込(24)一七八九

それが此頃の願ひである。これを三十錢にするには今日の二倍の讀者をうればたやすく行なはれるであらう。一歲、まだ十二ケ月、おゝ、これから十二册の間にどんな風に我々は成長するだらう、私はいふ「女人藝術」とそして「女人大衆」をどうぞみなさんのものにして、そして共に手をつらねて進まうではありませんか、未來の建設をめざして。（時雨）

ビラ撒き。講演者いらい等皆んなの奔走の勞も報ひられて三週年記念講演會は世の不況にかゝはらず盛會だつた。それは單なる好奇心、面白半分からではなく、自發的に或物を掴み得たいと望む人が多いからだと思ふ、閉會の眞先きに聯盟員も加はつて全女性行進曲を合唱した。鬪志滿々とした壇上の力強い聲がまだ響いてゐる。此の無神經な頭に何を聞き取つたか――今更に自身の愚劣さが判然として心痛む。（美智子）

三週年記念號の盛んな好評と、講演會に對する素晴らしい支持とは、充分に私たちを力付けてくれます。みんな暑いのも忙しいのも忘れて、八月號の仕度くに懸命になつてゐます。雜誌に對する種々な希望や心づいた事をきたんなく寄せて下さる方が多くなつて樂しみです。雜誌の立場を明らかに認識しての眞面目な御注告は喜んで受け、その意見をしんしやくして編輯する事を心がけてゐます。と同時に讀者網擴張に對するみなさんの支持を切に希望します。（素子）


ヘチマコロン
へちまの水から發明した化粧水
寫眞は岡田嘉子さん
時代の寵兒とは
正にヘチマコロンの事です
お化粧下に白粉のとき水にお髭剃の
あとに殿方にも 御婦人にもあらゆ
る階級を通じて何れの御家庭にも愛
用されて居ります
大瓶 五十錢
小瓶 三十錢
東京 天野源七

昭和三年九月六日第三種郵便物認可
昭和[illegible]日印刷納本

第三卷第八號

定價金四十錢（送料金一錢五厘）

雨脚本集 第一輯



——ある時期を一轉機として、彼女らしい甦生が努められた。そこに夢の床から離れようとするものの苦しさと惱ましさとがあり、それを生き抜かうとするものの煩ひと惑ひとが來た。僕は彼女のこの憂欝を見て來た。そして彼女はかなり十分に內省と認識とに月日を費やしたのだつた。その效果はこの數年間に徐々に現はれ、若し、性格的な疳癖に、內なるものを傷けられることがなくば、今後自然な發展を示すことが出來るであらうと信じてゐる。此の集に盛られたものは、多くこの再生期——展開期の作だ。一個の女性が、いかに生活の望みと空しさとのすがたを見たか、光りと無知との交錯を見たか、ここに讀者の興味を繋けることは慥かに出來る——

三上於菟吉氏序

內容

定價金貳圓
送料金六錢
本社處女出版の美本です

東京市牛込區
女人藝術社發行
振替東京七五八三
電話牛込一七八九